平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)

埋蔵文化財発掘調査報告

寺田遺跡（第１・２次）
田丸道遺跡（第２次）
塚田古墳群
世古里中遺跡
西垣内遺跡（第２次）
鳥墓遺跡（第２次）
簑村大塚遺跡（第２次）
西垣外遺跡
茶臼塚遺跡

２０１３（平成25）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、平成21～23年度に実施された伊勢農林水産環境事務所管内における県営農業基盤整備事業に伴い、記録保存を実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2　本書では、上記事業のうち、経営体育成基盤整備事業(有田地区)および県営かんがい排水事業(宮川4工区)の成果を収録した。
3　調査費用は、その一部については国庫補助金を受けて県教育委員会が、他の大部分を県農水商工部(平成24年度からは県農林水産部)がそれぞれ負担した。
4　調査にかかる体制は下記のとおりである。発掘調査は平成21年度から23年度に実施した。整理作業は平成22年度から順次実施し、報告書作成は平成24年度に行った。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
平成21年度(現地調査)　調査研究Ⅰ課
　寺田遺跡　　主査　西村美幸　　主査　岩脇成人
平成22年度(現地調査・整理作業)　調査研究Ⅰ課
　寺田遺跡　　技師　髙松雅文　　主査　大川操　　主査　山口田美
　塚田古墳群・田丸道遺跡(南部)　　技師　相場さやか　　主幹　田中久生
　田丸道遺跡(北部)　　主査　山口田美　技師　相場さやか　主幹　伊藤裕偉　技師　髙松雅文
平成23年度(現地調査・整理作業)調査研究Ⅰ課
　世古里中遺跡・鳥墓遺跡・西垣内遺跡　　主幹　伊藤裕偉
　簑村大塚遺跡　　技師　髙松雅文
　西垣外遺跡　　技師　相場さやか　　主幹　伊藤裕偉
　茶臼塚遺跡　　主幹　伊藤裕偉
平成24年度(整理作業・報告書作成)調査研究Ⅰ課
　報告書作成業務　　主幹　伊藤裕偉　　主査　星野浩行　　技師　相場さやか　　技師　髙松雅文

5　現地調査および報告書作成にあたり、下記の方々に様々なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)
　榎村寛之　館野和己　中原計
6　田丸道遺跡出土木製品の樹種同定については、布谷知夫氏(三重県立博物館長)のご援助を頂き、その分析結果についても寄稿していただいた。
7　本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
8　当報告書の作成業務は、各遺跡の調査担当者および調査研究Ⅰ課が行った。

凡　　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図（平成19年測図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。

2　調査区のうち、座標を示しているものについては、測地成果2000に対応した新座標第Ⅵ系で示している。座標表示の無い調査区については、座標測量ができなかったものである。挿図の方位は、座標北ないしは真北で示している。

＜遺構類＞

3　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

4　土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。

5　当報告書での遺構は、全体で通番としている。

6　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＡ‥‥柱列　ＳＢ‥‥掘立柱建物　ＳＤ‥‥溝　ＳＦ‥‥焼土坑　ＳＨ‥‥竪穴住居

ＳＫ‥‥土坑　ＳＲ‥‥旧河道　ＳＺ‥‥その他遺構　pit‥‥ピット・柱穴

7　遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している

＜遺物類＞

8　当報告書での遺物実測図類は実物の1/4を基本としたが、木製品など大形ものはそれ以外の縮尺もある。

9　実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12以下）が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。

10　当報告書での用語は、「つき」は「坏」に統一し、「わん」は「椀」・「碗」を慣例的使用に応じて使い分けた。

11　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号‥‥‥‥‥‥‥‥挿図掲載番号である。

実測番号‥‥‥‥‥‥実測段階の登録番号である。

器種・質等‥‥‥‥‥「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

小地区‥‥‥‥‥‥‥調査時のグリッドや小地区名を記した。

遺構・層位等‥‥‥‥‥遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量（cm）‥‥‥‥‥‥遺物の法量を示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（体）は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴‥‥‥主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土‥‥‥‥‥‥‥‥小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調‥‥‥‥‥‥‥‥その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度‥‥‥‥‥‥‥指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項‥‥‥‥‥‥遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

12　挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

13　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続……伊藤　（1）
Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境……高松・伊藤　（4）
Ⅲ　度会郡玉城町佐田　寺田遺跡（第１・２次）……高松・星野　（7）
Ⅳ　度会郡玉城町妙法寺　田丸道遺跡・塚田古墳群……相場・伊藤　（37）
Ⅴ　度会郡玉城町世古　世古里中遺跡……伊藤（105）
Ⅵ　度会郡玉城町世古　西垣内遺跡（第２次）……伊藤（114）
Ⅶ　多気郡明和町玉城町箕村　鳥墓遺跡（第２次）……伊藤（117）
Ⅷ　多気郡明和町玉城町箕村　箕村大塚遺跡（第２次）……高松・伊藤（120）
Ⅸ　伊勢市柏町　西垣外遺跡……相場・伊藤（125）
Ⅹ　伊勢市有滝町　茶臼塚遺跡……伊藤（139）

挿　図　一　覧

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境
第Ⅱ-1図　調査遺跡と周辺の遺跡
Ⅲ　寺田遺跡
第Ⅲ-1図　調査区周辺地形図
第Ⅲ-2図　工事立会調査区平面・土層断面図
第Ⅲ-3図　第１次調査区平面・土層断面図
第Ⅲ-4図　第２次（幹線）調査区平面図
第Ⅲ-5図　第２次（幹線）調査区土層断面図
第Ⅲ-6図　第２次（支線）調査区平面図
第Ⅲ-7図　第２次（支線）調査区土層断面図(1)
第Ⅲ-8図　第２次（支線）調査区土層断面図(2)
第Ⅲ-9図　寺田遺跡出土遺物実測図(1)
第Ⅲ-10図　寺田遺跡出土遺物実測図(2)
第Ⅲ-11図　寺田遺跡出土遺物実測図(3)
第Ⅲ-12図　寺田遺跡出土遺物実測図(4)
第Ⅲ-13図　寺田遺跡出土遺物実測図(5)
第Ⅲ-14図　寺田遺跡出土遺物実測図(6)
第Ⅲ-15図　寺田遺跡出土遺物実測図(7)
第Ⅲ-16図　寺田遺跡出土遺物実測図(8)
Ⅳ　田丸道遺跡・塚田古墳群
第Ⅳ-1図　調査区周辺地形図
第Ⅳ-2図　調査区の概要
第Ⅳ-3図　田丸道遺跡・塚田古墳群遺構平面図(1)
第Ⅳ-4図　田丸道遺跡・塚田古墳群遺構平面図(2)
第Ⅳ-5図　田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1)
第Ⅳ-6図　田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(2)
第Ⅳ-7図　田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(3)
第Ⅳ-8図　ＳＤ１実測図
第Ⅳ-9図　ＳＲ15堰平面図
第Ⅳ-10図　田丸道遺跡の堰構造模式図
第Ⅳ-11図　堰１平面・立面図
第Ⅳ-12図　堰東壁土層断面図
第Ⅳ-13図　堰２平面・立面図
第Ⅳ-14図　竪穴住居ＳＨ40実測図
第Ⅳ-15図　調査区北部個別遺構実測図
第Ⅳ-16図　ＳＢ46平面・断面図
第Ⅳ-17図　Ｎ176-ｐｉｔ８平面・断面図
第Ⅳ-18図　田丸道遺跡出土遺物実測図(1)
第Ⅳ-19図　田丸道遺跡出土遺物実測図(2)
第Ⅳ-20図　田丸道遺跡出土遺物実測図(3)
第Ⅳ-21図　田丸道遺跡出土遺物実測図(4)
第Ⅳ-22図　田丸道遺跡出土遺物実測図(5)
第Ⅳ-23図　田丸道遺跡出土遺物実測図(6)
第Ⅳ-24図　田丸道遺跡出土遺物実測図(7)
第Ⅳ-25図　田丸道遺跡出土遺物実測図(8)木製品
第Ⅳ-26図　田丸道遺跡出土遺物実測図(9)木製品
第Ⅳ-27図　田丸道遺跡出土遺物実測図(10)木製品
第Ⅳ-28図　田丸道遺跡出土遺物実測図(11)木製品
第Ⅳ-29図　田丸道遺跡出土遺物実測図(12)木製品
第Ⅳ-30図　田丸道遺跡出土遺物実測図(13)木製品
第Ⅳ-31図　田丸道遺跡出土遺物実測図(14)木製品
第Ⅳ-32図　田丸道遺跡出土遺物実測図(15)木製品
第Ⅳ-33図　田丸道遺跡出土遺物実測図(16)木製品
第Ⅳ-34図　田丸道遺跡出土遺物実測図(17)木製品
第Ⅳ-35図　田丸道遺跡出土遺物実測図(18)木製品
第Ⅳ-36図　田丸道遺跡ＳＲ15の層序および堆積物試料採取位置
第Ⅳ-37図　花粉化石群集
第Ⅳ-38図　植物珪酸体群集
第Ⅳ-39図　杭の種類および同定結果
Ⅴ　世古里中遺跡
第Ⅴ-1図　世古里中遺跡ほか調査区位置図
第Ⅴ-2図　世古里中遺跡調査区平面図
第Ⅴ-3図　世古里中遺跡調査区北壁土層(1)
第Ⅴ-4図　世古里中遺跡調査区北壁土層(2)
第Ⅴ-5図　世古里中遺跡出土遺物実測図(1)
第Ⅴ-6図　世古里中遺跡出土遺物実測図(2)
Ⅵ　西垣内遺跡
第Ⅵ-1図　西垣内遺跡調査区平面図および土層断面図
第Ⅵ-2図　西垣内遺跡出土遺物実測図
Ⅶ　鳥墓遺跡
第Ⅶ-1図　鳥墓遺跡調査区平面図および土層断面図
第Ⅶ-2図　鳥墓遺跡出土遺物実測図
Ⅷ　箕村大塚遺跡
第Ⅷ-1図　箕村大塚遺跡調査区平面図および土層断面図
第Ⅷ-2図　箕村大塚遺跡出土遺物実測図
Ⅸ　西垣外遺跡
第Ⅸ-1図　西垣外遺跡周辺地形図
第Ⅸ-2図　西垣外遺跡調査区位置図
第Ⅸ-3図　西垣外遺跡調査区平面図
第Ⅸ-4図　西垣外遺跡調査区土層断面図
第Ⅸ-5図　西垣外遺跡ＳＤ12平面・断面図

第Ⅸ-6図　西垣外遺跡出土遺物実測図(1)
第Ⅸ-7図　西垣外遺跡出土遺物実測図(2)
第Ⅸ-8図　西垣外遺跡出土遺物実測図(3)
第Ⅸ-9図　西垣外遺跡出土遺物実測図(4)

Ⅹ　茶臼塚遺跡
第Ⅹ-1図　茶臼塚遺跡位置図
第Ⅹ-2図　茶臼塚遺跡調査区平面図および土層断面図

挿入写真一覧

Ⅲ　寺田遺跡
写真Ⅲ-1　川田地蔵
Ⅳ　田丸道遺跡・塚田古墳群
写真Ⅳ-1　木札赤外線写真
写真Ⅳ-2　花粉化石
写真Ⅳ-3　植物珪酸体
写真Ⅳ-4　種実遺体(1)
写真Ⅳ-5　種実遺体(2)・昆虫遺体
写真Ⅳ-6　粗染

表一覧

Ⅰ
第Ⅰ-1表　調査遺跡(範囲確認を含む)一覧
Ⅲ　寺田遺跡
第Ⅲ-1表　寺田遺跡遺構一覧表
第Ⅲ-2表　寺田遺跡出土遺物観察表(1)
第Ⅲ-3表　寺田遺跡出土遺物観察表(2)
第Ⅲ-4表　寺田遺跡出土遺物観察表(3)
第Ⅲ-5表　寺田遺跡出土遺物観察表(4)
第Ⅲ-6表　寺田遺跡出土遺物観察表(5)
第Ⅲ-7表　寺田遺跡出土遺物観察表(6)
第Ⅲ-8表　寺田遺跡出土遺物観察表(7)
第Ⅲ-9表　寺田遺跡出土遺物観察表(8)
Ⅳ　田丸道遺跡・塚田古墳群
第Ⅳ-1表　田丸道遺跡遺構一覧表
第Ⅳ-2表　田丸道遺跡出土遺物観察表(1)(土器類等)
第Ⅳ-3表　田丸道遺跡出土遺物観察表(2)(土器類等)
第Ⅳ-4表　田丸道遺跡出土遺物観察表(3)(土器類等)
第Ⅳ-5表　田丸道遺跡出土遺物観察表(4)(土器類等)
第Ⅳ-6表　田丸道遺跡出土遺物観察表(5)(土器類等)
第Ⅳ-7表　田丸道遺跡出土遺物観察表(6)(土器類等)
第Ⅳ-8表　田丸道遺跡出土遺物観察表(7)(木製品)
第Ⅳ-9表　田丸道遺跡出土遺物観察表(8)(木製品)
第Ⅳ-10表　田丸道遺跡出土遺物観察表(9)(木製品)
第Ⅳ-11表　田丸道遺跡出土遺物観察表(10)(木製品)
第Ⅳ-12表　田丸道遺跡ＳＲ15堆積物試料一覧
第Ⅳ-13表　花粉分析結果
第Ⅳ-14表　植物珪酸体含量
第Ⅳ-15表　種実同定結果(1)
第Ⅳ-16表　種実同定結果(2)
第Ⅳ-17表　昆虫同定結果
第Ⅳ-18表　筵の樹種同定結果
第Ⅳ-19表　杭の樹種同定結果
第Ⅳ-20表　ＳＲ15堰一覧
Ⅴ　世古里中遺跡
第Ⅴ-1表　世古里中遺跡出土遺物観察表(1)
第Ⅴ-2表　世古里中遺跡出土遺物観察表(2)
Ⅵ　西垣内遺跡
第Ⅵ-1表　西垣内遺跡出土遺物観察表
Ⅶ　鳥墓遺跡
第Ⅶ-1表　鳥墓遺跡出土遺物観察表
Ⅷ　簑村大塚遺跡
第Ⅷ-1表　簑村大塚遺跡出土遺物観察表
Ⅸ　西垣外遺跡
第Ⅸ-1表　西垣外遺跡遺構一覧表
第Ⅸ-2表　西垣外遺跡出土遺物観察表(1)
第Ⅸ-3表　西垣外遺跡出土遺物観察表(2)
第Ⅸ-4表　西垣外遺跡出土遺物観察表(3)

写真図版一覧

写真図版Ⅲ-1　寺田遺跡　遺構(1)
写真図版Ⅲ-2　寺田遺跡　遺構(2)
写真図版Ⅲ-3　寺田遺跡　遺構(3)
写真図版Ⅲ-4　寺田遺跡　遺構(4)
写真図版Ⅲ-5　寺田遺跡　遺物(1)
写真図版Ⅲ-6　寺田遺跡　遺物(2)
写真図版Ⅳ-1　塚田古墳群　遺構(1)
写真図版Ⅳ-2　塚田古墳群(2)・田丸道遺跡(1)遺構
写真図版Ⅳ-3　田丸道遺跡　遺構(2)
写真図版Ⅳ-4　田丸道遺跡　遺構(3)
写真図版Ⅳ-5　田丸道遺跡　遺構(4)
写真図版Ⅳ-6　田丸道遺跡　遺構(5)
写真図版Ⅳ-7　田丸道遺跡　遺物(1)
写真図版Ⅳ-8　田丸道遺跡　遺物(2)
写真図版Ⅳ-9　田丸道遺跡　遺物(3)
写真図版Ⅳ-10　田丸道遺跡　遺物(4)
写真図版Ⅳ-11　田丸道遺跡　遺物(5)
写真図版Ⅳ-12　田丸道遺跡　遺物(6)
写真図版Ⅳ-13　田丸道遺跡　遺物(7)
写真図版Ⅳ-14　田丸道遺跡　遺物(8)
写真図版Ⅳ-15　田丸道遺跡　遺物(9)
写真図版Ⅳ-16　田丸道遺跡　遺物(10)
写真図版Ⅳ-17　田丸道遺跡　遺物(11)
写真図版Ⅴ-1　世古里中遺跡　遺構
写真図版Ⅴ-2　世古里中遺跡　遺物
写真図版Ⅵ-1　西垣内遺跡　遺構・遺物
写真図版Ⅶ-1　鳥墓遺跡　遺構・遺物
写真図版Ⅷ-1　簑村大塚遺跡　遺構・遺物
写真図版Ⅸ-1　西垣外遺跡　遺構
写真図版Ⅸ-2　西垣外遺跡　遺物
写真図版Ⅹ-1　茶臼塚遺跡

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続

1　事業内容と調査遺跡

a　総説

ここで報告する遺跡は、平成21～23年度の３ヶ年にわたって実施された、経営体育成基盤整備事業（有田地区）および県営かんがい排水事業（宮川４工区）に伴い、記録保存を実施したものである。工事の事業主体は三重県農水商工部（農業基盤室、当時）、実施機関は伊勢農林水産商工環境事務所（農村基盤室宮川用水課）である。工事に伴い、本発掘調査および工事立会調査を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。

当該事業は、以下にも記すように掘削幅が広いところ（幹線部分）でせいぜい２ｍ内外、狭いところ（支線部分）では１ｍ足らずである。そのため、通常の発掘調査スタイルを採ることが難しく、工事立会という形式を採用したものが多い。

b　経営体育成基盤整備事業（有田地区）

この事業は、国営宮川用水からの幹線・支線を配置するものである。幹線の掘削深度は約200cm、支線は150cm内外である。この事業に伴い、寺田遺跡・田丸道遺跡・塚田古墳群・世古里中遺跡・西垣内遺跡・鳥墓遺跡・簑村大塚遺跡の調査（立会を含む）を実施した。また、遺構・遺物は確認されなかったが、範囲確認調査を実施した遺跡として迫間垣内遺跡・カリコ遺跡（以上、玉城町世古）、村ノ内遺跡（明和町簑村）があり、同じく立会を実施した遺跡として下里遺跡（玉城町玉川）がある。

c　県営かんがい排水事業（宮川４工区）

この事業は、上記と同じく宮川用水に関連する事業であるが、これは旧管の付け替えに相当するものである。この事業に伴い、西垣外遺跡・茶臼塚遺跡の調査（立会）を実施した。また、範囲確認調査を実施したが、遺構・遺物の確認が無かった遺跡として、御園尾遺跡・宮ノ前遺跡（以上、伊勢市有滝町）、大藪遺跡（伊勢市磯町）がある。

d　遺跡の調査にかかる法的措置

文化財保護法等に関係する遺跡調査の法的措置は、第Ⅰ－１表に示した通りである。

	遺跡名	所在地	94条通知	99条通知	対応	遺物発見通知	遺物量(kg)
1	寺田遺跡（第１次）	度会郡玉城町佐田	H22.3.10 勢農環第3521号	H22.1.4 教埋第373号	範囲確認→発掘調査	H23.2.19 教埋第422号	10.8
	寺田遺跡（第２次）			H22.10.4 教埋第177号		H23.3.1 教埋第324号	14.6
2	塚田古墳群	度会郡玉城町妙法寺			範囲確認→発掘調査	H23.3.7 教埋第345号	47.3
3	田丸道遺跡	度会郡玉城町妙法寺			範囲確認→発掘調査		
4	世古里中遺跡	度会郡玉城町世古	H23.7.27 勢農環第3196号	－	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第293号	28.5
5	西垣内遺跡	度会郡玉城町世古		－	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第292号	16.0
6	迫間垣内遺跡	度会郡玉城町世古		－	範囲確認	－	－
7	カリコ遺跡	度会郡玉城町世古		－	範囲確認	－	－
8	下里遺跡	度会郡玉城町玉川		－	工事立会	－	－
9	鳥墓遺跡	多気郡明和町簑村		－	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第291号	4.4
10	簑村大塚遺跡	多気郡明和町簑村		－	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第296号	10.4
11	村ノ内遺跡	多気郡明和町簑村		－	範囲確認	－	－
12	西新村西浦遺跡	伊勢市小俣町新村	H23.9.29 勢農環第3300号	－	範囲確認	－	－
13	西垣外遺跡	伊勢市柏町	H23.10.20 勢農環第3460号	－	工事立会	H24.3.27 教埋第446号	11.7
14	茶臼塚遺跡	伊勢市有滝町		－	範囲確認→工事立会	H24.3.26 教埋第454号	2.3
15	宮之前遺跡	伊勢市有滝町		－	範囲確認	－	－
16	御園尾遺跡	伊勢市有滝町		－	範囲確認	－	－

第Ⅰ－１表　調査遺跡（範囲確認調査を含む）一覧

2　各遺跡の協議・調査経過

a　寺田遺跡（玉城町佐田、平成21・22年度）

平成21年度　平成21年９月10日に事業地内（幹線）の範囲確認調査を実施し、遺構・遺物の存在が確認された。この結果に基づき、２度の調査を実施した。

１回目は工事立会形式で実施した。平成21年11月24日から27日にかけて行い、溝や落ち込みなどの遺構と、古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は250㎡である。

２回目は本調査として実施した（寺田遺跡第１次調査）。平成22年１月６日から同年１月15日にかけて行い、中世を中心とした遺構・遺物が確認された。調査面積は130㎡である。

平成22年度　調査は、水田の給排水が止まる秋以降の調査となった。当該年度は、寺田遺跡（２次調査）として実施した。調査地は、東西方向の幹線部分（掘削幅約３m）と、南北方向の支線部分（掘削幅約１m）とがある。調査は工事と併行して進める方法とし、土工部門の管理は、支線を㈱兵口土木が、幹線を㈲竜川組が行った。また、測量基準点については、橋本技術株式会社に委託して実施した。全体調査面積は,675㎡であった。

【支線】　９月28日に現地協議を行い、総長240mの調査区を３つに区分し、平成22年10月４日から南側３分の１について重機による表土除去、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。掘削完了後、10月26日に写真撮影を行った。同様の工程で、中央を11月４日から、北側を11月12日から重機による表土掘削、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。その後、11月18・19日に写真撮影を行い、24～27日に実測を行い、調査を終了した。

【幹線】　平成22年11月29日から重機による表土除去、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。12月10日に写真撮影を行い、12月13日から15日に実測を行い、調査を終了した。２次調査は雨天に悩まされた調査であった。

b　塚田古墳群・田丸道遺跡（玉城町妙法寺、平成22年度）

平成22年４月５日および同年11月17日に事業地内（幹線部分）の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、調査を実施した。

塚田古墳群と田丸道遺跡は、同一空間に重複する遺跡である。南北方向の幹線部分（掘削幅約３m）を中心に、東西方向の支線（掘削幅約１m）がある。調査は平成22年11月29日に開始し、平成23年２月10日に終了した。最終調査面積は661㎡であった。

調査は工事と併行して進める方法とし、㈱近藤建設が土工部門の管理を行った。また、測量基準点については、寺田遺跡と併せて橋本技術株式会社に委託した。

c　世古里中遺跡（玉城町世古、平成23年度）

平成23年９月12日から同月14日にかけて、事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会形式とし、同年11月22日から12月20日にかけて、146㎡を対象として実施した。

d　西垣内遺跡（玉城町世古、平成23年度）

平成23年９月12日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年11月８日から９日にかけて、53㎡を対象として実施した。

e　迫間垣内遺跡（玉城町世古、平成23年度）

平成23年９月12日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

f　カリコ遺跡（玉城町世古、平成23年度）

平成23年９月16日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

g　下里遺跡（玉城町玉川、平成22年度）

平成23年２月28日から同年３月８日にかけて、事業地内約140㎡の工事立会を行った。遺構・遺物は確認されなかった。

h　鳥墓遺跡（明和町簑村、平成23年度）

平成23年９月16日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年12月５日から７日にかけて、30㎡を対象として実施した。

i　簑村大塚遺跡（明和町簑村、平成23年度）

平成23年９月21日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年12月19日から21日にかけて、52㎡を対象として実施した。

j　村ノ内遺跡（明和町箕村、平成23年度）

平成23年９月14日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

k　西新村西浦遺跡（伊勢市小俣町、平成23年度）

平成23年10月６日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

l　西垣外遺跡（伊勢市柏町、平成23年度）

平成23年12月５日から同月９日にかけて、事業地内約78㎡の工事立会を実施した。

m　茶臼塚遺跡（伊勢市有滝町、平成23年度）

平成23年12月９日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を工事立会で調査した。

調査は同年12月23日から翌年１月18日にかけて行った。調査面積は28㎡である。

n　宮之前遺跡（伊勢市有滝町、平成23年度）

平成23年12月９日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

o　御薗尾遺跡（伊勢市有滝町、平成23年度）

平成23年12月９日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

３　調査成果の普及・公開

前述のように、多くの調査遺跡が工事立会であったために現地説明会の開催は困難であった。それでも、塚田古墳群・田丸道遺跡では、調査成果が多大であったため,時間が無いなか現地説明会を開催した。

平成22年12月23日（木・祝）には、塚田古墳群の現地説明会と寺田遺跡出土遺物解説を実施した。54名の参加があった。平成23年１月23日（日）には、田丸道遺跡の流路・木組部分を対象とした現地説明会を開催し、出土遺物の展示解説も同時に行った。150名の参加があった。

また、平成23年４月16日に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重2010」では、寺田遺跡・田丸道遺跡の遺物展示および田丸道遺跡の報告を行った。37名の参加があった。平成24年３月24日に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重2011」では、西垣外遺跡・世古里中遺跡・鳥墓遺跡・西垣内遺跡などの遺物展示を行い、世古里中遺跡ほかの報告を行った。55名の参加があった。

４　出土遺物の保存処理

脆弱だが重要な出土遺物については、保存処理を実施することで、出土文化財として今後の保存と活用に備える必要がある。

今回の発掘調査では、田丸道遺跡から古墳時代後期を中心とした重要な木製品・金属製品が出土した。そのため、これらの保存処理を実施した。

これらの保存処理は、委託事業として一般競争入札を実施した。いずれも㈱吉田生物研究所が受注し、処理を行った。

（伊藤）

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境

1　位置と地形

県営経営体育成基盤整備事業(有田地区)および県営かんがい排水事業(宮川４工区)の施工地域は、県農林水産部伊勢農林水産商工環境事務所が管轄する範囲である。調査地は、現在の行政単位で見れば、伊勢市・度会郡玉城町・多気郡明和町に及ぶが、江戸時代以前には概ね度会郡と把握されていた地域に相当する。大きく見れば宮川下流域の北西岸部にあたり、肥沃な水田地帯である。

有田地区は、現在では玉城町立有田小学校にその名を留めているが、明治22年から昭和30年までは「有田村」という一個の行政範囲であった。明治期の旧市町村が、江戸時代以前の地域的枠組みを残していることはよく指摘されるところである。つまり、今回の調査エリアとなった有田地区は、一定程度の空間的なまとまりが存在するところといえる。

地形的に見ると、有田地区は北方を大仏山丘陵、西方を玉城丘陵で囲まれ、南に外城田川、東に宮川が流れている。北・西部を丘陵、南・東部を河川でそれぞれ囲まれた当地は、標高15m前後の平坦で広い平地となっている。当地にこのような平地を形成するような河川は現在見られないが、外城田川は江戸時代に流路の付け替えが実施されたとされており、元々は有田地区を縦断していたという。有田地区の広大な平地は、外城田川の流れに伴って基礎が形成されたと考えられる。

これに対し、宮川河口部に近い地域は宮川が形成した低段丘や浜堤帯(砂堆)で構成されている。西垣外遺跡のある伊勢市柏町付近までは低段丘が広がり、海岸に近い伊勢市有滝町付近では浜堤帯の形成が見られる。

2　歴史的環境

当地の歴史的環境を、有田地区の状況を中心に概観する。

a　旧石器時代・縄文時代

大仏山丘陵の近隣では、旧石器時代の遺跡が集中している。とくにカリコ遺跡では、数百点ものナイフ形石器が出土している。縄文時代の早い時期では、神子柴型石斧や早期の土器が出土した上村池Ａ遺跡などが確認されている。縄文時代前期から中期にかけての遺跡数は少ないが、後期になると金剛坂遺跡を筆頭に、再び遺跡が多くなっている。

b　弥生時代

弥生時代前期では、有田地区にもほど近い櫛田川下流域が、いわゆる「亜流遠賀川式」土器が数多く分布する地域として特筆できる。前期後半から後期に至る遺跡として、金剛坂遺跡や斎宮跡(古里遺跡)などがある。櫛田川沿いの低段丘上に継続的な集落が営まれていたと考えられる。

有田地区周辺での弥生時代遺跡は判然としていないが、今回の田丸道遺跡の調査で弥生時代中期前葉の良好な土器が出土していることから、近隣に集落遺跡が展開している可能性が高い。また、やや南方の中楽山遺跡では後期の集落跡が確認されている。

c　古墳時代

玉城丘陵を中心に、500基を超える古墳が造営されている。そのほとんどは後期古墳だが、中期に遡るものもいくつか含まれている。中期古墳には高塚１号墳、神前山１号墳、大塚古墳などがあるが、いずれも玉城丘陵西部にあたり、有田地区からはやや離れている。

後期になると、有田地区近隣にも活発な古墳の造営が見られる。今回その一部を調査した塚田古墳群や、近隣の茶臼塚古墳群などもこの時期のものである。また、塚田古墳群の南方に位置する佐田山３号墳からは７世紀代と考えられる銅鏡が出土している。銅鏡の出土は珍しく、当時の有田地区にかなりの有力者が存在していたものと考えられる。

大仏山丘陵山麓では、後期古墳群のほか、須恵器窯も確認されている。八端古窯跡群は６世紀後半から７世紀前半の須恵器窯で、少なくとも３基が存在している。なお、外城田川中流には原窯跡群があり、こちらは８世紀代まで続く。この地域が様々な土器生産地であったことを物語っている。

d　古代

古代の有田地区は、『和名類聚抄』では度会郡城田郷ないしは湯田郷に相当すると考えられる。また、多気郡有弐郷は有田地区の北部にまで及んでいたと考えられる。

『皇大神宮儀式帳』には垂仁天皇から孝徳天皇の頃まで、「有爾の鳥墓村」に神宮の事務を執行する「神専」が置かれていたとされる。今回調査を行った鳥墓遺跡の北には鳥墓神社があり、鳥墓神専跡として明和町指定史跡となっている。事の実否は定かではないが、有田地区近隣に神宮と直接関係する施設が古代(古墳時代？)に存在していた可能性を示すものとして注意しておきたい。また、斎宮跡も有田地区にほど近い位置にある。

奈良・平安時代の特徴として、有田地区の近隣では土器焼成遺構が多数確認されていることが挙げられる。国史跡である永池土器製作遺跡のほか、北野遺跡などがある。土器生産に関しては、中世・近世においても有田地区で盛んであった。

e　中世

古代以降、有田地区は多気郡と度会郡の境界付近にあたる。郡境は今ひとつ明確ではないが、いずれにしても神宮の影響が強く及ぶ「神三郡」の範囲である。この影響は、中世でも強く及んでいる。

外城田川中流域は内宮の正禰宜である荒木田氏の本拠地であり、それに関連する田宮寺などが隆盛を誇った。また、在地に拠点を持つ神宮の権禰宜層を中心に開発が進展し、神宮領の御薗・御厨として展開した。外城田川中流では野篠里中遺跡や楠ノ木遺跡などで発掘調査がされており、それらの集落は中世前期の地域開発を示す遺跡である。

中世後期には伊勢国司を自称する北畠氏が、玉丸山に城郭を築いて宮川流域支配の拠点とした。後に田丸城が築城され、近世支配の拠点となる基礎は、北畠氏時代に形成されたといえる。

中世においてもこの地域の土器生産は極めて盛んである。平成４年度に実施した世古遺跡(現在の西垣内遺跡)からは、近隣の集落遺跡からは出土していない特殊器形が数多く見られた。同様なことは、砂谷遺跡でも確認できる。これらの遺跡は、中世有爾郷における土器生産の実態を解き明かす鍵を握っている。

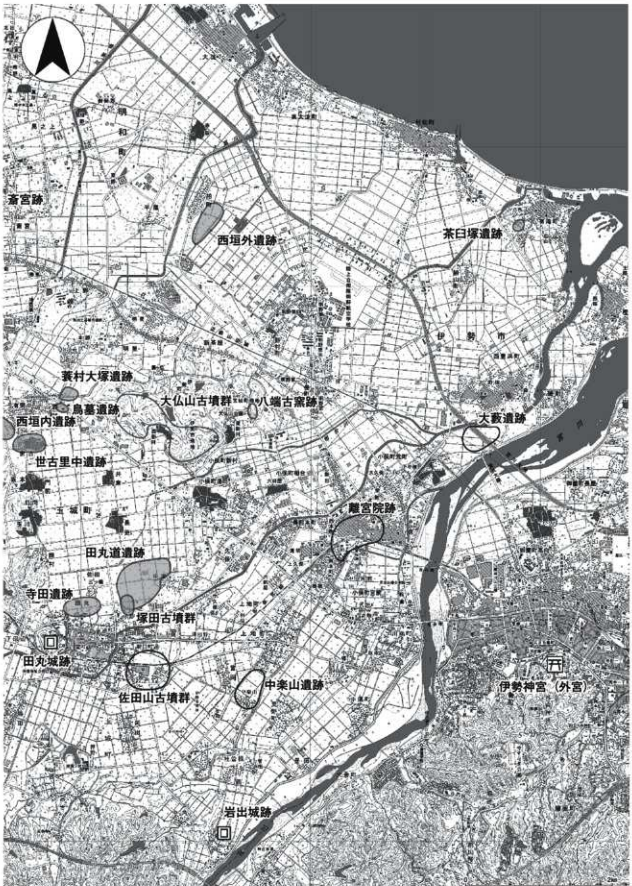
f　近世以降

江戸時代には、紀州藩田丸領の中心として田丸城が位置づけられ、城代が置かれた。田丸はまた、伊勢参宮街道と熊野街道との分岐点であり、交通の要衝として機能していた。伊勢参宮を終えて熊野詣でへと旅立つ人々は、田丸にて身支度を調えたという。明治期以降も田丸の盛行は続き、明治22年に町村制が施行されると、外宮膝下の山田町とともに、田丸はいち早く「田丸町」として町制を施いている。

近世においても有田地区の土器生産は盛んであった。これは、今回調査した世古里中遺跡や西垣内遺跡の状況が物語っている。

以上、有田地区を中心に、当地の状況を概観してきた。当地には通史的に良質な遺跡が展開しているが、それは神宮膝下の要地としての歴史と、交通の要衝としての歴史へと引き継がれていることが認識できよう。　　(高松・伊藤)

〔参考文献〕
・玉城町編『玉城町史』上巻(1995年)
・明和町史編さん委員会編『明和町史』史料編、第１巻、自然・考古(2004年)
・『三重県の地名』(日本歴史地名大系24、平凡社、1983年)
・小俣町教育委員会「八端古窯跡群範囲確認調査概報」(1993年)
・三重県埋蔵文化財センター『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』(2010年)
・相場さやか「玉城町中楽の考古資料 －古墳群出土資料を中心に－」(『研究紀要』第21号、三重県埋蔵文化財センター2012年)



第Ⅱ－１図　調査遺跡と周辺の遺跡(国土地理院『伊勢』『明野』)

Ⅲ　玉城町佐田　寺田遺跡（第１・２次）

１　調査経緯と調査区の状況

a　調査経緯

寺田遺跡の調査は、平成21・22年度経営体育成基盤整備事業（有田地区）による。いわゆる「宮川用水」を有田地区へと導水するための事業である。寺田遺跡の範囲では、幹線用水路と支線用水路とが計画されていた。幹線用水路は掘削幅２～３ｍ、支線用水路の掘削幅は１ｍ内外である。

調査面積は、平成21年度の立会調査250㎡、本調査（第１次調査）130㎡、平成22年度第２次調査では、幹線・支線併せて675㎡であった。

b　調査区の状況

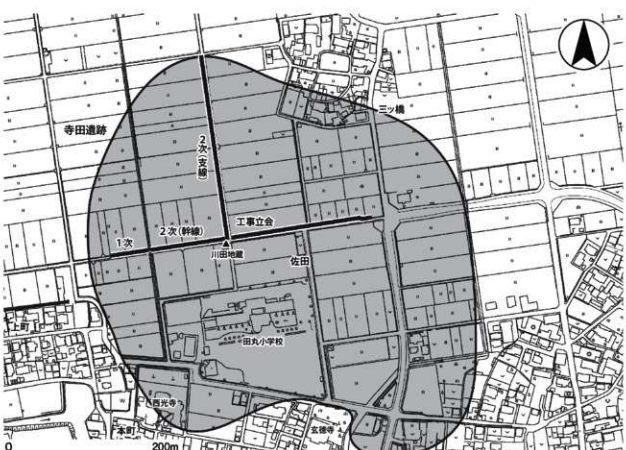
第Ⅰ章で触れたとおり、寺田遺跡の発掘調査は平成21・22年度の２ヶ年にわたって実施した。その調査地点は第Ⅲ－１図に示した通りである。

【平成21年度】　工事立会調査区は、道路北端に沿うように東西190ｍ、幅２ｍで行った。第１次調査区は工事立会箇所より西方において道路北端に沿うように東西長50ｍ、幅３ｍの範囲を発掘した。

【平成22年度】　第２次調査では道路北端に沿った東西長100ｍ、幅３ｍの範囲に加えて、道路西端に沿った南北長240ｍ、幅約１ｍの範囲についても発掘している。これは東西方向の送水管（幹線）から南北方向の送水管（支線）が分流していることによる。しがたって前者を第２次（幹線）調査区、後者を第２次（支線）調査区と呼称して区別しておく。

２　工事立会調査区の層位と遺構

工事立会では溝６条のほか、旧河道の可能性をも



第Ⅲ－１図　調査区周辺地形図

つ落込み２箇所、柱穴等を検出した(第Ⅲ－２図)。

a　基本層位

アスファルト・道路造成に伴う砕石等の下には旧耕作土(第22層)が一部残るもののわずかで、その下に灰黄褐色や褐灰色、黒褐色の堆積層が確認できる。さらに下層において、基盤にあたる第５・８・18～21・25・28・29・41・42・56・57層をとらえた。なお、ＳＤ３は基盤を深く削り込んでいるため、最下層において明緑灰色粘土の第21層が確認できた。この層は、第Ⅳ章において報告する田丸道遺跡ＳＲ15の地山(第77層)に対応する。ＳＤ３の埋土は、粘土からシルト質を主体とし、下層に向かうにつれて褐色系から灰色系の色調を帯びる傾向をもつ。ＳＺ４は褐灰色粘土を埋土とする。

ＳＤ６の埋土は褐灰から灰褐色の粘土あるいは粘質土で構成されており、下層に向かうにつれて明度が増す傾向にある。このうち第34・36層において遺物を確認したものの、最下層の第37層ではほとんど認められなかった。ＳＺ８では上部において埋土が安定しないものの、下部において灰色系の粘土を主体とした堆積層が確認できた。

b　遺構

ＳＤ１～３　ＳＤ１は調査範囲の東端で検出した南北方向の溝で、幅40cm、深さ５cmである。ＳＤ２は幅50cm、深さ40cm、ＳＤ３は幅1.7m、深さ1.3mで、ともに南北方向を軸とする。ＳＤ１・２では出土遺物がみられなかった。ＳＤ３では古代から中世の遺物が出土している。

ＳＺ４　旧河道の可能性をもつ落込みである。その東端はとらえることができなかったが、幅約18mと推定される。ＳＺ４では古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。

ＳＤ５　南北方向を軸とする幅15m程度の溝である。古墳時代の遺物が多く出土しており、当該期の遺構として評価できる。

ＳＤ６　幅7.4m以上の広い溝である。旧河道の可能性も考慮すべき遺構である。ＳＤ６からは平安時代末を中心とした遺物が出土した。

ＳＤ７　小規模な溝で土坑とすべきかもしれない。ごく細片ながら、古代から中世の遺物が確認された。

ＳＺ８　調査範囲の西端で検出した幅15.5m以上の落込みである。形状から旧河道の可能性も考えられる。出土品は中世の遺物を中心とするが、近・現代の遺物を一部含むことから、圃場整備前まで存続していたと考えられる。

３　第１次調査区の層位と遺構

第１次調査では溝１条、掘立柱建物とみなせる柱列２条を検出した。この他、調査区西端において溝状の落ち込みを検出した。

a　基本層位

田畑に伴う耕作土・床土(第58層)の下には黒褐色粘質土の第63層が確認でき、その下層において基盤に相当する褐色粘土の第66層が確認できた。

ＳＤ11は、第63層を切り込む形で形成されている。後述するＳＡ12・13は第66層を遺構面としており、第63層を遺構面とするＳＤ11はそれより新しい時期に形成されたことがわかる。

この他、調査区西端の溝状落ち込みは、第63層を切り込むことから、ＳＤ11とともに新しい時期の遺構と考えられる。

b　遺構

(1)柱列

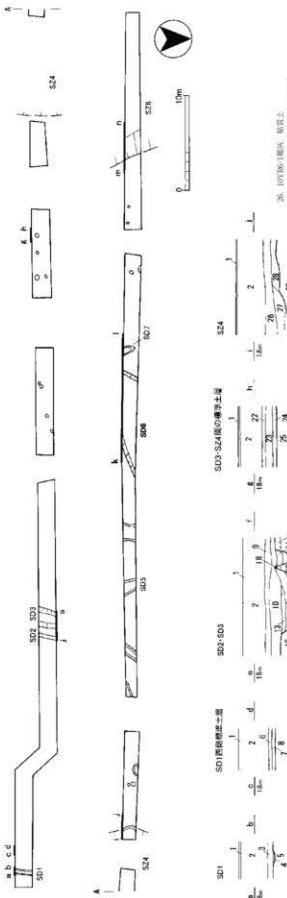
調査区が狭いため、確認された遺構はいずれも柱列として認識したにとどまる。しかし、根石を伴うことから、本来は掘立柱建物と考えられるものである。

ＳＡ12　調査区中央付近で検出した東西方向を軸とする柱列で、掘立柱建物の一部と考えられる。３間(6.5m)以上の規模をもつ。柱穴に根石を伴うこと、古代の土師器小片が出土したことから、建物の時期として平安時代後期以降の可能性が考えられる。

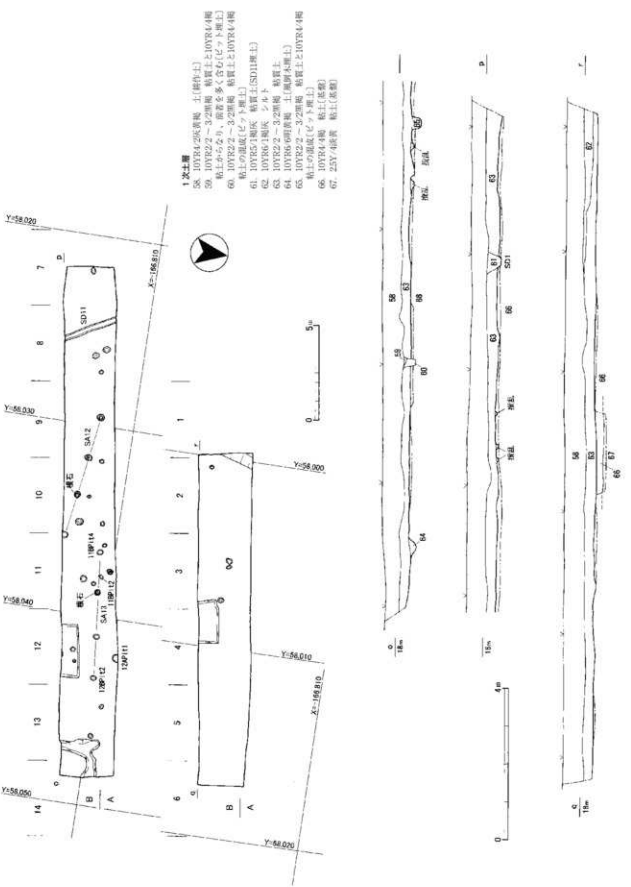
ＳＡ13　ＳＡ12の東側で検出した。東西を主軸とする柱列で、掘立柱建物の一部と考えられる。１間約2.2mで、調査区内で３間確認できた。柱穴に根石を伴うこと、平安時代末の遺物を伴うことから、建物の時期を平安時代末に求めることができる。

(2)溝

ＳＤ11　ＳＡ12の西側で検出した幅30cm程の溝である。第63層を切り込むことから層位的にＳＡ12・13よりも形成時期が新しいといえる。なお、ＳＤ11において時期を絞り込める遺物は出土しなかった。



第Ⅲ－２図　工事立会調査区平面・土層断面図



第Ⅲ－３図　第１次調査区平面・土層断面図

4　第２次(幹線)調査区の層位と遺構

第２次調査(幹線)では、近・現代の池およびそれに関連する遺構(ＳＤ59～60)、旧河道の可能性が高いＳＤ53・ＳＤ71、主軸の方向から一連の遺構とみなせる溝(ＳＤ55～58)、柱穴等が確認された。調査区西半では柱穴が多く検出されており、根石を伴うものも認められることから、平安時代後期から中世の集落が形成されていたと考えられる。なお、調査グリッドは調査区幅の都合から東西方向のみ設定した。

a　基本層位

耕作土・近現代の置土・造成土(第68～73層)の下層では、遺構とそれに伴う埋土が検出された。主な遺構として東側ではＳＤ60、中央付近ではＳＤ51～54、西側ではＳＤ55～58・71があげられる。これらの多くは基盤層(第103～108層)およびその可能性を持つ層(第101・102層)に形成されている。

東側のＳＤ60の埋土(第76層)には現代遺物が含まれていることから、これらの遺構は圃場整備に先立って埋められたと推測される。

中央付近にみられる遺構のうちＳＤ63は第95層上面から掘り込まれており、ＳＤ51・52より新しい時期に形成されたことが分かる。ＳＤ53の埋土は黒褐色系の色調を呈し、第92・94層は中粒砂で構成される。第91～93層からは多くの土器が出土した。

調査区西側のＳＤ55～58では埋土が類似しており、褐灰色シルトを主体とする。埋土の類似性と溝の主軸方向から、これらを関連する遺構と判断しておく。なお、ＳＤ54もこれらの遺構に関連する可能性がある。

基盤は東側において褐灰色系の色調を帯びるが、西側では黄褐色系の色調を強める。西側の基盤(第105層)は洪積台地を思わせる土層であり、平野部においては比較的安定した基盤といえる。

b　遺構

(1)旧河道・流路・溝

ＳＤ59・60　ＳＤ59・60は一連の遺構であり、このうちＳＤ60は幅6.8m、深さ約20cmで平底の人工的な池と考えられる。埋土の第76層からは現代遺物が検出された。このＳＤ60からＳＤ59が北東に向かって流れ出る。ＳＤ60は調査区の南側に広がるようで、道路を隔てた南側には川田地蔵(首切り地蔵)がたたずむ。地元の証言を勘案すれば、ＳＤ60は川田地蔵の前にあった通称「血洗池」と考えられる。

ＳＤ51・52　調査区の中央付近で検出した。底面は比較的なだらかであるが、安定した平坦面をなさない。地元の証言によると調査区付近は大水の度に田畑が流され、その度に盛り土を行っていたという。この点からＳＤ51・52は低湿地のような場所だったと推察される。ＳＤ51・52から土師器・山茶椀が出土した。

ＳＤ53・63　調査区の中央で検出した。ＳＤ53は幅4.5mで、西側が１段深くなっている。地元の証言もふまえれば、深い部分は中世に埋没したものの、浅い部分は近世・近代まで機能していた可能性も考えられる。ＳＤ53からは古代から中世の遺物が多く出土した。ＳＤ63は幅40cmの溝でＳＤ53の浅い部分に合流する。合流部では長径30cm程の石材が据えられており、水量・水位を調節するために用いられた可能性がある。

ＳＤ54　ＳＤ53に沿うようにして検出された逆台形の断面を呈する幅1.3mの直線的な溝である。ＳＤ54は調査区の北側でＳＤ53に合流するとみられる。なお、ＳＤ54は後述のＳＤ56・58と方向を揃えることから一連の可能性をもつ。

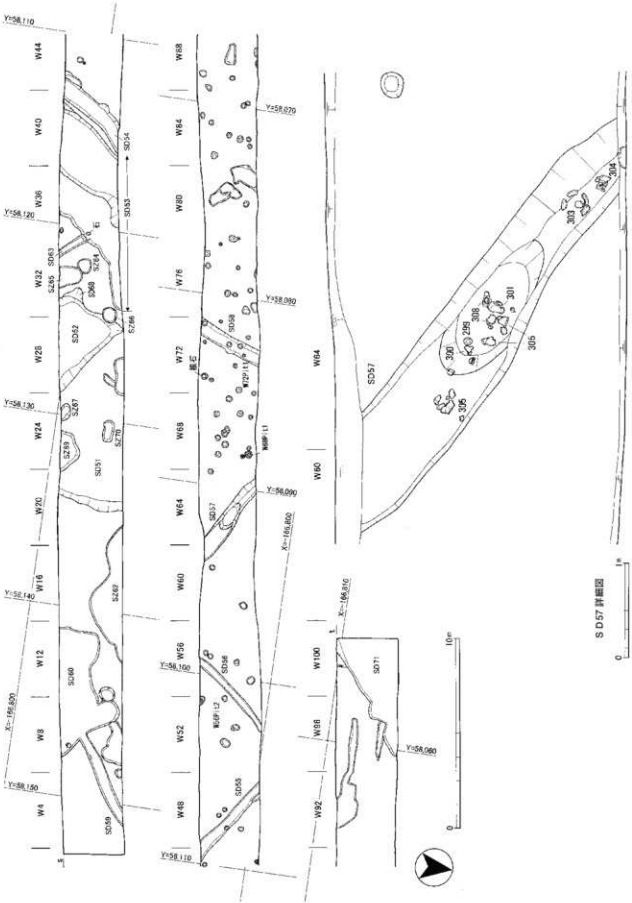
ＳＤ55～58　ＳＤ54に平行する方向とそれに直行するように展開する直線状の溝である。断面はいずれも逆台形を呈する。溝の方向や形状から一連の遺構と考えられる。このうちＳＤ57では山茶椀や土師器がまとまって出土している。

ＳＤ55～58の主軸方向は北東方向へ流れるＳＤ53をふまえた結果と考えられる。ＳＤ54も同様だろう。これらの溝は付近の条里と異なる方向を示している点が注視される。

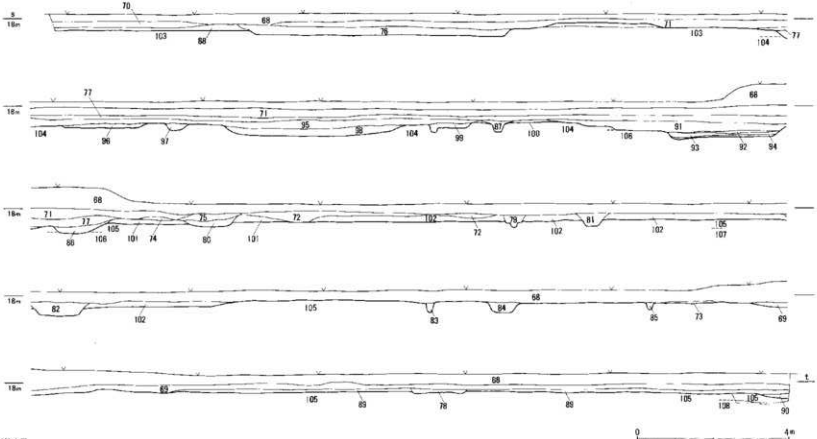
ＳＤ71　調査区の西端で検出された。幅3.2mで北東方向へ流れる。埋土の第90層からは土師器が出土している。

(2)土坑・柱穴等

柱穴　調査区西側で多くの柱穴を検出した。このうちW68Pit１では山茶椀が出土した。またW72グリッドでは根石を伴う柱穴が確認できた。これらの点から、平安時代後期から中世の掘立柱建物で構成される集落が営まれていたと考えられる。

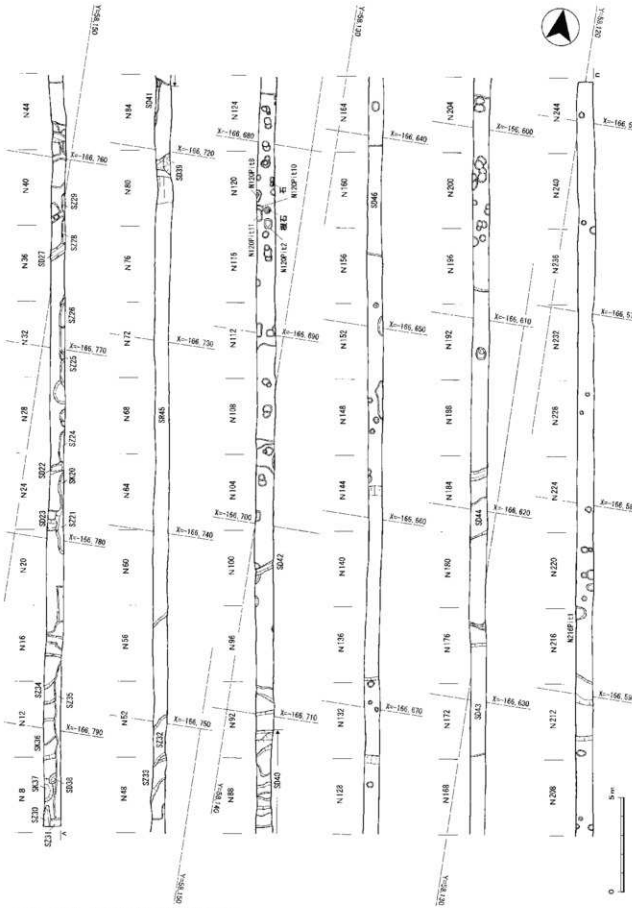


第Ⅲ－４図　第２次(幹線)調査区平面図

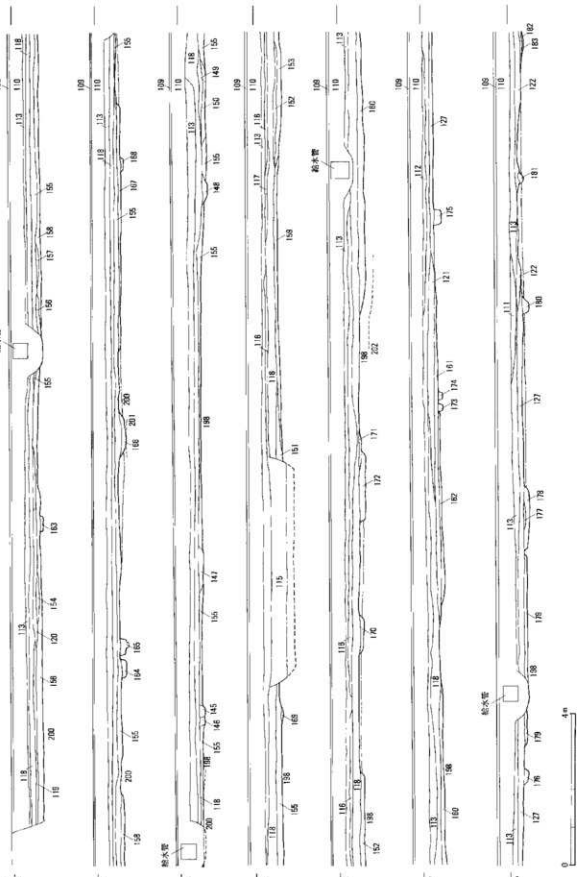


2次(幹線)土層

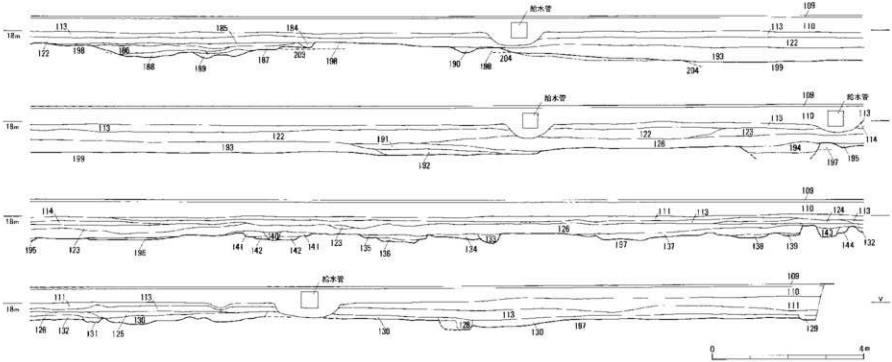
68. 10YR4/2灰黄褐　シルト～細砂層(耕作土)
69. 10YR2/6明黄褐　シルト～細砂層(整地土)
70. 7.5YR3/1黒褐　粘土～シルト(床土)
71. 10YR3/2黒褐　粘土～シルト(床土)
72. 10YR3/1黒褐　シルト～極細砂層(床土)
73. 10YR5/2灰黄褐　シルト～極細砂層(床土)
74. 10YR5/1褐灰　シルト(床土)
75. 10YR4/1褐灰　シルト(床土)
76. 7.5YR5/1褐灰　極細砂層～中砂層(長径2cm以下の礫を20%程度含む)
現代遺物を含む(ＳＤ60〔畝荒廃〕層)
77. 10YR3/1褐灰　粘土～シルト　しまりややあり
78. 10YR3/4暗褐　シルト～極細砂
79. 10YR3/2黒褐　シルト～細砂層(整地土を含む)
80. 10YR4/1褐灰　粘土～シルト　しまりややあり(ＳＤ55埋土)
81. 7.5YR4/1褐灰　シルト　しまりややあり(ＳＤ56埋土)
82. 7.5YR4/1褐灰　シルト　しまりややあり(ＳＤ57埋土)
83. 10YR3/1黒褐　シルト〔Pit埋土〕
84. 7.5YR4/1褐灰　シルト　しまりややあり(ＳＤ58埋土)
85. 10YR3/1黒褐　シルト～極細砂層〔Pit埋土〕
86. 10YR4/1褐灰　粘土～シルト　しまりややあり(ＳＤ54埋土)
87. 7.5YR2/1黒　粘土～細砂層(一部中砂層)〔ＳＤ63埋土〕
88. 10YR5/1褐灰　シルト～細砂層
89. 10YR3/3暗褐　シルト～極細砂層
90. 10YR4/1褐灰　シルト　しまりややあり(ＳＤ71埋土)
91. 7.5YR3/1黒褐　シルト～極細砂層(遺物を多く含む)〔ＳＤ53埋土〕
92. 10YR3/2黒褐　中砂層(遺物を多く含む)〔ＳＤ53埋土〕
93. 10YR3/1褐灰　シルト～極細砂層(遺物を多く含む)〔ＳＤ53埋土〕
94. 10YR2/3黒褐　中砂層(遺物をあまり含まない)〔ＳＤ53埋土〕
95. 7.5YR4/1褐灰　シルト〔ＳＤ51埋土〕
96. 7.5YR3/1黒褐　粘土～シルト(一部細砂層を含む)〔ＳＺ69埋土〕
97. 10YR3/2黒褐　シルト～極細砂層〔ＳＺ67埋土〕
98. 5YR4/1褐灰　粘土～極細砂層(一部細砂層含む)〔ＳＤ52埋土〕
99. 7.5YR3/1黒褐　シルト～細砂層〔ＳＺ65埋土〕
100. 10YR3/3暗褐　シルト
101. 10YR3/3暗褐　シルト
102. 10YR3/3暗褐　極細砂層
103. 7.5YR5/1褐灰　シルト～極細砂　しまりややあり(基盤)
104. 7.5YR4/2灰褐　シルト～極細砂層　しまりあり(基盤)
105. 10YR4/3にぶい黄褐　細砂層　しまりあり(基盤)
106. 10YR5/4にぶい黄褐(一部荒元されて10GY5/1緑灰の色調となる)
粘土～シルト(一部細砂層)　しまりあり(基盤)
107. 7.5YR4/4褐色　中砂層(長径2～4cm程度の砂礫を多く含む)
しまりややあり(基盤)
108. 10Y R6/4にぶい黄橙　シルト～極細砂層(一部中砂層を含む)
しまりあり(基盤)



第Ⅲ－６図　第２次(支線)調査区平面図



第Ⅲ－７図　第２次(支線)調査区土層断面図(1)



2次(支線)土層

109. アスファルト
110. 5BG6/1青灰　粗および2.5Y6/1黄灰　粗砂砂利および粘土
111. 10YR6/6明黄褐　極細砂～細砂砂[整地土]
112. 10YR4/1黒褐20%に7.5YR6/1黒褐30%を混状に含む　シルト～極細砂砂
113. 7.5YR3/1黒褐　シルト[旧耕作土]
114. 2.5Y3/2黒褐　シルト～細砂砂
115. 10YR4/1褐灰　シルト～細砂砂[S D 6埋土]
116. 10YR4/1褐灰　シルト
117. 10YR4/1褐灰　シルト～極細砂砂
118. 10YR4/1褐灰　粘土～シルト
119. 10YR4/1褐灰　シルト～極細砂砂
120. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂
121. 7.5YR4/1褐灰　粘土～シルト　しまりややあり
122. 10YR4/1褐灰　粘土～シルト
123. 2.5Y3/1黄灰　シルト
124. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂
125. 10YR5/2灰黄褐　シルト
126. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂[一部中粒砂]
127. 7.5YR2/2黒褐　粘土～シルト　しまりややあり
128. 10YR3/1黒褐　シルト～細砂砂[圃場整備に伴う埋土]
129. 5BG4/1暗緑灰を10%、10YR3/1黒褐を90%、混状に含む、シルト～細砂砂[圃場整備に伴う埋土]
130. 5BG4/1暗緑灰を10%、10YR3/1黒褐を90%、混状に含む、シルト～細砂砂[圃場整備に伴う埋土]
131. 7.5YR4/2灰褐　シルト～細砂砂[圃場整備に伴う埋土]
132. 7.5YR4/2灰褐　シルト～細砂砂[圃場整備に伴う埋土]
133. 10YR4/1褐灰　シルト～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
134. 7.5YR3/2黒褐　極細砂砂～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
135. 10YR4/1褐灰　シルト～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
136. 10YR5/1褐灰　シルト～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
137. 7.5YR3/2黒褐　極細砂砂～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
138. 10YR4/4褐　極細砂砂～中粒砂[圃場整備に伴う埋土]
139. 10YR4/6褐　極細砂砂～中粒砂
140. 7.5YR5/1褐灰　シルト～中粒砂
141. 7.5YR5/1褐灰　シルト～中粒砂
142. 7.5YR5/1褐灰　シルト～中粒砂
143. 10YR3/4暗褐　極細砂砂～細砂砂[ピット埋土]
144. 7.5YR4/2灰褐　シルト～細砂砂
145. 7.5YR3/1黒褐　シルト～極細砂砂
146. 7.5YR3/1黒褐　シルト～極細砂砂
147. 7.5YR3/1黒褐　シルト
148. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂[溝埋土]
149. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂[S D 44埋土]
150. 7.5YR3/2黒褐　シルト～細砂砂[S D 44溝埋土]
151. 7.5YR3/1黒褐　シルト
152. 7.5YR3/1黒褐　シルト
153. 7.5YR3/2黒褐　粘土～シルト[S D 46埋土]
154. 10YR3/1黒褐　シルト～極細砂砂
155. 7.5YR3/2黒褐　シルト
156. 7.5YR3/2黒褐　シルト～細砂砂
157. 7.5YR3/2黒褐　シルト～細砂砂
158. 10YR4/3にぶい黄褐　粘土～シルト　しまりややあり
159. 7.5YR3/2黒褐　シルト
160. 7.5YR3/2黒褐　シルト
161. 7.5YR2/2黒褐　粘土～シルト
162. 7.5YR4/1褐灰　シルト
163. 10YR3/2黒褐　シルト～細砂砂[ピット埋土]
164. 10YR5/3にぶい黄褐　シルト～極細砂砂[ピット埋土]
165. 10YR5/2灰黄褐　シルト～細砂砂[ピット埋土]
166. 10YR5/3にぶい黄褐　シルト[溝埋土]
167. 10YR3/4暗褐　シルト[溝埋土]
168. 10YR5/3にぶい黄褐　シルト～細砂砂[ピット埋土]
169. 7.5YR3/1黒褐　シルト～細砂砂[根痕]
170. 7.5YR2/2黒褐　シルト[土坑埋土]
171. 7.5YR4/1褐灰　シルト
172. 7.5YR2/2黒褐　シルト[土坑埋土]
173. 10YR3/1黒褐　シルト[ピット埋土]
174. 7.5YR2/1黒褐　シルト[ピット埋土]
175. 7.5YR3/3暗褐　シルト[ピット埋土]
176. 7.5YR3/2黒褐　シルト[ピット埋土]
177. 7.5YR3/1黒褐　シルト[土坑埋土]
178. 7.5YR3/2黒褐　粘土～シルト[落込埋土]
179. 7.5YR3/2黒褐　粘土～シルト[落込埋土]
180. 7.5YR3/2　シルト～細砂砂[S D 42埋土]
181. 7.5YR3/2黒褐　極細砂砂[ピット埋土]
182. 7.5YR3/2黒褐　シルト
183. 7.5YR3/3暗褐　粘土～シルト[溝埋土]
184. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細砂砂[S D 40埋土]
185. 7.5YR4/1褐灰　シルト[S D 40埋土]
186. 10YR4/1褐灰　シルト[S D 40埋土]

第Ⅲ－8図　第2次(支線)調査区土層断面図(2)

187. 10YR5/1褐灰　シルト～粗粒砂〔ＳＤ40堆土〕
188. 10YR4/3にぶい黄褐　細粒砂～中粒砂〔ＳＤ40堆土〕
189. 7.5YR5/1褐灰　シルト〔ＳＤ40堆土〕
190. 10YR4/1褐灰　シルト～細粒砂〔ＳＤ39堆土〕
191. 10YR3/1黒褐　シルト〔ＳＲ45堆土〕
192. 7.5YR5/1褐灰　シルト〔ＳＲ45堆土〕
193. 7.5YR3/1黒褐　粘土～シルト〔ＳＲ45堆土〕
194. 2.5Y4/1黄灰　粘土～シルト（一部極細粒砂）〔ＳＺ32堆土〕
195. 7.5YR4/1褐灰　シルト～細粒砂〔ＳＺ33堆土〕
196. 7.5YR4/2灰褐　シルト～中粒砂〔落込堆土〕
197. 7.5YR2/2黒褐　粘土（一部中粒砂）　しまりあり〔基盤〕
198. 7.5YR2/3極暗褐　粘土　しまりあり〔基盤〕
199. 10YR5/1褐灰　粘土〔基盤〕
200. 10YR4/2灰黄褐　粘土　しまりあり〔基盤〕
201. 10YR4/4褐　粘土〔基盤〕
202. 10YR6/1褐灰　粘土～シルト　しまりあり〔基盤〕
203. 10YR5/4にぶい黄褐　粘土　しまりあり〔基盤〕
204. 10YR4/4褐　粘土〔基盤〕

※第163～196層は基盤に形成された遺構の堆土

5　第２次（支線）調査区の層位と遺構

第２次調査（支線）では、山茶椀などの遺物が出土した溝のＳＤ40、旧河道のＳＲ45の他、調査区中央付近の微高地において根石を伴う柱穴等を検出した。なお、調査グリッドは調査区幅の都合から南北方向のみ設定した。

a　基本層位

調査区は道路を対象としており、アスファルト（第109層）の下に道路造成に伴う砕石・砂、整地土（第110・111層）が確認できた。道路造成にかかわるこれらの層を取り除くと、旧耕作土・床土にあたる第113・114層、さらに褐灰色シルトを主体とする第116～121層と褐灰色シルトを主体とする第122～127層が認められた。さらに、これらの下層において遺構と基盤層を検出した。基盤層（第197～204層）は、南側では黒褐色粘土、中央付近の微高地では極暗褐色粘土、北側では灰黄褐色粘土を主体とする。

遺構は、南側において圃場整備前の微地形を反映した落込み（第128～138層）、溝・柱穴（第139～144層）、ＳＲ45（第191～193層）等の埋土が確認された。中央付近は、微高地になっており、柱穴やＳＤ40（第184～189層）等に伴う埋土をとらえることができた。

b　遺構

(1) 旧河道・流路・溝

ＳＫ20・ＳＺ21等　Ｎ４～Ｎ44グリッドにおいて調査区東側でとらえた南北に細長い落込み（ＳＫ20、ＳＺ21・24～26・28・29・35）を指し、一連のものと考えられる。地元の証言によると、圃場整備以前は東側において田畑が一段低くなっていたという。したがって、これらは圃場整備以前の微地形を反映していると考えられるとともに、その埋没時期はごく最近といえる。なお、ＳＤ22・27、ＳＺ30・31もこれらに関連すると考えられる。

ＳＲ45　幅24ｍの旧河道あるいは湿地と考えられる。地元の証言や第２次世界大戦の米軍による航空写真を参考にすれば、南西－北東方向に流れる旧河道の可能性があろう。

ＳＤ40　Ｎ80～Ｎ92でとらえた幅７ｍの溝で東西方向に走る。山茶椀など比較的多くの遺物がまとまって出土した。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。なお、弥生土器や古墳時代の須恵器が混じることから、当該期の遺構が近在すると推測される。

ＳＤ44　Ｎ180・Ｎ184でとらえた東西方向を軸とした溝である。第155層から掘り込まれていることから、基盤に形成された遺構よりも新しいと判断される。

その他　Ｎ132～Ｎ144、Ｎ152～Ｎ164付近において低湿地をとらえた。東西を主軸とすると思われるが、流路という判断までは至らなかったため、低湿地として報告しておく。

(2) 土坑・柱穴等

Ｎ80～Ｎ124付近は微高地に相当する。この微高地において多くの柱穴を検出した。Ｎ120では、根石を伴う直径30㎝の柱穴や、根石と思われる石材をもつ直径20㎝の柱穴が確認できた。前者はその特徴や周辺の柱穴からの出土品から平安時代後期から中世の建物遺構といえる。後者についても同様の性格を考えておきたい。

第２次（支線）調査区では、調査区幅の制約により建物の規模・方向を明らかにできなかったが、この地に平安時代後期から中世の集落が営まれていたことが判明した。（高松）

6　出土遺物

寺田遺跡の立会、第１次、第２次調査で出土した遺物総数は、コンテナバット29箱、総重量25.43kgである。以下では、立会・第１次・第２次（支線）・第２次（幹線）の順に遺構単位で記述するが、ＳＤ53は

遺物量が突出して多いため、２次(幹線)と区別して別項を設けた。さらに、ＳＤ40（第Ⅲ－８図参照）とＳＤ53（第Ⅲ－５図参照）に関しては、層位による区別もしている。ここでは遺構別の傾向や遺物の特徴を記述するが、個々の詳細については遺物観察表(第Ⅲ－２～Ⅲ－９表)を参照されたい。

a　工事立会調査

ＳＤ５出土遺物(１～39)　古墳時代を中心とする遺物が出土しており、全体に摩滅が激しく調整が不明瞭なものが多い。１～24は土師器で、１～４は椀、５は小型鉢で外面全体にミガキが施されている。６～13は高坏。14は口縁部小片の出土で、Ｓ字状口縁台付甕である。15～19は甕、20～21は壺、22～24は甑である。25～29は須恵器で、25は高杯蓋である。26、27はいずれも田辺編年ＴＫ47型式に相当する。30～39はすべて土師質の土錘で、細長い形状の比較的小型のものである。

ＳＺ４出土遺物(40～42)　古墳時代から中世までの遺物が混在して出土している。40は古墳時代の土師器高坏、41は平安時代の土師器皿、42は13世紀中葉の土師器鍋である。

ＳＤ６出土遺物(43～50)　43は頸部小片の出土であるが、Ｓ字状口縁台付甕であり、混入品と考えられる。44～46は土師器小皿および皿、47～50は土師器甕である。

ＳＺ８出土遺物(51～53)　51は土師器甕である。52は藤澤編年(以下山茶椀は藤澤編年)渥美型第６型式、53は尾張型第６型式の山茶椀と思われる。

ＳＤ３出土遺物(54～63)　54、55は土師器皿、56は土師器甕で平安時代末期のものと思われる。57～59はいずれも南伊勢系土師器皿Ｂ形態である。61～63は南伊勢系土師器鍋であるが、61は伊藤編年(以下南伊勢系土師器鍋は伊藤編年)第２段階、62は第３段階、63は第４段階のものと考えられる。

包含層出土遺物(64)　64は陶器鉢で底部が出土。

b　第１次調査

ＳＡ13･Pit出土遺物(65～68)　65～68は土師器小皿で、時期はいずれも平安時代末期と思われる。

c　第２次調査(支線)

ＳＤ40第189層出土遺物(69～79)　最下層には弥生時代から平安時代までの遺物が出土している。69は弥生土器壺の底部で弥生時代後期のもの。70は土師器丸底鉢で、全体に磨耗が激しい。71、72は須恵器坏蓋と坏身の小片である。73～76は土師器小皿および皿、77は土師器坏の口縁部の出土で、平安時代前期のものであろう。78、79はいずれも灰釉陶器椀の口縁部の出土である。

ＳＤ40第188層出土遺物(80～82)　80は弥生土器甕の底部で弥生時代中期のもの。81は土師器皿である。82は灰釉陶器椀である。

ＳＤ40第186層出土遺物(83、84)　83は弥生時代末であるが全体に磨耗が激しい。84は灰釉陶器椀で内面底部に重ね焼き痕がはっきりと確認できる。

ＳＤ40出土遺物(85～91)　85は土師器甑の底部の出土。86～88は土師器甕である。89～91はロクロ土師器の椀および皿である。

ＳＺ28･ＳＤ43･39出土遺物(92～95)　92は古墳時代中期の土師器甕で全体に磨耗が激しい。93は山茶椀の底部である。94は山皿で、95は南伊勢系土師器鍋で第４段階のものと考えられる。

Pit･包含層他出土遺物(96～124)　96は土師器皿、97～100はいずれも土師器甕の口縁部が出土。101は口縁部小片の出土で、土師器蓋であろう。102～104はロクロ土師器の椀、皿、台付皿と思われる。

105は頸部小片の出土で、磨耗が激しいが、古式土師器と思われる。106は須恵器壺の底部の出土。107はロクロ土師器椀の底部である。108は山皿、109～119は山茶椀である。115は渥美型第６型式、118は渥美型第５型式であろう。120は小片ではあるが、土師器蓋とした。121は土師器羽釜、122、123は土師器鍋の口縁部の出土で、123は南伊勢系土師器鍋第４段階と思われる。

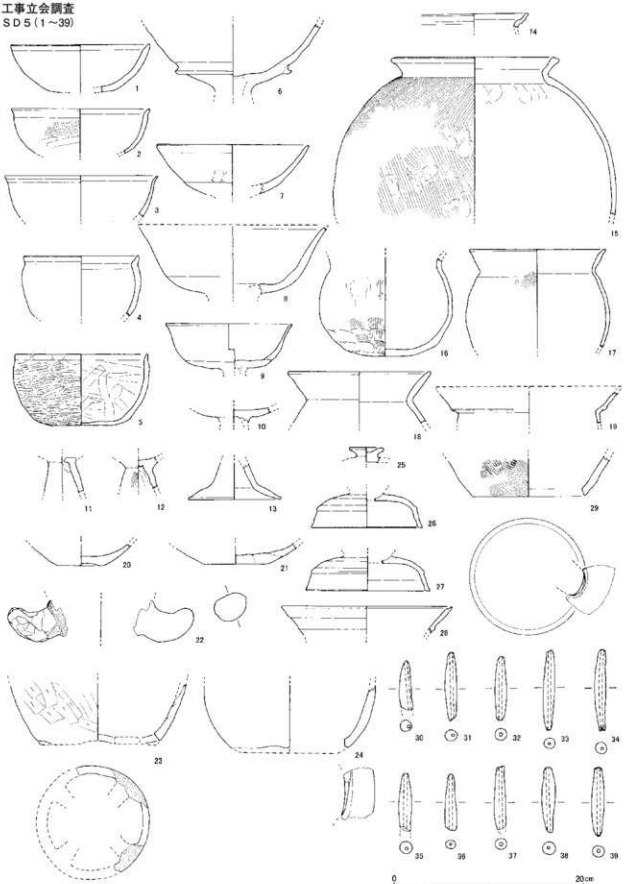
124は土師器羽釜である。

d　ＳＤ53出土遺物

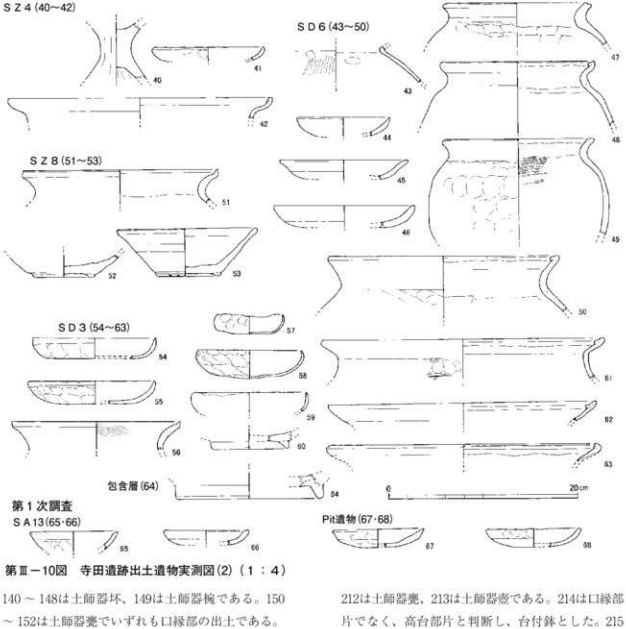
ＳＤ53第94層出土遺物(125～127)　遺構最下層出土の遺物。125～127は土師器小皿および皿である。126の口縁部と底部外面には煤が付着している。127は完存の土師器皿で、底部外側に墨書が確認できるが、不明瞭なため判別はできない。記号ではなく、文字と思われ、「女」「必」「交」の可能性がある。

ＳＤ53第93層出土遺物(128～178)　遺構下層出土の遺物。128～139は土師器小皿および皿である。

工事立会調査
ＳＤ５（１～39）



第Ⅲ－９図　寺田遺跡出土遺物実測図(1)（１：４）



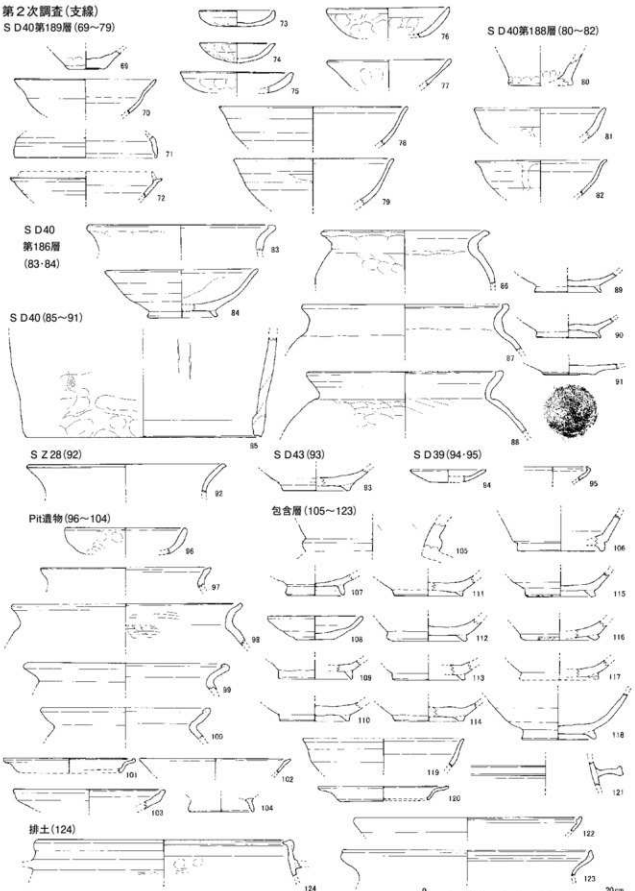
第Ⅲ－10図　寺田遺跡出土遺物実測図(2)（１：４）

140 ～ 148は土師器坏、149は土師器椀である。150 ～ 152は土師器甕でいずれも口縁部の出土である。153は両黒、154は内黒の黒色土器椀で、154の内面にはわずかであるが暗文が確認できる。155 ～ 159は須恵器甕および大甕である。160 ～ 164は須恵器壺で、162の底部外面には「×」のようなヘラ記号が確認できる。165は須恵器鉢であると思われる。166 ～ 168は灰釉陶器小椀および椀である。166・169には煤が、168には墨跡が確認できる。169 ～ 174は灰釉陶器壺で、171と172は同一個体の可能性がある。173の体部片には明瞭な除刻花文がみられる。175 ～ 177はいずれも山茶椀底部の出土である。178は陶器甕である。

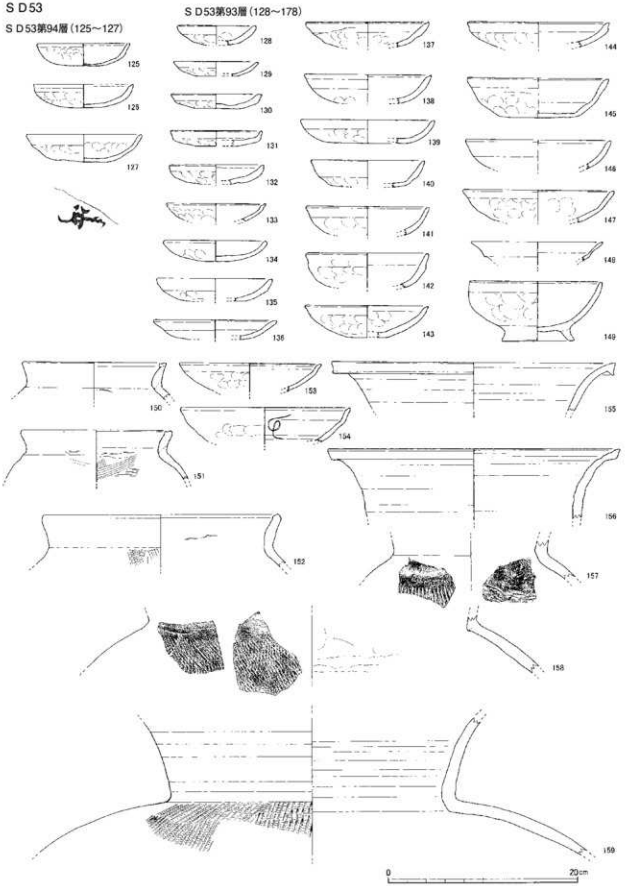
ＳＤ53第92層出土遺物(179 ～ 236)　遺構中層出土の遺物。179 ～ 199は土師器小皿および皿、200、201は土師器坏、202 ～ 204は土師器椀である。205 ～ 212は土師器甕、213は土師器壺である。214は口縁部片でなく、高台部片と判断し、台付鉢とした。215 ～ 218は須恵器甕である。219 ～ 221は灰釉陶器小椀および椀である。222 ～ 225は灰釉陶器壺で、223には内面に墨が付着する。226はロクロ土師器小皿、227 ～ 235はロクロ土師器椀である。236は渥美産陶器甕の底部である。

ＳＤ53第91層出土遺物(237 ～ 267)　遺構上層出土の遺物。237 ～ 243は土師器小皿および皿で、238はほぼ完存状態で出土した。244は土師器坏、245 ～ 249は土師器甕であり、250は南伊勢系土師器鍋であろう。251は灰釉陶器椀、252 ～ 257は山茶椀で、252には輪花と自然釉が確認できる。258はロクロ土師器皿、259 ～ 267はロクロ土師器椀である。

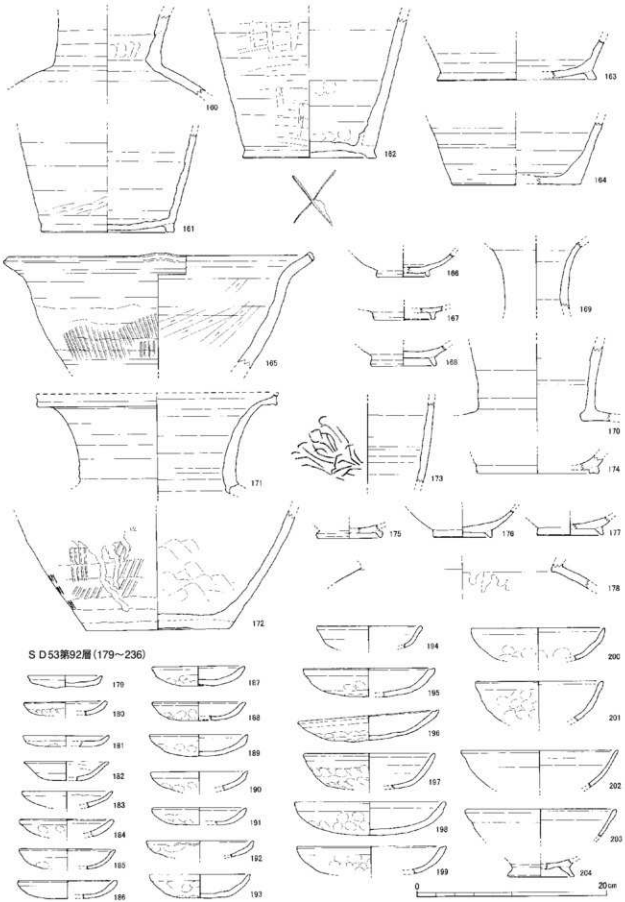
ＳＤ53他出土遺物(268 ～ 272)　268 ～ 272は弥生時



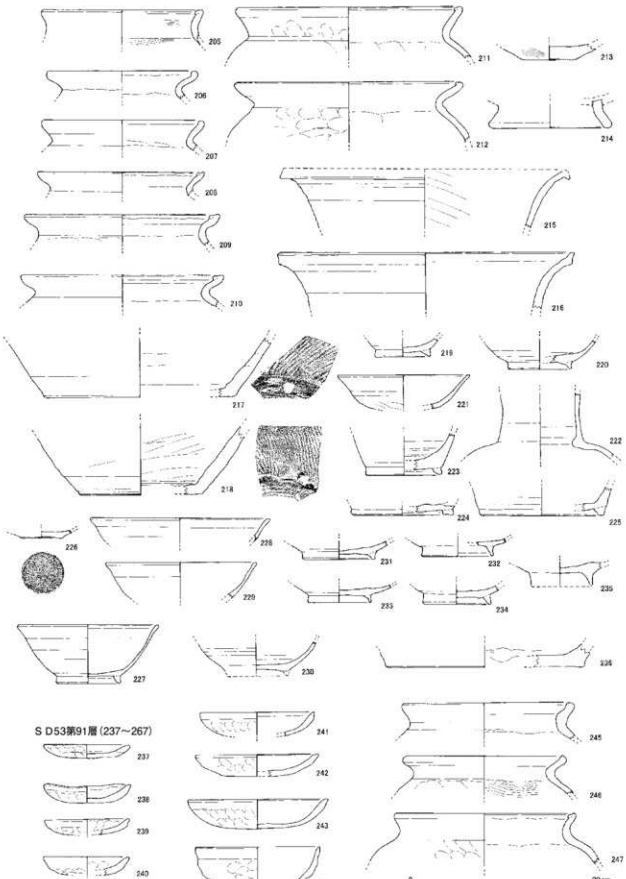
第Ⅲ－11図　寺田遺跡出土遺物実測図(3)（１：４）



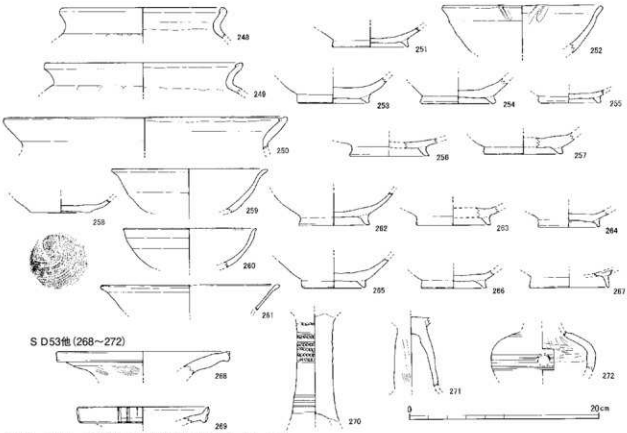
第Ⅲ－12図　寺田遺跡出土遺物実測図(4)（1：4）



第Ⅲ－13図　寺田遺跡出土遺物実測図(5)（1：4）



第Ⅲ－14図　寺田遺跡出土遺物実測図(6)（1：4）



第Ⅲ－15図　寺田遺跡出土遺物実測図(7)（1：4）

代後期から古墳時代前期初頭にかけての遺物で、第92･91層から出土しており、混入品と考えられる。268・269は壺である。270は高坏の脚部で、赤色顔料が残る。

e　2次調査(幹線)

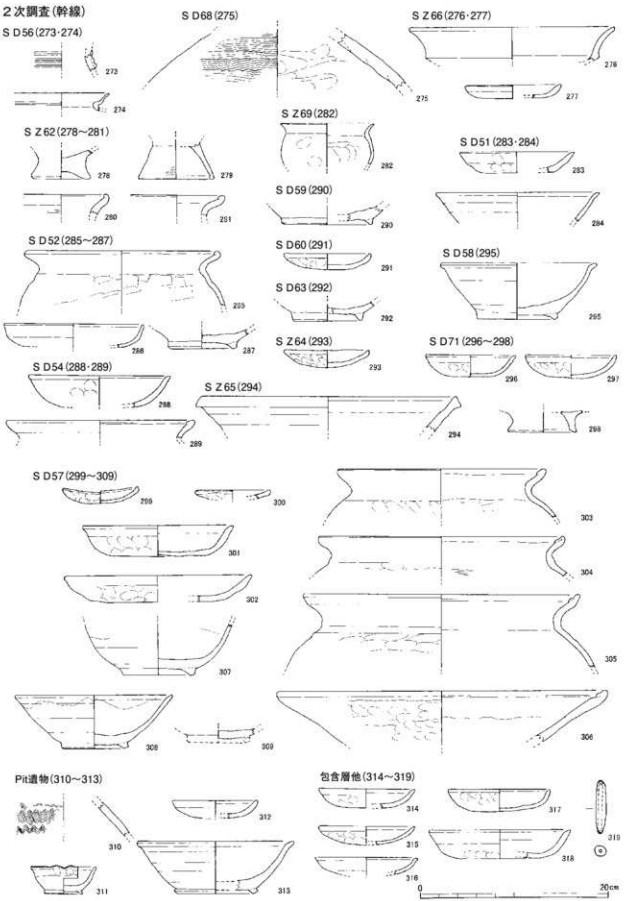
SD51･52･54･56･58～60･63･68･71、SZ62･64～66･69出土遺物(273～298)　273は弥生土器壺の小片で、外面に赤色顔料が残る。274は口縁部小片のみの出土で、S字状口縁台付甕。275は壺の体部片、276は高坏で、いずれも弥生時代後期のものと思われる。277は土師器皿、278、279は台付甕の台部である。280、281は土師器甕の口縁部小片である。282は土師器小型甕。283は土師器皿、284は山茶椀である。285は土師器甕、286は土師器皿、287はロクロ土師器椀である。288は土師器皿、289は土師器甕である。290は山茶椀。291は土師器小皿。292はロクロ土師器椀。293の土師器皿はほぼ完存状態で出土。294は須恵器甕の口縁部。295は山茶椀で尾張型第5型式と思われる。296、297は土師器小皿、298は高台部のみの出土で、土師器椀か台付皿と思われる。

SD57出土遺物(299～309)　299～302は土師器小皿および皿である。302には内外面ともに煤が付着する。303～305は土師器甕、306は土師鉢の口縁部が出土している。307、308はいずれも渥美型の山茶椀で、漬け掛けされた釉が確認できる。307が第4型式、308が第5型式であろう。309は白磁椀の底部で、ケズリコミは浅く、玉縁口縁椀の可能性もある。

Pit･包含層他出土遺物(310～319)　310は弥生土器壺の体部小片の出土である。311は渥美産の片口小椀で自然釉が確認できる。312は土師器小皿で、313は渥美型第5型式と思われる山茶椀である。

313～318は土師器小皿および皿である。319はほぼ完存の土錘である。　(星野)

[註]　土器の編年･時期に関しては、以下の編年を参考にした。
・田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)
・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター、1994年)
・伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』(三重歴史文化研究会、1990年)『南伊勢・志摩地域の中世土器』(『三重県史』資料編 考古2、2008年)



第Ⅲ－16図　寺田遺跡出土遺物実測図(8)（1：4）

7　調査のまとめと検討

a　概要

寺田遺跡ではＳＡ12・13や根石を伴う柱穴が示すように平安時代後期から中世において集落が展開することが判明した。またＳＤ５において古墳時代の土器が一定量出土したことから、古墳時代にも集落の本格的な形成がなされたと考えられる。さらに、わずかながら弥生土器も確認できたことから、当遺跡の範囲、あるいは近在の地に弥生時代の集落を想定する必要があるだろう。

この他、ＳＲ45・ＳＤ53等が示すように旧外城田川・相合川につながる旧河道・旧流路をとらえた。これにより田丸城の改修に伴う河川の付け替えのあり方や土地利用の変化に関する手がかりが得られたといえる。このように、寺田遺跡そのものの内容だけでなく、その周辺と連動した変化に関する手がかりも得られたのである。

b　評価

遺跡の年代　寺田遺跡については、これまでに紡錘車が出土したと紹介されている[1]。この紡錘車は田丸小学校新校舎建設の際に出土しており、６世紀前半のものとされる。今回の一連の調査において弥生土器、古墳時代前期の土器が確認できたことから、遺跡の成立年代はさらに遡るといえる。以下では時代順に評価を加えておく。

古墳時代　ＳＤ５から古墳時代の土器が出土した。土師器・須恵器が一定数認められたことから集落の存在がうかがえる。また、土錘の出土から河川での漁撈も行っていたと推測される。

平安時代後期～中世　掘立柱建物に関連する遺構が検出され、その年代は平安時代後期から中世と考えられる。これらの遺構は第１次調査区・第２次調査区(幹線・支線)で確認できたことから、集落は広い範囲にわたって展開していたと想定できる。

なお、建物の密集度や旧外城田川・相合川の氾濫原にあたるという立地を勘案すれば、それほど大規模な集落ではなく、洪水の度に適地を求めて絶えず移動していた集落と判断される。そして寺田遺跡の集落は、現在の三ツ橋集落へとやがて収斂していくのだろう。まさに三ツ橋集落の前身をとらえたといえる。

条里の方向　ＳＤ55～58は、伊藤裕偉氏によって整理された付近の条里型地割り[2]と異なる主軸方向であった。ＳＤ53付近では洪水等の事情から河道や流路の方向を基軸としたのだろう。実状にあわせた土地利用の好例といえる。

近世　近世になると、田丸城の修築に伴って外城田川は現在の流れに付け替えられた[3]。これによって、かつての流れは田丸城外堀付近から相合川あるいは外城田川へと通じる小さな流路となったようである。この小さな流路は圃場整備以前まで機能していたようで、地元の証言によれば、かつて田丸城から伊勢市小俣町方面へ小さな舟で往来できたという。第２次世界大戦後にアメリカ軍が撮影した航空写真でも南西－北東方向の流路が確認できる。ＳＲ45、ＳＤ53・71等がこれにあたる可能性がある。

写真Ⅲ－１　川田地蔵

血洗池　ＳＤ60については、川田地蔵の前にあった「血洗池」の可能性を指摘できた。この池は1970年の圃場整備以前にもみられたという地元の証言がある一方で、地蔵は圃場整備の際に100ｍ東の地点から現在の地に移されたとも言われている[4]。この異同は「血洗池」の形成年代とともに、処刑場の正確な位置の特定にも関わる。刑場に伴う遺構の検出は困難を伴うと推察されるが、今後の発掘調査・関連資料の詳細な検討によって上記の問題が整理・解決される必要があろう。

c　まとめ

以上、寺田遺跡の概要とその評価についてまとめた。寺田遺跡周辺は、玉城町においてこれまで発掘調査が十分なされてこなかった地域にあたる。寺田遺跡の発掘調査は、近世城郭田丸城の成立前代の玉城町を明らかにする上で、今後、大きな意味を持つことだろう。　（髙松）

[註]

(1) 『玉城町史』上巻(1995年)

(2) 伊藤裕偉「斎宮室・伊勢道・条里」(『斎宮歴史博物館研究紀要』13 斎宮歴史博物館、2004年)

(3) 岩中淳之「田丸城」(『三重県の城』郷土出版社、1991年)

(4) 近隣の古老の証言による。川田地蔵(首切り地蔵)は佐田村川田に田丸領の刑場があり、刑死者供養のために祀られたのだという。地蔵の前にあった池の名称については、罪人処刑後にこの池で血を洗ったことに由来するという。なお、刑場の詳細は『玉城町史』下巻(2005年)を参照されたい。

第Ⅲ－１表　寺田遺跡遺構一覧表

遺構名	形態	時期	調査次数	グリッド	長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
ＳＤ１	溝		立会	－	2.0 ～	0.4	0.08	
ＳＤ２	溝		立会	－	1.1 ～	0.4	0.07	
ＳＤ３	溝	中世	立会	－	2.1	1.8 ～	1.18	
ＳＺ４	落込み	平安時代～中世	立会	－	1.5 ～	1.4 ～	0.14	旧河道？
ＳＤ５	溝	古墳時代中～後期	立会	－	1.8 ～	1.5 ～	0.12	
ＳＤ６	溝	平安時代末	立会	－	7.4 ～	4.0 ～	0.65	旧河道？
ＳＤ７	溝	古代～中世	立会	－	1.5 ～	1.0 ～	0.51	
ＳＺ８	落込み	古代以降	立会	－	15.5 ～	1.5 ～	0.7	旧河道？
ＳＤ11	溝		1次	8Ａ・8Ｂ	3.0 ～	0.3	0.07	
ＳＡ12	柱列	平安時代後期？	1次	9Ｂ・10Ｂ・11Ｂ	－	－	－	３間(6.5m以上)
ＳＡ13	柱列	平安時代末	1次	11Ｂ・12Ｂ	－	－	－	３間(6.6m)
ＳＫ20	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ24	2	0.3 ～	0.16	圃場整備前の微地形
ＳＺ21	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ20・Ｎ24	2.4	0.4 ～	0.19	圃場整備前の微地形
ＳＤ22	溝	近・現代	2次(支線)	Ｎ24	0.7 ～	0.5	0.16	
ＳＤ23	溝	中世	2次(支線)	Ｎ20・Ｎ24	1.1	0.5 ～	0.09	SD23→SZ21の形成順
ＳＺ24	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ24・Ｎ28	1.7	0.3 ～	0.1	圃場整備前の微地形
ＳＺ25	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ32	0.4 ～	0.3 ～	0.07	圃場整備前の微地形
ＳＺ26	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ32・Ｎ36	3.2	0.3 ～	0.22	圃場整備前の微地形
ＳＤ27	溝	近・現代	2次(支線)	Ｎ36	0.9 ～	0.5	0.22	SZ28→SD27の形成順
ＳＺ28	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ36・Ｎ40	1.3 ～	0.2 ～	0.12	圃場整備前の微地形
ＳＺ29	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ40	1.1	0.2 ～	0.06	圃場整備前の微地形
ＳＺ30	溝	近・現代	2次(支線)	Ｎ８	1.1 ～	0.4 ～	0.26	
ＳＺ31	溝	近・現代	2次(支線)	Ｎ８	0.6 ～	0.4 ～	0.11	
ＳＺ32	溝		2次(支線)	Ｎ48・Ｎ52	2.3	0.7 ～	0.16	
ＳＺ33	溝	古代～中世	2次(支線)	Ｎ48	2.0 ～	0.7 ～	0.16	
ＳＺ34	溝		2次(支線)	Ｎ12・Ｎ16	4.4	0.9 ～	0.31	中央に近・現代の裡瓜
ＳＺ35	落込み	近・現代	2次(支線)	Ｎ８～Ｎ16	8.4 ～	0.3 ～	0.23	圃場整備前の微地形
ＳＫ36	溝	中世	2次(支線)	Ｎ８・Ｎ12	2.2	0.7 ～	0.06	
ＳＫ37	土坑	古代～中世	2次(支線)	Ｎ８	1.2	0.4 ～	0.09	
ＳＤ38	土坑		2次(支線)	Ｎ８	0.5 ～	0.4	0.03	
ＳＤ39	溝	中世	2次(支線)	Ｎ80	1.1	0.8 ～	0.14	
ＳＤ40	溝	平安時代	2次(支線)	Ｎ84 ～Ｎ92	7	0.8 ～	0.37	
ＳＤ41	溝		2次(支線)	Ｎ84	2.0 ～	0.2 ～	0.13	SD41→SD40の形成順
ＳＤ42	溝	古代～中世	2次(支線)	Ｎ100	1.0 ～	0.4	0.15	
ＳＤ43	溝	近・現代？	2次(支線)	Ｎ172・Ｎ176	6	0.8 ～	0.18	
ＳＤ44	溝		2次(支線)	Ｎ180・Ｎ184	2.2	0.8 ～	0.08	
ＳＲ45	旧河道		2次(支線)	Ｎ56 ～Ｎ80	24	0.8 ～	0.52	
ＳＤ46	溝		2次(支線)	Ｎ156 ～Ｎ164	5.8	0.8 ～	0.13	
ＳＤ51	落込み	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ20 ～Ｗ32	9.4 ～	3.3 ～	0.3	低湿地
ＳＤ52	落込み	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ28・Ｗ32	5.6 ～	3.4 ～	0.29	低湿地
ＳＤ53	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ32 ～Ｗ40	6.0 ～	4.5	0.47	
ＳＤ54	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ40・Ｗ44	4.0 ～	1.3	0.45	
ＳＤ55	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ44・Ｗ48	4.5 ～	0.6	0.17	
ＳＤ56	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ52・Ｗ56	4.8 ～	0.4	0.25	
ＳＤ57	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ60・Ｗ64	4.6 ～	1	0.17	
ＳＤ58	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ72	3.4 ～	0.8	0.27	
ＳＥ59	溝	近・現代	2次(幹線)	Ｗ４・Ｗ８	5.3 ～	0.6	0.19	
ＳＤ60	池	近・現代	2次(幹線)	Ｗ８・Ｗ12	6.8	3.1 ～	0.31	
ＳＤ61	池	近・現代	2次(幹線)	Ｗ８・Ｗ12	－	－	－	ＳＤ60に統合
ＳＺ62	落込み	中世	2次(幹線)	Ｗ12 ～Ｗ20	7.3 ～	1.8 ～	0.11	低湿地
ＳＤ63	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ32・Ｗ36	1.9 ～	0.4	0.25	
ＳＺ64	土坑	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ32	0.8	0.7	0.11	
ＳＺ65	土坑		2次(幹線)	Ｗ32	1.2 ～	1.1 ～	0.25	
ＳＺ66	土坑	近・現代	2次(幹線)	Ｗ28・Ｗ32	0.8	0.8	0.18	
ＳＺ67	土坑		2次(幹線)	Ｗ24	1.0 ～	0.7	0.2	
ＳＤ68	落込み		2次(幹線)	Ｗ28・Ｗ32	1.2 ～	0.6 ～	－	SD68→SD52の形成順
ＳＺ69	土坑	古代～中世	2次(幹線)	Ｗ20・Ｗ24	2.2 ～	1.0 ～	0.13	
ＳＺ70	土坑	古代～中世	2次(幹線)	Ｗ24	1.2	0.6	0.16	
ＳＤ71	溝	平安時代～中世	2次(幹線)	Ｗ96・Ｗ100	7.0 ～	3.2	0.31	

遺構番号9・10・14～19・47～50は欠番

第Ⅲ－２表　寺田遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ﾌﾟﾗﾝﾄﾞ等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	00204	土師器　椀	立会		SD5	(口)14.8	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	明赤褐 2.5YR5/6	口縁部3/12	
2	00607	土師器　椀	立会		SD5	(口)14.5		密	橙 7.5YR7/6	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
3	00402	土師器　椀	立会		SD5	(口)16.2		密	橙 5YR6/6	口縁部2/12	
4	00608	土師器　椀	立会		SD5	(口)12.1		密	橙 2.5YR6/8	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
5	00501	土師器小型鉢	立会		SD5	(口)14.0	外:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ	密	外:橙 7.5YR7/6 内:浅黄橙 10YR8/3	全体3/12	
6	00142	土師器　高坏	立会		SD5		ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	橙 7.5YR7/6	坏底部5/12	摩滅のため調整不明瞭
7	00205	土師器　高坏	立会		SD5	(口)16.1	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	やや密	外:橙 7.5YR6/6 内:黒 10YR2/1	坏部3/12	
8	00604	土師器　高坏	立会		SD5	(口)18.8		密	橙 5YR6/6	口縁部2/12	
9	01104	土師器　高坏	立会		SD5	(口)13.2		やや粗	橙 5YR7/6	坏部全体8/12	摩滅のため調整不明瞭
10	00745	土師器　高坏	立会		SD5	(脚)3.5		密	橙 5YR6/6	坏底部6/12	摩滅のため調整不明瞭
11	00746	土師器　高坏	立会		SD5	(脚)2.9		密	橙 7.5YR7/6	脚部3/12	
12	00747	土師器　高坏	立会		SD5	(脚)2.9		密	にぶい黄橙 10YR6/4	脚部4/12	脚部内面に絞り痕あり
13	00743	土師器　高坏	立会		SD5	(底)9.8	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	外:赤褐 5YR4/6 内:橙 5YR6/8	底部2/12	摩滅のため調整不明瞭
14	00741	土師器台付壺	立会		SD5		ﾖｺﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部小片	S字状口縁
15	00401	土師器　甕	立会		SD5	(口)17.8	外:ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ(4本/cm)→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/4	口縁部9/12	
16	01143	土師器　甕	立会		SD5		ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ(5本/cm)	やや粗	橙 7.5YR6/6	全体5/12	表面磨耗は激しい
17	01101	土師器　甕	立会		SD5	(口)14.4	ﾊｹﾒ	粗	赤褐 2.5YR4/6	口縁部3/12	摩滅のため調整不明瞭
18	006-01	土師器　甕	立会		SD5	(口)15.0		密	外:灰褐 7.5YR4/2 内:橙 5YR6/6	口縁部11/12	摩滅激しく調整不明
19	008-08	土師器　甕	立会		SD5	(口)15.1		やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	頸部1/12	
20	006-03	土師器　壺	立会		SD5	(底)5.1		密	外:赤 10R5/6 内:暗赤灰 10R4/1	底部ほぼ完存	摩滅激しく調整不明
21	006-02	土師器　壺	立会		SD5	(底)6.6		密	外:橙 2.5YR6/8 内:にぶい黄橙 10YR7/3 :黒褐 10YR3/1	底部ほぼ完存	摩滅激しく調整不明
22	007-04	土師器　瓶	立会		SD5			密	橙 5YR6/6	把手	
23	012-01	土師器　瓶	立会		SD5	(底)14.0	ﾅｽﾞﾘ	やや粗	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:明褐 7.5YR5/6	底部5/12	
24	010-01	土師器　瓶	立会		SD5	(底)11.7	ﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 5YR6/4	底部1/12	
25	006-06	須恵器高坏蓋	立会		SD5	(口)11.6	ﾛｸﾛﾅｽﾞﾘ-ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	やや密	灰 5PB6/1	口縁部小片	
26	008-03	須恵器高坏蓋か	立会		SD5	(口)11.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	青灰 5PB6/1	口縁部小片	T K 47型式
27	006-05	須恵器高坏蓋か	立会		SD5	(口)11.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰 N4/ 内:灰 5Y6/1	口縁部1/12	
28	008-04	須恵器　壺	立会		SD5	(口)18.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰 N4/ 内:灰 5Y6/1	口縁部1/12	
29	007-02	須恵器　瓶	立会		SD5	(底)12.4	ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ(6本/cm)	密	灰白 N5/	底部2/12	
30	018-07	土製品　土錘	立会		SD5	5.2×1.2×1.15 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2 にぶい橙 7.5YR7/4	全体9/12	重さ7.46 g
31	018-09	土製品　土錘	立会		SD5	7.3×1.3×1.2 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	全体9/12	重さ9.82 g
32	018-04	土製品　土錘	立会		SD5	6.75×1.25×1.25 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/4	完存	重さ9.95 g
33	018-02	土製品　土錘	立会		SD5	8.4×1.2×1.15 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	完存	重さ10.57 g
34	018-01	土製品　土錘	立会		SD5	8.7×1.15×1.2 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完存	重さ10.25 g
35	018-03	土製品　土錘	立会		SD5	6.15×1.35×1.35 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体10/12	重さ10.3 g
36	018-06	土製品　土錘	立会		SD5	6.0×1.05×1.0 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	完存	重さ7.23 g
37	018-08	土製品　土錘	立会		SD5	6.9×1.25×1.2 孔径0.4		密	灰黄橙 10YR8/4	ほぼ完存	重さ8.1 g
38	018-05	土製品　土錘	立会		SD5	6.9×1.35×1.3 孔径0.25		密	灰白 2.5Y8/2 にぶい橙 7.5YR7/4	全体10/12	重さ10.35 g
39	009-01	土製品　土錘	立会		SD5	7.3×1.3×1.3 孔径0.45		密	灰白 10YR8/2	ほぼ完存	重さ10.49 g
40	009-06	土師器　高坏	立会		SZ4	(口)12.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	やや密	にぶい橙 10YR5/3	脚部6/12	摩滅のため調整不明
41	009-04	土師器　皿	立会		SZ4	(口)12.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	やや密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/12	

第Ⅲ－３表　寺田遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
42	009-05	土師器　鍋	立会		SZ4		ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	外:灰黄褐 10YR5/2 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
43	004-03	土師器　甕	立会		SD6		外:ﾅﾃﾞ -ｷﾀｴ→ｶﾀﾊﾂﾂ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ｷﾀｴ →ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい褐 7.5YR5/3	頸部小片	S 字状口縁
44	002-06	土師器　小皿	立会		SD6	((口)9.8	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄褐 10YR7/3	口縁部2/12	
45	009-03	土師器　皿	立会		SD6	((口)13.5	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	全体3/12	全体に磨耗
46	009-02	土師器　皿	立会		SD6	((口)16.7		やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	全体3/12	摩滅のため調整不明
47	002-01	土師器　甕	立会		SD6	((口)15.8	外:ｷﾀｴ→ヨコﾅﾃﾞ 内:板ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部4/12	外面煤付着
48	002-02	土師器　甕	立会		SD6	((口)16.4	外:ｷﾀｴ→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	口縁部3/12	外面煤付着
49	004-01	土師器　甕	立会		SD6	((口)16.0	外:ｷﾀｴ→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ →ﾊｹﾒ→ヨコﾅﾃﾞ	やや密	外:灰黄褐 10YR6/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部2/12	
50	003-01	土師器　甕	立会		SD6	((口)24.6	外:ｷﾀｴ→ヨコﾅﾃﾞ 内:板ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 7.5YR8/3	口縁部1/12	
51	010-04	土師器　甕	立会		SZ8	((口)20.6	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 7.5YR7/3	口縁部1/12	摩滅のため調整不明瞭
52	008-02	陶器　椀 (山茶椀)	立会		SZ8	(底)6.6	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ →貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰 5Y6/1	底部完存	瀬美型第６型式
53	008-01	陶器　椀 (山茶椀)	立会		SZ8	((口)14.9(高台)6.9 (高)4.9～5.4	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ →貼付ﾅﾃﾞ	やや密	外:灰白 5Y7/1 内:灰白 2.5Y7/1	底部完存 口縁部3/12	尾張型第６型式 時期疑あり
54	008-06	土師器　皿	立会		SD3	((口)13.0	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
55	011-02	土師器　皿	立会		SD3	((口)13.6	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR7/1	口縁部9/12	
56	003-03	土師器　甕	立会		SD3	((口)17.8	外:ｷﾀｴ　内:ﾊｹﾒ	やや密	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部1/12	
57	012-03	土師器　皿	立会		SD3	((口)7.4(高)2.0	ｷﾀｴ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	全体5/12	南伊勢系土師器皿Ｂ形態
58	012-02	土師器　皿	立会		SD3	((口)11.0(高)3.1	ﾅﾃﾞ -指ｷﾀｴ	やや密	灰白 2.5Y8/1	口縁部5/12	南伊勢系土師器皿Ｂ形態
59	008-07	土師器　皿	立会		SD3	((口)12.0	ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	南伊勢系土師器皿Ｂ形態
60	002-03	陶器　椀 (山茶椀)	立会		SD3	(高台)8.2	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ →貼付ﾅﾃﾞ	密	黄灰 2.5Y6/1	底部2/12	内面にわずかに自然釉
61	003-02	土師器　鍋	立会		SD3	((口)30.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	外:にぶい黄橙 7.5YR5/4 内:灰黄褐 10YR6/2	口縁部1/12	南伊勢鍋第２段階 外面煤付着
62	003-05	土師器　鍋	立会		SD3	((口)28.4	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:灰褐 7.5YR4/2 内:灰白 10YR8/2	口縁部1/12	南伊勢鍋第３段階
63	003-04	土師器　鍋	立会		SD3	((口)29.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	南伊勢鍋第４段階
64	008-05	陶器　鉢	立会		包含層	(底)15.6	ﾛﾛｸﾛｽﾞﾘ→ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 N7/	底部2/12	
65	010-03	土師器　小皿	1 次	11B	Pit4(伊藤(SA13)	((口)9.2	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
66	009-08	土師器　小皿	1 次	12B	Pit2(SA13)	((口)9.0	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	
67	010-02	土師器　小皿	1 次	11B	Pit2	((口)9.6(高)1.9	ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや粗	灰白 10YR8/2	全体3/12	
68	009-07	土師器　小皿	1 次	12A	Pit1	((口)10.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
69	021-03	弥生土器　壺	2 次(支)	N88	SD40 第189層	(底)3.8	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ	やや密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:灰 N4/	底部完存	弥生後期
70	020-03	土師器 丸底鉢	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)15.0		やや密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭
71	020-06	須恵器　坏蓋	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)15.0	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰白 N7/ 内:灰白 5Y7/2	口縁部1/12	
72	020-07	須恵器　坏身	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)16.0	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ -ﾛﾛｸﾛｽﾞﾘ	密	灰白 N7/	口縁部1/12	
73	019-05	土師器　小皿	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)8.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体1/12	
74	021-04	土師器　小皿	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)8.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体3/12	
75	020-05	土師器　皿	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)12.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
76	019-06	土師器　皿	2 次(支)	N88	SD40 第188層	((口)13.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
77	020-08	土師器　坏	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)13.2	ﾅﾃﾞ -ｷﾀｴ	密	にぶい黄橙 7.5YR7/4	口縁部2/12	
78	020-01	灰釉陶器　椀	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)22.0	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰黄褐 -に 2.5Y7/2 :にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	
79	020-02	灰釉陶器　椀	2 次(支)	N88	SD40 第189層	((口)17.0	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
80	019-08	弥生土器　甕	2 次(支)	N88	SD40 第188層	(底)6.8	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	底部2/12	弥生中期
81	020-04	土師器　皿	2 次(支)	N88	SD40 第188層	((口)14.0	ｷﾀｴ→ﾅﾃﾞ →ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
82	019-07	灰釉陶器　椀	2 次(支)	N88	SD40 第188層	((口)14.0	ﾛﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	口縁部2/12	
83	019-04	土師器　甕	2 次(支)	N92	SD40 第186層	((口)20.0	ﾖｺﾅﾃﾞ か	やや密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭

第Ⅲ－4表　寺田遺跡出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	種類器種等	地区	グリッド等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
84	02202	灰釉陶器　椀	2次(支)	N92	SD40 第186層	(口)16.2(高)5.0 (高台)7.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	明紫灰 5P7/1	口縁部1/12 底部10/12	内面に磨耗、重ね焼き痕あり
85	05301	土師器　甕	2次(支)	N88	SD40	(底)24.4	外:ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:工具ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	底部1/12	内面煤付着
86	01602	土師器　甕	2次(支)	N88	SD40	(口)17.8	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR5/3 内:にぶい黄橙 10YR7/4	頸部2/12	外面煤付着
87	01902	土師器　甕	2次(支)	N92	SD40	(口)22.0	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭
88	01601	土師器　甕	2次(支)	N88	SD40	(口)20.8	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部4/12	
89	02245	ロクロ土師器 椀	2次(支)	N88	SD40	(高台)7.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	底部ほぼ完存	
90	02246	ロクロ土師器 椀	2次(支)	N88	SD40	(高台)6.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 10YR8/2	底部11/12	摩滅のため調整不明瞭
91	01901	ロクロ土師器 皿	2次(支)	N88	SD40	(底)5.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ	やや密	外:橙 7.5YR7/6 内:明黄褐 10YR6/6	底部完存	
92	01903	土師器　甕	2次(支)	N40	SZ28		ﾅﾃﾞ	やや密	外:黄橙 10YR3/1 内:灰白 2.5YR8/2	口縁部小片	全体に磨耗、調整不明瞭
93	02147	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N172	SD43	(高台)7.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	
94	02146	陶器　小皿 (山皿)	2次(支)	N76	SD39	(口)8.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	全体2/12	
95	02145	土師器　鍋	2次(支)	N76	SD39		ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	灰白 2.5Y8/2	口縁部小片	南伊勢鍋第4段階
96	01703	土師器　皿	2次(支)	N120	Pit2	(口)13.0	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	
97	01706	土師器　甕	2次(支)	N120	Pit10			密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部小片	摩滅のため調整不明瞭
98	01606	土師器　甕	2次(支)	N216	Pit1	(口)24.6	外:ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:褐灰 2.5Y5/2 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
99	01701	土師器　甕	2次(支)	N120	Pit2		ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい橙 5YR7/4	口縁部小片	
100	01702	土師器　甕	2次(支)	N120	Pit2		ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 10YR8/2	口縁部小片	
101	01705	土師器　壺	2次(支)	N120	Pit8		ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:橙 5YR7/6 内:にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部小片	
102	01704	ロクロ土師器 椀	2次(支)	N120	Pit2	(口)16.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	
103	01707	ロクロ土師器 皿	2次(支)	N120	Pit11	(口)16.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰白 2.5Y7/1 内:灰白 2.5Y8/2	口縁部1/12	
104	01708	ロクロ土師器 台付皿	2次(支)	N120	Pit11	(高台)6.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	高台1/12	
105	01506	土師器　壺	2次(支)	N100	弦合層			粗	浅黄 2.5Y7/3	頸部小片	古式土師器か
106	01407	瓦恵器　壺	2次(支)	N120	弦合層	(高台)9.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰 N5/	底部1/12	
107	01404	ロクロ土師器 椀	2次(支)	N156	弦合層	(高台)6.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:浅黄 2.5Y8/4 内:明黄褐 10YR7/6	底部5/12	
108	01405	陶器　小皿 (山皿)	2次(支)	N84	弦合層	(口)10.0(高)2.5 (底)4.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y7/2	全体3/12	
109	01402	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N64	弦合層	(高台)7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部2/12	
110	01306	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N196	弦合層	(高台)7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	底部8/12	
111	01303	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N84	弦合層	(高台)7.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 2.5Y7/1	底部2/12	
112	01304	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N176	弦合層	(高台)8.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 5Y1/8	底部9/12	
113	01605	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N160	弦合層	(高台)7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	高台:灰 N6/1 内:灰白 5Y7/1	底部2/12	
114	01301	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N164	弦合層	(高台)7.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	底部3/12	
115	01302	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N184	弦合層	(高台)7.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:黄灰 2.5Y6/1 内:褐灰 10YR5/1	底部10/12	渥美型第6型式 初段敷あり
116	01305	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N188	弦合層	(高台)8.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 2.5Y7/1 内:灰黄 2.5Y7/2	底部4/12	初段敷あり
117	01401	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N60	弦合層	(高台)8.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 5Y7/2 内:灰白 10Y7/1	底部3/12	
118	01403	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N84 ~88	弦合層	(高台)7.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	底部完存	渥美型第5型式
119	01304	陶器　椀 (山茶椀)	2次(支)	N88	弦合層	(口)17.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	口縁部1/12	
120	01406	土師器　壺	2次(支)	N168	弦合層	(口)13.8		密	外:灰黄 2.5Y6/2 内:にぶい黄橙 2.5Y6/3	口縁部1/12	
121	01501	土師器　羽釜	2次(支)	N188	弦合層	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ		密	にぶい黄橙 10YR7/4	鍔部小片	
122	01505	土師器　鍋	2次(支)	N160	弦合層	(口)24.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:橙 5YR6/6 内:にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	
123	01408	土師器　鍋	2次(支)	N84	弦合層	(口)26.0	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	南伊勢鍋第4段階 外面煤付着
124	01502	土師器　羽釜	2次(支)	N224	排土	(口)27.0	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄 2.5Y8/3	口縁部1/12	
125	01403	土師器　小皿	2次(幹)	W36 ~40	SD53 第94層	(口)9.8(高)2.3	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y6/2	全体9/12	

第Ⅲ－５表　寺田遺跡出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄ区	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
126	041-04	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)10.4(高)2.5	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体5/12	口縁部･底部外面に煤付着
127	041-05	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)12.2(高)2.9	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄褐 10YR6/2	完存	底部外側に墨書あり。文字は判別できず。
128	037-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)8.4	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
129	037-01	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)9.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部3/12	
130	036-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)9.6(高)1.5	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体5/12	
131	036-06	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)9.7	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体3/12	
132	038-01	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)10.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部4/12	
133	041-01	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)10.5	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部3/12	
134	038-02	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)11.0(高)2.2	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体4/12	
135	040-05	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)12.2	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	外:にぶい黄橙 5YR5/4 内:灰黄 2.5Y6/2	口縁部2/12	
136	036-01	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	灰黄 2.5Y6/2	全体2/12	
137	037-06	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:にぶい黄橙 10YR7/2 内:褐灰 10YR5/1	口縁部3/12	
138	040-04	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.4	ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
139	040-06	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)14.2	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部1/12	
140	036-02	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)12.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体2/12	
141	036-05	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	全体2/12	
142	036-08	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
143	037-04	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)13.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:灰黄 2.5Y6/2 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
144	036-04	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)15.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体2/12	
145	044-03	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)15.2(高)4.1	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:灰黄褐 10YR5/2 内:にぶい橙 7.5YR7/4	全体5/12	
146	041-02	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)15.4	ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部2/12	
147	037-45	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)16.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部8/12	
148	040-03	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)14.0	ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部2/12	
149	038-04	土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)14.0(高)6.3 (高台)7.7	外:ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ･貼付ﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	底部完存 口縁部9/12	
150	041-08	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)15.2	ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	
151	041-07	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)16.0	外:ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ 内:ﾍﾗﾅﾃﾞ(6～7本/1cm)→ｴｺｶﾞ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部2/12	
152	041-06	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)25.2	外:ﾍﾗﾅﾃﾞ(3本/1.4cm)→ｴｺｶﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	密	外:灰白 2.5YR7/1 内:黄灰 2.5Y4/2	口縁部1/12	
153	037-02	黒色土器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)15.0	ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	暗灰 N3/	口縁部2/12	黒色土器B類(両黒) 内面に鉄分付着
154	036-07	黒色土器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)15.6	外:ﾅﾃﾞ･ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ﾐｶｷﾞﾅﾃﾞ→ｴｺｶﾞ	やや密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:暗灰 N3/	口縁部小片	黒色土器A類(内黒)
155	044-01	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)30.0	ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	外:灰 N5/ 内:灰 N4/	口縁部1/12	
156	043-01	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	((口)30.9	ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	灰 5Y6/1	口縁部2/12	
157	039-02	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層		ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	密	灰白 N5/	頸部小片	
158	040-01	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層		ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	密	灰 N6/1	頸部片	
159	045-01	須恵器　大甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(頸)30.0	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→格子状ﾅﾃﾞ 内:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	外:灰白 N7/ 内:灰白･灰 N7/,N5/	頸部4/12	
160	046-01	須恵器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(頸)11.8	ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	外:灰 5Y6/1 内:黄灰 2.5Y6/1	頸部6/12	歪みあり
161	046-03	須恵器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(高台)14.0	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ→ｸﾀﾗｽﾞﾘ 内:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	全体に自然釉あり
162	047-03	須恵器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(高台)14.0	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ→ 一部ｸﾀﾗｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ 内:ｴﾀﾋﾞﾅﾃﾞ→ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	外:灰 N6/1 内:灰 7.5Y6/1	底部9/12	底部外側にヘラ記号あり
163	047-02	須恵器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(高台)17.0	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ 内:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部6/12	全体に自然釉あり 焼きふくれ多い
164	047-01	須恵器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(底)13.7	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→一部ｸﾀﾗｽﾞﾘ 内:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ	密	外:灰白,灰 N7/,N4/ 内:灰 N7/	底部5/12	煤付着
165	045-02	須恵器　鉢	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(口)32.8	外:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ 内:ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→一部ｽﾀﾘ	密	灰白 5Y7/1	口縁部2/12	
166	039-04	灰釉陶器　小椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	(高台)5.6	ﾀﾀﾗﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部1/12	外,内に煤分量付着

第Ⅲ－6表　寺田遺跡出土遺物観察表(5)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄ等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残存度	特　記　事　項
167	039-07	灰釉陶器 小椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]6.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 N7/	底部1/12	
168	043-02	灰釉陶器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]7.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:明黄灰 5Y7/1 内:灰 N6/1	底部5/12	内面に磨耗あり 内外面に墨書
169	039-06	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[頸]8.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 N8/	頸部片	内面に煤付着
170	039-05	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[頸]13.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	:灰白 7.5Y7/1 釉:ｵﾘｰﾌﾞ灰 10Y5/2	頸部片	
171	042-01	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[口]25.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:ｵﾘｰﾌﾞ灰 10Y5/2 内:灰白 7.5Y7/2	頸部5/12	172と同一個体の可能性あり
172	042-02	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[底]15.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰ｵﾘｰﾌﾞ 7.5Y6/2	底部3/12	171と同一個体の可能性あり
173	038-05	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰 5Y6/1 内:灰白 5Y7/1	体部片	線刻花文
174	039-08	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]13.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 N8/	底部2/12	
175	039-03	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]7.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	自然釉有り
176	043-03	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]6.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰 N6/1	底部3/12	内面に磨耗あり
177	043-04	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層	[高台]7.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 N7/1 内:灰白 7.5Y7/1	底部4/12	
178	039-01	陶器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第93層		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	:灰白 N7/ 釉:ｵﾘｰﾌﾞ灰 10Y5/2	頸部小片	
179	029-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]7.9	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	鞠灰 10YR5/1	全体6/12	
180	032-49	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]8.8	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y6/2	全体3/12	
181	029-04	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]9.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
182	030-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]9.0(高)2.0	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体3/12	
183	029-02	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]9.6	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰黄橙 10YR5/2	全体4/12	
184	032-02	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y8/1	全体3/12	
185	028-04	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.2	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	浅黄 2.5Y7/2	全体3/12	
186	032-01	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.6(高)1.9	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	浅黄 2.5Y7/3	全体3/12	口縁部に煤付着
187	032-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]9.8(高)2.1	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:にぶい黄 2.5Y6/3	全体4/12	
188	032-04	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]9.9(高)2.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y7/2	全体3/12	
189	032-06	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.4(高)2.3	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体10/12	
190	030-05	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.4	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部3/12	
191	030-02	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.0(高)1.8	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	全体4/12	
192	030-04	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]11.2	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
193	029-01	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]10.8	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:灰黄橙 10YR6/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3	全体5/12	
194	049-04	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]11.2	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/12	
195	032-08	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]15.0(高)2.95	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄 2.5Y6/3 :灰白 2.5Y8/2 内:にぶい黄 2.5Y6/4	全体2/12	
196	032-07	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]15.0(高)2.6	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:灰白 2.5Y8/1 内:灰白 2.5Y8/2	全体6/12	
197	032-05	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]14.0	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
198	049-02	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]16.0(高)3.6	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	全体8/12	
199	030-06	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]15.8	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体2/12	
200	030-07	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]14.2	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:灰黄橙 10YR6/2 内:灰黄橙 10YR4/10	口縁部2/12	
201	031-01	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]13.6	ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	
202	049-01	土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]16.6	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
203	049-05	土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]16.0	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
204	048-02	土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[高台]7.0	ﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部5/12	
205	029-06	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]17.1	工具ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
206	029-08	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]16.0	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	内面煤付着
207	029-07	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	[口]17.2	ﾅﾃﾞ→ｴｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12	内外面煤付着

第Ⅲ－7表　寺田遺跡出土遺物観察表(6)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄ番号	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
208	029-05	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)17.6	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR5/4	口縁部2/12	
209	028-03	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)20.8	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	外面煤付着
210	029-09	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)21.4	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰黄橙 10YR6/2	口縁部1/12	
211	028-02	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)24.0	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	内外面煤付着
212	028-01	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)24.2	外:ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部2/12	
213	049-03	土師器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)6.0	ﾅﾃﾞ→ﾊｹﾒ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:灰白 5Y8/1	底部(ほぼ)完存	
214	030-01	土師器 台付鉢か	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)13.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	灰黄橙 10YR5/2	高台部2/12	
215	034-03	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層		ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰 5Y6/1 内:灰 N5/	口縁部1/12	自然釉有り
216	033-01	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層		ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 N7/	口縁部小片	
217	035-02	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)20.3	外:ﾅﾃﾞ→ﾅﾃｷ 内:ﾅﾃﾞ	密	灰 N5/	底部1/12	
218	035-01	須恵器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)13.0	外:ﾅﾃﾞ→ﾅﾃｷ 内:工具ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部1/12	
219	033-05	灰釉陶器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)5.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	
220	048-07	灰釉陶器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)6.7	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰 5Y6/1 内:灰白 5Y7/1	底部4/12	
221	034-02	灰釉陶器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層		ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰白 N7/ 内:灰オリーブ 7.5Y5/2	口縁部小片	
222	033-02	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(頸)9.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	外:明オリーブ灰 2.5GY7/1 内:灰白 N7/	頸部8/12	内外面に自然釉あり
223	033-03	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)8.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 7.5Y7/1 内:灰白 N7/	底部2/12	内面に墨付着 内外面に自然釉あり
224	034-01	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)11.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰 N4/ 内:灰 N6/1	底部2/12	
225	033-04	灰釉陶器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)13.1	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 5Y7/1 内:灰白 7.5Y7/1	底部1/12	内外面に自然釉あり
226	048-04	ロクロ土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)4.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/3	底部完存	
227	050-05	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)15.0(高)6.1	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y8/2	底部完存 口縁部3/12	
228	048-09	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)19.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y8/2	口縁部1/12	
229	049-06	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)16.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	外:灰黄褐 10YR6/2 内:褐灰 10YR5/1	口縁部1/12	内面に墨跡あり
230	038-03	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)6.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y7/2	底部(ほぼ)完存	
231	048-05	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	褐灰 10YR4/1 灰白 2.5Y8/2	底部9/12	
232	048-08	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:褐灰 N3/	底部6/12	内面に煤付着
233	048-06	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)6.7	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 2.5Y8/2 内:黄褐 2.5Y5/3	底部9/12	
234	048-01	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)7.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:浅黄 2.5Y8/3	底部5/12	
235	048-03	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(高台)6.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部10/12	
236	035-03	陶器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(底)21.0	ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰 N6/1	底部2/12	渥美産
237	026-01	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)9.2(高)1.5	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体4/12	
238	026-03	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)9.2(高)2.0	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	(ほぼ)完存	
239	025-09	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)9.0	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄 2.5Y6/4	口縁部3/12	
240	026-02	土師器　小皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)9.1	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y7/2	全体2/12	
241	025-08	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)12.2	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部3/12	
242	026-05	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)13.0(高)2.3	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体5/12	
243	026-04	土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)14.8(高)3.1	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体5/12	
244	026-06	土師器　坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)13.2	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	
245	027-04	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)17.2	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/2 内:灰白 5Y8/1	口縁部1/12	
246	026-07	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)17.2	外:ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾊｹﾒ(6条/1.5cm)→ヨコﾅﾃﾞ	密	灰褐 7.5YR6/2	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
247	027-03	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)19.2	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	外面煤付着
248	026-08	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)17.7	外:ｹﾅｴ→ヨコﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
249	027-02	土師器　甕	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)21.0	ｹﾅｴ･ﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ	密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部2/12	外面煤付着

第Ⅲ－８表　寺田遺跡出土遺物観察表(7)

番号	実測番号	種類器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残存度	特　記　事　項
250	027401	土師器　鍋	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)30.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	外面煤付着 南伊勢鍋第1段階
251	025402	灰釉陶器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]8.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	内面に磨耗あり
252	023404	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)17.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 7.5Y7/1 一部 7.5YR4/3 内:灰白 N7/	口縁部3/12	輪花椀・自然釉あり
253	022404	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]7.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/1	底部7/12	
254	025406	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]8.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 N8/	底部2/12	
255	025405	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]6.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 N7/	底部4/12	内面に磨耗あり
256	025401	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]8.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 N8/	底部2/12	内面磨耗、重ね焼き痕、自然釉あり
257	023402	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]8.3	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	底部2/12	籾殻痕あり
258	023401	ロクロ土師器　皿	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(底)6.1	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/4	底部完存	
259	024403	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[口]16.5	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部4/12	摩滅のため調整不明瞭
260	025407	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[口]14.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	
261	023405	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[口]18.9	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
262	022401	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(底)7.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 10YR8/2	底部は定存	
263	022409	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]7.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/2	底部3/12	
264	022407	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]6.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	灰白 2.5Y8/2	底部9/12	
265	022403	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]6.7	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR8/1	底部は定存	
266	022408	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[高台]6.8	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや粗	灰白 10YR8/2	底部10/12	
267	023403	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	[底]8.4	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	にぶい橙 7.5YR7/3	高台部3/12	
268	024401	弥生土器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(口)18.2	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	密	橙 5YR7/6	口縁部1/12	弥生後期
269	050402	土師器　壺	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層	(口)14.0	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部小片	古式土師器か
270	044404	弥生土器　高坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層		脚接→竹管文	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部9/12	弥生後期 表面に赤色顔料残る
271	049407	土師器　高坏	2次(幹)	W36～40	SD53 第92層			密	橙 5YR7/8	脚上部	摩滅のため調整不明瞭
272	023406	須恵器　鉢	2次(幹)	W36～40	SD53 第91層	(体)11.0	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	褐青灰 5PB7/1	全体1/12	
273	060402	弥生土器　壺	2次(幹)	W52～56	SD56			密	外:にぶい黄橙 7.5YR7/4 明赤褐 2.5YR5/8 内:橙 7.5YR6/8	頸部小片	外面赤色顔料あり
274	059405	土師器　甕	2次(幹)	W52～56	SD56			密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部小片	S字状口縁
275	024402	弥生土器　壺	2次(幹)	W32	SD68		外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ(6本/2.3cm) 内:ﾅﾃﾞ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	体部小片	弥生後期
276	058402	弥生土器　高坏	2次(幹)	W32	SZ66	(口)21.8	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	弥生後期
277	057402	土師器　小皿	2次(幹)	W32	SZ66	(口)10.2(高)1.4	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y8/2	口縁部5/12	
278	057404	土師器　台付甕	2次(幹)	W16	SZ62	(高台)6.2	ﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部完存	
279	057408	土師器　台付甕	2次(幹)	W16	SZ62	(高台)8.0		密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	台部3/12	摩滅のため調整不明瞭
280	059406	土師器　甕	2次(幹)	W16	SZ62			密	褐灰 10YR3/3	口縁部小片	外面煤付着
281	059402	土師器　甕	2次(幹)	W16	SZ62			密	外:灰白 2.5Y8/2 内:にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部小片	
282	058404	土師器　小型甕	2次(幹)	W24	SZ69	(口)9.9	ﾅﾃﾞｴｰﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
283	057407	土師器　皿	2次(幹)	W24	SD51	(口)12.2 (高)2.2	外:ﾅﾃﾞｴｰﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	
284	057406	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W24	SD51	(口)17.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
285	058401	土師器　甕	2次(幹)	W32	SD52	(口)20.6	外:ﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:工具ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい橙 7.5YR6/3 内:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	
286	055402	土師器　皿	2次(幹)	W28	SD52	(口)14.8	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	灰白 2.5Y8/1	口縁部1/12	
287	055401	ロクロ土師器　椀	2次(幹)	W28	SD52	[高台]7.2	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	底部10/12	
288	054404	土師器　皿	2次(幹)	W36	SD54	(口)15.0	ﾅﾃﾞｴｰﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体3/12	
289	057409	土師器　甕	2次(幹)	W36	SD54	(口)20.0	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	
290	054406	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W4～8	SD59	[高台]9.6	ﾛﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	やや密	灰白 7.5Y7/1	底部3/12	

第Ⅲ－９表　寺田遺跡出土遺物観察表(8)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残存度	特　記　事　項
291	01604	土師器　小皿	2次(幹)	W12	SD60	(口)9.2(高)1.65	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	全体11/12	
292	05746	須恵器　ワクロ土師器風	2次(幹)	W36	SD63	(高台)7.6	ﾛﾀｴﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	橙 7.5YR7/6	底部3/12	
293	016033	土師器　小皿	2次(幹)	W32	SZ64	((口)9.0(高)1.85	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	ほぼ完存	
294	058403	須恵器　壺	2次(幹)	W32	SZ65	((口)28.0	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ	密	外:褐灰 10YR5/1 内:灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
295	053402	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W72	SD58	((口)16.5 (高台)3.5	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 10YR7/1	底部完存 口縁部4/12	渥美型第５型式
296	055405	土師器　小皿	2次(幹)	W100	SD71	((口)9.6 (高)2.3	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	浅黄 2.5Y7/3	全体3/12	
297	055404	土師器　小皿	2次(幹)	W100	SD71	((口)9.6 (高)2.5	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	灰白 2.5Y8/2	全体6/12	
298	055406	土師器　椀か台付皿	2次(幹)	W100	SD71	(高台)7.3	ﾖｺﾅﾃﾞ	密	浅黄橙 10YR8/3	高台12/12	
299	052406	土師器　小皿	2次(幹)	W64	SD57	((口)8.0	外:ｴﾅﾐ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/4	全体11/12	
300	052405	土師器　小皿	2次(幹)	W64	SD57	((口)8.0	外:ｴﾅﾐ→ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	口縁部2/12	
301	054403	土師器　皿	2次(幹)	W64	SD57	((口)16.0 (高)3.25	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:灰白 2.5Y8/2	全体5/12	
302	052401	土師器　皿	2次(幹)	W64	SD57	((口)19.9	外:ｴﾅﾐ　内:ﾅﾃﾞ	密	橙 5YR6/8	全体3/12	内外面煤付着
303	051402	土師器　奏	2次(幹)	W64	SD57	((口)22.0	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	明褐灰 7.5YR7/2	口縁部4/12	
304	051403	土師器　奏	2次(幹)	W64	SD57	((口)26.2		密	灰褐 7.5YR6/2	口縁部1/12	
305	051401	土師器　奏	2次(幹)	W64	SD57	((口)29.2	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	にぶい黄橙 7.5YR7/3	口縁部6/12	
306	056403	土師器　鉢	2次(幹)	W64	SD57	((口)35.0	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	
307	054402	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W64	SD57	(高台)7.5	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	渥美型第４型式 釉漬け掛け
308	054401	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W64	SD57	((口)16.7(高)5.6 (高台)7.0	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	外:灰白 5Y7/1 内:にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部5/12 底部完存	渥美型第５型式 釉漬け掛け
309	052404	石錘　椀	2次(幹)	W64	SD57	(高台)4.6	ﾀﾃﾞﾅﾃﾞ	密	軸:灰白 素:灰白 10YR8/2	底部10/12	
310	060403	弥生土器　壺	2次(幹)	W56	Pit 2			密	外:にぶい橙 5YR7/4 内:黄灰 2.5YR4/1	体部小片	
311	05304	陶器　灯口小椀	2次(幹)	W68	Pit 1	((口)6.8(高)3.0 (高台)4.0	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	明褐灰 5Y7/1	全体10/12	渥美産 自然釉あり
312	05405	土師器　小皿	2次(幹)	W72	Pit 1	((口)9.0	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	外:明褐 7.5YR5/6 内:褐灰 10YR6/1	全体4/12	
313	05303	陶器　椀(山茶椀)	2次(幹)	W68	Pit 1	((口)16.6 (高台)8.8	ﾛﾀﾛﾅﾃﾞ→貼付ﾅﾃﾞ	密	明褐灰 5Y7/1	口縁部4/12 底部3/12	渥美型第５型式
314	05601	土師器　小皿	2次(幹)	W100	包含層	((口)10.2	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体6/12	
315	055408	土師器　小皿	2次(幹)	W100	包含層	((口)10.2	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体4/12	
316	055407	土師器　小皿	2次(幹)	W100	包含層	((口)10.8	ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
317	056402	土師器　小皿	2次(幹)	W100	包含層	((口)10.8	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	全体6/12	
318	05701	土師器　皿	2次(幹)		排土	((口)15.0(高)3.0	ｴﾅﾐ→ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	全体2/12	
319	058405	土製品　土錘	2次(幹)		排土	5.65×1.2×1.1 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/3	ほぼ完存	重さ6.05ｇ

Ⅳ　玉城町妙法寺　田丸道遺跡（第２次）・塚田古墳群

１　調査の契機と経過

a　総説

田丸道遺跡（第２次）は、平成22年度経営体育成基盤整備事業（有田地区）に伴い調査を実施した。いわゆる「宮川用水」にあたり、田丸道遺跡の範囲では、主に幹線用水路が計画されていた。調査期間は、東西調査区（支線）は平成22年11月15日～16日（幅1.5m×全長16m）、南北調査区（幹線）は11月29日～平成23年２月10日（幅２m～3.5m×全長210m）で、最終調査面積は約661㎡であった。

なお、田丸道遺跡（第２次）発掘調査の結果、調査区内において塚田古墳群（塚田１号墳・塚田２号墳）の周溝を確認した。

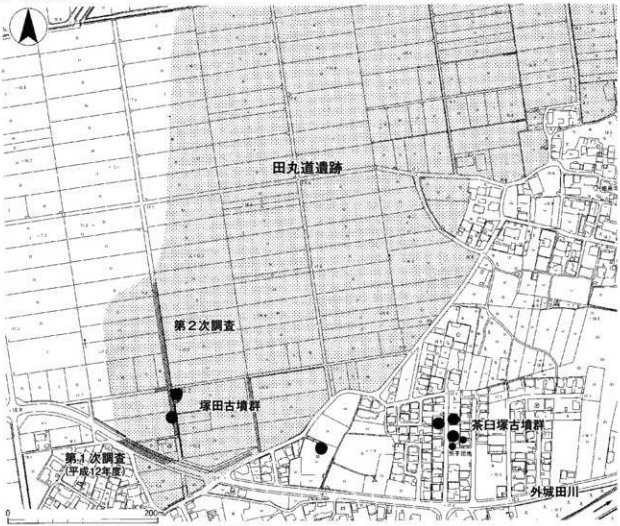
b　協議の経過

事業地は田丸道遺跡と塚田古墳に隣接していたため、範囲確認調査を実施した。平成22年４月５と11月17日に調査を行った結果、確認調査坑から古墳の周溝や、中世の遺構・遺物を確認した。これを受けて、どうしても保存困難な部分661㎡について工事立会調査を実施し、記録保存を行った。

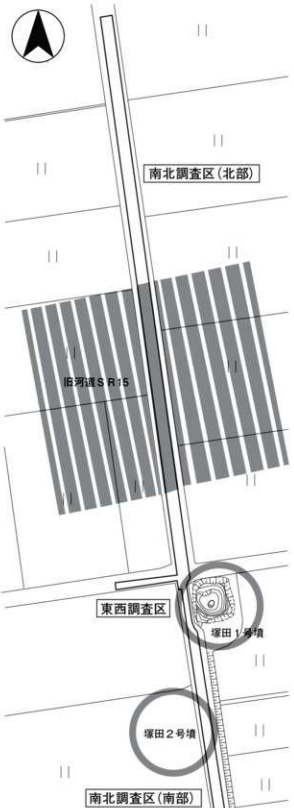
c　調査の経過と各地区の概要

調査区の設定　東西方向の調査区（小地区Ｗ１～Ｗ16）、南北方向の調査区（小地区Ｎ４～Ｎ212）を設定した。小地区は４ｍごとに設定し、Ｗは西→東、Ｎは南→北に数字を付与した。

調査区は、中央を横断する旧河道ＳＲ15によって南部・旧河道・北部と概ね３つに区分される。そのうち旧河道と北部については、機械掘削・人力掘削を並行して進めることとなった。



第Ⅳ－１図　調査区周辺地形図（１：5,000）



第Ⅳ－２図　調査区の概要（１：1,000）

【東西調査区】　平安時代の土坑群を検出した。平成22年11月15～16日に重機掘削・人力掘削・実測を行った。

【南北調査区（南部）】　塚田１号墳、塚田２号墳の周溝と、中世後期の集落跡を確認した。平成22年11月29日～12月21日に重機掘削・人力掘削を行い、適宜写真撮影・実測を行った。塚田古墳群の現地説明会（第１回）は12月23日に実施し、地元小学校を中心に54名の参加があった。

【南北調査区・旧河道（ＳＲ15）】　弥生時代中期から平安時代後期まで機能した旧河道である。古墳時代後期の木組みの堰を検出し、多量の木製品が出土した。期間は平成23年１月11日～２月９日で、木製品の記録・取り上げ作業等は調査区北部と並行して進められた。現地説明会（第２回）は１月23日に実施し、150名の参加者を得た。

【南北調査区・北部】　古墳時代後期の竪穴住居と土坑、平安時代後期の掘立柱建物群を検出した。大型の掘立柱建物は、柱穴から緑釉陶器片を伴うことから、官衙などの可能性が高い。１月20日にＳＲ15の北岸を検出したのち、21日～２月９日に重機掘削・人力掘削を行った。調査期間の都合上、現地説明会は行えなかった。

幅の狭い調査区であったが遺物・遺構ともに濃密で、最終的には調査研究１課職員総動員で掘削にあたる調査となった。

d　田丸道遺跡（第１次）の概要

第１次調査は、町道中楽朝久田線および松阪伊勢自動車道の建設に伴って実施された。平成12年11月24日に当センターが範囲確認調査を行い、対象面積4,500㎡に対し32㎡（10箇所）の確認調査坑を設定した。その結果、中世の土坑・柱穴などを確認し、田丸道遺跡を新発見の遺跡として登録した。第１次調査は、平成15年７月１日～９月30日の期間、埋蔵文化財センターの支援のもと玉城町教育委員会が主体となって行われた。調査区からは溝10条、掘立柱建物２棟、井戸２基、中世墓２基が検出されている。[1]

〔註〕

（1）三重県埋蔵文化財センター『平成15年度　三重県埋蔵文化財年報』（2004年）

2　層位と遺構

a　基本層位

地形の状況　当地は昭和41年から同47年にかけて、県営圃場整備事業が実施された。調査地そのものは道路(農道)敷きだが、周囲は水田および一部が宅地として利用されている。調査地の標高は、現況地表面で約18m、水田部では約17.5mである。

当地の南部には外城田川が東流しており、北部および西部の丘陵部までは約1.5～2㎞の隔たりがある。したがって、当地は河岸段丘ないしは低湿地に相当する地形となる。ただし、先述のように圃場整備が終了しているため、現況からその状況を観察することは難しい。

調査区の層位は、上部が圃場整備事業に伴う農道設置に関する土層、下部がそれ以前のものとなる。調査の結果、遺構の基盤となるのは黄褐色系の粘土から砂へと変化する層で、基本的には低位段丘面を形成するものである。調査区南部ほど粘性で、北部ほど砂性という傾向が見られる。

田丸遺遺跡・塚田古墳群の層位は、調査区南部の塚田古墳群付近、中央部の流路ＳＲ15付近、北部の集落跡付近という３地区に大きく区分できる。そこで、この区分に沿って層位状況を見ていく。

調査区南部(塚田古墳群付近)（第Ⅳ－５図）　調査区南部では路床改良土の直下(標高約17.2m)で明黄褐色系粘土層(第31層)の遺構基盤層にあたる。この層以下では砂および円礫を含む層が確認でき(第32～34層)、河成層と考えられる。遺構埋土は、後述の古墳周溝では黒色土で、いわゆる「黒ボク」由来の堆積土が基本となる。遺構基盤構成土としての黒ボクは認められないので、この付近は少なく見積もっても30㎝以上の削平があると考えられる。

調査区中部(河道ＳＲ15付近)（第Ⅳ－６図）　黒ボク由来土が遺構埋土の基本となる調査区南部に対し、調査区中央部では黒ボク由来土は北岸部に見られるに止まる。これは、河道ＳＲ15付近に水田耕作土が見られることとも関係すると見られる。河道ＳＲ15の上層部には、中近世の水田土壌と考えられる層(第７・８層)が見られる。この層は、流路ＳＲ13以北からＳＲ15の北岸まで見られ、ＳＲ15の埋没後も低地の状態としてこの部分が残されていたことを示す。

調査区中部の遺構基盤は、上部層は黄褐色系粘土(第76層)で調査区南部と同一だが、その下部層には緑灰色系粘土層(第77・78層)が見られ、特徴的である。緑灰色系粘土は、現地調査の段階ではミント色の白っぽい粘土として認識でき、若干の有機質をも含む層であった。そのため、土層図では「地山」としているが、基本的にはＳＲ15に先行する流路の埋土にあたる土層である。

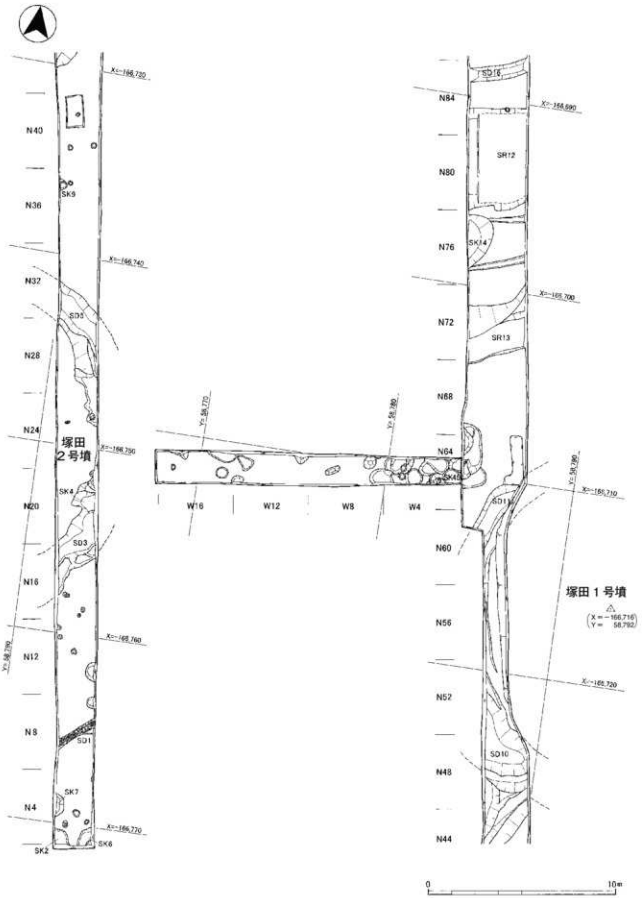
調査区北部(集落跡付近)（第Ⅳ－７図）　調査区北部の層位状況は、調査区南部と比較的類似するが、北端部には中近世の水田土壌が確認できるという相違点がある。遺構基盤となるのは黄褐色系粘土(第36層)で、南寄りでは標高約17.0mで検出できるが、中近世水田土壌と考えられる第６層が確認できる付近から次第に下降し、北端では標高16.5mにまで達する。黄褐色系粘土の下降に伴い、その上部に褐色シルト(第35層)が堆積している。遺構は第35層上面で確認できるが、第35層が確認できる付近から北部は遺構密度が激減している。この状況から、調査区北部のさらに北側に、流路(旧河道)が存在しているものと考えられる。

なお、調査区北部では、遺構埋土に黒ボク由来の堆積土はほとんど確認できない。ただ、先述のＳＲ15北岸部には黒ボク由来土と考えられる層の堆積が見られるので、調査区北部にも黒ボクは堆積していたと考えられる。

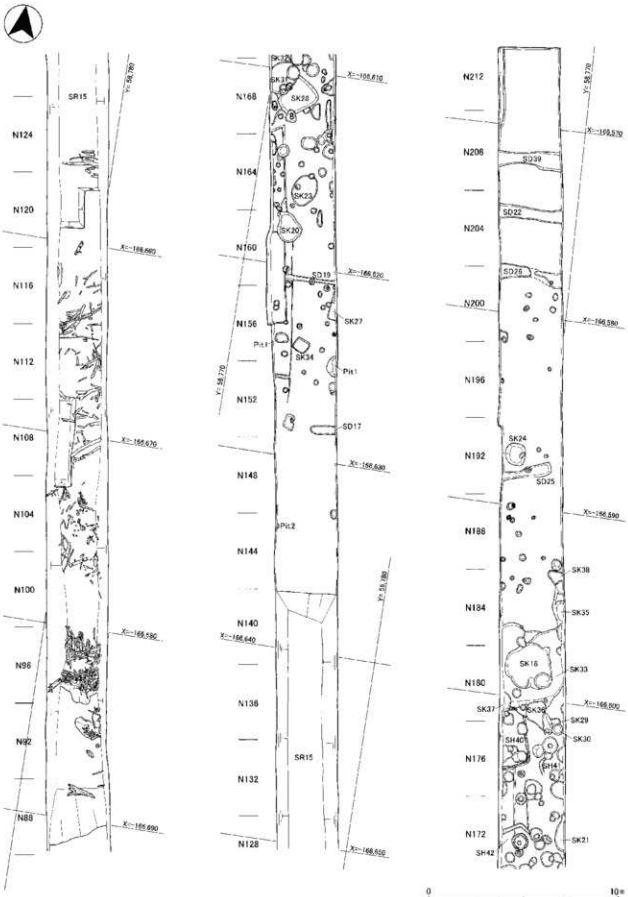
層位の全体構成　以上の状況から、調査区南部と調査区北部南半に良質な基盤層が存在し、中央部と北部北半に流路(旧河道)の存在が考えられる。遺構基盤は黄褐色系粘土であるが、調査区南部ではその上に黒ボクが厚く堆積していたと考えられる。以上により、段丘として最も良好な土地が調査区南部で、調査区北部南半は河道に囲まれた微高地であったと見ることができる。　(伊藤)

b　調査区南部の遺構(古墳時代後期)

塚田１号墳　N44～N64で検出した円墳である。墳丘が残存しているが周囲が削られており、現状では１辺11m、現地表面から墳頂までの高さは2.5mの方墳状を呈している。今回の調査区では、周溝南辺にあたるＳＤ10、周溝北辺にあたるＳＤ11を検出

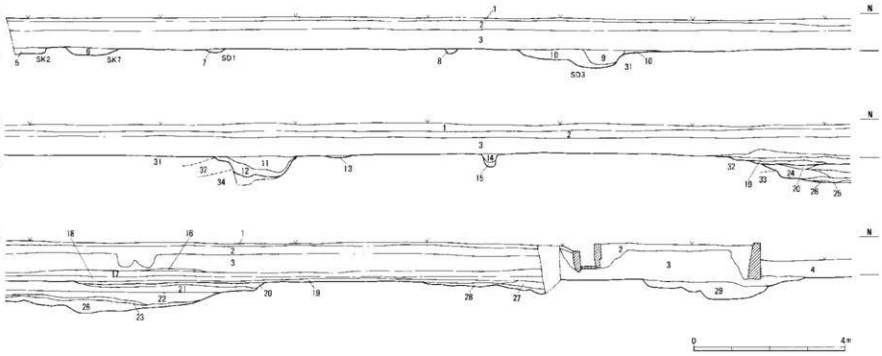


第Ⅳ－３図　田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1)（1：200）



第Ⅳ－４図　田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(2)（1：200）

南北調査区西壁(1)



1. 表土
2. 砕石
3. 路床改良土
4. 現代耕作土(圃場整備後)
5. 7.5YR3/3暗褐色土(ＳＫ２)
6. 7.5YR3/3暗褐色土、炭混じり(ＳＫ７)
7. 7.5YR3/3暗褐色土(ＳＤ１)
8. 7.5YR3/3暗褐色土(Ｐｉｔ)
9. 7.5YR3/1黒褐色土、粘質・ベース31ブロック含む
10. 7.5YR2/1黒色土、均質
11. 7.5YR2/1黒色土、均質
12. 7.5YR3/3暗褐色土にベース32と黒色土ブロック含む
13. 10YR3/3暗褐色土
14. 10YR3/2黒褐色土にベース32の小ブロック含む
15. 10YR3/2黒褐色土、粘質
16. 耕作土(路床改良の直前)
17. 耕作土(路床改良とあまり離れない時期)
18. 7.5YR3/3暗褐色土、シルト質粘性有り・炭・ベース32小ブロック含む

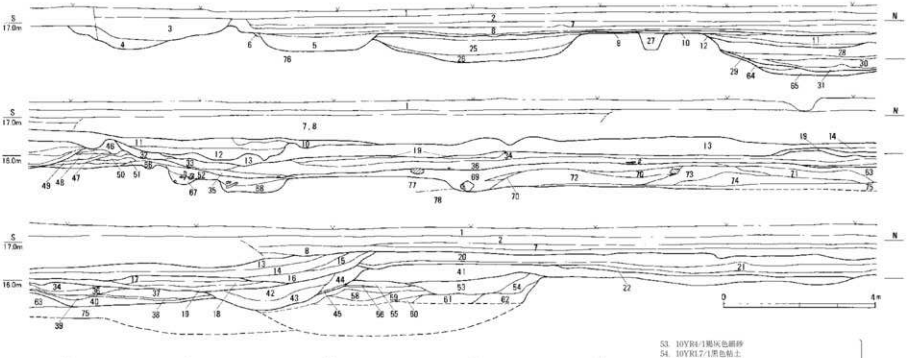
(ＳＤ３)
(ＳＤ５)
(ＳＫ９)

19. 7.5YR3/3暗褐色土、粘質・ベース32小ブロック多い
20. 7.5YR3/2黒褐色土、粘質・均質
7.5YR3/4暗褐色土・粘質・ベース32の小ブロック含む
21. 黒色土(7.5YR2/1)土ブロック多い(ブロック混合層)
22. 7.5YR2/2黒褐色土、粘質・ベース32の小ブロック極少量
23. 7.5YR4/2灰褐色土、粘質・均質
24. 7.5YR3/3暗褐色土、粘質・ベース32小ブロック多い(均質に含む・ブロック混合層)
25. 7.5YR4/2灰褐色土・7.5YR2/2黒色土・7.5YR3/4暗褐色土・ベース32小ブロックの互層
7.5YR4/4褐色土、粘質
26. ベース32とベース33の大ブロック、少量の黒色土小ブロック含む(ブロック混合層)
27. 7.5YR2/2黒褐色土、均質
28. 2.5YR5/8明黄褐色土(ベースの崩落)に黒褐色小ブロック少量入る
29. 7.5YR2/2黒褐色土、粘質・ベース32のブロック入る(ＳＫ)
30. 7.5YR2/3極暗褐色土、粘質
31. 10YR6/6明黄褐色粘土、～5mmの礫混じり
32. 2.5YR5/8明黄褐色粘土
33. 7.5YR6/6橙色粘土、株はやや砂質
34. 10YR5/6黄褐色中粒砂、～5mmの円礫含む

(ＳＤ10)
(ＳＤ11)
(地山)

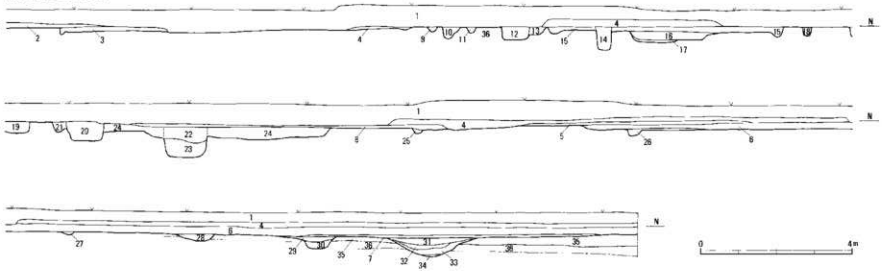
第Ⅳ－５図　田丸遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1)(1：100)

南北調査区西壁(2)



1. 表土
2. 10YR4/1褐灰色中砂質シルト(整地土・は場整備時)
3. 10YR5/3にぶい黄褐色土　下部に中砂　(現代流路)
4. 10YR3/3褐色シルト　根砂混じり
5. 10YR2/3黒褐色土
6. 10YR3/2黒褐色土　黄色小ブロック含む
7. 10YR4/4褐色土　(旧耕作土)
8. 10YR5/2灰黄褐色土
9. 10YR3/3褐褐色土
10. 10YR4/4褐色土
11. 10YR4/2灰黄褐色土　**※分析No. 1**　(SR15 上層Ⅱ)
12. 10YR4/1褐灰色土
13. 10YR4/3にぶい黄褐色土
14. 10YR5/2灰黄褐色土、黄色ブロック含む　(SR15 上層Ⅱ)
15. 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
16. 10YR5/2灰黄褐色根砂とシルト質粘土
17. 10YR5/1褐灰色粘土、根砂少量含む
18. 10YR4/1褐灰色粘土、根砂やや多い
19. 10YR4/1褐灰色粘土、根砂多く含む
20. 10YR3/1黒褐色粘土、黒色ホ・ブロック含む　(SR15 上層Ⅱ)
21. 10YR4/1褐灰色粘土
22. 5Y2/1黒色粘土
23. 10YR2/1黒色粘質シルト
24. 10YR4/3にぶい黄褐色土、黄色・黒色ブロック含む
25. 10YR5/1褐色シルト(粘質)(SK14)
26. 10YR4/1褐灰色粘土(SK14)
27. 10YR5/2 灰黄褐色粘土(SK14)
28. 10YR5/2灰黄褐色粘土
29. 10YR5/1褐灰色粘土
30. 10YR3/1黒褐色シルト、根砂・有機物多い　(SR15 下層Ⅰ)
31. 10YR3/1黒褐色粘土
32. 10YR4/2灰黄褐色粘土
33. 10YR3/3褐褐色粘土、根砂少量・有機物多い
34. 10YR4/1褐灰色粘土、有機物多い
35. 10YR2/2黒褐色根砂シルト・有機物多い　**※分析No. 4**
36. 10YR3/1黒褐色粘土、有機質多い　**※分析No. 2**　(SR15 下層Ⅰ)
37. 10YR3/1黒褐色粘土、有機物含む
38. 10YR4/1褐灰色粘土、有機物少量含む
39. 10YR3/1黒褐色粘土、根砂まじり
40. 10YR4/1褐灰色粘土、有機質含む
41. 10YR2/2黒色粘質シルト　(SR17下層Ⅱ)
42. 10YR4/1褐灰色粘土
43. N4/　灰色粘土　(SR17下層Ⅱ)
44. 10YR4/4褐色細砂、ややシルト質
45. N2/　黒色粘土
46. 10YR5/2灰黄褐色粘土
47. 10YR5/1灰黄褐色粘土、根砂混じり
48. 10YR3/2黒褐色シルト、根砂・黄色粘土ブロック混じり
49. 10YR4/1褐灰色粘土、根砂・黄色粘土ブロック混じり　(遺構土)
50. 10YR3/2黒褐色シルト
51. 10YR3/4暗褐色根砂、黄色粘土ブロック
52. 10YR2/2黒褐色粘土、明緑灰色ブロック含む
53. 10YR4/1褐灰色細砂
54. 10YR1.7/1黒色粘土
55. 10YR4/1褐灰色粘土
56. N1.5/ 黒色土、有機層
57. 5Y4/1灰色粘土、シルト質・有機物少量含む
58. N6/ 灰色+25Y6/2灰黄色根砂、有機質含む　(SR15 最下層Ⅰ)
59. N3/ 暗灰色粘土と細砂の互層
60. N4/ 灰色細砂
61. N3/ 暗灰色細砂質シルトと細砂の互層、有機物含む
62. 10YR1.7/1黒色粘土
63. 10YR3/1黒褐色根砂10～40mmの礫多い
有機物多い、黒褐色粘土含む
64. 10YR3/1黒褐色粘土、明緑灰色ブロック多い
65. 10YR3/1黒褐色シルト、根砂・明緑灰色ブロック多い
66. 10YR2/2黒褐色粘土、根砂多い
67. 10YR3/2黒褐色根砂
68. 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、根砂+10～20mmの礫　(SR15 最下層Ⅰ)
69. 10YR4/1褐灰色細砂　10～30mmの礫
70. 10YR4/1褐灰色シルト、根砂混じり・有機物少量含む
71. 10YR4/1褐灰色粘土、根砂少量・有機物多く含む
72. 10YR3/1黒褐色粘土、有機物少量　**※分析No. 5**
73. 10YR2/1黒色根砂、黄色褐色砂・褐灰色粘土含む
74. 10YR4/3にぶい黄色褐色根砂、褐灰色粘土含む
75. 10YR6/1褐灰色根砂、50～80mmの礫多い
76. 10YR2/6黄橙色粘土
77. 10GY7/1明緑灰色粘土　**※分析No. 6**　(地山)
78. 0GY6/1緑灰色粘土、混礫シルト(細砂質)

南北調査区西壁(3)



1. 表土
2. 10YR4/1褐灰色中粒砂質シルト(整地土・ほ場整備時)
3. 10YR4/2灰黄褐色土
4. 10YR4/4褐色土（旧耕作土）
5. 10YR4/1褐灰色土(旧耕作土)
6. 10YR5/1褐灰色土(旧耕作土)
7. 10YR4/1褐灰色土(旧耕作土)
8. 10YR5/2灰黄褐色土
9. 10YR3/2黒褐色土
10. 10YR3/3暗褐色土
11. 10YR4/4褐色土
12. 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む(Pte)
13. 10YR3/3暗褐色土(Pte)
14. 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む(N168Pte4)
15. 10YR3/2黒褐色土、瓦混じり(SH42)
16. 10YR3/2黒褐色土、地山小ブロック含む(SK32)
17. 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック多い（SK31)
18. 10YR4/3褐色土(Pte)
19. 10YR3/3暗褐色土、炭・地山ブロック含む(Pte)
20. 10YR4/2灰黄褐色土、地山ブロック含む(N176Pte14)
21. 10YR3/2黒褐色土(SH40)
22. 10YR3/2黒褐色土 } (SK37)
23. 10YR3/3暗褐色土、地山ブロック含む } (SK37)
24. 10YR2/3黒褐色土、瓦混じり(SH40)
25. 10YR4/6褐色土、灰黄褐色ブロック含む(Pte)
26. 10YR2/3黒褐色土(Pte)
27. 10YR3/1黒褐色土(Pte)
28. 10YR3/3暗褐色土(SD26)
29. 10YR3/2黒褐色土 } (SD22)
30. 10YR2/1黒褐色土、やや砂質 } (SD22)
31. 10YR4/2灰黄褐色粘土 } (SD39)
32. 10YR3/3暗褐色粘砂 } (SD39)
33. 10YR5/1褐灰色粘土 } (SD39)
34. 10YR4/1褐灰色粘土 } (SD39)
35. 10YR4/6褐色シルト、粗砂質 } (地山)
36. 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 } (地山)

東西調査区南壁

1. 表土
2. 砕石
3. 盛り土
4. 旧耕作土
5. 7.5YR2/2黒褐色粘質土 (明黄褐色粘土ブロック入る) } (SK45)
6. 10YR2/2黒褐色粘質土と7.5YR6/6橙色粘質土の互層 } (SK45)
7. 25Y3/3暗オリーブ褐色粘質土(Pte)
8. 10YR7/8黄橙色粘土(地山)

第IV－7図　田丸遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(3)（1：200）

した。周溝の円周から元々は直径約20mの円墳であったと考えられ、周溝を含めた規模は直径約26mである。

北溝ＳＤ10は幅約３m、深さ約１mで、塚田２号墳の周溝に比べると深く掘り込まれている。ＳＤ10の南側で、西に向かって緩やかに弧を描く溝が重複していることから、塚田１号墳の南西方向に、さらにもう１基古墳があった可能性が考えられる。一方、南溝にあたるＳＤ11は幅約1.4m、深さ0.3mを測り、北溝に比べ幅・深さともに規模が小さくなっている。遺構面が削平されているため全体的に浅い印象を受ける。墳丘裾西側は、後世の耕作により段状を呈している。

周溝からは遺物はほとんどみられなかったが、埋土の堆積状況が塚田２号墳と同様であることから古墳時代後期の築造と考えられる。なお『玉城町史』には、塚田古墳が直径14mの円墳であり、須恵器小片が１点採集されたと記載される。[1] 地元では「マムシ塚」と呼称されている。

塚田２号墳　N16～N32で検出した円墳である。規模は、周溝の円周から直径約20mと推測され、調査区の西側に続いている。墳丘は削平されて現存しない。周溝は曲線的で、内外側ともになだらかに掘りこまれる。周溝計測値は北側のＳＤ３が幅2.2m、深さ0.4m、南側のＳＤ５が幅2.0m、深さ0.6mである。周溝埋土は黒褐色土で、いずれも均質である。

第Ⅳ－８図　ＳＤ１平面・立面図（１：30）

築造時期については、周溝底近くからの出土遺物に欠けるため明確に時期を決める資料に乏しいが、土師器甕の形態から、概ね古墳時代後期の範疇におさまるものと考えられる。また、古墳の南側で検出したＳＫ２（中世後期）から出土した古墳時代後期の滑石製紡錘車は、元々は塚田２号墳に伴うものであった可能性が高い。したがって、墳丘が削平された時期は中世後期と推測される。

c　調査区南部の遺構（古代～中世）

ＳＫ45　東西方向にのびる調査区で検出した平安時代前期後半の遺構である。直径約１mを測る土坑が密集しており、土坑の形状と規模から粘土採掘坑の可能性がある。平安時代の遺構は、ＳＲ15の南岸ではＳＫ45、ＳＲ13のみ確認される。

ＳＤ１（第Ⅳ－８図）　調査区南側のＮ８グリッドで検出した溝である。幅33cmの掘形を持つ石組溝で、性格は暗渠と考えられる。石組の隙間からは、構築時に廃棄されたと考えられる土師器鍋・羽釜や常滑焼大甕口縁が出土した。土器の形態から、時期は南北朝期と考えられる。

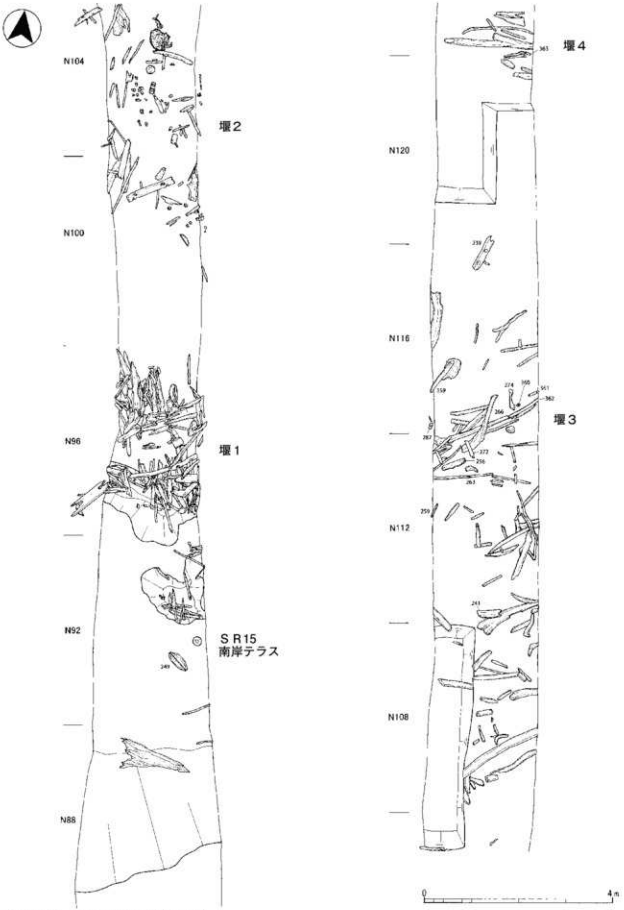
ＳＫ２　調査区南端Ｎ４グリッドで検出した浅い土坑である。出土遺物から、時期は室町時代後半と考えられる。古墳時代後期の紡錘車が混入している。

d　調査区中部の遺構（河道ＳＲ15）

概要　調査区のほぼ中央を河道ＳＲ15が横断する。弥生時代中期から平安時代後期にかけて機能した幅約55mの流路で、西流する。外城田川の前身と考えられる。古墳群側の南岸で、河道と平行方向に設けられた木組みの堰[2]を検出した。堰周辺からは古墳時代後期の土器や、農耕具・建築部材などの木製品が出土した。

規模　幅約３mの調査区内を横断する旧河道であるため、全体像は明確ではないが、両岸間の距離は55.5m、深さは遺構面から２m以上あったと考えられる。南岸にテラス状の段を設けており、この深さは遺構面から１mである。　（相場）

遺構内構築物と層位　ＳＲ15では、自然流路段階、築堤を伴う構造物のある段階、河道がほぼ埋没した段階の、概ね３時期に区分することができる。それぞれを最下層・下層・上層とする。主に第Ⅳ－６図に基づき見ていく。



第Ⅳ-９図　ＳＲ15堰平面図（１：80）

最下層　最下層は、第Ⅳ－６図の第53～75層にあたるが、第53～62層を最下層Ⅰ、第63～75層を最下層Ⅱと区分できる。

最下層ⅡはＳＲ15全体を覆う層で、加工痕の見られない自然流木や木葉を中心とした有機物、さらには自生二枚貝(マツカサガイ)が見られるのもこの層である。この状況から、当流路が河道として最も機能していた時期に形成されたのがこの層と考えられる。第69層中から弥生時代中期前葉の良好な土器が出土していること、その他の層から古墳時代前期頃までの土器が出土していることから、最下層Ⅱの形成時期はこれらの時期に相当すると考えられる。

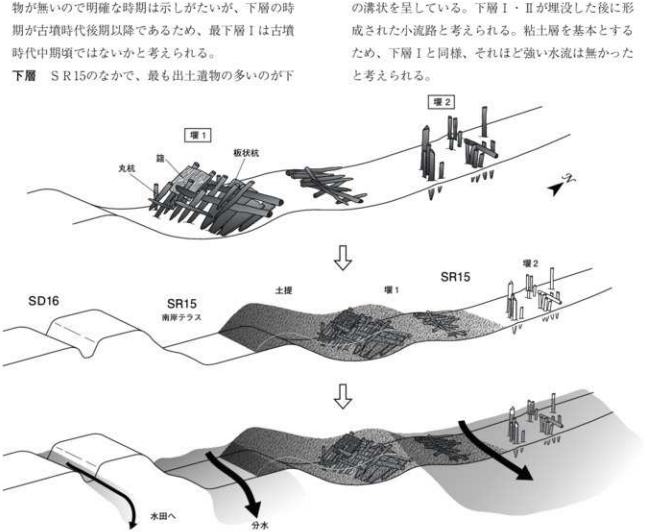
最下層Ⅰは、ＳＲ15の北端部に見られる。幅10m程度の流路として機能していた時期のものと考えられる。第59層に砂と粘土の互層が見られるので、この段階も相応の水流があったと考えられる。出土遺物が無いので明確な時期は示しがたいが、下層の時期が古墳時代後期以降であるため、最下層Ⅰは古墳時代中期頃ではないかと考えられる。

下層　ＳＲ15のなかで、最も出土遺物の多いのが下層である。第28～45層が相当するが、第28～40層を下層Ⅰ、第41層を下層Ⅱ、第42～45層を下層Ⅲとして区分できる。また、第46～52層の堰堤盛土も下層相当の構造物である。

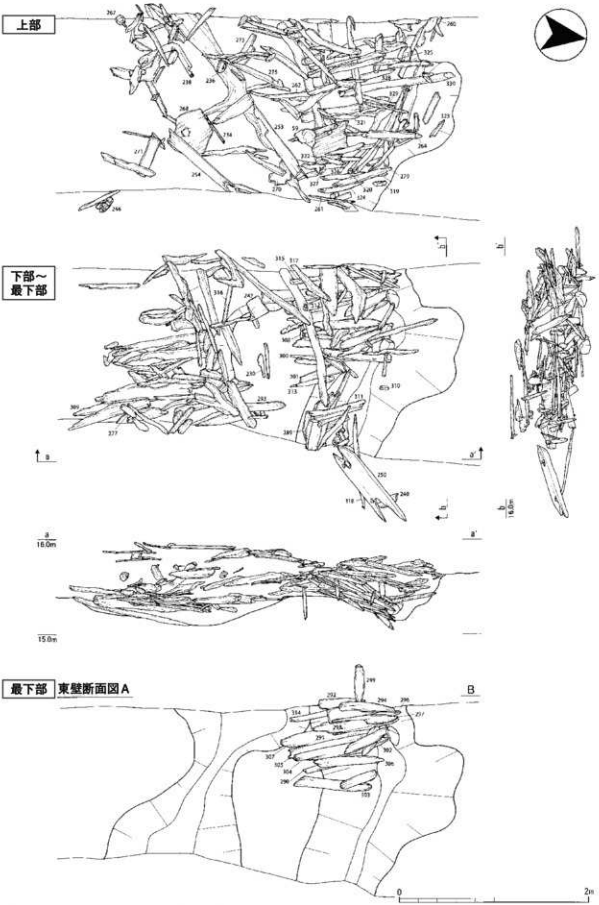
下層Ⅰは、ＳＲ15をほぼ覆う厚さ30～40cmの粘土層である。ＳＲ12とＳＤ16の埋土も基本的にこの層と同質であり、連動して堆積したと考えられる。この層中に多くの木製品や土器類が包含されていた。粘土層であるため、それほど強い水流は無かったと考えられる。古墳時代後期を中心とした遺物を包含しているため、形成時期はその頃に求められる。

下層Ⅱは、ＳＲ15の北岸部を覆う層である。下層Ⅲによって分断されているため、下層Ⅰとの関係が明確でないが、基本的には下層Ⅰと連動した層と考えられる。

下層Ⅲは、ＳＲ15の北岸部に見られる。幅約５ｍの溝状を呈している。下層Ⅰ・Ⅱが埋没した後に形成された小流路と考えられる。粘土層を基本とするため、下層Ⅰと同様、それほど強い水流は無かったと考えられる。



第Ⅳ－10図　堰構造模式図



第Ⅳ－11図　堰1 平面・立面図（1：40）

下層の堰堤盛土（第Ⅳ－12図）　下層Ⅰの形成前に、ＳＲ15南岸部に堤状遺構が構築されている。堰堤は、ＳＲ15南岸部のテラス状部端に構築されている。その下には最下層Ⅱの埋土がある。この結果、ＳＲ15の南端に別の流路を形成する状態となっている。

堰堤は幅約４ｍ、遺存高約1.2ｍで、築堤に伴う杭列は認められないが、河道南岸部は杭およびシガラミ（堰１）で固められている。後述の堰１は、基本的には堰堤に伴う構造物と考えられる。堰堤部は、粘土およびシルトを細かく積み上げており、一種の版築技法と見ることもできる。

堰堤によって分断されたＳＲ15南岸テラスは、ＳＲ15本体から導水するための施設として用いられたと考えられる。南方のＳＲ12とＳＤ16についても同種の機能が考えられる。

上層　上層はＳＲ15が機能していた最終段階と考えられる層である。第Ⅳ－６図第10～24層が相当するが、第10～12層を上層Ⅰ、第13～16層を上層Ⅱ、第17～24層を上層Ⅲとして区分できる。

上層Ⅲは、ＳＲ15北岸部を大きく埋積する層である。ＳＲ15の中央から北側にのみ観察できる層で、黒ボク由来の黒色土を基本とする。

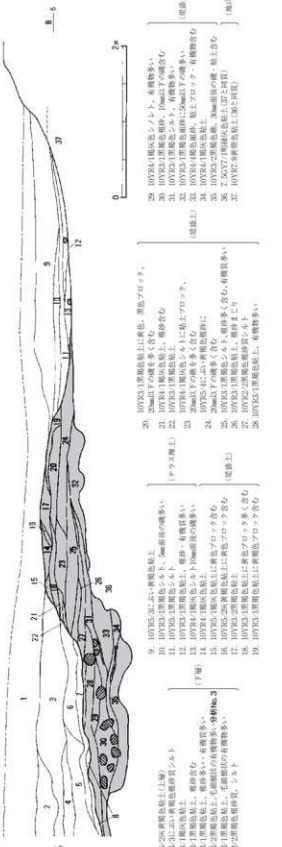
上層Ⅱは灰黄褐色系土で、シルトおよび粘土質である。植物生痕が見られたため、水田土壌か、あるいは湿地を示す土質と考えられる。

上層ⅠはＳＲ15を完全に覆い尽くす層である。この層も灰黄褐色系の粘土質で、水田土壌ないしは湿地を示すと考えられる。上層からは、灰釉陶器類の出土が見られた。そのため、形成時期は平安時代中後期頃と考えられる。　（伊藤）

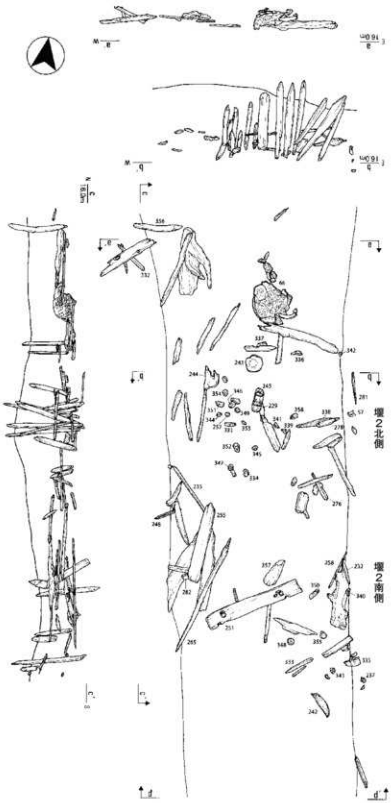
ｅ　ＳＲ15　木組みの堰

概要と機能（第Ⅳ－９図）　ＳＲ15の南岸で検出した古墳時代後期の杭列で、川岸に沿うように東西に伸びる水利施設である。木組は調査区外まで続いている。杭列は４つのまとまりが確認され、便宜上岸辺から順に堰１→堰４とした。

一番岸に近い堰１は、板状杭や筵を芯とし、盛土を行う構造をもつ。これは旧河道の水流をテラスや溝に分水し、下流にある水田に流し込むための機能を有していたと思われる。一方、堰２は長い角材を、堰３～４は丸杭をほぼ垂直に打っており、水の流れ



第Ⅳ－12図　堰１ 東壁土層断面図（１：50）



第Ⅳ－13図　堰2 平面・立面図（1：40）

を緩める役割をもっている。堤によって分水された灌漑用水路は、南岸テラスやＳＤ16、ＳＲ12が相当すると考えられる。

堰１の構造（第Ⅳ－11図）　ＳＲ15の岸辺にあたり、南岸テラスに隣接する。杭列の方向はＳＲ15と平行するため、流水を堰き止めるものではなく、土堤を用いて分水する機能であったと考えられる。調査区内において、長さ約1.3mの南杭列と、長さ約2mの北杭列を検出した。

構造は、まず板状杭を敷き並べるように北→南方向に斜めに打ち込んでいる（堰１最下部）。最下部で折り重なるように用いられた板状杭は、調査区内で19本確認され、そのほとんどがコナラ材であった。

板状杭の上（堰１下部）では、自然木を用いた横木を並べ、丸杭が斜めに打ち込まれている。堰１では、丸杭が調査区内で18本みられた。また、南と対になるよう北側にも板が並べられているが、これは杭ではなく板状の加工材を用い、地山を掘りくぼめた斜面に対し水平方向に敷き並べたものである。

堰上部では、丸杭と丸杭の隙間に、粗朶で製作された筵が堤の土台として用いられている。遺構検出作業は木杭を掘り下げる形で進められたが、これら木杭は全て土堤の基礎と考えられ、土層断面では堤状の高まりが確認できる。したがって、本来は木杭を覆う土手状の堤が構築されていたと想定される（第Ⅳ－10図）。

ただし、古代の堤防にみられるような土嚢積みや敷葉工法は確認されなかったかったことから、比較的簡易な盛土であるといえよう。なお、漂着した木製品のほとんどは、杭の直上ではなく堤の想定ラインより上から出土している。

堰２の構造（第Ⅳ－13図）　緩やかな傾斜を持つ堰１とは対照的に、角材が直立し、しっかりと打ち込まれるものである。

堰２では、約1.2m離れている２つのまとまりを確認した。南側では比較的大きくしっかりした杭が垂直に打たれ、中には335のように建築部材を杭に転用した板材が混じる。

一方、北側では当初より杭として用意された大型の蜜柑割材（残存長75cm程度）を主体とし、それらが川と平行して２条並ぶ。さらに、角杭の隙間を57縫うように小型の丸杭（径約５cm程度）が密集している。横木はみられないが、葦堤当時は蔓状の植物や小枝・芦や葦などが横方向に「しがらみ」状に絡めてあった可能性が高い。堰２の角杭は、いずれも尖端が地山まで到達し、水の流れを緩やかにする機能を有している。

堰３・堰４の構造（第Ⅳ－９図）　非常に脆弱な杭列である。河床に打ち込まれている杭を確認したため、便宜上堰３・堰４としたが、堰１・堰２と比べ、まとまった単位は認められない。堰３は、丸杭が２本打たれたものである。堰４は流木を堰き止めるように直立した丸杭を１本確認した。

遺物出土状況　土器は、堰の上に流れ着く形でみられた。59は堰１上部の杭上面で検出した。須恵器大甕66は、堰２北端で１個体分まとまって出土した。

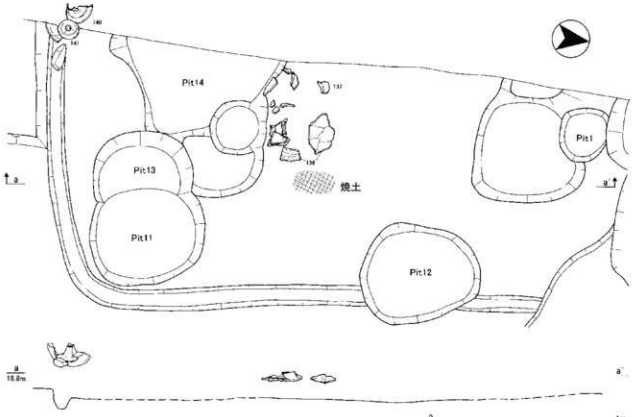
木製品は、祭祀遺物である舟形木製品が２点出土していることが特筆される。32.5cmの大型品249は、古墳群に近い南岸テラスの浅瀬で確認された。小型の舟形木製品248は堰２で出土した。

ｆ　調査区北部の遺構（古墳時代後期）

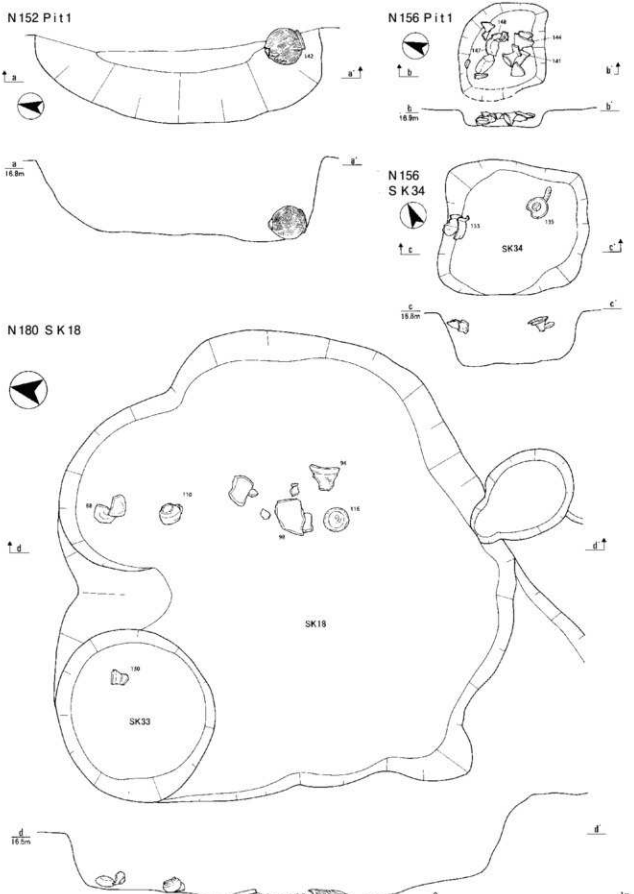
ＳＫ18（第Ⅳ-15図）　径約2.4m、深さ40cmの土坑で、形状は円形を呈する。底面からはほぼ完形の須恵器蓋坏６点、壺３点のほか、古墳時代後期の土器がまとまって出土した。

ＳＫ34（第Ⅳ－15図）　N156グリッドで検出した、ほぼ正方形の土坑である。一辺約80cmを測る。底からやや浮いた状態で、高坏の脚部などが出土した。

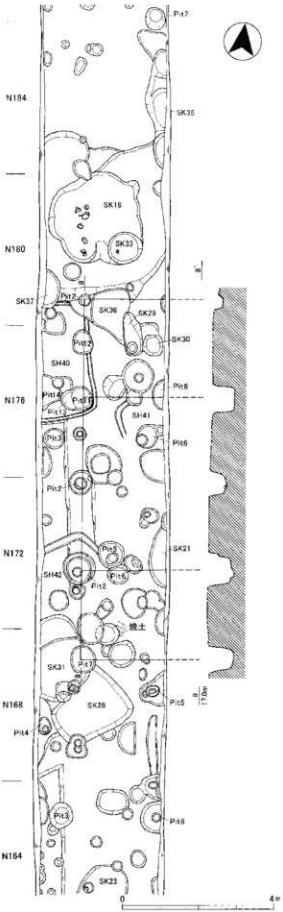
ＳＨ40（第Ⅳ－14図）　N176グリッドの西端で検出した竪穴住居である。方形のプランだが、上面および南辺は平安時代後期から中世に削平され、さらに古墳時代後期～平安時代後期のピットが重複していることから、建物に伴う主柱穴は確認できなかった。残存している東壁から推測すると規模は一辺3.1m以上で、調査区の西側に続くものである。焼土は、通常のカマド痕跡とは異なり、壁面から離れた位置



第Ⅳ－14図　竪穴住居ＳＨ40平面・立面図（１：20）



第Ⅳ－15図　調査区北部個別遺構平面・立面図（1：20）



第Ⅳ－16図　ＳＢ46平面・断面図（１：100）

で検出した。竪穴住居に伴うものではないが、付近から鉄滓が出土していることから野鍛冶に関わる施設であった可能性も指摘できよう。

出土遺物は、床面から10cmほど浮いた状態で確認された。西壁上で高坏が折り重なって出土している。竪穴住居ＳＨ40は、土師器類の形態から古墳時代後期に廃絶した遺構と考えられる。

ＳＨ41　Ｎ176グリッドで検出した竪穴住居で、北西端の壁際溝を確認した。上面は削平されている。遺物は出土しなかったが、埋土の状況からＳＨ40と同時期にあたる古墳時代後期のものと考えられる。

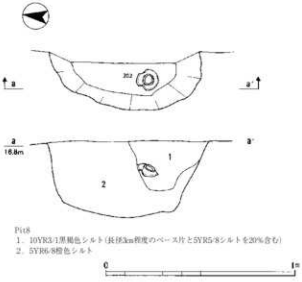
ＳＨ42　ＮＳＨ42同様、壁際溝のみ検出した。

Ｎ152ピット１（第Ⅳ－15図）　調査区東壁沿いで検出した土坑で、幅1.5m、深さ40cm。土坑の底から、脚台部以外ほぼ完形のＳ字甕が横向に出土した。

Ｎ156ピット１（第Ⅳ－15図）　ＳＫ34に隣接している。幅45cm、高さ10cmの浅い土坑で、上面は既に削平されている。高坏の坏部や脚部がまとまって出土した。

ｇ　調査区北部の遺構（平安時代後期）

ＳＢ46（第Ⅳ－16図）　掘立柱建物で、南北４間を確認した。柱間は南北2.5m、東西2.3mで、建物はさらに東へ続くと考えられる。両端のピットが小さいことから、南北方向に庇をもつ二面廂付建物、あるいは四面廂付建物などが想定される。建物の方向はほぼ南北である。建物に伴う柱穴は円形を呈し、



第Ⅳ－17図　Ｎ176Ｐｉｔ８平面・断面図（１：20）

第Ⅳ－１表　田丸道遺跡遺構一覧表

遺構番号	形態	時期	調査区	小地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
ＳＤ１	暗渠	中世後期	南北	N8	2.1～	0.5	0.09	土師器(皿・鍋・羽釜・茶釜)、雪滑焼、山茶椀	石組(土器片混じる)
ＳＫ２	土坑	中世後期	南北	N4	0.85～	0.85～	0.12	土師器(皿・茶釜蓋)、軒錘車	古墳時代後期の紡錘車出土
ＳＤ３	周溝	古墳後期～中世後期	南北	N16-N20	4.0～	2.2	0.35	上層：土師器鍋など 下層：土師器甕など	堀田２号墳周溝
ＳＫ４	土坑	不明	南北	N20	1.25	1.2	0.19	土師器片	ＳＤ３の一部か
ＳＤ５	周溝	古墳後期	南北	N24-N32	4.0～	2.0	0.55	土師器片	堀田２号墳周溝
ＳＫ６	土坑	中世後期	南北	N4	0.95～	0.75～	0.11	土師器片	
ＳＫ７	土坑	中世後期	南北	N4	1.1	0.45～	0.17	土師器(皿・鍋)	
ＳＫ８	土坑	不明	南北	N12	1	0.15～	0.33	土師器片	
ＳＫ９	土坑	不明	南北	N36	0.75	0.15～	0.08	土師器片	
ＳＤ10	周溝	古墳後期	南北	N44-N52	9.0～	3.1	1.0	土師器片	堀田１号墳周溝。幅が広く、古墳南西側にもう１基築造された可能性がある。
ＳＤ11	周溝	古墳後期	南北	N56-N64	3.0～	1.4	0.3	土師器片	堀田１号墳周溝
ＳＲ12	溝	古墳後期	南北	N80	3.0～	5.4	0.68	なし	上流の堰で分水された農耕用水路か
ＳＲ13	旧流路	現代	南北	N72	3.0～	3.3?	0.36	土師器(坏)、山茶椀、須恵器	現代流路
ＳＫ14	土坑	平安後期	南北	N76	2.85	1.3～	0.4	土師器(坏)	
ＳＲ15	旧流路	弥生中期～平安後期	南北	N88-N140	3.0～	55.5	2.0～	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、木製品等	外城田川の前身と考えられる旧河道 南側で古墳時代後期の堰１～４を検出
ＳＤ16	溝	古墳中～後期	南北	N84	3.0～	0.75	0.46	古式土師器(壺片)	ＳＲ15の南に位置する 上流の堰で分水された農耕用水路か
ＳＤ17	溝	中世前期	南北	N152	1.35～	0.45	0.12	土師器片	
ＳＫ18	土坑	古墳～飛鳥	南北	N180-N184	2.4	2.5	0.4	土師器(甕・椀)須恵器(坏身坏蓋・高坏・壺)	
ＳＤ19	溝	平安後期か	南北	N160	2.6	0.3	0.02	土師器片	
ＳＫ20	土坑	古墳後期	南北	N160	0.8	0.65	0.3	土師器(椀)	
ＳＫ21	土坑	平安後期	南北	N172	0.8	0.24～	0.17	灰釉陶器	
ＳＤ22	溝	平安後期？	南北	N204	1.5～	0.45	0.9	土師器片(坏)	
ＳＫ23	土坑	平安後期か	南北	N164	1.6	1.3	0.2	土師器片、弥生土器片	
ＳＫ24	土坑	平安後期か	南北	N192	1.2	1.1	0.2	土師器片(甕)	
ＳＤ25	溝	平安後期か	南北	N192	2.5～	0.6	0.12	土師器片(坏)	
ＳＤ26	溝	不明	南北	N200	3.0～	0.7	0.1	土師器片、弥生土器片	
ＳＫ27	土坑	平安中期	南北	N156	1.3	0.4	0.04	土師器片、灰釉陶器	
ＳＫ28	土坑	古墳後期	南北	N168	2.0	1.5	0.2	土師器(壺・甕)、須恵器(坏蓋)、石器	方形土坑。ＳＫ31と重複 北辺付近に焼土あり
ＳＫ29	土坑	平安	南北	N176-N180	1.2	0.45	0.06	緑釉陶器片、ロクロ土師器	
ＳＫ30	土坑	古墳後期	南北	N176	0.5	0.5	0.3	土師器片	
ＳＫ31	土坑	古墳後期～古代	南北	N168	1.8	1.4	0.2	土師器(甕)	ＳＫ28、ＳＫ32の上面で検出
ＳＫ32	土坑	古代	南北	N168-N172	1.0～	0.6	0.2	土師器片	ＳＫ３１と重複、切り合い不明瞭
ＳＫ33	土坑	古墳後期	南北	N180	0.9	0.9	0.22	土師器片、須恵器	ＳＫ18の上面で検出 須恵器平瓶の口縁部出土
ＳＫ34	土坑	古墳後期	南北	N156	0.7	0.7	0.3	土師器(甕・高坏・Ｓ字甕脚台)	
ＳＫ35	土坑	古墳後期	南北	N184	1.0	0.5～	0.2	土師器片(甕)	
ＳＫ36	土坑	古代	南北	N180	1.2	1.0	0.13	土師器片	
ＳＫ37	土坑	平安中期？	南北	N180	1.0	0.4～	0.5	土師器(甕・暗文坏)	
ＳＫ38	土坑	古墳後期	南北	N184	0.9～	0.7	0.04	土師器片、須恵器(坏身)	
ＳＤ39	溝	古墳後期？	南北	N208	3.0～	0.9	0.11	土師器片、須恵器片	
ＳＨ40	竪穴住居	古墳後期	南北	N176	3.1～	1.5	0.04	土師器(甕・高坏)、鉄滓片	中世の遺構による上面および北壁の削平著しい。主柱穴等は不明。
ＳＨ41	竪穴住居	古墳後期	南北	N176	2.5～	1.5～	0.02	なし	遺物なし 遺構の全体像不明
ＳＨ42	竪穴住居	古墳後期	南北	N172	1.0～	0.8～	0.11	なし	遺物なし 遺構の全体像不明
ＳＫ45	土坑	平安後期	東西	W4-W8	5	1.5～	0.27	土師器(坏)	径約１mの土坑群で、ほぼ同一の埋土 粘土採掘坑の可能性がある
ＳＢ46	掘立柱建物	平安後期	南北	N168-N180	9.5	2.3～	－	土師器(坏・椀・甕)、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、刀子	大型の掘立柱建物で、調査区の東側に続くと考えられる。柱間は南北25m、東西23mか。

堀方約75cm、柱穴は25cmである。確認された柱穴7つのうち、N168ピット7、N172ピット2、N176ピット2、N180ピット2およびN176ピット8からは緑釉陶器片が出土している。なかでも、N176ピット8の柱穴跡から出土した完形の緑釉陶器皿は、口縁部が意図的に打ち欠きされており、建物の廃絶期に地鎮として投棄された可能性が高い(第Ⅳ-15図)。時期は、柱穴出土の灰釉陶器が猿投窯H72型式併行期に相当し、平安時代後期の10世紀末頃。

柱穴群　SB46周辺から、建物に伴う柱穴群を検出した。出土遺物はいずれも平安時代後期の範疇に収まることから、あまり時期をおかず、同じ場所に建物を建て替えているといえよう。　(相場)

[註]

(1)玉城町編「玉城町史」上巻(1995年)

(2)ここでは、河川などから農業用水を水路へ引き入れるための施設に対し、「堰」という名称を使用する。

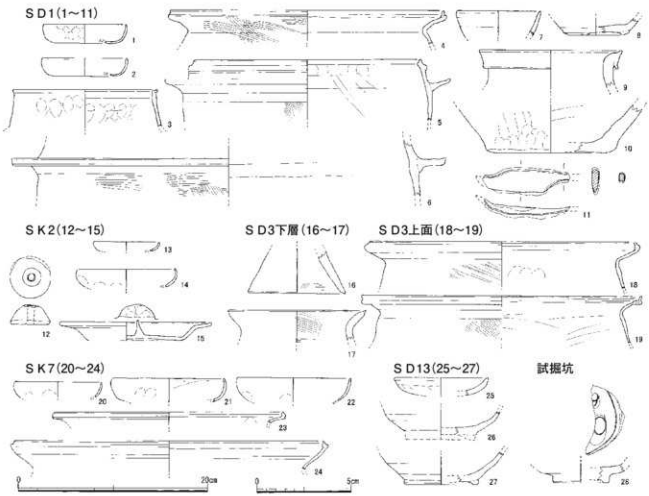
3　出土遺物

田丸道遺跡(第2次)で出土した遺物は、土器・石製品・金属製品・木製品で、土器の量はコンテナケース約21箱である。以下では、特徴的な遺構のみ記述する。個々の詳細については遺物観察表(土器・石製品・金属製品：第Ⅳ－2～7、木製品：第Ⅳ－8～11表)を参照されたい。[1]

まず土器・金属製品の特徴を述べ、次に木製品の特徴を述べる。土器は、南北調査区南部・SR15・同北部・東西調査区の順で記述した。なお、木製品は全てSR15から出土している。

a　調査区南部の出土土器・石製品

SD1出土遺物(1～11)　土師器皿、茶釜、鍋、羽釜などが出土しており、これらは南伊勢中世Ⅲb期の状況を示している。7は古瀬戸の丸椀。8は山茶椀で、藤澤編年第5型式に相当する。9～10は常



第Ⅳ－18図　田丸道遺跡出土遺物実測図(1)…調査区南部SK・SD・SR(土器1：4、鉄器1：2)

滑産の陶器で、9は広口壺で常滑窯編年6ａ型式期のものである。11は鉄製のヤリガンナである。

ＳＫ２出土遺物(12～15)　12は古墳時代後期の紡錘車である。滑石製で、塚田２号墳など周辺の埋没古墳から出土した可能性が高い。13～14は土師器皿、15は茶釜の蓋で、南伊勢中世Ⅲｂ期と考えられる。

ＳＤ３出土遺物(16～19)　下層出土16～17は古墳時代後期の甕である。17～19は土師器鍋で、南伊勢中世Ⅲｂ期に相当する。

ＳＫ７出土遺物(20～24)　20～22は土師器皿、23～24は土師器鍋で、これらはＳＤ１と同じく南伊勢中世Ⅲｂ期の状況を示している。

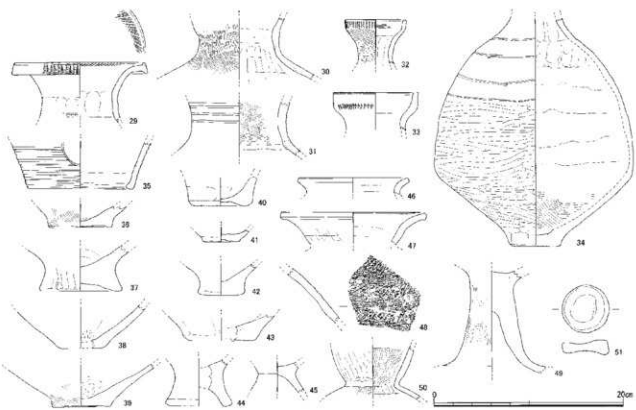
ＳＤ13出土遺物(25～27)　25は平安時代後期の土師器小皿で、混入品。26～17は猿投・知多産の山茶椀で、藤澤編年の第５型式に相当する。

ｂ　ＳＲ15出土土器

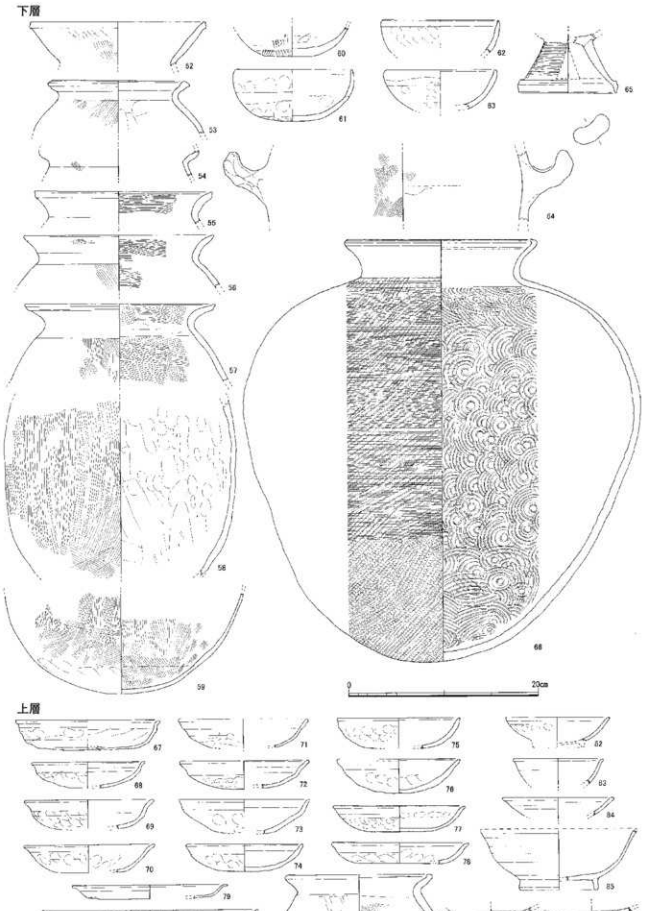
最下層出土遺物(29～51)　ＳＲ15堰周辺もしくは最下層から出土した遺物で、弥生時代中期から古墳時代前期の土器群である。29～30は壺の口縁部および頸部で、時期は第Ⅲ様式期後半頃と考えられる。31～35は弥生時代中期の範疇におさまるもの。34は壺で、体部はほぼ完形。35は弥生第Ⅳ様式期に畿内でみられる台付無頸壺の台部である。円形の透孔があり、下半に凹線文を巡らすもので、玉城町波瀬Ｂ遺跡から完形が出土している。[註2] 36～44は甕もしくは壺の底部で、中期もしくは後期のもの。45～46は甕で、45は脚台部、46は口縁部。47は壺の口縁部で、時期は後期前半のもの。49は高坏で、時期は後期前半か。51は加工円盤であるが、全体的に摩滅しており調整等不明である。

下層出土遺物(52～66)　いずれも堰周辺で出土した。52～53は比較的古い様相を示すもので、53の台付甕はＳ字甕Ｄ類に近い形状を持つもの。54～60は甕もしくは長胴甕片である。59は堰１で検出した筵直上から出土した。61から63は土師器椀で、いずれも古墳時代後期。

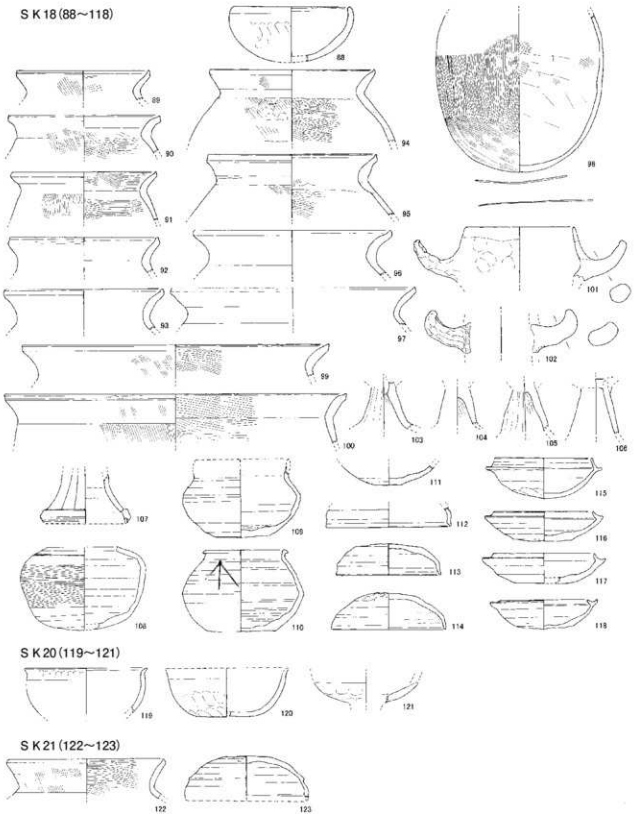
須恵器高坏(65)は透孔を４方向にもつが、形態から田辺編年ＴＫ23～47型式に併行すると考える。66は体部外面にタタキのちカキメを施し、田辺編年ＴＫ217型式に相当する。



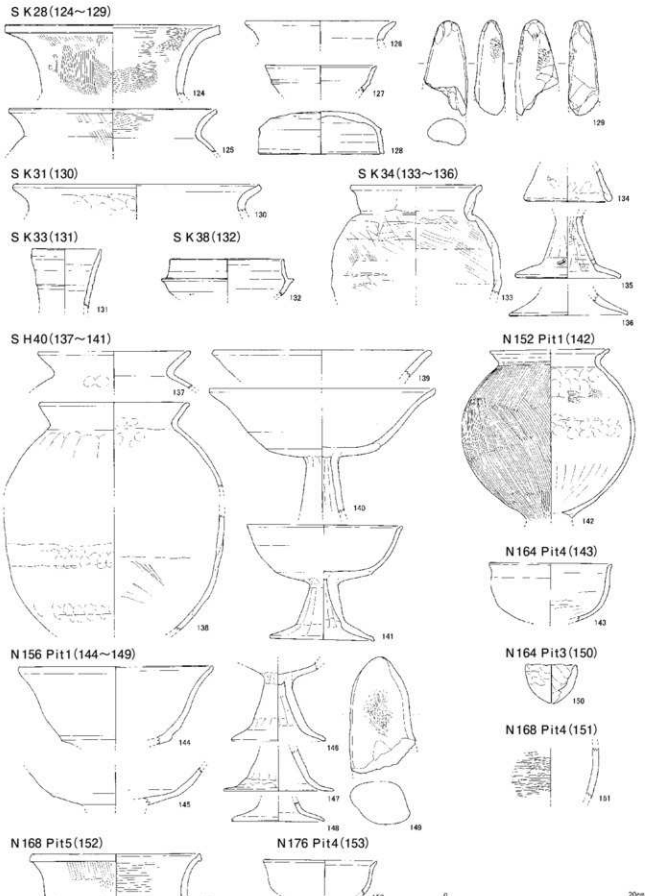
第Ⅳ－19図　田丸道遺跡出土遺物実測図(2)…ＳＲ15最下層(１：４)



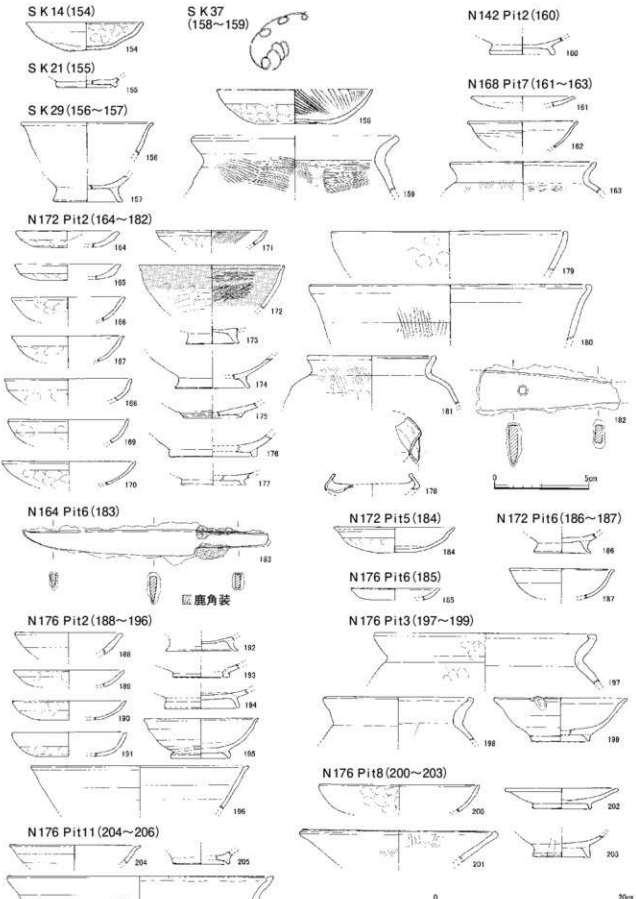
第Ⅳ－20図　田丸道遺跡出土遺物実測図(3)…ＳＲ15下層・上層（１：４）（下層：52～66、上層：67～87）



第Ⅳ－21図　田丸道遺跡出土遺物実測図(4)…調査区北部(ＳＫ18・ＳＫ20)(1：4)



第Ⅳ－22図　田丸道遺跡出土遺物実測図(5)…調査区北部（ＳＫ・ＳＨ・Ｐｉｔ）（１：４）



第Ⅳ－23図　田丸道遺跡出土遺物実測図(6)…調査区北部（ＳＫ・Ｐｉｔ）（１：４）（182・183は１：２）

上層出土遺物(67 ～ 87)　67 ～ 78は土師器坏。67は体部下半部にケズリがみられるやや古い様相を示し、時期は斎宮編年第Ⅰ期第４段階～第Ⅱ期第1段階と考えられる。土師器坏(68 ～ 78)、皿(79 ～ 80)、甕(81)は、概ね斎宮編年Ⅲ期に相当する。82は土師器の小椀で、おそらく高台をもつものである。

83は緑釉陶器椀で、美濃産と考えられる。84 ～ 87は灰釉陶器の椀と皿で、高台の形から、猿投窯Ｈ72型式併行期であろう。

c　調査区北部の出土土器・金属製品(古墳時代)

ＳＫ18出土遺物(88 ～ 118)　88 ～ 106は土師器である。88は椀、89 ～ 97は甕の口縁部。98は長胴甕で、底部外面に２本の線刻が施される。99 ～ 102は鉢片、103 ～ 106は高坏の脚柱部である。

107 ～ 118は須恵器である。107は高坏で、田辺編年ＴＫ23 ～ＭＴ15併行期と考えられ、他の遺物に比べやや古い様相を示す。108は無頸壺か。109 ～ 110は短頸壺で、110は口縁部の形態から田辺編年ＴＫ217型式の古い段階であろうか。111は壺の底部。112 ～ 114は坏蓋で、112がやや新しく、113と114は同時期であるが系統が異なっているものである。115 ～ 118は坏身で、115がやや古い様相を示す。蓋坏の時期は、概ね田辺編年ＴＫ217型式併行期であろう。

ＳＫ20出土遺物(119 ～ 121)　119 ～ 121は土師器椀、121は土師器高坏で、いずれも古墳時代後期のものである。

ＳＫ21出土遺物(122 ～ 123)　122は土師器甕。123は須恵器坏蓋で、田辺編年ＴＫ10型式に併行する。

ＳＫ28出土遺物(124 ～ 129)　124は土師器壺、125 ～ 126は土師器甕である。127は須恵器の高坏で、自然釉が付着している。128は須恵器坏蓋で、田辺編年ＭＴ15型式併行期であろう。129は叩き石である。

ＳＫ38出土遺物(132)　132は須恵器坏身で、時期は田辺編年ＭＴ15型式併行期と考えられる。

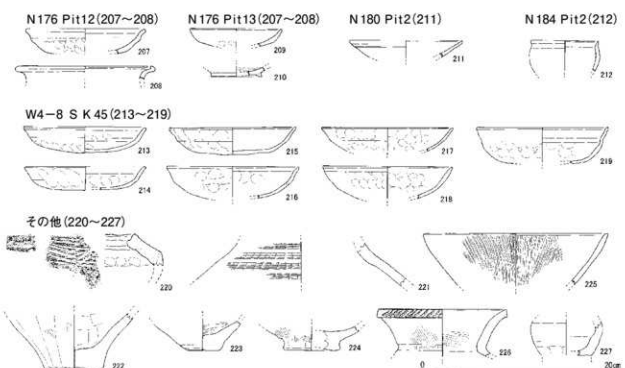
ＳＨ40出土遺物(137 ～ 141)　土師器がまとまって出土した。137 ～ 138は甕、139 ～ 141は高坏で、いずれも古墳時代後期の範疇におさまるものである。

Ｎ156ピット１出土遺物(142)　ほぼ完形のＳ字状口縁甕体部片で、口縁部の形態からＤ類に相当する。

d　調査区北部の出土土器・金属製品(平安時代)

ＳＫ37出土遺物(158 ～ 159)　158は土師器坏で、坏部内面に放射状暗文＋螺旋状暗文が施されている。159は土師器甕で、これらは斎宮編年Ⅱ期第２段階に相当すると考えられる。

ＳＫ29出土遺物(156 ～ 157)　156は緑釉陶器椀の高台で、美濃産。157は土師器の椀。



第Ⅳ－24図　田丸道遺跡出土遺物実測図(7)…調査区北部(Ｐｉｔ・その他)(１：４)

Ｎ168ピット７出土遺物(161 ～ 163)　161は緑釉陶器の皿で、深緑の釉がかかっており美濃産と考えられる。162は灰釉陶器の小椀で渥美産。163は土師器甕である。

Ｎ172ピット２出土遺物(164 ～ 182)　164 ～ 171は土師器坏で、いずれも斎宮第Ⅱ期第４段階に相当する。172は黒色土器の椀で、大川編年における平安時代Ｖ期の椀Ｂである。173 ～ 174はロクロ土師器の椀。175 ～ 176は灰釉陶器の椀で、時期はH72型式期の10世紀後半頃。177 ～ 178は軟胎の緑釉陶器で、いずれも東濃産と考えられる。177は椀である。178は耳皿で、破片資料だが、伊藤編年の耳皿３類であろうか。[3] 179 ～ 180は土師器鉢で、180は大型のもの。181は土師器甕である。182は刀子片であるが柄緑装は認められず、木質等も不明である。甕などで切断した可能性がある。

Ｎ164ピット６出土遺物(183)　183は茎部を鹿角装で拵えている。鹿角の下地に有機物の付着がみられるが、布地か木質かは不明である。

Ｎ176ピット２出土遺物(188 ～ 196)　188 ～ 192は斎宮第Ⅲ段階前半に併行する土師器で、188 ～ 190は皿、191は坏、192は椀である。193は軟胎の緑釉陶器で近江産。194 ～ 195は灰釉陶器椀、196は灰釉陶器鉢である。いずれもH72型式に併行するもの。

Ｎ176ピット８出土遺物(200 ～ 203)　200は土師器坏、201は土師器鉢である。202は完形の緑釉陶器皿で、軟胎であり東濃産と考えられる。高台内面まで釉薬が施されており、一部欠損した口縁部は意図的な打ち欠きの可能性がある。203は灰釉陶器椀で、高台部の形状がH72型式に相当する。

ｅ　東西調査区出土土器・その他

Ｎ172ピット２出土遺物(213 ～ 219)　土師器坏である。いずれも坏部外面に圧痕跡が多くみられ、斎宮編年第Ⅱ期第４段階と考えられる。

その他(220 ～ 227)　遺構に伴わないものや、包含層出土のものを「その他」とした。出土した地点は、主に南北調査区ＳＫ18周辺である。

220は条痕紋系土器様式の一器種、内傾する非常に厚い口縁部を持ついわゆる「厚口鉢」で、弥生時代前期後半から中期前葉にかけて、尾張平野から三河を中心とした地域に分布する土器である。[4] 口縁端部と口縁部外面に貝殻条痕文がみられるが、比熱を受けた痕跡は認められない。伊勢湾を介した搬入品で、三重県内では鈴鹿市域の東庄内Ｂ遺跡や須賀遺跡に分布する[5]。

227は須恵器のミニチュア壺で、底部が剥離していることから、子持ち高坏の壺の可能性がある。

ｆ　ＳＲ15出土木製品

木製品は、ＳＲ15下層以下から出土しており、全て古墳時代後期に製作されたものと考えられる。製品・建築部材と、築堤に用いられた杭にわけて記述した。なお、杭に転用された部材は、製品として記述している。[6]

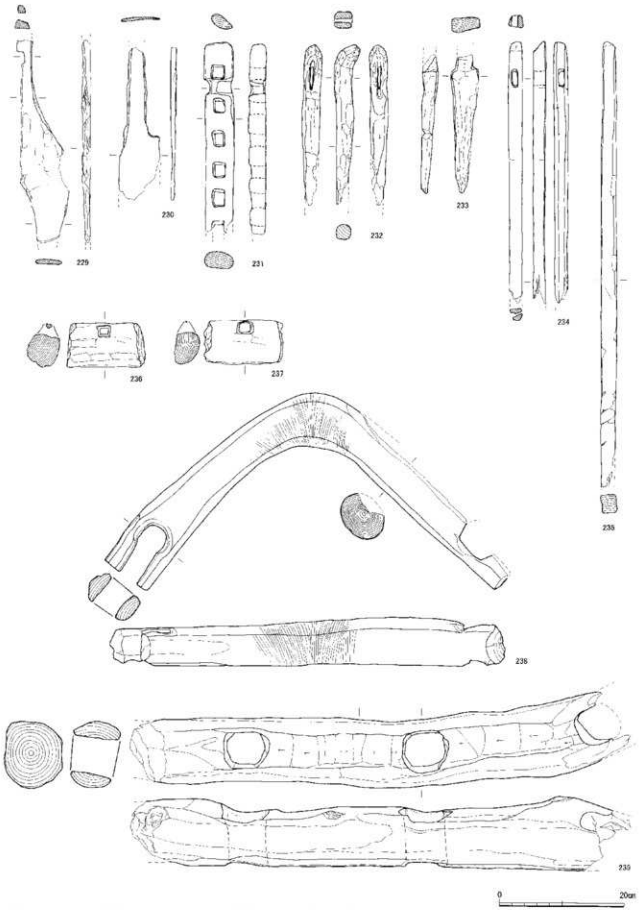
木札(228)　木簡状の木札で、堰１上部から出土した。残存長12.7cm、残存幅1.5cmで、右上はほぼ直角に成形しており、右辺には紐のようなものを括り付けた圧痕が３カ所みられる。厚みは2.5cmである。表面には炭素反応を示す墨痕が認められるが、文字は判別できない。

農耕具(229 ～ 231)　229はナスビ形曲柄又鍬で、片側のみ残存している。231は方形枠付田下駄の枠木で、形状から右側後ろの外側枠板と考えられる。

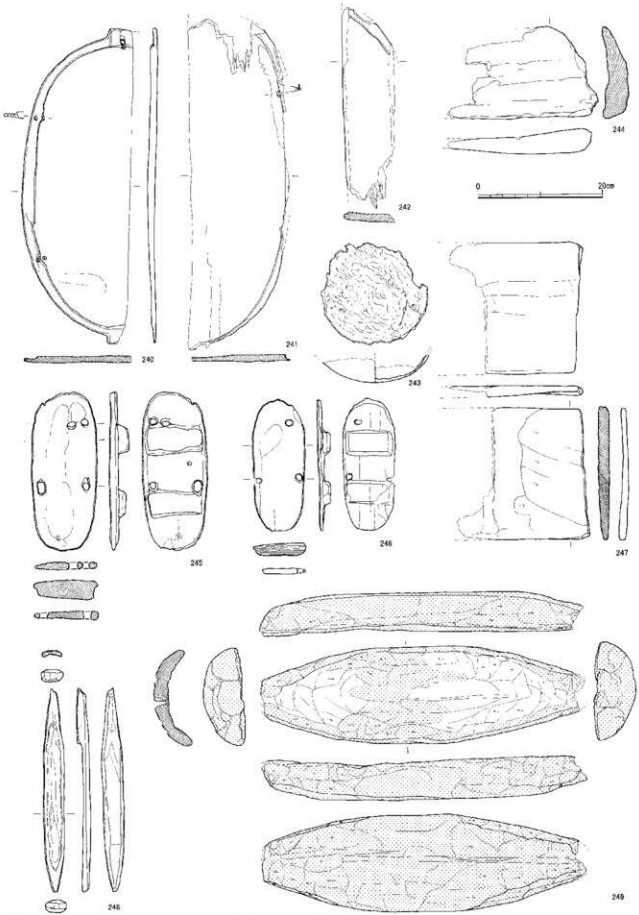
工具(232 ～ 233)　鎌の柄であるが、いずれも杭に転用されており尖端が折損している。

編み具(234 ～ 237)　234は高機部材「経返し具」と推測されるもので、糸による擦痕がある。[7] 不明材・残材とした262 ～ 263も、織機の可能性がある。

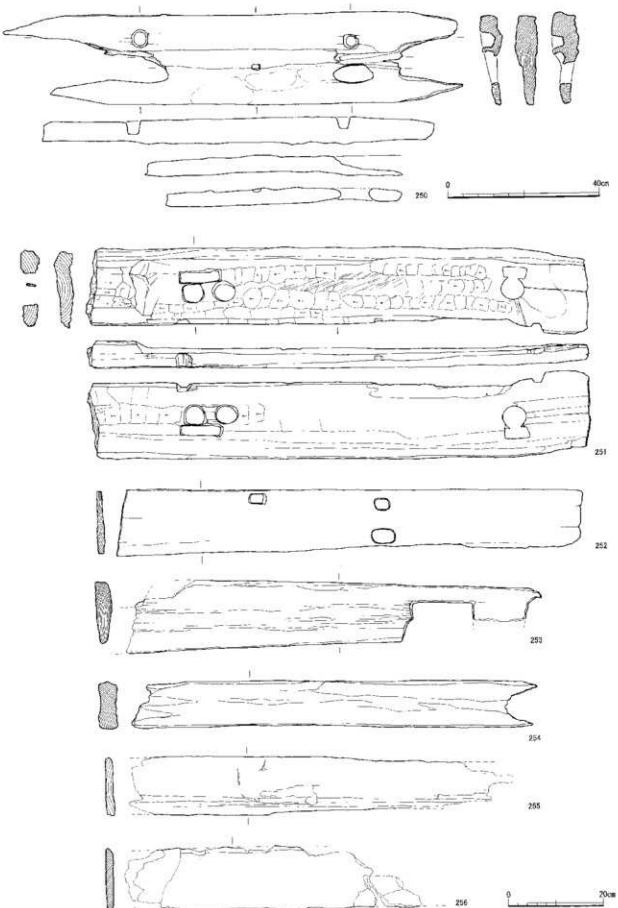
第Ⅳ－25図　田丸道遺跡出土遺物実測図(8)
写真Ⅳ－１　木札の赤外線写真



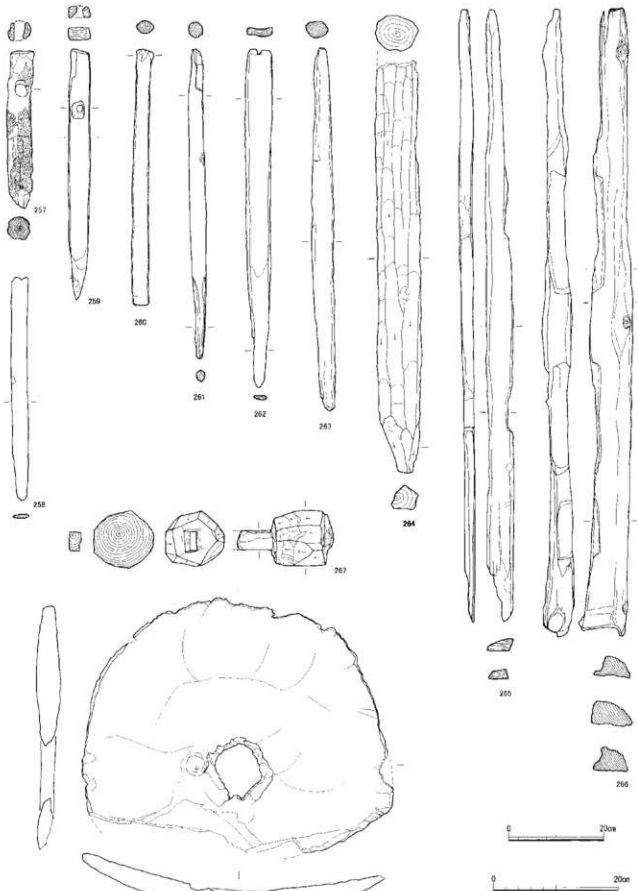
第Ⅳ－26図　田丸道遺跡出土遺物実測図(9)…ＳＲ15（１：６）



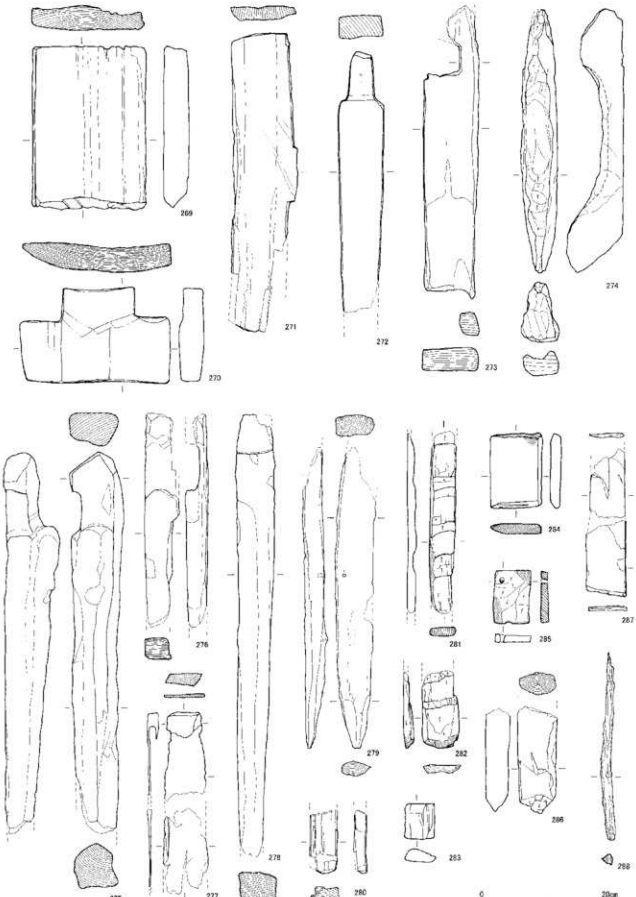
第Ⅳ－27図　田丸道遺跡出土遺物実測図(10)…ＳＲ15（１：６）



第Ⅳ－28図　田丸道遺跡出土遺物実測図(11)…ＳＲ15（250は１：10、その他１：８）

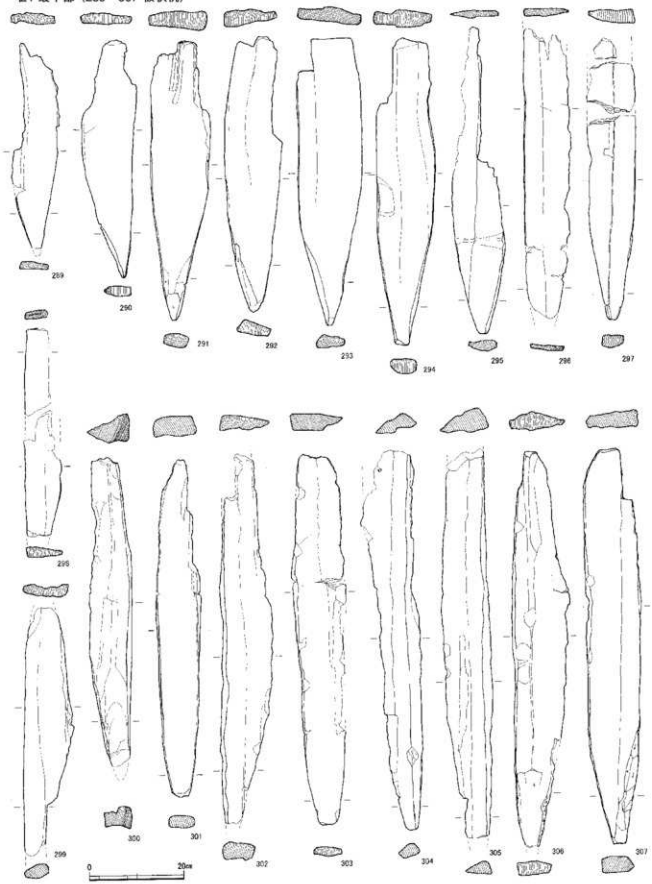


第Ⅳ－29図　田丸道遺跡出土遺物実測図(12)…ＳＲ15（265～266は１：８、その他１：６）

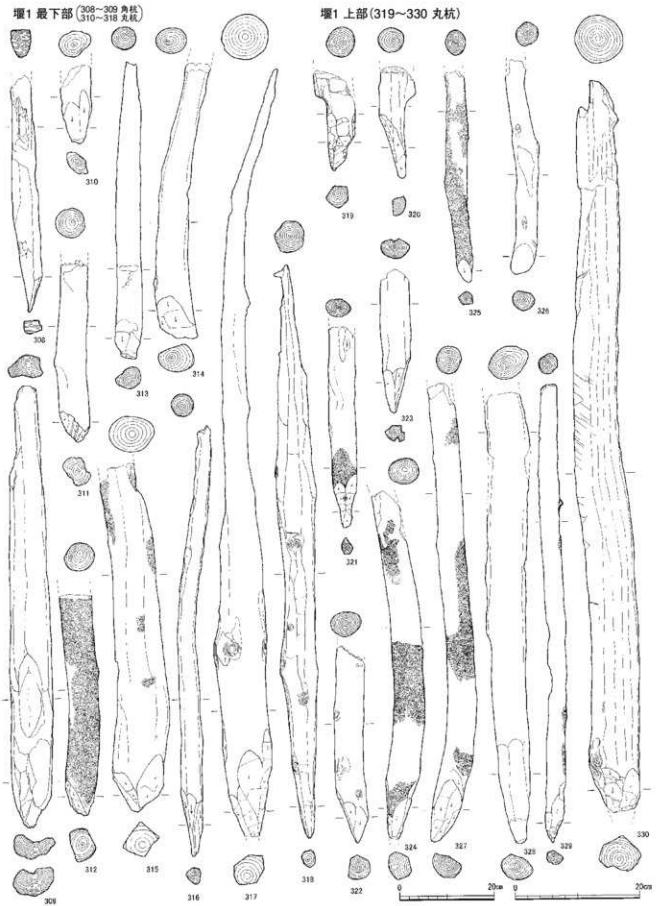


第Ⅳ－30図　田丸道遺跡出土遺物実測図(12)…ＳＲ15（１：６）

堰1 最下部（289～307 板状杭）

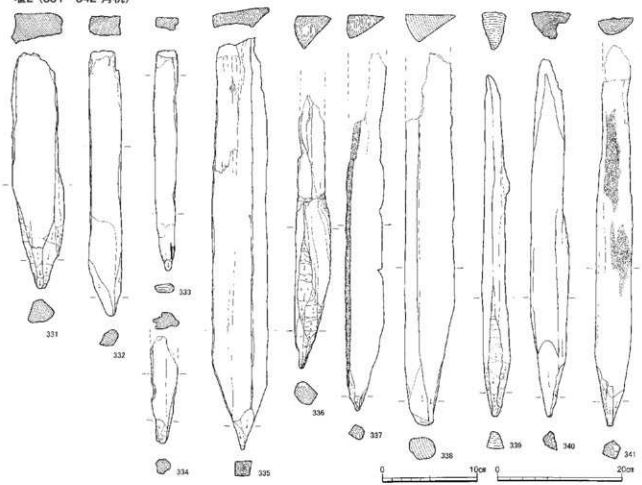


第Ⅳ－31図　田丸道遺跡出土遺物実測図(14)…ＳＲ15（１：８）



第Ⅳ－32図　田丸道遺跡出土遺物実測図(15)…ＳＲ15（390は１：８、その他１：６）

堰2（331～342 角杭）



第Ⅳ－33図　田丸道遺跡出土遺物実測図(16)…ＳＲ15（331 ～ 334は１：６、その他１：８）

236～237は木錘で「木器集成」で５類とされるもの。

運搬具(238 ～ 239)　238は轆である。239は櫓の左側滑走台で、芯持ち材を利用する。内面にあたる側は平坦になるよう調整され、下面は曲面を呈する。

容器(240 ～ 242)　240 ～ 242は曲物底板である。大型品(240 ～ 241)は、桜の綴じ皮が残存している。243は樹皮を利用した容器と考えられ、底部のみ残存する。244はアスナロを用いた材である。臼とは木取りが異なり、一木鋤の場合はカシを用いるため、大型の槽や盤の未製品と想定される。

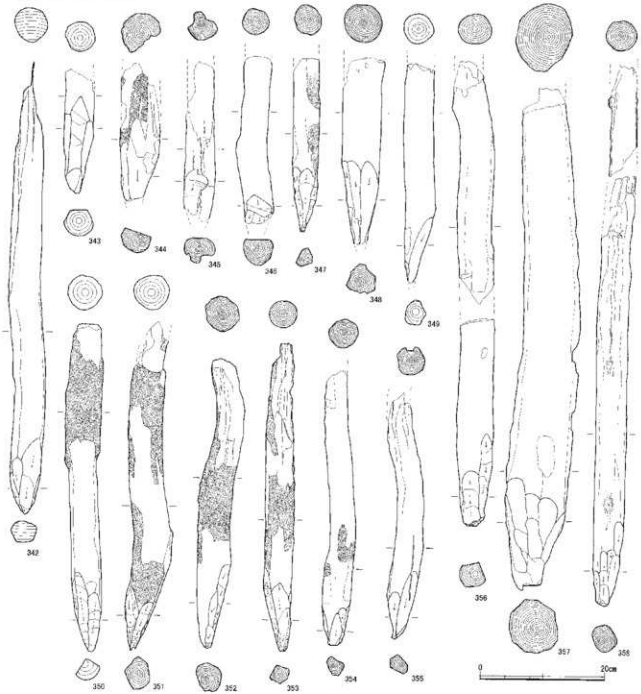
装身具(245 ～ 246)　右足用の下駄で、245は親指の踏み込み痕が明瞭に残る。

祭祀具(248 ～ 249)　舟形木製品が２点出土した。248は32cmの小型品。アスナロ材を用い側面を精巧に作ったもので、船尾などの表現がみられる。一方、51cmの大型品(249)はコウヤマキの丸太材の中心部分をくり抜いたもので、全面に焼けが残る。

建築部材(250～256、264～268)　250 ～ 251は高床倉庫の扉口に据え置かれる材である。250は観音扉用の蹴放し材で、両側端部に柱固定用の両つの造り出しが存在している。材のほぼ中央にある方形状にくぼんだ軸釣穴を中心として、縦壁板(方立)をはめ込むための円形状のくぼみ・溝・楕円形の穿孔が一対ある。扉口部分の柱間は50cm、1枚約25cmの扉板が想定される。木取りは柾目ではなく、細い木の端を利用した板目材で、粗い造りになっている。251は楣材で、柱間は約60cm。扉の振れ止め機能を持つ突起は材側面部にあり、断面はＬ字状を呈する。[8]

264は丸太材を用いた面取り束柱である。杭に転用されているため両端は欠損しているが、全面に手斧による丁寧な削りが施される。267はほぞを持つ五画柱の部材で側面は丁寧に削られており、天地は凸状と考えられるが、用途は不明である。268はクスノキの樹皮を用いており、鼠返しと考えられる。

堰2（343～358 丸杭）

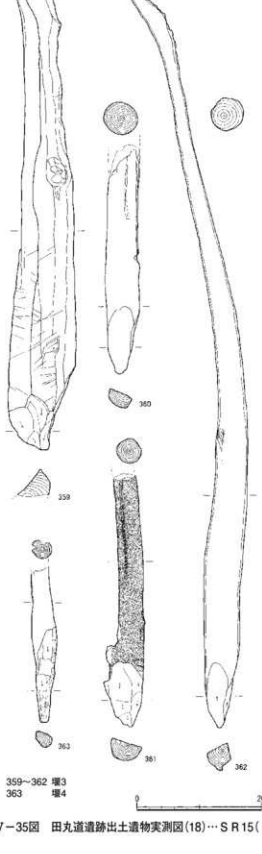


第Ⅳ－34図　田丸道遺跡出土遺物実測図(17)…ＳＲ15（1：6）

不明品・残材(257～263、269～287)　275は、断面形態から校倉造りなどの壁板材か。288は火付け木。

堰１出土 杭(289 ～ 330)　289 ～ 307は堰１最下部出土の板状杭で、堰の基部を構成していたものである。樹種は289以外全てコナラで、いくつかは木の捻れや節が同一であることから、同時期に伐採・加工されたと推測される。308 ～ 309は堰１最下部出土角杭である。310 ～ 318は堰１最下部出土の丸杭で、芯持ち丸太材。315・318は横木の可能性がある。319 ～ 330は堰１上部出土の丸杭で、樹皮を残したまま使用されているものが多い。

堰２出土 杭(331 ～ 358)　331 ～ 342は角杭で、ヒノキなどの建築部材を転用した可能性が高い。蜜柑割の杭は、堰２の北側に集中しており、樹皮が残るものが散見される。342は断面が円形状の辺材である。343 ～ 358は丸杭で、芯持ち丸太材である。径



第Ⅳ－35図　田丸道遺跡出土遺物実測図(18)…ＳＲ15(１:６)

の小さいものは樹皮が残っており、これらは堰２北側で蜜柑割材の合間を縫うように刺さっていたものである。大型品(256 ～ 258)は堰２の南北両端で出土しており、小型品とは用途が異なる。

堰３出土 杭(359 ～ 362) 359は側面に面をもち擦痕があることから、転用材の可能性がある。

堰４出土 杭(363)　堰４出土の丸杭で、自然木を用いた大型品である。

[註]

(1)編年・時期に関しては、以下の編年を参考にした。

・上村安生「伊勢・伊賀地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年)

・田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ、1966年)、田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1980年)

・斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』(2001年)

・古代の土器研究会編『古代の土器１　都域の土器集成』(1992年)、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(1976年)

・大川勝宏「斎宮の黒色土器―供膳形態を中心に―」(『斎宮歴史博物館　研究紀要』２　斎宮歴史博物館1993年)

・伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」(『三重県史』資料編 考古２、2008年)

・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター、1994年)

・藤澤良祐ほか『愛知県史』別編窯業２中世・近世　瀬戸(2007年)

・柴垣勇夫ほか2012『愛知県史』別編窯業３　中世・近世常滑系(2012年)

(2)三重県埋蔵文化財センター『波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告』(1992年)

(3)伊藤正人「耳皿ノート」(『中近世土器の基礎研究ＸＶ』日本中世土器研究会、2000年)

(4)永井宏幸「条痕紋系土器様式の研究」(『研究紀要』愛知県埋蔵文化財センター、2007年)

(5)三重県教育委員会「東庄内Ｂ遺跡」『日本道路公団　東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(1970年)、鈴鹿市考古博物館『須賀遺跡(第５次)』(2012年)

(6)木製品の器種名に関しては、以下を参考にした。

・上原真人『木器集成図録　近畿原始篇(解説)』(奈良文化財研究所、1993年)

・三重県埋蔵文化財センター『六大Ａ遺跡発掘調査報告(木製品編)』(2002年)

(7)穂積裕昌「古墳時代機織研究の新展開」(『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター、2008年)

(8)穂積裕昌「大溝出土の木製品について」(『松ノ木遺跡・森山遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年)、松岡良憲「古墳時代以前の扉口装置」(『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会、1997年)

第Ⅳ－２表　田丸道道跡出土遺物観察表(1)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	26-06	土師器　皿	N８	SD1	(口)8.6 (高)2.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 2/12	
2	29-02	土師器　皿	N８	SD1	(口)9.2 (高)1.9	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	体部内外面摩滅
3	28-04	土師器　蓋	N８	SD1	(口)15.4	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
4	27-03	土師器　鍋	N８	SD1	(口)29.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	煤付着
5	27-02	土師器　羽釜	N８	SD1	(口)24.0	外:ハケメ→鍔部分ヨコナデ 内:ナデ→オサエ・工具痕	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
6	27-01	土師器　羽釜	N８	SD1	(鍔)46.0	外:ハケメ→鍔部分ヨコナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	ツバ部 2/12	
7	29-03	陶器 (古瀬戸)	丸梅	N８	SD1	(口)9.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	素地:5Y5/7/1 釉:オリーブ黄5Y6/3	口縁部 2/12	古瀬戸産 口縁部に漆による補修痕あり
8	26-07	陶器 (山茶椀)	椀	N８	SD1	(底)7.0	外:回転ナデ,底部糸切り→高台貼付 付後ナデ 内:回転ナデ	外:灰黄2.5Y6/2 内:灰白N7/0	底部 3/12	第５型式,知多・猿投産 底部モミガラ痕あり
9	28-03	陶器 (常滑焼)	宜	N８	SD1	(口)15.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:灰白5Y7/1 内:赤灰2.5YR4/1	口縁部 3/12	常滑産
10	28-02	陶器 (常滑焼)	ねり鉢	N８	SD1	(底)13.6	外:オサエ 内:ナデ(研磨あり)	外:にぶ赤橙2.5YR5/3 内:明褐6.5YR7/2	底部 2/12	常滑産
11	69-01	金属製品	ヤリガンナ	N８	SD1	(長)4.65 (幅)1.5	－	－	－	重量:5.64g 厚:8-0.6
12	45-02	石製品	砥頭車	N４	SK2	(底)4.2 (高)2.0	孔径0.8	－	－	ほぼ 完形	頭径1.9-重量:47.55g 滑石製・磨側なし
13	30-03	土師器　小皿	N４	SK2 上層	(口)7.2	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
14	30-02	土師器　小皿	N４	SK2 上層	(口)10.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12	
15	30-01	土師器　茶釜 竈	N４	SK2 上層	(口)16.0 (高)2.1	外:ヨコナデ→つまみ部分オサエ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	室町後期
16	30-07	土師器　甕	N16-20	SD3	(脚台)10.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	外:浅黄橙2.5YR8/4 内:にぶい橙5YR7/4	脚部 2/12	
17	30-06	土師器　甕	N16-20	SD3	(口)14.6	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	密	暗灰7.5YR4/1	口縁部 1/12	
18	30-04	土師器　鍋	N16-20	SD3 上層	(口)28.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・オサエ	やや密	外:浅黄橙10YR8/4 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 15/12	
19	30-05	土師器　鍋	N16-20	SD3 上面	(口)29.6	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・オサエ・工具痕あり	密	外:オリーブ黒5Y3/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12弱	
20	31-04	土師器　皿	N４	SK7	(口)9.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
21	31-03	土師器　皿	N４	SK7	(口)11.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
22	31-05	土師器　皿	N４	SK7	(口)12.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
23	31-02	土師器　鍋	N４	SK7	(口)24.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・オサエ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12弱	
24	31-01	土師器　鍋	N４	SK7	(口)32.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12弱	
25	63-03	土師器　小皿	N68-72	SR13 淡黄灰色層	(口)10.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3～4/12	平安後期
26	62-07	陶器 (山茶椀)	椀	N68-72	SR13 灰色粘土	外:回転ナデ→底部糸切り,高台貼付 付後ナデ 内:回転ナデ,研磨	密	灰白5Y7/1	底部 4～5/12	猿投・知多産
27	63-01	陶器 (山茶椀)	椀	N68-72	SR13 灰色粘土	外:回転ナデ→底部糸切り,高台貼付 付後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白7.5Y7/1	底部 4/12	猿投・知多産
28	31-06	青磁	皿	試掘坑 No.1	(底)6.0	外:ヨコナデ→施釉 内:回転ナデ→蓮弁文→施釉	密	素地:5GN6/ 外:灰白7.5Y7/2	底部 5/12	削り出し高台
29	41-05	弥生土器	壺 (口縁)	N108	SR15 下層	外:ヨコナデ→櫛状文・波状文 内:ヨコナデ・オサエ→刺突文	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	弥生且様式後半 口縁部内面に梅鉢刺突文
30	41-06	弥生土器	底 (頸部)	N100	SR15 最下層	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ・シボリメ	粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰褐10YR5/2	頸部 12/12	弥生且様式後半か
31	40-04	弥生土器	壺 (頸部)	N92	SR15第１ 最下層	外:ヨコナデ→ヘラ描き沈線文 内:ナデ→ハケメ→シボリメ	やや密	外:褐灰黄2.5Y5/2 内:黄灰2.5Y4/1	頸部 2/12	弥生中期 頸武内面黒ｲ付着
32	41-03	弥生土器	壺 (口縁)	N98	SR15 最下層	外:ヨコナデ→櫛描直線文→刺突文 内:ヨコナデ	粗	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:黒5Y2/1	口縁部 1/12	弥生中期,口縁部の刺突文 (梅鉢)は7本/0.8cm
33	40-06	弥生土器	壺 (口縁)	N94	SR15 最下層	外:ヨコナデ→刺突文 内:ヨコナデ・ナデ	粗	にぶい黄橙10YR5/3	口縁部 3/12	弥生中期
34	42-01	土師器　壺	N102	SR15 最下層	(底)5.3 (体)21.1	外:ヨコナデ→ミガキ→沈線 内:ヨコナデ→ハケメ・オサエ	密	外:にぶい橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	体部 完形	弥生中期
35	41-01	弥生土器　壺	N96	SR15 最下層	(脚裾)11.2	外:ヨコナデ→四線文 内:ヨコナデ	粗	にぶい黄橙10YR6/4	脚部 2/12	弥生中期(Ｖ様式)台付然頭壺 円形透かし１ヵ所
36	39-02	弥生土器	壺 (底部)	N88	SR15 最下層	外:ヨコナデ→ヤリガンナ→ハケメ 内:ナデ→底部工具痕	粗	外:黄灰2.5Y5/1 内:灰黄褐10YR6/2	底部 1/12	堀南くぼみ出土 体部外面付着
37	39-01	弥生土器	壺 (底部)	N88	SR15 最下層	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR6/2 内:黒褐2.5Y3/1	底部 1/12	堀南くぼみ出土 体部内面に焦げ付着
38	40-07	弥生土器	壺 (底部)	N96	SR15 最下層	外:ヨコナデ・ナデ 内:ナデ→ハケメ	粗	外:オリーブ黒5Y3/1 内:5GY5/1	底部 3/12	
39	39-04	弥生土器	壺 (底部)	N88	SR15 最下層	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ・オサエ	やや粗	灰黄褐10YR5/2	底部 9/12	堀南くぼみ出土 体部外面付着
40	39-06	弥生土器	壺 (底部)	N96	SR15第１ 最下層	外:ナデ 内:ナデ	粗	灰黄褐10YR6/2	底部 4/12	

第Ⅳ－３表　田丸道道跡出土遺物観察表(2)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
41	41-02	弥生土器	壺（底部）	N96	SR15 最下層	(底)4.0	粗	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:黒褐10YR3/1	底部 9/12	弥生後期
42	39-05	弥生土器	壺（底部）	N88	SR15 最下層	(底)5.0	粗	外:ナデ 内:ナデ	底部 12/12	弥生後期、壁面くぼみ出土・体部外面煤付着
43	39-03	弥生土器	壺（底部）	N88	SR15 最下層	(底)7.0	粗	外:ナデ 内:ナデ	底部 2/12	弥生後期 壁面くぼみ出土
44	41-04	弥生土器	台付壺（台部）	N108	SR15 最下層	(脚台)7.0	やや粗	外:ナデ 内:ナデ	台部 3/12	弥生中期
45	39-08	弥生土器	台付壺（脚台部）	N92	SR15層1最下層	(脚上端)3.5～4.0	粗	外:ナデ 内:ナデ	脚台部 12/12	弥生後期
46	40-05	弥生土器	甕（口縁）	N92	SR15層1最下層	(口)11.6	やや粗	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	口縁部 1/12	弥生中期～後期
47	40-02	弥生土器	壺（口縁）	N92	SR15層1最下層	(口)15.2	やや粗	外:ヨコナデ→ミガキ・オサエ 内:ヨコナデ	口縁部 1/12	弥生後期前半
48	40-03	弥生土器	壺（頸部）	N92	SR15層1最下層	－	やや粗	外:ナデ→櫛描直線文・刺突文 内:ナデ・オサエ	体部小片	弥生後期・櫛描直線文は1条7本、櫛描による刺突は5本
49	42-02	土師器	高坏	N92	SR15 層1下部	(脚柱)4.5	粗	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ・シボリメ	脚部 12/12	弥生後期前半 焼成不良
50	39-07	弥生土器	壺（頸部）	N92	SR15層1最下層	(頸)5.6	粗	外:ヨコナデ→タテミガキ 内:ヨコナデ→ハケメ・シボリメ	頸部 12/12	古墳前期初頭
51	39-09	弥生土器	加工円盤	N92	SR15層1最下層	(底)5.0	やや粗	外:ナデ 内:ナデ	完形	摩滅のため調整不明瞭
52	35-07	土師器	壺	N108	SR15 下層	(口)18.6	やや密	外:ハケメ 内:摩滅	口縁部 1/12	
53	36-01	土師器	台付甕	N96	SR15 下層	(口)15.0	やや密	外:ハケメ 内:ケズリ・オサエ	口縁部 1/12	S字状口縁変D類 焼成やや不良
54	35-05	土師器	甕	N108	SR15 下層	(頸)13.6	密	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	口縁部 2/12	
55	34-05	土師器	甕	N108	SR15 層2	(口)17.8	密	外:ナデ 内:ナデ→ハケメ	口縁部 2/12	明褐灰7.5YR7/1
56	34-08	土師器	甕	N96	SR15 層2	(口)20.2	密	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	口縁部 2/12弱	
57	37-01	土師器	甕	N100	SR15 層2	(口)20.2	密	外:ナデ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	口縁部 3/12強	
58	43-01	土師器	長胴甕	N92	SR15 層1上部	(体)24.5	密	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→板ナデ・オサエ	体部 9/12	
59	36-04	土師器	長胴甕	N100	SR15 層1上部	－	やや密	外:ハケメ→ナデ 内:ハケメ	底部完存	外面煤付着
60	36-02	土師器	甕	N96	SR15 層1上部	(底)4.6	密	外:ハケメ 内:板ナデ	底部 12/12	
61	36-03	土師器	椀	N92	SR15 層1上部	(口)12.3	密	外:天井部ハケメ・口縁部ヨコナデ 内:天井部ハケメ・口縁部ヨコナデ	口縁部 6/12	
62	35-03	土師器	椀	N104	SR15 下層	(口)12.6	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	灰白2.5Y7/1
63	34-06	土師器	椀	N96	SR15 下層	(口)12.0	密	外:ヨコナデ→オサエ・ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	口縁部 2/12	
64	37-02	土師器	把手付鉢	N92	SR15 下層	(体)25.0	密	外:ハケメ→ハケメ 内:オサエ・ナデ	把手のみ	褐灰10YR4/1
65	34-07	須恵器	高坏	N108	SR15 下層	(脚柱)10.4	やや密	外:回転ナデ→カキメ 内:回転ナデ	脚部 2/12	褐灰2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2
66	38-01	須恵器	甕	N108	SR15 下層	(口)20.2 (高)45.0	密	外:回転ナデ→タタキ→カキメ 内:回転ナデ→同心円状タタキ	口縁部 6/12	内:灰N5/0～灰N4/0 外:灰N5/0～灰黄5YR5/2
67	32-02	土師器	坏	N104	SR15 上層	(口)15.4 (高)3.2	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ→工具痕	口縁部 5/12	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:浅黄2.5Y7/3
68	32-03	土師器	坏	N104	SR15 上層	(口)12.0 (高)2.7	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 5/12	浅黄2.5Y7/3
69	32-08	土師器	坏	N112	SR15 上層	(口)13.8 (高)3.0	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 5/12	にぶい橙7.5YR7/3
70	32-05	土師器	坏	N112	SR15 上層	(口)13.8 (高)3.0	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	にぶい黄橙10YR6/3
71	33-01	土師器	坏	N112	SR15 上層	(口)13.8	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	にぶい橙7.5YR7/4
72	32-07	土師器	坏	N112	SR15 上層	(口)13.8 (高)2.9	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 5/12	灰黄2.5Y7/2
73	32-06	土師器	坏	N112	SR15 上層	(口)13.8 (高)3.0	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	灰黄2.5Y7/2
74	35-04	土師器	坏	N116	SR15 上層	(口)12.4 (高)2.9	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:・ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	にぶい黄橙10YR7/2
75	35-02	土師器	坏	N116	SR15 上層	(口)13.0	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:・ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 1/12	灰白10YR8/2 外面煤付着
76	32-01	土師器	坏	N100	SR15 上層	(口)13.1 (高)3.55	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ→工具痕	口縁部 6/12	にぶい黄橙10YR7/3
77	35-01	土師器	坏	N116	SR15 上層	(口)14.0 (高)2.7	やや密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 4/12	灰白2.5Y7/1
78	33-05	土師器	皿	N92	SR15 上層	(口)14.5 (高)2.15	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 2/12	にぶい黄橙10YR7/4
79	33-02	土師器	皿	N112	SR15 上層	(口)16.4 (高)1.5	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 1/12強	浅黄橙7.5YR8/4
80	33-03	土師器	皿	N112	SR15 上層	(口)23.0 (高)1.4	密	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	口縁部 1～2/12	浅黄橙7.5YR8/4
81	33-07	土師器	甕	N132	SR15 上層	(口)15.6	密	外:摩滅(ハケメか) 内:ハケメ	口縁部 2～3/12	外:浅黄橙10YR8/4 内:にぶい黄橙10YR7/3

第Ⅳ－４表　田丸道道跡出土遺物観察表(3)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
82	3204	土師器　小皿	N100	SR15上層	(口)11.0	外:ナデ.ユナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ.口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:淡黄2.5Y8/3	口縁部12/12	
83	5605	緑釉陶器　椀	N96	SR15上層	(口)9.6	外:回転ナデ→ミガキ？→施釉 内:回転ナデ→ミガキ？→施釉	密	素地:N7.5Y5/1 釉:緑	口縁部2/12	硬胎、美濃産
84	3304	灰釉陶器　椀	N112	SR15上層	(口)11.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白7.5Y7/1	口縁部2/12	知多・猿投産 輪薬なし
85	3401	灰釉陶器　椀	N96	SR15上層	(高台)8.4	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	灰白5Y7/1	高台部6/12	猿投・知多産、H72型式 輪薬なし、内面に煤付着
86	3403	灰釉陶器　皿	N116	SR15上層	(高台)8.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部2/12	知多・猿投産、O53型式 輪薬なし
87	3404	灰釉陶器　皿	N128	SR15上層	(高台)6.4	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部3/12	知多・猿投産、O53型式 輪薬あり
88	6201	土師器　小型椀	N180-184	SK18	(口)12.4	外:ナデ.ユナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR5/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部5/12	
89	5704	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)14.0	外:ハケメ・ヨコナデ 内:ハケメ・ヨコナデ	やや粗	浅黄2.5Y7/4	口縁部1/12	
90	5801	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)18.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	明黄褐10YR7/6	口縁部11/12	
91	5701	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)15.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部4/12	
92	5702	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)15.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	
93	5503	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)16.8	外:摩滅 内:摩滅	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部3/12	
94	5905	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)17.6	外:ハケメ.オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部3/12弱	
95	5703	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)17.8	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ.オサエ 内:ハケメ	やや粗	浅黄橙10YR8/4	口縁部3/12	
96	5804	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)20.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12	
97	5802	土師器　奏	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)25.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR5/4	口縁部1/12	
98	5502	土師器　長胴甕	N180-184	SK18	(体)17.4	外:ハケメ 内:板ナデ	やや密	灰白10YR8/2	胴部完形	
99	5803	土師器　把手付甕	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)32.4	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	
100	5705	土師器　把手付鍋	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)36.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ.オサエ	密	外:にぶい黄橙10YR5/3 内:明黄褐10YR7/6	口縁部1/12	残存率悪く、双方に把手がつくかは不明
101	6001	土師器　小型鍋	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)13.4	外:ナデ.オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12	把手付
102	5601	土師器　把手	N180-184	SK18 撹乱黄色層	－	外:ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	把手のみ	瓶小把手付鍋の把手
103	5902	土師器　高坏(脚部)	N180-184	SK18 撹乱黄色層	－	外:板ナデ 内:シボリメ	やや密	赤橙25YR4/8	脚部のみ	
104	5901	土師器　高坏(脚部)	N180-184	SK18 撹乱黄色層	－	外:摩滅 内:シボリメ	密	にぶい黄橙7/4	脚部のみ	
105	5903	土師器　高坏(脚部)	N180-184	SK18 撹乱黄色層	－	外:板ナデ 内:シボリメ	密	明赤褐2.5YR5/6	脚部のみ	
106	5904	土師器　高坏(脚部)	N180-184	SK18 撹乱黄色層	－	外:ナデ 内:板ナデ.ケズリ	やや密	にぶい橙5YR7/4	脚部のみ	
107	4406	須恵器　高坏(脚部)	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(底)9.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	底部11/12	方形3方透し T K245～M T15型式併行期
108	4501	須恵器　無頸壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)7.55 (高)8.9	外:回転ナデ→回転ケズリ→沈線・カキメ 内:回転ナデ	密	灰N6/1	口縁部11/12	6世紀後半～7世紀前半 T K209型式併行期
109	5504	須恵器　壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(底)6.0 (頸)10.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ→ナデ	密	灰白2.5Y7/1	底部9/12	M T15～T K209型式併行期
110	6107	須恵器　壺	N180-184	SK18	(口)15.2	外:回転ナデ→ヘラ記号 内:回転ナデ	粗	外:灰N5/1 内:灰10Y6/1	口縁部2～3/12	ヘラ記号・自然釉あり T K217型式片相併行期か
111	6004	須恵器　壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(底)3.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗	灰黄2.5Y7/2	底部12/12	
112	5805	須恵器　壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)13.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰5Y5/1	口縁部1/12	M T15型式併行期頃か
113	4401	須恵器　壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)11.2 (高)3.3	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰N5/0 内:灰N6/0	口縁部11/12	T K217型式併行期
114	4403	須恵器　壺	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)12.0 (高)3.8	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部11/12	T K217型式併行期
115	4402	須恵器　坏身	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)10.4 (高)4.2	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部8/12	受部径12.2 T K217型式併行期
116	4404	須恵器　坏身	N180-184	SK18	(口)10.6 (高)3.1	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部9/12	受部径12.5、T K217型式併行期 焼成不良
117	6002	須恵器　坏身	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)10.6	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ・ヘラ切り 内:回転ナデ	やや密	灰白5Y7/2	口縁部11/12	T K217型式併行期 焼成不良
118	4405	須恵器　坏身	N180-184	SK18 撹乱黄色層	(口)9.4 (高)3.0	外:回転ナデ→ヘラ切り 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部4/12	受部径11.8 T K217型式併行期
119	6101	土師器　椀	N160	SK20 黒褐色層	(口)13.0	外:オサエ.ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部1～2/12	
120	6105	土師器　椀	N160	SK20 黒褐色層	(底)6.2	外:オサエ.ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	橙7.5YR6/6	底部5/12	

第Ⅳ－５表　田丸道遺跡出土遺物観察表(4)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
121	61-06	土師器	高坏(坏部)	N160	SK30 黒褐色層	(口)11.0	外:ナデ→摩滅 内:摩滅	やや密	に赤い橙7.5YR7/4	口縁部2～3/12
122	62-03	土師器	甕	N172	SK21 黒褐色層	(口)17.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外:に赤い橙2.5YR6/4 内:灰褐7.5YR4/2	口縁部3/12
123	62-05	須恵器	坏蓋	N172	SK21 黒褐色層	(口)13.0	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	5Y N5/1	口縁部片
124	65-04	土師器	壺	N168	SK28 (口)22.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:褐10YR4/6 内:黄褐10YR5/6	口縁部1/12	T K10型式併行期？
125	65-03	土師器	甕	N168	SK28 黒褐色層	(口)22.0	外:ヨコナデ→ハケメ・オサエ 内:ナデ→口縁部ハケメのちヨコナデ	密	に赤い黄褐10YR5/4	口縁部1/12
126	65-02	土師器	甕	N168	SK28 黒褐色層	(口)16.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:に赤い橙7.5YR6/4 内:褐灰10YR4/1	口縁部1/12	煤付着
127	64-05	須恵器	高坏(坏)	N168	SK28 黒褐色層	(口)11.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:5Y N5/0 内:5Y N6/0	口縁部2/12	自然釉付着
128	65-01	須恵器	壺	N168	SK28 黒褐色層	(底)13.3 (高)4.5	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ→回転ヘラケズリ	密	5Y N6/0	底部8/12	M T15型式併行期
129	66-01	石製品	叩き石	N168	SK28 黒褐色層	(長)10.0 (厚)2.8	敲打痕あり 先端ケズリ	－	－	－	残存幅4.0・重量:150g
130	61-04	土師器	甕	N168	SK31	(口)25.8	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	やや粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:に赤い黄橙10YR7/3	口縁部1/12	
131	61-03	須恵器	平瓶	N180	SK33	(口)7.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗	5Y 5/1	口縁部完形	
132	65-05	須恵器	坏身	N184	SK38 褐灰色層	(口)12.0 (径)14.0	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	5Y N6/0	口縁部1/12	M T15型式併行期
133	64-01	土師器	甕	N156	SK34 (口)14.0	外:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	外:に赤い黄橙10YR7/4 内:に赤い黄橙10YR7/4	口縁部1/12	
134	64-03	土師器	甕(脚台)	N156	SK34 黒褐色層	(脚)9.4	外:ヨコナデ→ハケメ 内:板ナデ→オサエ	密	に赤い黄橙10YR6/4	底部1～2/12	
135	64-04	土師器	高坏(脚部)	N156	SK34 黒褐色層	(脚)11.2	外:板ナデ→粗雑ヨコナデ 内:シボリ上→ケズリ	密	橙5YR6/6	底部10/12	穿孔は1ヵ所のみ
136	64-02	土師器	高坏(脚部)	N156	SK34 黒褐色層	(脚裾)12.6	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/4	底部2/12	摩滅のため調整不明瞭
137	67-04	土師器	甕	N176	SH40	(口)16.0	外:調整 内:調整	やや密	に赤い黄25Y6/3	口縁部2/12	
138	68-02	土師器	甕	N176	SH40	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	外:に赤い黄橙10YR6/4 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部5/12	煤付着
139	68-03	土師器	甕	N176	SH40	(口)23.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙5YR6/6	口縁部1/12	
140	67-05	土師器	高坏	N176	SH40	(口)24.0	外:摩滅 内:坏部摩滅,脚部シボリ上	やや密	橙5Y R6/6	口縁部4/12	
141	67-01	土師器	高坏	N176	SH40	(口)16.5 (脚裾)10 (高)12.0	外:坏部ヨコナデ→ナデ,脚部シボリ上のちケズリ→粗部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部5/12	摩滅のため調整不明瞭
142	55-01	土師器	甕	N152	Pit1 黒色層	(口)12.7	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ・オサエ・板ナデ	やや粗	褐5Y 7.5YR5/1	口縁部5/12	S字状口縁変D類
143	49-02	土師器	小型鉢	N164	Pit2	(口)13.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ→板ナデ	やや密	外:に赤い橙5YR6/3 内:橙5YR7/6	口縁部1/12	古墳後期
144	52-02	土師器	高坏(坏部)	N156	Pit1	(口)20.8	外:摩滅 内:摩滅	密	橙5YR6/8	口縁部2/12	
145	52-01	土師器	高坏(坏部)	N156	Pit1	－	外:ナデ 内:ナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/6 内:浅黄橙10YR8/4	脚部2/12	
146	49-04	土師器	高坏(脚部)	N156	Pit1	(脚裾)10.0	外:ヨコナデ 内:板ナデ	やや密	外:に赤い橙7.5YR7/4 内:灰白10YR8/2	底部2/12	焼成不良
147	52-03	土師器	高坏(脚部)	N156	Pit1	(脚裾)11.6	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:に赤い黄橙10YR7/3 内:浅黄橙7.5YR8/4	底部4/12	
148	52-04	土師器	高坏(脚部)	N156	Pit1	(脚裾)9.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:に赤い黄橙10YR7/4	底部3/12	
149	52-08	石製品	叩き石	N156	Pit1	(長)12.3 (厚)4.6	一面に研磨痕あり	－	－	－	残存幅6.3
150	49-09	土師器	ミニチュア品	N164	Pit3	(口)5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	に赤い橙7.5YR6/4	口縁部3/12	
151	52-07	土師器	甕	N168	Pit4 黒褐色層	－	外:ナデ→タタキ 内:ナデ	密	に赤い黄橙10YR6/4	体部片のみ	タタキ要撹入品か
152	47-03	土師器	甕	N168	Pit5 黒褐色層	(口)18.2	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	やや密	に赤い褐7.5YR6/3	口縁部1/12	古墳中期
153	48-02	土師器	小型鉢	N176	Pit14	(口)12.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	に赤い褐7.5YR5/4	口縁部2/12	
154	63-04	土師器	坏	N76	SK14 灰色粘土	(口)11.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや粗	外:に赤い橙7.5YR7/4 内:に赤い黄橙10YR7/3	口縁部4/12	
155	62-02	灰釉陶器	小皿	N172	SK21 黒褐色層	(底)6.0	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→研磨	やや密	灰白2.5Y7/1	口縁部4/12	猿投窯O53型式
156	56-07	緑釉陶器	椀	N176-180	SK29 黒褐色層	(口)14.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰白N7/0 釉:褐オリーブ5Y4/3	口縁部1/12	硬質,美濃窯 二次的な被熱痕あり
157	61-02	土師器	椀	N176-180	SK29 黒褐色層	(底)7.5	外:ヨコナデ→高台貼り付け後ナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/1	底部2/12	
158	68-01	土師器	坏	N180	SK37 黒褐色層	(口)16.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ・短文	密	外:に赤い褐7.5YR5/4 内:灰褐7.5YR5/2	口縁部5/12	H-C
159	67-02	土師器	甕	N180	SK37 黒褐色層	(口)22.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/4	口縁部3/12	
160	47-06	灰釉陶器	椀	N140	Pit2	(高台)7.0	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白N7/0	底部12/12	O53型式

第Ⅳ－6表　田丸道道跡出土遺物観察表(5)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
161	5604	縁帯陶器　皿	N168	Pit7 黒褐色層	(口)11.0	外:回転ナデ→ミガキ？→施釉 内:回転ナデ→ミガキ？→施釉	密	素地:灰白2.5Y/1 釉:深緑	口縁部 2/12	硬質、美濃産か
162	4606	灰釉陶器　小椀	N168	Pit7 黒褐色層	(口)11.6	外:回転ナデ→施釉ハケぬり？ 内:回転ナデ	密	灰5Y6/1 (釉)灰黄2.5Y7/2	口縁部 2/12	瀬美産
163	4603	土師器　甕	N168	Pit7 黒褐色層	(口)15.6	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	やや密	灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	
164	5005	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)12.4	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	に.ぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
165	5003	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)12.6	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12強	
166	4803	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層上	(口)12.0	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 2/12	
167	5006	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)12.6	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
168	5007	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)13.5	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
169	5101	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)11.8	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
170	5105	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層	(口)11.2	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
171	4804	土師器　坏	N172	Pit2 黒褐色層上	(口)11.8	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
172	5102	黒色土器　椀	N172	Pit2 黒褐色層	(口)15.6	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	外:に.ぶい橙7.5YR6/3 内:黒75Y2/1	口縁部 1/12	内面黒色 10世紀前半から半ば、V期
173	4908	ロクロ土師器　椀	N172	Pit2 黒褐色層	(高台)7.6	外:ナデ→高台貼付け後ナデ 内:ナデ	やや密	灰白10YR8/2	底部 1/12	
174	4903	ロクロ土師器　椀(底部)	N172	Pit2　黒褐	(高台)7.8	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	橙5YR7/6	底部 4/12	
175	5407	灰釉陶器　椀	N172	Pit2 黒褐色層	(高台)6.0	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:内:灰白5Y7/2	高台部 4/12弱	H72型式
176	4707	灰釉陶器　椀	N172	Pit2 黒褐色層上	(高台)9.4	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	H72型式
177	5608	緑釉陶器　皿(高台)	N172	Pit2 黒褐色層	(高台)6.8	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→ミガキ？→施釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:鶯緑	高台部 2/12	軟質、美濃産
178	5602	緑釉陶器　耳皿	N172	Pit2 黒褐色層	(口)8.4	外:ナデ？→施釉 内:ナデ？→施釉	密	素地:に.ぶい黄橙 釉:雪彩緑47	耳部片	焼成不良 美濃産
179	4806	土師器　鉢	N172	Pit2 黒褐色層上	(口)25.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
180	5103	土師器　大型鉢	N172	Pit2 黒褐色層	(口)30.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	密	灰褐75YR5/2	口縁部 1/12	
181	5308	土師器　甕	N172	Pit2 黒褐色層	(口)13.7	外:ハケメ→オサエ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	外:に.ぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12	
182	6903	金属製品　刀子	N172	Pit2 黒褐色層	(長)7.7 (幅)2.5	－	－	－	－	重量:33.07g、厚み1.3 目釘穴あり
183	6902	金属製品　刀子	N164	Pit6 黒褐色層	(長)13.2 (幅)2.4	－	－	－	－	重量:30.07g、厚み1.35 柄部断角裂。
184	4901	土師器　皿	N172	Pit5 黒褐色層	(口)12.8 (高)2.65	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2～橙7.5YR7/6	口縁部 6/12弱	
185	5301	土師器　皿	N176	Pit6 搬形	(口)9.4 (高)1.2	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1～2/12	
186	4708	ロクロ土師器　椀(底部)	N172	Pit6 黒褐色層	(高台)6.2	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	外:浅黄2.5Y8/3 内:に.ぶい橙7.5YR7/3	底部 2/12	
187	4702	灰釉陶器　小椀	N172	Pit6 黒褐色層	(口)11.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白5Y7/1 (釉)オリーブ灰10Y6/2	口縁部 1/12	鉄粒・知多産 釉薬なし
188	5001	土師器　皿	N176	Pit2 黒褐色層	(口)11.6	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	
189	5008	土師器　皿	N176	Pit2 黒褐色層	(口)11.8	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12強	
190	5002	土師器　皿	N176	Pit2 黒褐色層	(口)12.0 (高)2.0	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12強	
191	4905	土師器　坏	N176	Pit2 黒褐色層	(口)12.2	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:磨耗	やや密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12	
192	4906	土師器　椀	N176	Pit2 黒褐色層	(高台)7.4	外:ナデ→高台貼付け後ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	底部 6/12	
193	5609	緑釉陶器　皿(高台)	N176	Pit2 黒褐色層	(高台)6.0	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→ミガキ→施釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:雪彩緑47	高台部 3/12	軟質、近江産 外面は釉薬によりミガキ不明
194	4907	灰釉陶器　椀	N176	Pit2 黒褐色層	(高台)8.0	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰黄2.5Y6/2	底部 2/12	H72型式
195	5307	灰釉陶器　椀	N176	Pit2 黒褐色層	(口)11.0 (高台)6.3 (高)4.2	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白5Y7/1	口縁部 2/12	H72型式
196	4801	灰釉陶器　鉢	N176	Pit2 黒褐色層	(口)23.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	
197	4701	土師器　甕	N176	Pit3 黒褐色層	(口)23.6	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:に.ぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
198	4602	土師器　甕	N176	Pit3 黒褐色層	(口)16.0	外:ヨコナデ 内:板ナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:に.ぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	
199	4601	灰釉陶器　椀	N176	Pit3 黒褐色層	(口)14.1 (高台)4.2 (高)4.6	外:回転ナデ→底部糸切り→高台貼付け後ナデ→輪花→施釉 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 2/12	輪花あり、瀬美産 内面底部研磨される
200	4805	土師器　坏	N176	Pit8 黒褐色層	(口)17.0	外:ヨコナデ・ナデ:口縁部ヨコナデ 内:ナデ:口縁部ヨコナデ	密	に.ぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	

第Ⅳ－７表　田丸道遺跡出土遺物観察表(6)（土器類等）

報告	実測番号	器種・質等		小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
201	5303	土師器	鉢	N176	Pit8	(口)21.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:板ナデ・ハケメ	密	に赤い黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
202	5603	緑釉陶器	皿	N176	Pit8 黒褐色層	(口)12.0 (高)0.63 (高)2.2	外:回転ナデ→底部へラ切り？・高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:5Y5/1 釉:松葉色8S1	ほぼ完形	軟質、美濃産 高台内面まで釉薬あり 口縁部は意図的な打ち欠きか
203	5302	灰釉陶器	椀	N176	Pit8	(高台)6.1	外:回転ナデ→底部必切・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	灰白2.5Y7/1	高台部 12/12	内面全面に釉薬あり H72型式
204	5104	土師器	甕	N176	Pit11 黒褐色層	(口)28.2	外:ヨコナデ→ハケメ・オサエ 内:ヨコナデ	やや密	淡橙5YR8/3	口縁部 1/12	
205	5304	土師器	椀	N176	Pit11	(高台)6.0	外:摩滅 内:摩滅	密	橙5YR6/8	高台部 2/12	
206	5004	土師器	皿	N176	Pit11 黒褐色層	(口)14.0	外:ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	11世紀後半頃
207	5401	土師器	皿	N176	Pit12 黒褐色層	(口)12.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	平安中期 煤付着
208	5402	土師器	甕	N176	Pit12 黒褐色層	(口)14.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	平安中期 煤付着
209	5306	土師器	皿	N176	Pit13	(口)9.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1～2/12	
210	5305	黒色土器	椀	N176	Pit13	(高台)5.4	外:高台貼り付け後ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:黒N2/0	高台部 3/12	内面黒色
211	5606	緑釉陶器	皿	N180	Pit2	(口)12.0	外:回転ナデ→ミガキ？→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄褐10YR5/2 釉:萌黄色8S2	口縁部 2/12	硬質、美濃産 内面は釉薬でミガキ不明瞭
212	5406	土師器	ミニチュア土器	N184	Pit2 黒褐色層	(口)7.2	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:に赤い橙7.5YR7/4 内:あ灰黄2.5Y7/2	口縁部 1～2/12	
213	2605	土師器	皿	W4-8	SK45	(口)13.0 (高)2.65	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	外:に赤い橙7.5YR6/3 内:灰褐7.5YR6/2	口縁部 3/12	口径任意
214	2608	土師器	皿	W4-8	4区Pit	(口)13.0 (高)2.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/2	口縁部 3/12	
215	2901	土師器	皿	W4-8	Pit1	(口)13.4 (高)2.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白10YR8/1	口縁部 3/12	摩滅のため調整不明瞭
216	2603	土師器	皿	W4-8	4区Pit	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	口径任意
217	2604	土師器	皿	W4-8	4区Pit	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	口径任意
218	2602	土師器	皿	W4-8	4区Pit	(口)13.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
219	2601	土師器	皿	W4-8	4区Pit2	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	に赤い黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
220	4605	弥生土器	厚口鉢	N176	Pit5 黒褐色層	－	外:ナデ→口縁条痕文 内:ナデ・オサエ	粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:褐灰10YR4/1	口縁部 小片	弥生前期末～中期前葉 岩滝式厚口鉢・瓶入品
221	4302	弥生土器	壺	N160	SK20 黒褐層	(胴)14.9	外:ナデ→簾状文 内:摩滅	やや粗	橙2.5YR7/6	胴部 1/12	弥生中期 胴部外面簾状文４条残存
222	4604	弥生土器	壺 (底部)	N164	Pit5	(底)6.2	外:ナデ→工具痕 内:ナデ→板ナデ	やや粗	外:に赤い橙7.5YR5/4 内:褐灰10YR4/1	底部 11/12	弥生中期
223	6206	土師器	壺	N180-184	SK18	(底)3.8	外:ナデ 内:板ナデ	やや粗	外:に赤い黄橙10YR7/4 内:褐灰10YR4/1	底部 11/12	弥生後期～古墳初頭
224	4203	土師器	台部	N180-184	SK18 褐暗褐層	(底)6.0	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケメ→ナデ	やや粗	外:に赤い橙7.5YR7/4 内:オリーブ黒5Y3/1	底部 1/12	弥生後期～古墳初頭
225	5405	土師器	高坏	N184	Pit2 黒褐色層	(口)19.6	外:ミガキ 内:ミガキ	密	灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	弥生後期～古墳初頭
226	5404	土師器	壺	N164	Pit9 黒褐色土	(口)13.6	外:ハケメ→刺突文 内:ハケメ・ヨコナデ	密	外:橙2.5YR7/6 内:に赤い黄橙10YR6/4	口縁部 2/12	弥生後期～古墳初頭、口縁部にヘラ状工具による刺突文(法一石)
227	6302	須恵器	壺	N148	暗褐色層	(底)5.4	外:回転ナデ・オサエ 内:回転ナデ	密	5G5Y6/1	底部 2/12	手持ち高坏の壺の可能性あり 自然釉付着

第Ⅳ－８表　田丸道遺跡出土遺物観察表(7)（木製品）…ＳＲ15出土

報告番号	取上番号	実測番号	器種 大別分類	器種 細別用途・器種	器種 器種・機等	遺構 小地区	遺構 位置	法量(cm) 全長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚さ	木取り等	樹種	特記事項
228	－	009/03	板状	木札	墨書	N96	堀1上部	12.7	1.5	2.5	板目	広葉樹か	墨書あり
229	W26	007/01	農具	耕起具	ナスビ形鋤頭鍬	N104	堀2	31.9	6.8	1.3	柾目割り出し	コナラ属アカガシ亜属	完端折損
230	W119	003/29	農具	耕起具？		N96	堀1 最下部	24.0	6.3	0.9	柾目割り出し	コナラ亜属コナラ節	完端折損
231	W174	002/04	農具	方形柄付田下駄	枠木	N104	堀2 端辺	30.0	4.5	2.7	柾目割り出し	アスナロ属	石後ろ外側柄板か,底面は平坦。完端折損。
232	W34	001/04	工具	鑿の柄	杭に転用	N100	堀2 端辺	25.2	2.8	2.8	柾目割り出し	クリ	完端面化,芯持ち材ではなく辺材を使用,完端折損。
233	W185	001/48	工具	鑿の柄	杭に転用	N104	堀2	22.0	4.5	2.5	柾目割り出し	アカガシ亜属	
234	W11	002/05	編み具	織機		N96	堀1上部	41.3	2.2	2.0	柾目割り出し	ヒノキ属	織機の尖端材 完端折損,側面台形
235	W31	013/01	編み具	織機？		N104	堀2	71.0	2.6	2.9	柾目割り出し	コウヤマキ	糸状の圧痕残る 完端折損
236	W24	002/03	編み具	木錘		N96	堀1上部	12.4	7.1	5.1	半載割り出し	アスナロ属	ハンドバッグ形
237	W44	007/02	編み具	木錘		N100	堀2	12.6	7.0	3.8	半載割り出し	アスナロ属	ハンドバッグ形
238	W58	016/01	運搬具	輦		N96	堀1上部	63.2	31.9	6.2	芯持割り出し	イヌマキ	材屈曲部を利用して製作か
239	W56	016/03	運搬具	橇	滑板	N116	堀3 端辺	80.0	11.5	11.8	芯持割り出し	アスナロ属	左滑走台 底面は加工あり,側面は加工なし
240	W164	001/02	容器	曲物	底板	N96	堀1上部	50.2	12.1	1.1	板目	ヒノキ属	板の縦じ皮残る
241	W45	006/07	容器	曲物	底板	N112	堀3	52.8	15.6	1.2	板目	ヒノキ属	板の縦じ皮残る
242	W20	006/08	容器	曲物	上板	N100	堀2	32.0	8.3	1.3	板目	ヒノキ属	
243	W183	008/01	容器？	刳物		N104	堀2	φ17.0	4.5	0.4	樹皮か	樹皮？	樹皮を使用
244	W28	007/03	容器？	刳物	櫛か盤？	N104	堀2	22.9	14.3	3.7	柾目割り出し	ケヤキ	未製品か 横木取り
245	W21	009/02	装着具	下駄		N104	堀2	25.3	10.5	2.1	板目	コウヤマキ	親指の踏み込み痕あり
246	W170	004/03	装着具	下駄		N92	堀1上部	20.9	8.4	2.0	板目	ヒノキ属	
247	W118	001/03	家具	案	天板	N96	堀1下部	21.0	21.0	1.8	板目	アスナロ属	
248	W113	009/01	祭祀具	形代	舟形	N104	堀2	32.5	3.4	1.9	柾目割り出し	アスナロ属	はぼ定形(両端部欠損)。側面は斜めに削り込まれる。全面焼けあり。
249	W173	001/01	祭祀具	形代	舟形	N92	S015南テラス	51.7	15.5	6.5	半載割り出し	コウヤマキ	はぼ定形 底部を中心に全面が炭化
250	W163	019/01	建築部材	扉口装置	蹴放し材	N96	堀1上部	119.5	24.3	6.0	板目	アスナロ属	柱間44cm
251	W38	013/03	建築部材	扉口装置	柵材	N100	堀2	105.7	17.0	5.0	板目	ヒノキ属	柱間60cm,全面に手斧による丁寧な爪割りを施す。
252	W184	017/06	建築部材	板状	有孔材	N120	堀4	99.3	13.9	1.8	板目	アスナロ属	
253	W10	017/03	建築部材	板状	有孔材	N96	堀1上部	88.0	12.8	3.3	板目	アスナロ属	
254	W12	017/04	建築部材	板状	くりこみ有り	N96	堀1上部	85.5	9.4	3.8	板目	アスナロ属	
255	W30	013/02	建築部材	板状	くぼみ有り	N100	堀2	81.0	12.5	2.0	板目	ヒノキ属	
256	W48	006/01	建築部材	板材		N112	堀3	62.6	13.3	1.7	追柾目	シオジ類	腐食著しい
257	W94	011/04	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N104	堀2	25.3	径3.8	－	芯持割り出し	不明(広葉樹)	
258	W35	002/06	不明品・残材	棒状		N104	堀2	38.5	2.6	0.7	柾目割り出し	スギ	
259	W52	006/05	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N112	堀3	40.1	3.8	2.1	板目	不明 (スギかヒノキ)	
260	W116	024/01	不明品・残材	棒状		N96	堀1上部	54.3	径2.6	－	柾目割り出し	スギ	一部炭化
261	W7	002/09	不明品・残材	棒状	杭に転用	N96	堀1上部	49.5	径3.4	－	柾目割り出し	コウヤマキ	
262	W15	017/02	不明品・残材	棒状	杭に転用	N96	堀1上部	53.7	4.2	2.0	板目	コウヤマキ	編み具か？
263	W47	015/04	不明品・残材	棒状	杭に転用	N112	堀3	58.0	3.7	2.6	柾目割り出し	ヒノキ属	編み具か？
264	W3	017/01	建築部材	扉取束柱	杭に転用	N96	堀1上部	65.6	6.7	6.6	芯持割り出し	クヌギ節	全面に手斧による丁寧な爪割りを施す
265	W32	013/04	建築部材	板状	くりこみ有り	N100	堀2	129.0	5.6	2.5	柾目割り出し	カヤ	くりこみ2カ所
266	W53	024/03	建築部材	板状	くりこみ有り	N116	堀3	132.2	7.7	9.2	四分割割り出し	モミ属	
267	W59	004/04	建築部材？	五角柱部材	ほぞ有り	N96	堀1上部	15.5	8.9	9.4	芯持割り出し	モミ属	天地は凸状か,ケズリの方向は下から上,はぞ部分の尖端欠損。

第Ⅳ－９表　田丸道遺跡出土遺物観察表(8)（木製品）…ＳＲ15出土

報告番号	取上番号	実測番号	器種 大別分類	器種 細別用途・器種	器種 器種・備考	遺構 小地区	遺構 位置	法量(cm) 全長	法量(cm) 幅	法量(cm) 厚さ	木取り等	樹種	特記事項
268	W60	025-01	建築部材？	弦巻し？	有孔材	N96	層1上部	(49.0	40.0	9.2	樹皮か	クスノキ	高さ80
269	W181	006-02	不明品・残材	板状		N96	層1最下部	26.2	18.3	4.0	板目	ヒノキ属	
270	W23	002-10	不明品・残材	板状		N96	層1上部	15.4	23.8	4.0	板目	ヒノキ属	
271	W14	006-04	不明品・残材	板状		N96	層1上部	48.0	10.3	2.3	柾目	コナラ属アカガシ亜属	
272	W46	006-06	建築部材	板状	ほぞ有り	N112	層3	40.0	7.1	37	割材削り出し	ヒノキ属	
273	W72	016-04	建築部材？	板状	有孔材	N96	層1上部	46.7	8.9	37	板目	ヒノキ属	
274	W51	001-05	不明品・残材	板状	くぼみ有り	N116	層3	42.0	6.0	7.2	割材削り出し	スギ	焼けあり。奇形木製品の未製品の可能性あり。
275	W66	015-05	建築部材？	板状	樋板材か	N96	層1上部	61.3	8.0	8.5	四分割削り出し	クリ	校倉造りの構造材か
276	W22	005-01	不明品・残材	棒状		N104	層2	31.1	3.6	5.6	板目	針葉樹（ヒノキ？）	
277	W149	015-02	不明品・残材	板状		N96	層1下部	27.8	7.2	1.7	割材削り出し	キハダ	北側出土
278	W104	015-06	不明品・残材	板状	段あり 杭に転用	N100	層2	70.8	6.0	5.5	割材削り出し	シイ類	
279	W4	003-05	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N96	層1上部	63.5	径7.9	－	半截削り出し	クリ	
280	W182	001-07	不明品・残材	板状	段あり	N100	層2	10.0	4.4	2.0	板目	ヒノキ属	
281	W57	006-03	建築部材？	板状		N104	層2	28.0	3.9	1.5	柾目	コウヤマキ	一部炭化 二次加工あり？
282	W40	001-06	不明品・残材	板状		N104	層2	12.3	5.9	1.7	板目	不明（スギかヒノキ）	
283	W179	005-14	不明品・残材	板状		N96	層1上部	5.7	(5.0)	2.1	割材削り出し	コウヤマキ	
284	W177	005-12	不明品・残材	板状		N116	層4	12.0	8.1	1.8	割材削り出し	ヒノキ属	
285	W178	005-13	不明品・残材	板状	有孔材	N96	層1上部	8.4	5.7	1.3	割材削り出し	ツバキ属	焼けあり
286	W180	005-11	不明品・残材	棒状		N112	層3	17.1	径6.0	－	半截削り出し	スギ	
287	W50	005-10	不明品・残材	板状		N116	層3	(13.4)	6.2	0.8	板目	コウヤマキ	
288	－	008-02	不明品・残材	犬付け木		N96	層1上部	29.5	1.7	－	芯持ち割り出し	不明	先端炭化
289	W143	003-07	杭	角杭	板状	N96	層1下部	44.5	径9.3	－	割材	スギ	横木か
290	W133	003-08	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	42.0	7.6	2.3	割材	コナラ亜属	東側出土
291	W159	018-04	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	52.4	10.3	2.8	割材	コナラ亜属	東側出土
292	W162	003-10	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	49.3	10.8	2.4	割材	コナラ亜属	東側出土
293	W153	021-01	杭	角杭	板状	N96	層1下部	56.2	12.0	3.8	割材	コナラ亜属	北側出土
294	W155	018-01	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	57.7	11.3	3.5	割材	コナラ亜属	
295	W156	018-03	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	60.7	13.5	3.2	割材	コナラ亜属	
296	W147	020-03	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	64.8	12.4	4.0	割材	コナラ亜属	東側出土
297	W146	020-02	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	64.7	10.3	3.0	割材	コナラ亜属	東側出土
298	W158	021-02	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	58.3	9.9	1.6	割材	コナラ亜属	東側出土
299	W168	004-02	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	58.2	10.2	3.1	割材	コナラ亜属	
300	W134	023-02	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	65.1	9.0	6.0	割材	コナラ亜属	東側出土
301	W141	018-09	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	71.0	9.5	4.4	割材	コナラ亜属	東側出土
302	W125	018-06	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	77.6	10.5	3.5	割材	コナラ亜属	
303	W135	021-06	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	78.0	11.2	3.5	割材	コナラ亜属	東側出土
304	W148	018-07	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	79.9	10.8	4.1	割材	コナラ亜属	東側出土
305	W157	018-08	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	81.8	10.2	4.9	割材	コナラ亜属	東側出土
306	W122	023-01	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	83.7	12.2	4.1	割材	コナラ亜属	
307	W161	021-04	杭	角杭	板状	N96	層1最下部	85.4	11.4	3.6	割材	コナラ亜属	東側出土
308	W136	003-04	杭	角杭	方形	N96	層1最下部	37.9	径4.3	－	板目	コナラ亜属	建築部材転用か

第Ⅳ－10表　田丸道遺跡出土遺物観察表(9)（木製品）…ＳＲ15出土

報告番号	取上番号	実測番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
309	W154	021 -05	杭	角杭	半截材	N96	堀1 最下部	93.9	9.0	5.4	半截割り出し	コナラ属アカガシ亜属	東側出土
310	W121	003 -01	杭	丸杭		N96	堀1 下部	12.5	径4.9	－	丸太材	クリ	
311	W128	023 -03	杭	丸杭		N96	堀1 下部	29.0	径4.7	－	丸太材	コナラ亜属	
312	W126	023 -04	杭	丸杭		N96	堀1 下部	35.3	径4.7	－	丸太材	シオジ類	樹皮残る
313	W132	003 -06	杭	丸杭		N96	堀1 下部	47.0	径4.2	－	丸太材	コナラ亜属	
314	W160	018 -02	杭	丸杭		N96	堀1 最下部	44.2	径5.8	－	丸太材	ネムノキ	
315	W140	022 -02	杭	丸杭		N96	堀1 下部	55.6	径8.6	－	丸太材	コナラ亜属	橋木か
316	W152	018 -10	杭	丸杭		N96	堀1 下部	68.5	径3.6	－	丸太材	スギ	北側出土
317	W138	022 -01	杭	丸杭		N96	堀1 最下部	122.5	径7.5	－	丸太材	ヒノキ属	東側出土
318	W172	020 -05	杭	丸杭		N96	堀1 最下部	91.1	径6.4	－	丸太材	ヒノキ属	橋木か
319	W5	002 -02	杭	丸杭		N96	堀1 上部	16.0	径4.7	－	丸太材	ヒノキ属	
320	W9	002 -01	杭	丸杭		N96	堀1 上部	17.8	径4.3	－	丸太材	ネジキ	
321	W73	005 -09	杭	丸杭		N96	堀1 上部	32.0	径4.0	－	丸太材	シイ類	樹皮残る
322	W8	002 -07	杭	丸杭		N96	堀1 上部	31.4	径4.7	－	丸太材	ムクノキ	樹皮残る
323	W1	005 -07	杭	丸杭		N96	堀1 上部	22.8	径4.8	－	丸太材	コナラ亜属	
324	W6	002 -08	杭	丸杭		N96	堀1 上部	55.7	径4.9	－	丸太材	カエデ類	樹皮残る
325	W71	005 -08	杭	丸杭		N96	堀1 上部	33.9	径4.0	－	丸太材	リョウブ	樹皮残る
326	W112	005 -05	杭	丸杭		N96	堀1 上部	34.3	径3.8	－	丸太材	コナラ亜属	
327	W111	005 -06	杭	丸杭		N96	堀1 上部	73.4	径4.4	－	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
328	W70	018 -05	杭	丸杭		N96	堀1 上部	71.8	径6.1	－	丸太材	クリ	
329	W68	015 -03	杭	丸杭		N96	堀1 上部	72.9	径3.1	－	丸太材	クリ	樹皮残る
330	W18	004 -01	杭	丸杭		N96	堀1 上部	116.7	径8.1	－	丸太材	コナラ亜属	側面に損傷あり
331	W92	011 -06	杭	角杭	板材転用	N104	堀2	37.6	7.9	4.5	割材割り出し	シイ類	樹皮残る
332	W166	020 -01	杭	角杭	板材転用	N104	堀2	42.3	5.2	3.1	割材割り出し	ヒノキ属	
333	W33	012 -06	杭	角杭	板材転用	N100	堀2	35.1	3.8	2.0	割材割り出し	コウヤマキ	
334	W89	010 -05	杭	角杭	板材転用	N104	堀2	17.1	3.3	3.5	割材	ヒノキ属	
335	W79	024 -02	杭	角杭	板材転用	N100	堀2	86.8	11.4	4.0	芯持割り出し	スギ	
336	W106	011 -03	杭	角杭		N104	堀2	57.9	7.1	8.2	柴榾割り	シイ類	
337	W105	014 -06	杭	角杭		N100	堀2	75.4	4.7	7.7	柴榾割り	ヒノキ属	樹皮残る
338	W93	014 -07	杭	角杭		N104	堀2	71.9	5.0	7.6	柴榾割り	シイ類	
339	W102	014 -03	杭	角杭		N104	堀2	78.2	10.4	6.0	柴榾割り	ヒノキ属	
340	W85	014 -05	杭	角杭		N100	堀2	75.4	6.9	7.9	柴榾割り	イヌガヤ	
341	W101	014 -04	杭	角杭		N104	堀2	80.0	7.3	7.3	半截材	シイ類	樹皮残る
342	W107	014 -02	杭	丸杭		N104	堀2	71.8	径5.2	－	割材	コナラ属アカガシ亜属	辺材、建築部材転用か
343	W82	015 -01	杭	丸杭		N100	堀2	19.7	径4.7	－	丸太材	コナラ亜属	
344	W95	011 -05	杭	丸杭		N104	堀2	21.9	径6.4	－	丸太材	ヒノキ属	樹皮残る
345	W88	012 -05	杭	丸杭		N104	堀2	26.4	径5.0	－	丸太材	ヒノキ属	
346	W98	010 -02	杭	丸杭		N104	堀2	26.7	径4.3	－	丸太材	ネジキ	
347	W90	012 -04	杭	丸杭		N104	堀2	27.7	径4.3	－	丸太材	ハンノキ類	樹皮残る
348	W81	010 -03	杭	丸杭		N100	堀2	29.7	径6.2	－	丸太材	モミ	
349	W99	010 -01	杭	丸杭		N104	堀2	35.1	径4.9	－	丸太材	ハンノキ類	

第Ⅳ－11表　田丸道遺跡出土遺物観察表(10)（木製品）…ＳＲ15出土

報告番号	取上番号	実測番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
350	W84	014-01	杭	丸杭		N100	層2	52.1	径5.5	－	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
351	W96	011-01	杭	丸杭		N104	層2	52.3	径5.6	－	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
352	W91	012-02	杭	丸杭		N104	層2	46.3	径5.1	－	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
353	W100	011-02	杭	丸杭		N104	層2	49.3	径4.4	－	丸太材	シイ節	樹皮残る
354	W97	012-03	杭	丸杭		N104	層2	43.9	径4.6	－	丸太材	シイ節	樹皮残る
355	W80	010-04	杭	丸杭		N100	層2	39.2	径4.7	－	丸太材	ヒノキ属	
356	W114	010-06	杭	丸杭		N104	層2	(72.4)	径5.9	－	丸太材	ムクノキ	
357	W83	015-07	杭	丸杭		N100	層2	80.2	径9.0	－	丸太材	スギ	
358	W103	012-01	杭	丸杭		N104	層2	86.6	径4.8	－	丸太材	シイ節	
359	W54	016-02	杭	角杭		N116	層3	78.1	10.5	5.6	柴柾割り	スギ	
360	W109	005-03	杭	丸杭		N116	層3	36.4	径5.4	－	丸太材	クリ	
361	W108	005-04	杭	丸杭		N116	層3	40.3	径4.0	－	丸太材	コナラ亜属	樹皮残る
362	W171	020-04	杭	丸杭		N116	層3	122.7	径6.0	－	丸太材	スギ	
363	W110	005-02	杭	丸杭		N124	層4	24.8	径4.1	－	丸太材	ムクノキ	

田丸道遺跡　凡例

- 施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社『日本の伝統色』第５版(1989年)を用いて補っている。
- 木製品の樹種は、保存処理を行った40点を株式会社吉田生物研究所に委託し、その他127点を布谷知夫氏(三重県立博物館)に依頼した。保存処理を行った製品は229～234、236～242、244～254、264～270、272～275、277、280～281、284～285である(このほか228・257・259・276・282も保存処理を行っている。ただし樹種は不明である)。
- 木製品の実測図に用いたスクリーントーンは下記の通りである。

焼け

樹皮

4　自然科学分析と樹種同定

a　自然科学分析の目的

花粉分析は生活圏からやや離れた範囲の植生が復元される。一方、植物珪酸体分析は、栽培植物であるイネ属の同定が可能である。

田丸道遺跡ＳＲ15の時期は、大きく３期に分かれる。最下層は弥生時代～古墳時代、下層は古墳時代後期、上層は平安時代に堆積したことが出土遺物から推測される（第Ⅳ－36図）。

今回は、周辺の古環境復元を目的として、ＳＲ15の断面堆積物試料および下層堆積試料７点について、花粉分析と植物珪酸体分析を行い、うち２点について種実同定を実施した（第Ⅳ－12表）。

また、発掘調査時に主に堰１から出土した種実約200粒、昆虫約20片について同定を行った。さらに、古代の築堤技術の復元を試みることを目的としてＳＲ15の堰に用いられた筵状製品（粗朶）の材質同定を実施した。

以上の分析・同定および考察は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。　（相場）

第Ⅳ－36図　調査地点の層序および堆積物試料採取位置

第Ⅳ－12表　堆積物試料一覧

番号	遺構	位置	層位・地点	層相	分析項目		
					花粉	植物珪酸体	種実
試料1	SR15	（上層）	上層	10YR4/2灰黄褐。細礫・粗粒～細粒砂混じり泥からなる。著しく撹拌されている。垂直方向の幅1mm以下の植物根痕が認められる。	○	○	
試料2	SR15	堰3付近	下層	10YR3/1黒褐。植物遺体業理を挟在する極細粒砂～細粒砂混じり有機質泥からなる。	○	○	
試料3	SR15	堰1堤	下層　東壁	10YR3/2黒褐。粗粒～中粒砂を挟在する泥炭質ないし有機質泥からなる。生物擾乱により初生の堆積構造は乱れている。微細な植物根および地下茎などを未分解植物遺体を多く含み、5mm以下の炭化材片混じる。	○	○	○
試料4	SR15	堰1	下層　堰の直上	10YR2/2黒褐色。中粒砂から細粒砂混じり有機質泥、著しい生物擾乱により初生の堆積構造は不明瞭となっている。1cm程度の炭化材片を多く含む。	○	○	○
試料5	SR15	堰3付近	最下層	10YR4/2灰黄褐。泥質細粒～中粒砂から細粒砂質有機質泥からからなる。初生の堆積構造とみられる業理構造が確認されるが、生物擾乱により乱れている。未分解植物遺体・炭化材片が混じる。	○	○	
試料6	SR15	堰2北側	ベース土	10GY7/1明緑灰。見かけ上塊状をなす海汰の負いシルト質粘土からなる。生物擾乱の痕跡が確認される。	○	○	
試料7	SR15	堰1南側	最下層　ベース	10YR3/2黒褐。泥質細粒～中粒砂から細粒砂質有機質泥からからなる。初生の堆積構造とみられる業理構造が確認されるが、生物擾乱により不連続となっている。未分解植物遺体・炭化材片が混じる。	○	○	

b　花粉分析

方法　試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25㎜の篩による篩別、重液(臭化亜鉛，比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤本・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

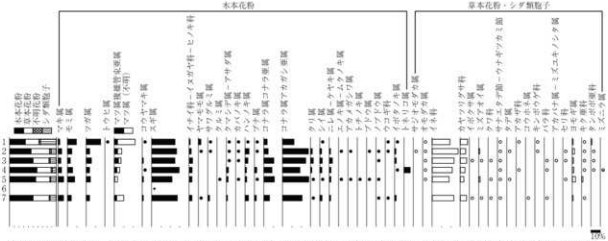
結果　結果を第Ⅳ－13表、第Ⅳ－37図に示す。流路底の基盤堆積物にあたる試料6以外の試料から、花粉化石が多く検出された。花粉化石群集は、検出された6点ともほぼ同様な組成であるが、上層に相当する試料1のみやや異なる。

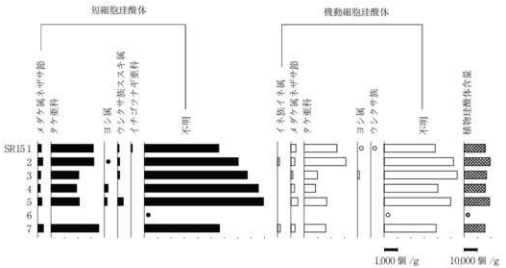
木本花粉と草本花粉の比率は、木本花粉の方がやや多い。いずれの試料も、スギ属とアカガシ亜属の割合が高く、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属を伴う。試料1のみ、アカガシ亜属がやや減少し、マツ属、モミ属、ツガ属が増加する。その他、クリ属、シイノキ属、ニレ属―ケヤキ属を含む。

草本花粉は6試料全てでイネ科の割合が高く、次いでカヤツリグサ科、ヨモギ属と続く。オモダカ属、ミズアオイ属、イボクサ属などの水生植物も含む。
(パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

第Ⅳ－13表　花粉分析結果

種類(分類群)	地点・試料番号						
	SR15						
	1	2	3	4	5	6	7
木本花粉							
マキ属	4	8	7	10	13	－	14
モミ属	21	10	7	15	17	－	10
ツガ属	34	8	13	10	10	－	9
トウヒ属	2	－	－	－	－	－	－
マツ属複維管束亜属	7	7	10	7	1	－	6
マツ属(不明)	42	10	7	9	7	－	19
コウヤマキ属	1	－	3	2	3	－	3
スギ属	55	56	58	80	48	2	67
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	3	5	9	9	7	－	8
ヤマモモ属	6	1	－	－	－	－	1
サワグルミ属	1	2	－	－	－	－	5
クルミ属	－	－	－	－	1	－	－
クマシデ属－アサダ属	1	1	1	6	4	－	3
カバノキ属	1	1	1	－	1	－	－
ハンノキ属	2	9	7	4	4	－	9
ブナ属	1	2	－	7	1	－	5
コナラ属コナラ亜属	8	10	25	24	25	－	15
コナラ属アカガシ亜属	27	58	58	51	62	－	51
クリ属	－	4	7	4	2	－	1
シイ属	1	4	6	6	1	－	6
ニレ属－ケヤキ属	－	3	8	5	4	－	4
エノキ属－ムクノキ属	－	1	－	－	1	－	－
アカメガシワ属	－	1	－	－	1	－	－
トチノキ属	－	－	－	－	1	－	－
ブドウ属	－	1	－	－	1	－	－
ノブドウ属	－	2	1	－	2	－	1
グミ属	－	1	－	－	－	－	－
ウコギ科	1	1	－	－	－	－	1
エゴノキ属	－	－	－	2	－	－	－
イボタノキ属	1	3	4	2	－	－	4
トネリコ属	－	－	－	18	－	－	－
ガマズミ属	－	－	－	－	－	－	1
タニウツギ属	－	－	－	－	1	－	－
スイカズラ属	－	－	－	－	2	－	－
草本花粉							
サジオモダカ属	－	1	－	－	－	－	－
オモダカ属	1	1	2	1	2	－	－
イネ科	122	124	107	98	71	－	111
カヤツリグサ科	52	27	32	24	16	－	33
イボクサ属	－	－	1	－	－	－	1
ミズアオイ属	－	5	1	－	6	－	3
ユリ科	－	－	－	－	－	－	3
クワ科	－	－	1	－	1	－	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	3	1	1	2	－	3
タデ属	－	1	－	－	1	－	－
アカザ科	1	－	－	1	－	－	－
ナデシコ科	－	－	－	1	－	－	－
コウホネ属	－	－	－	－	－	－	1
カラマツソウ属	－	1	－	－	－	－	－
キンポウゲ科	1	1	－	－	－	－	－
アブラナ科	－	－	－	1	－	－	－
バラ科	－	－	1	3	－	－	2
マメ科	－	1	－	－	－	－	－
フウロソウ属	－	1	－	－	－	－	－
アカバナ属－ミズユキノシタ属	－	－	1	－	－	－	－
セリ科	－	1	3	－	1	－	－
オミナエシ属	－	－	－	－	1	－	－
ヨモギ属	7	11	7	8	14	－	5
キク亜科	2	4	3	3	6	－	4
タンポポ亜科	8	2	1	1	－	－	－
不明花粉							
不明花粉	22	17	12	12	8	1	7
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	3	－	2	－	1	－	1
イノモトソウ属	14	3	3	3	－	－	－
ミズニラ属	－	－	－	1	－	－	－
他のシダ類胞子	204	46	55	35	46	－	65
合　計							
木本花粉	219	209	232	271	220	2	243
草本花粉	196	184	161	142	121	0	167
不明花粉	22	17	12	12	8	1	7
シダ類胞子	221	49	60	39	47	0	66
合計(不明を除く)	636	442	453	452	388	2	476


木本花粉
草本花粉・シダ類胞子
木本花粉
草本花粉
不明花粉
シダ類胞子
ヤシ属
ヤマモモ属
ヤナギ属
ヤマハンノキ属
ハンノキ属
カバノキ属
クルミ属
サワグルミ属
ノブドウ属
ブドウ科
ウコギ科
トリカブト属
ツルウメモドキ属
ツリバナ属
ニシキギ科
ヒノキ科
ヒノキ属
ヒメコマツ属
ヒメバショウ属
ヒルガオ科
ヒルガオ属
ヒルムシロ属
ヒロハノアサガラ属
ヒロハノキ属
ヒロハユキノシタ属
ヒロハヒメウツギ属
ヒロハヒメウツギ
ヒロハヒメウツギ節
ヒロハヒメウツギ節－ウチダウツギ節
ヒロハヒメウツギ節－ニシキウツギ節
ヒロハヒメウツギ節－ニシキウツギ属
ヒロハヒメウツギ節－ニシキウツギ属
ヒロハヒメウツギ節－ニシキウツギ属



乾土 1g あたりの個数で示す。○●は 100 個未満、○(内部に模様) は 1,000 個未満を定性的に示す。

第Ⅳ－38図　植物珪酸体群集

について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

結果　結果を第Ⅳ－14表、第Ⅳ－38図に示す。ＳＲ15の各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。試料6を除き、各試料では同様な産状が見られる。すなわち、メダケ属(ネザサ節)を含むタケ亜科および分類群が明確にできない不明の産出が目立つ。また、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科がわずかあるいは稀に認められる。試料２と７では、栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体もわずかに産出する。なお、試料６では不明がわずかに認められるに過ぎない。(パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

ｄ　種実同定

分析方法　土壌試料は、200ccを水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料および洗浄済み試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。

同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)、岡本(1973)、伊藤(2001)、徳永(2004)等との対照より実施し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸して保管する。

結果　結果を第Ⅳ－15～16表に、各分類群の写真を写真図版４、５に示す。

全10試料を通じて、木本26分類群(ヤマモモ、オニグルミ、イヌシデ、ウバメガシ、ウバメガシ－コナラ、クヌギ節－カシワ、クヌギ節－カシワ－ナラガシワ、カシワ、ナラガシワ、コナラ亜属、ケヤキ、アブラチャン、スモモ、モモ、ハギ属、イヌザンショウ、サンショウ属、カエデ属Ａ・Ｂ、ゴンズイ、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、クマノミズキ、エゴノキ、ムラサキシキブ属) 257個、草本23分類群(オモダカ科、ヒルムシロ属、イネ、イネ科、アゼスゲ類、スゲ属(３稜)、ホタルイ属、カヤツリグサ科(３稜・２面)、カラムシ属、ギシギシ属、ミゾソバ近似種、サナエタデ近似種、タデ属(３稜綱目)、ナデシコ科、アブラナ科、ミズオトギリ、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、スミレ属、イヌコウジュ属、シソ科、キク科) 87個、計344個の種実遺体が抽出・同定された。種実以外では、木の芽、木材、炭化材、植物のトゲ、菌核、昆虫類の破片などが、主に土壌試料より確認された。

栽培種は、スモモの核が３個(No. 4，9,11)、モモの核が５個(No. 9,11)、イネの穎の破片が３個(No. 4)と、栽培種の可能性があるブドウ属の種子の破片が1個(No. 4)確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本は全て広葉樹で、常緑高木のヤマモモ、常緑低木のウバメガシ、ウバ

第Ⅳ－15表　種実同定結果（1）

	分類群	部位	状態	1段目：試料状態、2段目：位置、3段目：遺構名、4段目：層位										備考
				土壌試料		水洗選別済み試料								
				3	4	8	9	10	11	12	13	14	15	
				東壁断面	断面	N95	N96	N96	N104	N108	N112	N116	N112	
				SR15 堆1堤	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆2	SR15 堆2	SR15 堆2	SR15 堆3	SR15 堆2	
				下層	しがらみ直上	下層	下層	最下層	下層	下層	下層	下層	下層	
木本	ヤマモモ	核	破片		1									
	オニグルミ	核	完形							1				
			破片			1								
	イヌシデ	果実	完形										8	
	ウバメガシ	果実	破片　基部				1						1	
	ウバメガシ－コナラ	殻斗	完形			1	1					1	4	
			破片										1	
	クヌギ節－カシワ	果実	破片　基部			2								接合
	クヌギ節－カシワ－ナラガシワ	果実	破片　頂部			1								
			破片			9								
	カシワ	殻斗	破片							1				
		殻斗・果実	破片							1				
	ナラガシワ	幼果	完形　花柱残存									1	10	
			破片										1	
		殻斗	完形				4	1		1	1		1	
			破片			1	5		3	3	1		4	
		殻斗・果実	完形			1				1				
			破片				1			1				殻斗内に果実残存
		果実	破片　頂部			1								
			破片　基部				1				1			
			破片						3		3			
	コナラ亜属	幼果	完形　花柱欠損										7	
			破片										3	
		果実	破片　頂部				1							
			破片				3							
		果実（未熟果）	完形										1	
	ケヤキ	果実	完形										1	
	アブラチャン	果実・種子	完形						1					
		種子	完形				1							
	スモモ	核	半分						1					
			破片		1		1							
	モモ	核	完形				2		1					
			半分						2					接合
	ハギ属	種子	完形										1	
	イヌザンショウ	種子	完形	1										
	サンショウ属	種子	破片	9	24									
	カエデ属A	果実	完形										5	
	カエデ属B	果実	完形										2	
	カエデ属	種子	完形	1	1									
			破片		1									
	ゴンズイ	核	完形										1	
	ブドウ属（栽培種?）	種子	破片		1									
	ブドウ属	種子	破片	2										
	ノブドウ	種子	完形										1	
	ブドウ科	種子	破片	1	1									
	クマノミズキ	核	破片										1	
	エゴノキ	果実・種子	完形		1		1				2			
		種子	完形				10	6	4	1	3	1	7	
			破片	8	7		1	1	1				15	
	ムラサキシキブ属	核	完形	6	17									
			破片	1										
草本	オモダカ科	種子	完形	1	1									
	ヒルムシロ属	果実	完形										1	
	イネ	穎	破片		1									
			破片		1									
			破片		1									
	イネ科	果実	完形	1	4									
	アゼスゲ類	果実	完形	2	1									
			破片	3	1									

第Ⅳ－16表　種実同定結果(2)

	分類群	部位	状態	1段目：試料状態、2段目：位置、3段目：遺構名、4段目：層位										備考
				土壌試料		水洗選別済み試料								
				3	4	8	9	10	11	12	13	14	15	
				東壁断面	断面	N95	N96	N96	N104	N108	N112	N116	N112	
				SR15 堆1境	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆1	SR15 堆2	SR15 堆2	SR15 堆2	SR15 堆3	SR15 堆2	
				下層	しがらみ直上	下層	下層	最下層	下層	下層	下層	下層	下層	
草本	スゲ属	果胞	破片		1									
	スゲ属(3稜)	果実	完形	2	1									
			破片	1										
	ホタルイ属	果実	完形		3									
			破片	2	3									
	カヤツリグサ科(3稜)	果実	完形		2									
			破片	1										
	カヤツリグサ科(2面)	果実	完形					1						
	カラムシ属	果実	完形	2	2									
	ギシギシ属	花被	破片		1									
	ミゾソバ近似種	果実	破片		1									
	サナエタデ近似種	花被	破片		1									
		果実	完形	1										
	タデ属(3稜網目)	果実	破片		2									
	タデ属(網目)	果実	破片	4	15									
	ナデシコ科	種子	完形		1									
	アブラナ科	種子	完形		1									
	ミズオトギリ	種子	完形	2										
	キジムシロ類＊	核	完形		2									
			破片		3									
	カタバミ属	種子	破片	1										
	スミレ属	種子	完形		2									
			破片		2									
	イヌコウジュ属	果実	完形		3									
			破片		4									
	シソ科	果実	完形	1										
	キク科	果実	完形	1										
その他	木の芽			+	+									
	木材			+	+									
	炭化材			+	+									
	植物のトゲ			+	+									
	面核			+				+						
	昆虫類			+	+									
分析量				200cc 210g	200cc 258g									

注)＊キジムシロ類：キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属

メガシまたは落葉高木のコナラ、落葉高木のクヌギ節またはカシワ、カシワ、ナラガシワ、オニグルミ、イヌシデ、ケヤキ、クマノミズキ、落葉高木または小高木のカエデ属、落葉小高木のゴンズイ、エゴノキ、低木のアブラチャン、イヌザンショウ、ムラサキシキブ属、落葉低木または多年草のハギ属、落葉藤本のブドウ属、ノブドウ、ブドウ科などが確認された。ナラガシワなどのコナラ亜属が多く、果実や殻斗、幼果(未熟個体)が確認された。

草本は、2個以外が土壌試料から抽出された。明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から成り、オモダカ科、ヒルムシロ属、アゼスゲ類、ホタルイ属、ミゾソバ近似種、ミズオトギリなどの水湿地生植物を含む。

以下に、主な分類群の形態的特徴等を記す。

〈栽培種〉

・スモモ(*Prunus salicina* Lindley)バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、完形ならばレンズ状広楕円体。最大片の残存長は14.6㎜(No.11)、残存幅は11.6㎜(No.11)、厚さは7.3㎜(No. 4)。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隙条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状

部がある。No.11は、縫合線に沿って半割した破片である。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。半割した内側表面は平滑で、種子１個が入る卵状の窪みがみられる。

・モモ(*Prunus persica* Batsch)　バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、やや偏平な広楕円体。最小核は、長さ21.3㎜、幅16.9㎜、厚さ14.2㎜(No. 9)、最大核は、長さ25.0㎜、幅19.1㎜、厚さ14.2㎜(No. 9)。核の頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。No.11の半分2個は、縫合線に沿って半割した破片で接合し１個体となる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。半割した内側表面は平滑で、種子１個が入る卵状の窪みがみられる。

・ブドウ属(*Vitis*)　ブドウ科

種子は灰黒褐色、完形ならば狭～広倒卵体、側面観は半広倒卵形、やや偏平なこん棒状など。基部は嘴状に尖る核嘴があり、腹面側の先に臍がある。腹面は正中線上に(鈍)稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各１個の長さ2㎜、幅0.3 ～ 0.4㎜程度の広線～狭楕円形で深く窪む核窪がある。背面は、正中線上に1個の倒へら形、卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれる。種皮表面は粗面、断面は柵状。

No. 4は、腹面と背面上半部を欠損した破片で、残存長3.5㎜、残存幅3.2㎜。基部の核嘴は、長さ1.3㎜、幅1.7㎜と太く長く突出することから、栽培種のブドウ(*V. vinifera* L.)に由来する可能性がある。

・イネ(*Oryza sativa* L.)　イネ科イネ属

穎(果)は淡～灰褐色、炭化個体は黒色。完形ならば長さ6 ～ 7.5㎜、幅3 ～ 4㎜、厚さ2㎜程度のやや偏平な長楕円体。破片の大きさは、最大2㎜程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

〈その他〉

・ウバメガシ(*Quercus phillyraeoides A.* Gray)　ブナ科コナラ属コナラ亜属ウバメガシ節

果実は茶褐色、楕円体。破片の残存長17.6㎜、残存径11.5㎜(No. 9)。頂部はやや尖り、殻斗の圧痕である輪状紋は確認されず、花柱を欠損する。果皮表面はやや平滑で、浅く微細な縦筋が配列し、破片は縦筋に沿って割れている。基部はやや突出し、果皮とは別組織の着点がある。着点は灰褐色、径4.4 ～ 4.5㎜の円形。着点が非常に小さい点を同定根拠とした。

殻斗は灰褐色、総苞片は浅い杯状。長さ(高さ) 5.3 ～ 7.2㎜、径8.5 ～ 13.7㎜の浅い杯状。杯の壁の厚さは0.9 ～ 1.4㎜で、ナラガシワよりも薄い。表面には、卵形～長楕円形で鈍頭の総苞片が螺旋状に配列する。殻斗については、本地域に分布するコナラ(Q. serrata Thunb. ex Murray：コナラ亜属コナラ節)の殻斗との区別が困難であるため、両種をハイフォンで結んでいる。

・クヌギ節 (*Quercus Sect. Cerris*) － カシワ(*Quercus dentata Thunb.* ex Murray)　ブナ科コナラ属コナラ亜属

果実は黒褐色。完形ならば径２～３㎝程度の球～楕円体。破片は、基部全面を占める着点で、径10.5㎜の円形。果皮の下端よりもやや突出し、基部は平ら。表面には粗くオ規則な粒状紋様がある。着点がやや凹むナラガシワとは区別される。

本地域に分布するクヌギ節は、クヌギ(*Q acutissima* Carruthers)とアベマキ(*Q variabilis* Blume)がある。カシワを含めて、着点の形状のみでは区別が困難であるため、ハイフォンで結んでいる。

・カシワ(*Quercus dentata Thunb.* ex Murray)　ブナ科コナラ属コナラ節

殻斗、果実は灰黒褐色、殻斗の破片は、残存長(高)1.3㎝、径2.1㎝程度の椀状。表面には皮針形でクヌギやアベマキよりも質の薄い総苞片が螺旋状に配列し、反り返る先端付近を欠損する。殻斗に包まれる果実は、上半部を欠損する破片である(No.12)。果皮外面は平滑で、浅く微細な筋が縦列する。

・ナラガシワ(*Quercus aliena* Blume.)　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

幼果、殻斗は灰黒褐色。幼果は径0.5 ～ 1.3㎝程度の椀型で、頂部には３花柱が残存する。殻斗は長さ(高

さ）0.8 ～ 1.5㎝、径1.8 ～ 2.7㎝の椀状。椀の壁は、厚さ2.2 ～ 3.1㎜で、先端は内側を向く。幼果と殻斗の表面には、狭卵形の総苞片が螺旋状に配列する。

殻斗に包まれる果実は茶褐色。完形ならば広卵体。最大片の残存長2.6㎝（No.13）、径19.7㎜（No. 9）。頂部は尖り、輪状紋は確認されない。果皮表面は平滑で、浅く微細な縦筋が配列する。基部は切形で、果皮とは別組織の着点がある。着点は灰褐色、径9.3 ～ 12.1㎜ の円形で、果皮下端よりやや凹む。表面には維管束の穴が輪状に並ぶ。なお、種の同定根拠となる花柱を欠損する幼果や、果実や殻斗の破片をコナラ亜属（*Q. subgen. Quercus*）にとどめている。

・アブラチャン（*Lindera praecox* （Sieb. et Zucc.） Blume） クスノキ科クロモジ属

果実、種子は灰黒褐色、長さ11.3 ～ 12.0㎜、径10.6 ～ 10.9㎜の偏球体。果実は頂部に点状の小突起がある。果皮は薄く、表面には小斑点がある。種子は、頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く、表面は粗面。

・カエデ属（*Acer*） カエデ科

果実は形状が異なる2型が確認された。茶褐色、長さ4.7 ～ 5.6㎜、幅3.7 ～ 4.6㎜、厚さ2.5 ～ 3.7㎜の楕円体で、イロハモミジ（*A. palmatum* Thunb.）の類に似る果実をカエデ属A、黒褐色、長さ7.2 ～ 7.5㎜、幅4.6 ～ 5.0㎜、厚さ1.7 ～ 2.2㎜の偏平な非対称楕円体の果実をカエデ属Bとしている。果実はいずれも頂部から伸びる翼の先端部を欠損する。基部は切形で2翼果の合着面は平ら。両面の正中線上に鈍稜がある。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦）

e　昆虫同定

分析方法　2ケースから、保存状態が良いと思われる20片について、双眼実体顕微鏡やルーペを用いて同定を実施した。なお、同定にあたっては、東京農業大学松本浩一氏の協力を得た。

結果　結果を表Ⅳ-17表に示す。試料16（堰1）のうち、種まで同定できたものは、コガネムシ、ドウガネブイブイ、クロツヤクシコメツキコアオハナムグリの4種、試料17（堰2）のうち、種まで同定できたものは、コガネムシ1種である。なおNo.1とNo.2のコガネムシは同一個体の可能性がある。コガネムシは、河川

第Ⅳ－17表　昆虫同定結果

試料番号	遺構名		採取日	目名	科名	種名	部位
16	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	右上翅の一部
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	前胸背板
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	ドウガネブイブイ	左上翅基部
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コメツキムシ	クロツヤクシコメツキ	前胸
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コアオハナムグリ	左上翅末端部
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	不明	不明	胸部の一部
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	胸部の一部
	SR15	堰1	2011/1/13	コウチュウ	不明	不明	脚の一部
17	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	右上翅の一部
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	中胸側板
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	中胸腹板
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	尾節板
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	左上翅
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	腹部腹板
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	上翅の一部
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	左中脛節
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	不明	不明	脚の一部
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	ハナムグリ属の一種	左中頭節
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	不明	不明	腹部の一部
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	胸部前側板
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	口器の一部
	SR15	堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	脚の一部

敷などの開けた場所のギシギシ・イタドリ類を摂食する。ドウガネブイブイは、各種広葉樹の葉を摂食する。クロツヤクシコメツキは本州以西の平地に普通に生育する種類である。コアオハナムグリは各種植物の花に集まる。(パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

f　土壌分析および種同定の考察

調査区および周辺の植生　今回分析を行った弥生時代から古墳時代後期の最下層・下層堆積物は砂層を挟在する植物遺体混じりの有機質泥ないし泥炭質泥からなり、いずれの層準も程度の違いはあるものの生物擾乱の影響を受けている。このような層相から、最下層・下層堆積物は周辺からの氾濫堆積物が流入する時期を挟在するが、基本的には比較的静穏な堆積環境で形成されたことが推定される。このような堆積物中の植物化石群集は、調査地点近辺の流路沿いの植生を強く反映している可能性が高いと推定される。植物化石群集から過去の植生を復元する場合、花粉・胞子・種実・葉・木材・植物珪酸体といった、植物体の各部位の各植物遺体群がどのような過程(堆積物中への取り込まれ方、堆積時後の分解作用の影響など)を経て形成されたものか(タフォノミー)を検討し、それを複合的に調査することで、母植物の統一的把握、母植物の生育地の推定や植生の空間的分布状況の把握が可能となることが指摘されている(辻ほか,1986)。

今回の分析結果でも、花粉化石群集と種実化石群集を比較すると、両者で共通して産出する種類として、落葉広葉樹の種類や草本植物が、花粉のみで産出する種類として針葉樹や常緑広葉樹が認められる。このような両群集での産状の差異は、上記の堆積環境を踏まえると、母植物の生育地の違いを反映している可能性が高く、両者に共通する種類は流路沿いの植生を反映しており、花粉化石でのみ産出する種類はより離れた場所の植生を反映しているものと推定される。

流路沿いの植生を反映しているとみられる落葉広葉樹の種類をみると、種実と花粉化石で概ね対応する種類が確認されている。産出した主な落葉広葉樹は、オニグルミ、イヌシデ、クヌギ－アベマキ、ウバメガシ、ナラガシワ、カシワ、ケヤキ、アブラチャン、イヌザンショウ、サンショウ属、カエデ属、ゴンズイ、ブドウ属、ノブドウ、クマノミズキ、エゴノキ、ムラサキシキブ属などである。これらの種類は河畔や林縁など明るい林地を好む種類のほか、成長が早く、自然・人為的撹乱を受けた場合でも萌芽による再生が可能な種類を含む。すなわち、洪水などによって植生が失われた場所や人為的撹乱などを受けた領域に先駆的に侵入して林分を構成する要素が多い。これらの木本類が流路沿いの植生を構成する要素であったと推定される。

一方、草本植物は、花粉・種実ともに多く検出されている。花粉化石では、イネ科やカヤツリグサ科が多く含まれるが、種実でもイネ科やスゲ類などのカヤツリグサ科が含まれ、周辺に生育していたと考えられる。なお、植物珪酸体ではネザサ節を含むタケ亜科が多い。タケ亜科は植生が失われた場所に先駆的に進入して篠地を作るほか、林床に生育する種類も多く、周辺には比較的多く存在していたことが伺われる。しかし、分類群を明確にできない不明も概して多い。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすい。このため、実際には、今回の産状に見られるほどタケ亜科が繁茂していたとは考えにくい。その他、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科も認められ、これらのイネ科植物も生育していたと思われる。また、花粉化石や種実遺体では水生植物(もしくは水生植物を多く含む分類群)の産出もみられる。ヒルムシロ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ホタルイ属、ミゾソバ、ミズオトギリが検出されており、流路内あるいは集水域に生育していたと考えられる。その他、カラムシ属、ギシギシ属、タデ、ナデシコ科、アブラナ科、キジムシロ類、カタバミ属、スミレ属等は開けた草地を好むことから、氾濫もしくは人為的影響によって植生が失われた場所に草地を形成していたと考えられる。

以上のことから、ＳＲ15を充填する下層・最下層が形成された弥生時代～古墳時代後期には、流路沿いの氾濫低地には落葉広葉樹の林分や草本類が卓越

する植生が存在したことが推定される。一方、花粉化石でのみ多産したアカガシ亜属やシイ属などの常緑広葉樹や、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹はこれらの植生より離れた場所に生育していたものと思われる。

中勢道路建設に伴う中林・中道遺跡や小津遺跡など伊勢湾南岸部の海岸平野の花粉分析結果でも、今回と同様中世以前においては、アカガシ亜属やシイ属などの常緑広葉樹と、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹の花粉化石群集が確認されている。これらのうち、アカガシ亜属やシイ属は、安定した土地条件に常緑広葉樹林を作る主要素であり、現在でも自然度の高い場所にはこれらの森林が成立している。このことから、当時の後背山地など土地的に安定した場所には、常緑広葉樹林が存在していたとみられる。また、針葉樹のマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が検出される。この中でもスギ属の割合が多い。スギ属は沖積地や扇状地の土地条件の悪い場所でも生育可能であることから、沖積地を中心に多く生育していたと考えられる。しかし、スギは花粉生産量が多く、多量に飛散することから実際の植生と比較して花粉化石の割合は高くなる。このため当時のスギ属は、花粉化石から推測されるほど多くなかったと考えられる。また、スギは種実遺体が検出されていない。おそらく、化石としての残りやすさに由来していると考えられるが、SR15の河畔ではなく、やや離れた地域に分布していたと推定される。他の針葉樹は、斜面地、尾根沿い、谷頭など土壌が流出しやすく、土地条件の悪い場所に生育することが多いことから、周辺の丘陵地の谷筋などに生育していたと思われる。

平安時代と推定される上層堆積物ではマツ属花粉が増加傾向を示している。マツ属花粉の増加は、周辺の森林破壊等にともなうマツ二次林の増加に由来する可能性があるが、これまでの調査によれば、雲出川流域などでのマツ属花粉の増加は中世以降であることから、今後、調査地域の地形発達や人間による山林活用動態を踏まえた評価が必要である。

植物利用　弥生時代から古墳時代の堆積物から検出された植物遺体には、栽培植物に由来するものが認められる。その種類は植物珪酸体で検出されたイネと、スモモ、ウメ、モモ、イネである。いずれも日本各地の多くの遺跡で出土例があり、本地域でも広く栽培・利用されていたことが推定される。

また、ヤマモモ、オニグルミ、ナラ類のドングリ、ブドウ属は、種実が食用可能である。出土状態や出土部位から食用後の残渣が廃棄された可能性は低いが、遺跡近くに分布していたことから、当時の人々が利用していた可能性はある。

下層堆積物の昆虫化石について　堰を覆う堆積物から産出した昆虫化石は、すべてコウチュウ目のものであった。さらに1点のコメツキムシ科を除く他の大部分はコガネムシ科の体の一部であった。種まで同定できたものは、コメツキムシ科のクロツヤクシコメツキ、コガネムシ科のコガネムシ、ドウガネブイブイ、コアオハナムグリの4種であり、いずれも現代では日本全土もしくは関東以西の平地から低山地に極めて普通な種である。クロツヤクシコメツキは草地や荒れ地などの二次的環境に多くみられ、草本植物などの根を幼虫が摂食する。ドウガネブイブイは林地・草地・荒れ地など広く多様な環境に生息し、各種広葉樹の葉を摂食する。コアオハナムグリも草地や荒れ地などの二次的環境に見られる環境適応力の強い種であり、幼虫が各種草本の根を食害し、成虫は各種植物の花を摂食する。コガネムシは河川敷などの開けた環境に生息し、ギシギシ・イタドリ類の葉を摂食する。コガネムシの中には同一個体と思われるものがみられた。また、種の決定部位が見られないためコガネムシ科の一種と同定されたものも、本種の一部分である可能性が高い。これらは少なくとも数個体分の遺体の断片であると考えられる。これらの昆虫が生育する環境は、植物化石から推測される古植生に近いものであり、調和的といえる。（パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦）

g　粗朶の樹種

試料　対象資料は、下層の堰の柵を構成している粗朶である（試料18）。粗朶は2ブロックに分けて採取されている。このうち、1ブロックでは、比較的径の揃った丸棒状の木材が隙間無く並ぶ部分と薄い植物遺体が幾重にも重なっている部分とがある。樹種

第Ⅳ－18表　筵の樹種同定結果

資料番号	位置	遺構名	層位	試料情報				樹種
				仮番	形状	径	長さ	
試料18	N96	SR15堰1	下層	W-1	芯持丸木	0.4cm	21.5cm以上	広葉樹(当年性)
				W-2	芯持丸木	0.4cm	22cm以上	広葉樹(当年性)
				W-3	芯持丸木	0.4cm	10.8cm以上	広葉樹(当年性)
				W-4	芯持丸木	0.4cm	12.3cm以上	広葉樹(当年性)
				W-5	芯持丸木	0.4cm	16.5cm以上	広葉樹(当年性)

同定試料は、丸棒状の木材の中から５点(W－1～5)、植物遺体から２点(W－6,7)の合計７点を選択した。

分析方法　資料の状態・木取りを観察した上で、分析用の木片試料を採取する。剃刀を用いて木片から木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。

結果　樹種同定結果を表Ⅳ－18表に示す。粗朶木のうち木材は全て広葉樹の当年枝であり、組織の状況から同一種と考えられるが、木材組織が発達していないために樹種は不明である。また植物遺体は、２点とも草本類と考えられる。解剖学的特徴等を記す。

・広葉樹

道管は単独または２～３個が放射方向に複合して散在するが、全体的に放射方向に道管が揃う傾向がある。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、ほぼ単列であるが、所々で2列になり、1－30細胞高。

・草本類

軸方向組織のみで構成され、放射組織は認められない。軸方向組織は、道管と柔細胞が認められ、道管は2-３個が集合した状態で散在している。

放射組織が認められないことから草本類であり、道管の配置状況からイネ科に似ているが、保存状態が悪く、種類は不明である。

考察　河道ＳＲ15の堰１下層から採取された粗朶は、直径0.4cm、長さ10.8 ～ 22cm以上の丸棒状の木材が並べられた下に圧密により薄くなっている草本植物の植物遺体が幾重にも重なっている。観察した範囲では、丸棒状の木材は一方向にのみ並んでおり、直交するような状況は見られないが、草本類については交差して設置されている状況が確認される。これらは、木杭で固定されており、土堤を築く際の土盛り等のために使用された可能性が考えられている。丸棒状の木材は、いずれも広葉樹の当年性の枝等と考えられる。種類の同定はできなかったが、組織の特徴からいずれも同一種と考えられる。また、いずれも端部を欠損しているが、長い資料では22cmを超えている。これらのことから、枝がよく分岐し、当年性の小枝が比較的長く伸びるような種類が想定される。粗朶の木材を遠方から調達したとは考えにくく、周囲に生育していた樹木の枝等を利用したと考えられる。

丸棒状の上に見られる植物遺体は、葉等に由来する可能性があるが、保存状態が悪く、形状が明確な資料は得られなかった。丸棒状の木材を並べ、その上に植物遺体を敷くことで隙間を埋めたこと等が考えられる。(パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

h　樹種同定の目的

杭における樹種同定の目的　ＳＲ15出土木製品について樹種同定を行った。木製品における樹種の選択を検討するとともに、身近な植生を反映する杭の樹種から古環境を復元することを目的とした。

樹種同定を行うにあたり、調査終了後の段階で中原計氏(鳥取大学)に、目視による検討および指導をいただいた。樹種同定は、保存処理を行った木製品40点については株式会社吉田生物研究所に委託した。堰に用いられた杭127点については三重県立博物館館長布谷知夫氏に同定を依頼し、結果報告を頂いた。なお、個別の同定結果は、遺物観察表(第Ⅳ－８～ 11表)に記載している。　(相場)

i　樹種同定結果

県立博物館に持参された127の試料について、かみそりで薄片を作り生物顕微鏡で観察して樹種同定を行った。その結果、同定した樹種数は17種(属ふくむ)であった(第Ⅳ－19表)。

全ての資料が杭材であるため、その材の由来は選択された利用材の一部であったり周囲の林からの伐採材であったりと、さまざまなものが混在していると考えられる。そのために個々の材の由来についての考察には無理があるが、一般的な樹種の生育地などについて簡単に述べる。

イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia

やや湿気た森林内部の樹種であり、暖温帯から冷温帯まで幅広く見られる亜高木の常緑針葉樹、非常に粘りのある樹種であるために、選択して利用されることがある。

モミ　Abies firma

もともとは暖温帯と冷温帯の中間部分などの岩場を生育地とする常緑針葉樹であり、脂分が少なく白い材であることを生かして、有用材として利用することがある。なお日本のモミ属にはモミ以外も分布するが、全体の立地からモミとした。

スギ　Cryptomeria japonica

加工がしやすく多用される材であるが、現在見るスギはほとんどが植林由来であり、もともとはさほどどこにでも見られる樹種ではない。本来は大きな河川の河口部などが生育地であり、田丸遺遺跡周辺のそのような場所から材として運ばれてきた可能性が高い。

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata

湿気に強く材として利用されることが多いが、本来は亜高山の樹種であり、また現在では四国の一部や信州の高山帯、紀伊半島の産地などに見られるが、以前はかなり広く高山で見られたとされている。低地での生育は見られないために、運ばれてきた樹種である。

ヒノキ　Chamaecyparis obtuse

材として多用される樹種であるが、スギと同様に現在見られる林はほとんどが植林由来であり、もともとは山地のやや乾いた立地を好む樹種であり、やはり運ばれてきた樹種と考えられる。なお日本のヒノキ属にはヒノキ以外も分布するが、全体の立地からヒノキとした。

ハンノキ属　Alnus sp.

氾濫原のような低湿地に見られる樹種であり、有用材としての利用はあまり例がないが、遺跡からの出土例は多い。なお、ハンノキ属には山地を生育地とする樹種もある。

シイ属　Castanopsis sp.

暖温帯の最も主要な優占種であり、丘陵地などの安定した立地での極相林である。なおシイ属にはコジイとスダジイがあり、材からも区分はできるが連続的な特徴であるためにシイ属とした。

クリ　Castanea crenata

材も湿気に強く利用されるが、むしろ果実を食用として利用している。本来の生育地は暖温帯の上部、あるいは中間温帯と呼ばれる立地になり、平地では生育しない樹種であるが、近年では、古くからの半栽培状態で人里近くに、見られたのではないか、と言う意見が強い。

アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis

暖温帯の優占樹種、いわゆるカシ類である。カシ類には丘陵地にも見られる樹種が数種あるが、その区別は材では難しく、区分はしていない。

コナラ亜属

Quercus subgen. Quercus

一般的には常緑樹であるカシ類の林を伐採した後に成立する落葉樹林の優占種であるナラ類である。コナラとクヌギ、アベマキの仲間との区分ができる。今回の試料の中でも典型的なコナラあるいはクヌギあるいはアベマキと思えるものは見られたが、本来は連続的なものであり、今

第Ⅳ－19表　杭の樹種同定結果

堰名	資料数
コナラ亜属	32
スギ	18
ヒノキ	16
コウヤマキ	14
シイ類	9
アカガシ亜属	9
クリ	7
ムクノキ	5
ネジキ	3
リョウブ	3
ハンノキ類	2
ネムノキ	2
カエデ類	2
シオジ類	2
イヌガヤ	1
モミ	1
ヤマハゼ	1
	計127点

回は区分していない。

ムクノキ　Aphananthe aspera

河川周辺の自然堤防の上など、やや多湿な安定した立地で見られる。特別な目的で使われる有用中でも内が、巨木となるために、利用価値は高い。

ネムノキ　Albizia julibrissin

河川堤防や低湿地などの多湿な日が当たる立地にパイオニア的に進入する樹種であり、亜高木であることもあって、有用樹としては特別な利用はない。種子は風散布であり、広く分布される。

ヤマハゼ　Rhus sylvestris

ウルシの仲間であり、新たに作られた日が当たる立地にパイオニアとして進入する樹種である。亜高木であり、差ほど大きな材を持たないために特別な有用材ではないが、細工物などに利用する例はある。

カエデ属　Acer sp.

カエデ類はその種数が多いが、材での区分は難しくカエデ類とした。その多くは山地の渓谷の岩場を立地とするものが多い。ただ種子が風邪で運ばれて、やや日が当たる湿気たコケや多湿地などで発芽することが多く、遺跡周辺に生育した可能性も高い。

ネジキ　Lyonia ovalifolia

コナラ林やアカマツ林の中のやや日が当たる立地で生育する典型的な二次林樹種。特別な材の利用はない。

リョウブ　Clethra barbinervis

暖温帯から冷温帯にかけてみられ、幅広い二次林の中での樹種。特別な材の利用例はないが、材の硬いことには特徴がある。

シオジ属　Fraxnus sp.

アオダモやシオジなどの仲間であり、樹種によってやや幅広い環境下に見られるが、共通した生育環境は、やや明るい落葉樹林の中である。材は粘りがあることと木目がケヤキに似て好まれる。

このように同定した17種については、その立地はかなり幅があり、ごく周辺の林から伐採した樹種、周囲にある常緑樹の林から運んだもの、材が有用であるために遠方から運んだものなどが混在していると考えられる。

なお、種ごとの試料数についても大きな差がある。数の多いものでは、針葉樹のスギ、コウヤマキ、ヒノキなどであり、広葉樹ではシイ類、クリ、カシ類、ナラ類などである。その他では大半は１～３点である。どちらかと言うと試料数の多い樹種は、有用樹として利用している種が多く、再利用や利用残材の可能性がある。逆に点数の少ない樹種はどちらかといえば、周辺から伐採してきて使ったと思われる樹種が見られる。　（布谷知夫）

［パリノ・サーヴェイ株式会社　引用文献］

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology. I）. Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）(An Introduction to Palynology. II) ,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑,アクアコーラル企画,155p.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.

近藤錬三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究,昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書,32p.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜,北海道大学出版会,387p.

中村　純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）,大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

岡本素治,1973,どんぐりのはなし（3）,Nature Study,19巻8号,大阪市立自然科学博物館編,大阪自然科学研究会,7-10.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集,60p.

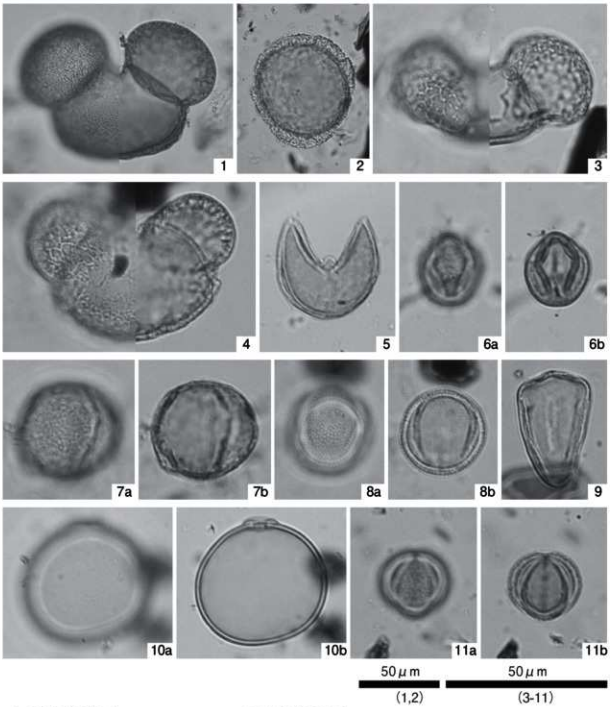
杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－,考古学と自然科学,19,69-84.

徳永桂子,2004,日本どんぐり大図鑑,偕成社,156p.

辻　誠一郎・南木睦彦・鈴木三男・能城修一・鈴木三男・吉川純子・橋屋光孝,1987,東京都中里遺跡の縄文時代以降の古植生,「中里遺跡２－遺跡と古環境２－」,中里遺跡調査団編,東北新幹線中里遺跡調査会,321-323.

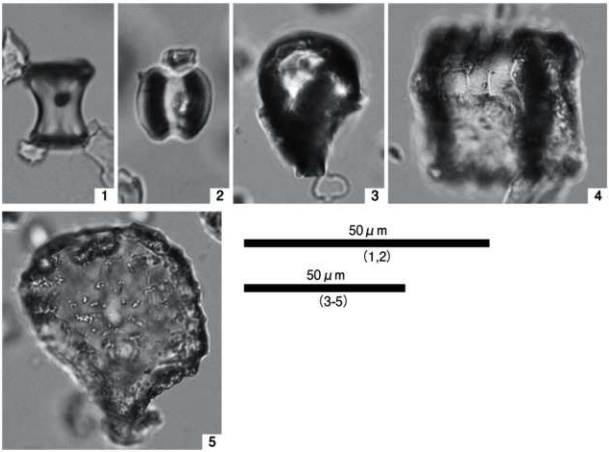
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

写真図版２　花粉化石



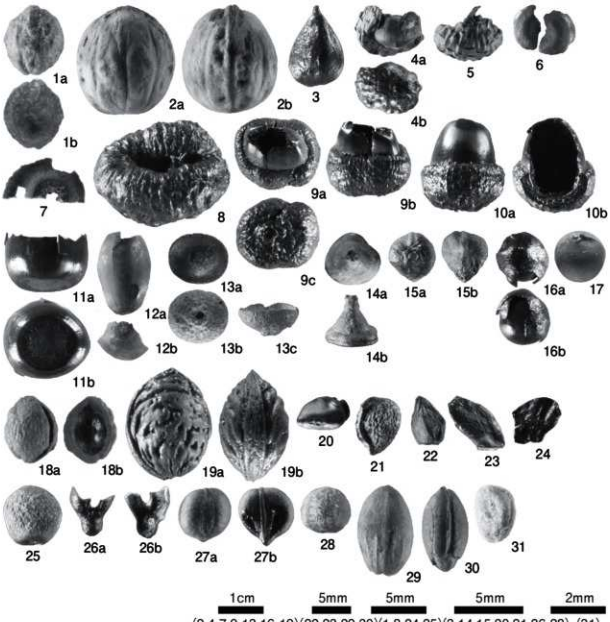
1．モミ属(SR15;4)
2．ツガ属(SR15;2)
3．マキ属(SR15;5)
4．マツ属(SR15;2)
5．スギ属(SR15;3)
6．コナラ属アカガシ亜属(SR15;2)
7．コナラ属コナラ亜属(SR15;4)
8．トネリコ属(SR15;4)
9．カヤツリグサ科(SR15;7)
10．イネ科(SR15;2)
11．ヨモギ属(SR15;2)

写真図版３　植物珪酸体



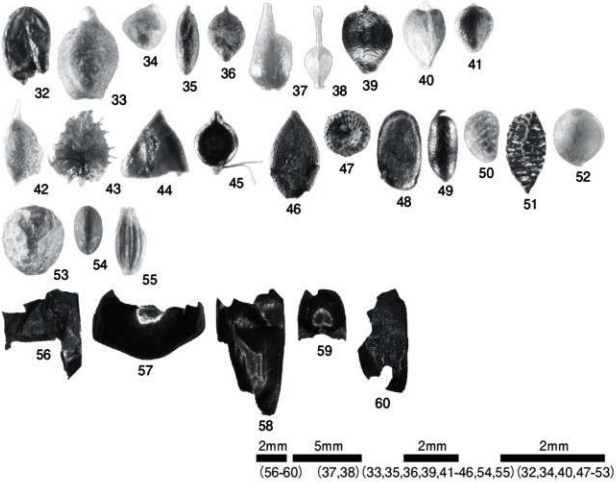
１．ネザサ節短細胞珪酸体(SR15;1)
２．ヨシ属短細胞珪酸体(SR15;3)
３．イネ属機動細胞珪酸体(SR15;1)
４．ネザサ節機動細胞珪酸体(SR15;1)
５．ヨシ属機動細胞珪酸体(SR15;2)

写真図版４　種実遺体(1)



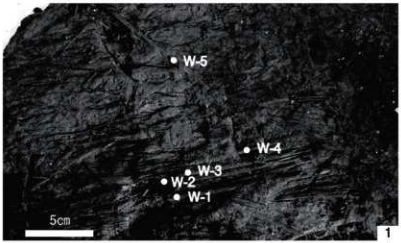
1．ヤマモモ 核(SR15;4)
2．オニグルミ核(SR15;12)
3．イヌシデ 果実(SR15;15)
4．カシワ 殻斗・果実(SR15;12)
5．カシワ 殻斗(SR15;12)
6．クヌギ節ーカシワ 果実(基部)(SR15;8)
7．クヌギ節ーカシワーナラガシワ 果実 頂部)(SR15;8)
8．ナラガシワ 幼果(SR15;15)
9．ナラガシワ 殻斗・果実(SR15;12)
10．ナラガシワ 殻斗・果実(SR15;8)
11．ナラガシワ 果実(基部)(SR15;9)
12．ウバメガシ 果実(SR15;9)
13．ウバメガシーコナラ 殻斗(SR15;15)
14．コナラ亜属 果実(未熟果)(SR15;15)
15．ケヤキ 果実(SR15;15)
16．クスノキ科 果実・種子(SR15;11)
17．クスノキ科 種子(SR15;9)
18．スモモ 核(SR15;11)
19．モモ 核(SR15;9)
20．マメ科 種子(SR15;15)
21．イヌザンショウ種子(SR15;3)
22．カエデ属A 果実(SR15;15)
23．カエデ属B 果実(SR15;15)
24．カエデ属 種子(SR15;3)
25．ゴンズイ 核(SR15;15)
26．ブドウ属(栽培種?) 種子(SR15;4)
27．ノブドウ 種子(SR15;15)
28．クマノミズキ 核(SR15;15)
29．エゴノキ 果実・種子(SR15;13)
30．エゴノキ 種子(SR15;13)
31．ムラサキシキブ属 核(SR15;4)

写真図版５　種実遺体(2)・昆虫遺体

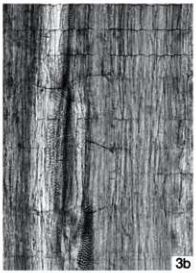


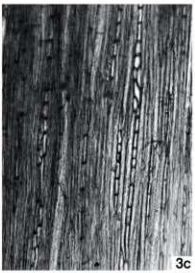
32 . オモダカ科 種子(SR15;3)
33 . ヒルムシロ属 果実(SR15;15)
34 . イネ 穎(SR15;4)
35 . イネ科 果実(SR15;4)
36 . アゼスゲ類 果実(SR15;3)
37 . スゲ属 果胞(SR15;4)
38 . スゲ属(3稜) 果実(SR15;4)
39 . ホタルイ属 果実(SR15;4)
40 . カヤツリグサ科(3稜) 果実(SR15;4)
41 . カヤツリグサ科(2面) 果実(SR15;10)
42 . カラムシ属 果実(SR15;3)
43 . ギシギシ属 花被(SR15;4)
44 . ミゾソバ近似種 果実(SR15;4)
45 . サナエタデ近似種 果実(SR15;3)
46 . タデ属(網目) 果実(SR15;4)
47 . ナデシコ科 種子(SR15;4)
48 . アブラナ科 種子(SR15;4)
49 . ミズオトギリ種子(SR15;3)
50 . キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 核(SR15;4)
51 . カタバミ属 種子(SR15;3)
52 . スミレ属 種子(SR15;4)
53 . イヌコウジュ属 果実(SR15;4)
54 . シソ科 果実(SR15;3)
55 . キク科 果実(SR15;3)
56 . コガネムシ 右上翅(SR15;16)
57 . コガネムシ 前胸背板(SR15;16)
58 . ドウガネブイブイ 左上翅(SR15;16)
59 . クロツヤクシコメツキ 前胸(SR15;16)
60 . コアオハナムグリ 左上翅(SR15;16)

写真図版６　粗朶

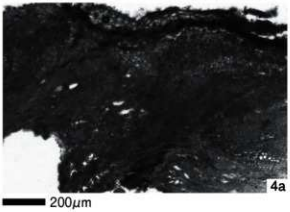


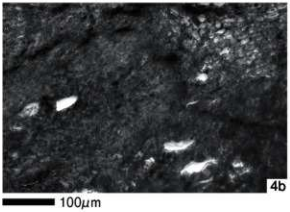
1. 粗朶の外観と樹種同定試料採取位置
2. 粗朶の断面　草本植物同定試料採取位置





3. 広葉樹（W-1）　a：木口,b：柾目,c：板目　200μm:3a　100μm:3b,c





4. 草本類　横断面

5　調査のまとめと検討

a　田丸道遺跡の変遷

弥生時代　ＳＲ15は、弥生時代中期から機能した旧河道である。調査区内ではＳＲ15以外に弥生時代に帰属する遺構は確認されていないが、上流にあたる寺田遺跡でも弥生土器が確認されていることから、周辺に集落があったことは明らかであろう。

また田丸道遺跡調査区南部の包含層からは尾張・三河からの搬入品と考えられる厚口鉢が出土しており、当遺跡内においても弥生時代中期の遺構が存在する可能性は十分に考えられる。

古墳時代　ＳＲ15から、わずかながら古墳時代初頭の土器が出土している。

明確な遺構として捉えられるのは古墳時代後期に入ってからで、南から順に塚田古墳群～旧河道(堰)～竪穴住居群・土坑群が確認される。狭く縦長の調査区であったが、このような「集落と生産と墓」の立地関係を明らかに出来た意義は大きい。７世紀前葉、北岸に集落が営まれ、対岸に灌漑(と水田)と塚が造営される。ＳＲ15以南では生活痕跡が認められないことから、居住域と墓域・生産域が流路によって区分されていたことがうかがえる。

出土した木製品から推測すると、古墳時代後期における先進的な集落であった可能性が高い。塚田古墳群の南方に位置する佐田山３号墳からは７世紀代と考えられる銅鏡が出土しており、当該地における有力者の存在を示しているものといえよう。

平安時代　平安時代前半の遺物はほとんど認められない。ＳＲ15の水流は弱く湿地状であったと推測され、平安時代後期には埋没する。平安時代後期、ＳＲ15北岸に遺構が集中する。掘立柱建物に伴う柱穴群がみられ、特にＳＢ46を構成する柱穴からはいずれも東濃産の緑釉陶器が出土している。ＳＢ46は南北方向に庇をもつ二面廂付建物、あるいは四面廂付建物などが想定され、官衙や有力者の館のような性格を有していたと考えられる。

中世以降　調査区南端に南北朝期の遺構が散見する。埋没しているとはいえ、幅が50m以上あったＳＲ15の上面は生活に適しているとは思えず、川を越えた調査区北部にも遺構はない。第１次調査区の成果から、集落は遺跡の南西方向に広がっていると考えられる。同時期、集落を展開するにあたり塚田２号墳を削平したことが紡錘車の混入から推測される。なお、近世の遺構・遺物は確認されなかった。

b　塚田古墳群

圃場整備前の状況　塚田１号墳、塚田２号墳ともに径20mほどの円墳である。現在は水田のなかに１号墳の墳丘のみが残存している状態であるが、昭和５年に圃場整備が行われる前は周囲に古墳が複数基あったとされ、塚田古墳群は２基以上で構成されていたものと考えられる。遺構面は少なくとも30cmほど削られていることから、周溝の規模は検出状況より広く深く想定する必要があろう。

築造時期　昭和36年に行われた踏査では、塚田１号墳から須恵器片がみつかっているが、今回の調査では遺物はほとんど出土しなかった。しかし、古墳周辺の土坑から出土した石製紡錘車(12)は、塚田２号墳もしくは周辺の埋没古墳に副葬されていたものと考えられる。紡錘車は截頭円錐形を呈し、側面傾斜角は58°である。線刻文様が無いため決め手には欠くが、三重県内の石製紡錘車を分類した河北秀実氏の論考におけるＩｃ類に相当し、６世紀代のものと考えられる。[1] なお、塚田古墳から約4.5km西方に位置する小金塚４号墳からもほぼ同様の形状を呈した滑石製紡錘車が出土しており、６世紀後半から末頃のものと推定されている。[2]

調査区内における古墳時代の遺構では、まず堰の時期は田辺編年ＴＫ209型式併行期の６世紀後半と推測される。調査区北部では土坑群から同ＭＴ15～ＴＫ10型式併行期、ＳＫ18から同ＴＫ217型式併行期の須恵器が出土しており、概ね６世紀半ばから７世紀前半頃にかけて集落が営まれたと考えられる。

次に、塚田古墳周辺の古墳群に目を向ける。隣接する茶臼塚古墳群は、昭和36年の宅地造成の際に６基中５基が削平され、現在は１号墳のみ墳丘が残存する。消滅した２～４号墳からは、人骨・直刀・須恵器坏蓋・提瓶・平瓶が出土している。採集遺物ではあるが、茶臼塚古墳群からは田辺編年ＴＫ209～217型式併行期に属する須恵器平瓶が、中楽集落周辺からは同ＴＫ43～ＴＫ209～217型式併行期の蓋坏がみつかっており、この時期に帰属する古墳が複

数基あったことが想定される。[3]

以上のことから塚田古墳群が築造された時期を推測すると、6世紀後半から7世紀初頭にあたると考えられる。

c　古墳時代の木製品

木製品はすべてＳＲ15の堰に漂着する形で出土した。時期は、概ね都城編年飛鳥Ⅰ期直前の6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。

まず、墨痕が残る木札(288)が注目される。墨痕は赤外線による炭素反応が認められ、筆の返しなどから文字に見えるが識別はできない。側面に糸を括った圧痕があり木簡のようにもみえるが、同時期の木簡は全体的に厚いものであるため、削り屑のように薄い288は木簡とは言い難い。[4] 筆致は、同時期の難波宮や桑津遺跡[5]などの事例と同じく全体的になめらかであり、文字としての時期的な類似点は指摘される。流路出土かつ全体像をうかがい知ることができない破片資料であるためこれ以上のことは不明であるが、いずれにせよ田丸道遺跡に筆と墨を持っていた人物がいたことを示しており、一般的な集落とは異なる性格を有していた可能性が高い。

出土した建築部材をみても、観音扉の蹴放材や校倉造の壁材などから、高床の建物があったことが想定される。古代から平安時代前期にかけて空白の期間はあるものの、平安時代後期には同一の場所に官衙の様相を呈する遺構がみられる点も、古墳時代後期段階の先進的な集落の存在を裏付けよう。

そのほか、祭祀具の舟形木製品が2点見つかったことが注目される。大型品(249)は全面的に焼けていることが特徴で、堰で分断された浅瀬にあたる南岸で水辺のまつりが行われたことを示している。

d　古墳時代の堰

Ｓ15木組の堰　田丸道遺跡の水制遺構は、同時代のＳＤ16・ＳＲ12がＳＲ15と併走していること、河岸にテラスを設けていることから、護岸や堤防といった治水施設ではなく、水を得るための利水施設であったと考えられる。貯水場などや器生産に関する施設も想定されるが、未製品が少ないこと、集落の対岸に位置することから可能性は低いといえよう。

本来、堰とは川の流れに対し直交方向に構築し流れを堰き止めるものであるが、今回は堰1・2ともに川の流れと平行して杭列が並んでいる。

木組みの堰は、横木の前後を直立した杭で止める「直立型堰」と、横木を挟み込む杭が斜めに打ち込まれた「合掌型堰」に分類され、5世紀末～6世紀初頭になると堤防によって自然河川を堰き止め流路を変更する方式が出現する。[6] これに則って見ていくと、堰1は丸太の横木を芯とし板状杭と自然木を並べ重ね、その上に盛土を行う堤防状を呈するものである。堰1は流れそのものを変えるものではなく、例えばより上流部に第一段階の堰があり、堰1は堤を用いて水田への取水を行う第二段階にあたるものと想定される。

一方、堰2は蜜柑割の長い材をしっかり河床に打ち込んでおり上記の「直立型堰」に分類される。堰2は、流れを堰き止め水位を変える構造をとる。

三重県内における木組みの堰　弥生時代末から古墳時代前期段階は、自然河道そのものを制御することが困難であったため人工の流路を附設することで水流を調整し、古墳時代中期以降になると大溝や自然流路など一定の水流があるものを制御している状況が推測されている。[7] 田丸道遺跡の堰についても、堰1～堰2にかけて何段階かの構造を用いており、非常に川幅の広い自然河道の水位を調節していたことがうかがえる。

伊賀市森脇遺跡旧河道ＳＲ413の木組み遺構は、古墳時代後期から飛鳥時代に造られたもので、砂防堰もしくは導水施設の性格をもつ。[8] 津市蔵田遺跡の堰は古墳時代中期後半から後期前半の旧河道に築かれ、排水および水田用の取り水施設と考えられる。[9] いずれの事例も、川幅は狭いものの自然河道に直接杭が穿たれていることが共通している。また蔵田遺跡の事例は丸杭を斜め方向に打ち込み、イネ科の植物を用いていて築堤している。

杭の樹種(第Ⅳ－9～11表)　堰1～4から、計93本の杭が出土した。そのうち製品や板材を転用している7本を除いた86本の樹種の分析を行った。[10]

杭は、耐久性・加工性の求められる製品や建築部材と比べ、木材選択時にあまり付加価値を求める必要がない材である。製作時には遺跡周辺から材を調達していたと考えられるため、杭の樹種はもっとも身近な地域の植生を反映しているといえる。[11]

コナラ亜属がもっとも多くみられる理由は、堰１最下部に用いられた板状杭のほとんどがコナラ亜種であるため、築堤時にまとめて伐採した(もしくは１本の木から製作した)ことが原因であろう。同様の理由からか、丸杭もコナラ亜種が一番多い。

次に多くみられるクリ・カシ類・シイ類(いずれも広葉樹)は、丸太材で樹皮が残るもの(353 ～ 354)があり、転用材ではなく杭用に調達されている。また、同定の結果丸杭には多くの樹種が少量ずつ使用されていたことがわかり、布谷氏の検討にもあるように遺跡周辺に植生が認められる樹種が多い。

堰２の蜜柑割材は、河床までしっかりと突き刺して水の流れを緩める働きを有していたと考えられる。このように長さと強度が必要な角杭にはスギ、ヒノキ属、コウヤマキなど建築部材に用いられる種がみられ、実際に建築部材の転用も５点認められた。

樹種の選択と周辺環境　以上のことから、杭の製作に際して、丸杭には遺跡周辺の木材を、角杭は用途に応じて樹種を選択していたことがうかがえる。

自然科学分析の結果とあわせてみると、まず流路沿いにはクヌギやカシワなどの落葉広葉樹、イネ科やスゲ類などの草本植物がみられた。遺跡の緑辺地には針葉樹と常緑広葉樹があり、丸杭に用いられたアカガシ亜属やシイ類などは川の氾濫低地から離れた場所に生育していたとされる。また花粉分析では、主に山地に分布するとされる針葉樹(スギ・コウヤマキ・ヒノキ)が検出されおり、これらについても花粉の届く地域内に分布していたことが確認された。

丸杭に多かったコナラやクヌギなどのブナ科植物は、森林を開発したのち形成される二次林に多い分類群である。したがって、築堤の際には流路近隣のこれら雑木林から用材を調達したことが推測される。

最後に、丸杭にヒノキ属が用いられている点が注目される。ヒノキ属は山地などを好む樹種のため、スギやコウヤマキとともに遺跡からやや離れた位置から運ばれてきた材と考えられるが、丸杭としても一定量が出土している。ヒノキ属の丸杭(317 ～ 319)は樹皮を剥がし、節を削った痕跡がみられることから、建築部材加工時の残材を用いた可能性が高い。

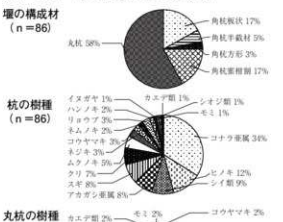
木製品の樹種　スギ・ヒノキ・コウヤマキといった針葉樹が、建築部材をはじめ下駄・曲物底板・舟形などに利用され、これらは強度の必要な堰２にも選択して転用されている。また、杭にはみられなかったアスナロ属が木錘・田下駄枠木・櫂・案ほか多くの木製品に使用されている。

e　平安時代の官衙的遺構

掘立柱建物ＳＢ46　調査区南部で、古墳時代の集落と重複して10世紀後半の柱穴群を検出した。

掘立柱建物ＳＢ46の規模は、調査区外に続くため詳細は不明であるが、建物を構成する柱穴は直径75cmの大きな堀方をもつもので、同時代の斎宮跡で検出する法量と比べても遜色ない。また、どの柱穴からも平安時代後期の緑釉陶器の椀や耳皿が出土していることから、いわゆる「官衙」や有力者の館であったと考えるのが妥当であろう。

第Ⅳ－39図　杭の種類および同定結果



第Ⅳ－20表　ＳＲ15堰一覧

堰名	杭の種類(本数)					備考
	丸	板状	半截	方形	蜜柑	
堰１	26	19	1	1	0	最下部は板状杭が主体
堰２	23	1	3	1	6	蜜柑割り材が主体、転用材多い
堰３	3	0	0	0	1	丸杭がまばらに打たれる
堰４	1	0	0	0	0	丸杭がまばらに打たれる
合計	53	20	4	2	7	計86本

玉城町内の調査事例に目を向けると、上田辺(かみたべ)に位置する師子焼遺跡で猿投産の緑釉陶器片が1点出土している。[12] 鎌倉時代の井戸から出土しているため建物跡に伴うものではないが、玉城町域の緑釉陶器出土事例は田丸道遺跡と併せ2例のみである。また、先述した師子焼遺跡の850m北方に位置する長谷町遺跡では、9世紀後半から10世紀前半の灰釉陶器長頸瓶を用いた火葬墓や土坑が検出している。[13] 上田辺は古代から明治維新まで皇大神宮の祢宜職を世襲した荒木田氏二門の本願地とされることから、師子焼遺跡、長谷町遺跡では同氏との関わりが指摘され、被葬者像にも斎宮、東寺領大国荘関係者のほか同氏が想定される。また、同氏の氏寺にあたる田宮寺と近接する上の山遺跡では10世紀前半の掘立柱建物が検出されており[14]、平安時代の玉城町域における荒木田氏の影響は看過できない。

10世紀前半に盛行を迎えた斎宮も、11世紀前半頃になると祭主の受領化が進行し建物数が減少するなど、衰退期となることが指摘されている。[15] 田丸道遺跡は斎宮に近く、出土遺物も類似性がみられる。しかし、掘立柱建物群が使用された10世紀後半は斎宮の衰退への過渡期にあたることから、斎宮だけでなく、荒木田氏のような在地勢力の影響と関わりも想定する必要があろう。

f　中世後期の田丸道遺跡

中世後期の遺構は、調査区の南端に集中している。付近の遺構面は圃場整備時に30cmほど削平されているため、調査区内で検出した浅い土坑群はより深いものであったと考えられる。第2次調査区内において、ＳＤ１以北からは遺構は認められない。第１次調査区内では、掘立柱建物２棟・井戸２基・中世墓２基を確認しており、居住域は古墳群から北西方向に広がっていることがわかる。

g　調査のまとめと課題

田丸道遺跡は、妙法寺と中楽の集落間にある田面全てを範囲とした大きな遺跡である。全長210mの細長い第２次調査内は旧河道によって南北に分断され、時代によって土地の利用に明確な差がみられた。

周辺には塚田古墳群や茶臼塚古墳群に連なる複数の埋没古墳が存在する可能性が高い。また、川幅の広いＳＲ15が田丸城から北東方向へ流れているため、今後の調査を行うにあたっては流路域の推定が重要となろう。　（相場）

[註]

(1) 6世紀後半～7世紀初頭は近畿地方で石製紡錘車が盛行し、南勢地域でもその時期の増加例が多くみられる。田丸道遺跡周辺では、寺田遺跡で放射状線刻の施された6世紀前半の石製品紡錘車が出土している。石製紡錘車については以下の文献を参照した。
・國下多美樹「京都府下の紡錘車について」(「京都考古」第50号京都考古刊行会、1988年)
・河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」(「Mie history」No.3　三重県歴史文化研究会、1991年)

(2) 三重県埋蔵文化財センター『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』(2010年)

(3) 相場さやか「玉城町中楽の考古資料～古墳群出土資料を中心に～」(『研究紀要』第21号　三重県埋蔵文化財センター、2011年)

(4) 墨痕の残る木札については、舘野和己氏、榎村寛之氏にご教示頂いた。

(5) 本簡学会編『木簡研究』14 (1992年)、22 (2000年)

(6) 広瀬和雄「古代の開発」(『考古学研究』第30巻第2号、考古学研究会、1983年)

(7) 和気清章「三重県の治水・利水遺跡について」(「治水・利水遺跡を考える」第7回東日本埋蔵文化財研究会 資料編、1998年)

(8) 三重県埋蔵文化財センター『森脇遺跡(第4次)・遊山城跡発掘調査報告』(1996年)

(9) 津市教育委員会『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報 蔵田遺跡 平田遺跡 位田東遺跡』(1993年)

(10) 種同定を行った器種は、杭86点・板材転用杭7点・材片34点の計127点で、実測図を取ったものについては遺物観察表に反映した。ただし、杭18点と材片23点は残存状況が悪く、実測図は掲載できなかった。この杭18点の樹種は、第Ⅳ－19表に反映している。板材23点の内訳はスギ7、コウヤマキ5、ヒノキ4、コナラ亜属2、カエデ類・ムクノキ・ヤマハゼ各1、不明1である。
杭の樹種同定に関して、以下の文献を参考にした。
・佐々木由香・能城修一「東京都下宅部遺跡の水場遺構材から復元する縄文時代後期の森林資源利用」(「植生史研究」第12巻－1、2004年)

(11) 樹種の選択については、中原計氏にご教示頂いた。

(12) 三重県埋蔵文化財センター『師子焼遺跡発掘調査報告』(2009年)

(13) 三重県埋蔵文化財センター『長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』(2010年)

(14) 三重県埋蔵文化財センター『上の山遺跡発掘調査報告』(1992年)

(15) 榎村寛之『伊勢神宮と古代王権』(筑摩選書、2012年)

Ⅴ　玉城町世古　世古里中遺跡

1　調査経緯と調査区の状況

世古里中遺跡は度会郡玉城町世古字里中に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年11月22日から同年12月20日にかけて断続的に事前調査(工事立会)を実施した。最終調査面積は146㎡である。

今回の調査地は、世古集落南縁の道路部分に埋設水路を設置する工事に伴っている。そのため、調査区の幅は70 ～ 80cm程度と狭いが、総延長は約207mと長い。調査区の標高は、西端部で約17.7m、東端部で約16.6mで、東に向かって緩やかな傾斜をしている。世古集落が微高地上に立地し、道路を挟んで南は水田である。したがって、調査区は世古集落の乗る微高地と低地である水田域のちょうど境目にあたる場所であった。

調査に当たっては、西端から埋設管(４m)を基準にグリッドとしたが、接続の関係で一部それ以外の単位となったものもある。

2　層位と遺構

層位　埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した(第Ⅴ－３・４図)。層の最深部には白灰～青白色を呈する粘土層がある(第14層)。この層は、深いところでは路面下約200cmで見られるが、ａ15 ～ 25グリッド付近では路面下約110cmまで高くなる。深い部分については、微高地縁辺を巡っていた流路に伴う落ち込みではないかと考えられる。ａ34グリッド付近で見られた杭列は、これに関連すると考えられる。

白色系粘土層の上には、黒褐色系粘土が堆積する(第10・11層)。一部に有機質と砂利層を含むため、流路構成土層と考えられるが、土質は水流が穏やかであったことを示している。この層には一部奈良時代の遺物を含むが、中心となるのは鎌倉時代から江戸時代初期の遺物で、とくに戦国時代末期から江戸時代初期にかけての遺物は多量に含まれていた。

黒褐色系粘土層の上は、現代のほ場整備や道路改良に伴う整地層・改良土層である。

遺構　白色系粘土層上面に、不定形な土坑が散在しているほか、流路に伴う落ち込みと考えられる遺構が見られた。土坑は直径1.5 ～ 2.0m程度の不整楕円形を呈するものが多い。白色系粘土層に達するように掘られているため、粘土採掘坑かと考えられる。粘土採掘坑からの出土遺物は少ないが、ａ５グリッド検出の土坑から12世紀後葉頃の土師器甕が完形に近い状態で出土していることから、古くはその時代まで及ぶと考えられる。また、黒褐色系粘土層からの遺物出土状態から見て、戦国時代末期頃の粘土採掘坑も確実に存在すると考えられる。

3　出土遺物

今回の調査で出土した遺物を第Ⅴ－５・６図に示した。奈良時代(１～８)、平安時代末期～鎌倉時代(10 ～ 19)、戦国時代末期～江戸時代初期(20 ～ 70)に大別される。これ以外では、時期不明の石製品・土製品(71 ～ 76)もある。

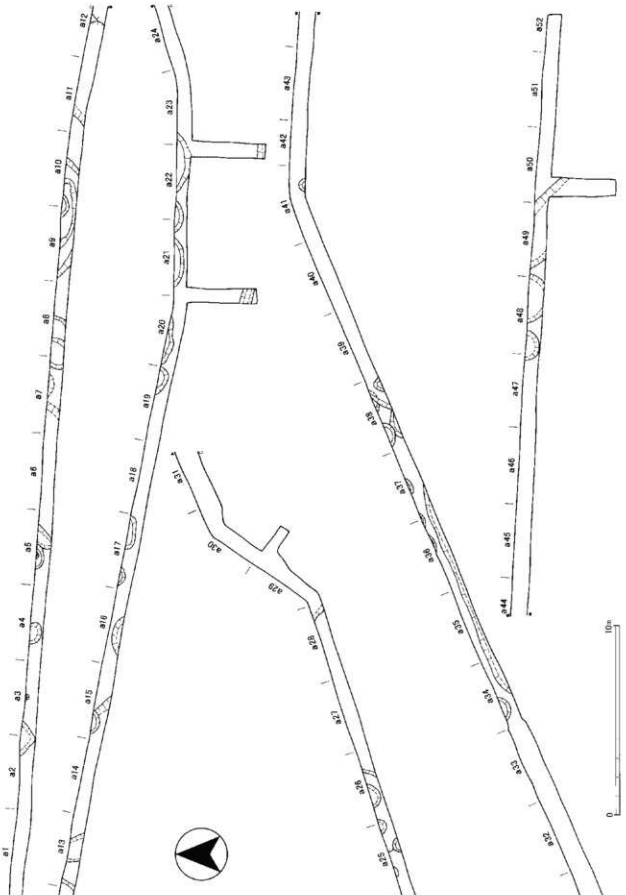
奈良時代の土器は、３のように比較的良好な破片もある。８は細い棒に粘土を巻き付けたまま焼成したと考えられる把手で、中の棒は炭化して遺存する。15は知多半島産の陶器椀(山茶椀)で、高台内面には「有田」かと考えられる墨書がある。20 ～ 57は16世紀後葉から17世紀初頭頃の土師器類で、多様な形態が見られる。

71は棒状土製品で、土器窯に伴う窯道具と考えられる。76は硯の転用と考えられ、鋸歯状の凹凸があり、一面には「爾候」の刻字が読める。

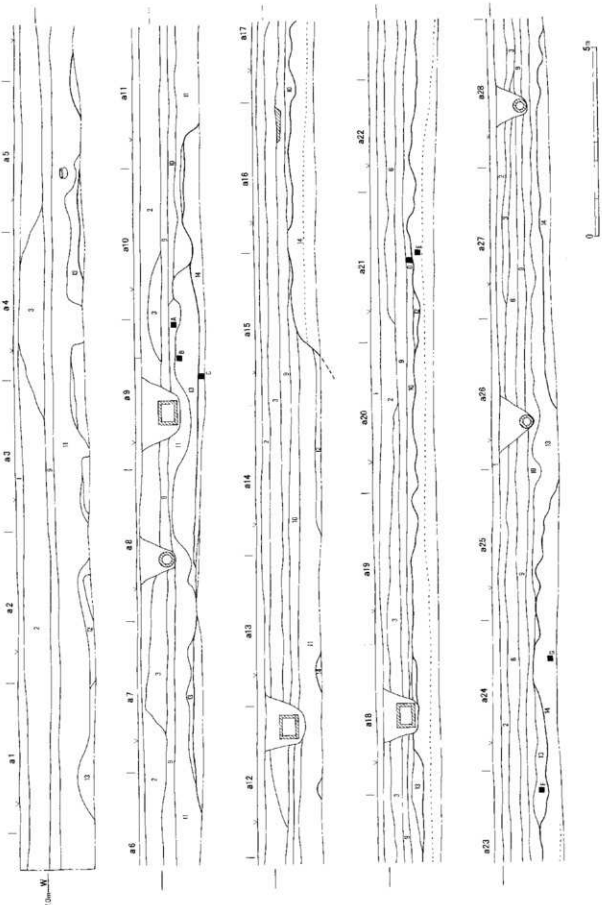
4　小結

今回の調査は、遺跡縁辺部分に長大なトレンチを設定した状況であった。調査の状況から見て、調査区を境に、現在の世古集落部分に出土遺物が示す時期の集落跡があり、調査区の南部には湿地(流路を含む)が広がっていたと考えられる。両者の境目には粘土採掘坑があった。棒状土製品の出土もあわせ、世古里中遺跡の本体は土器窯とその関連集落遺跡と考えることができよう。　(伊藤)

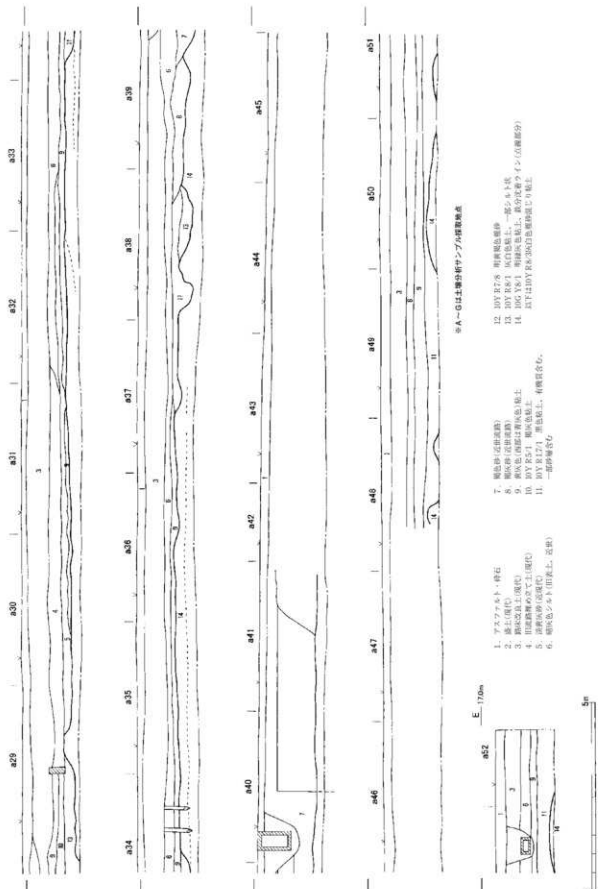
第Ⅴ－１図　世古里中遺跡ほか調査区位置図（１：5,000）



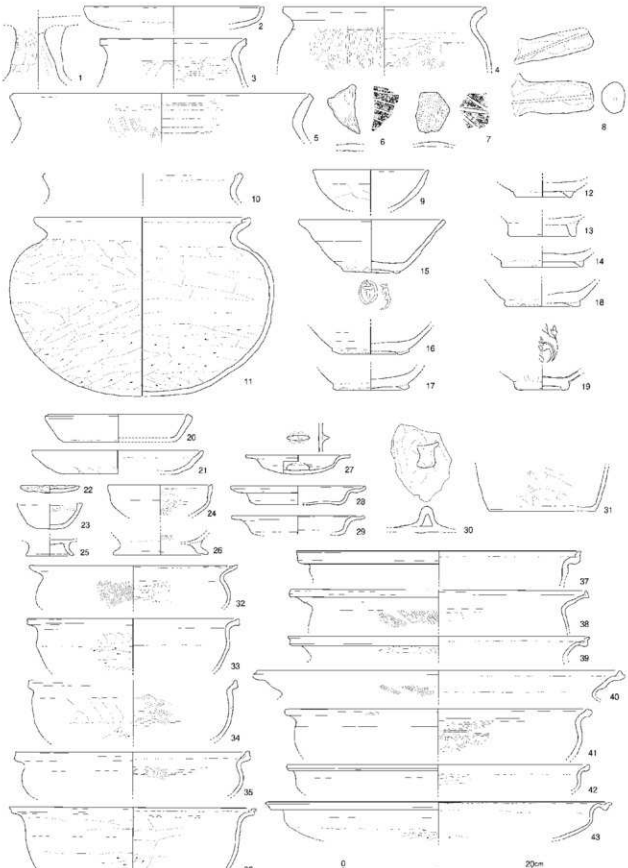
第Ⅴ－２図　世古里中遺跡調査区平面図（1：200）



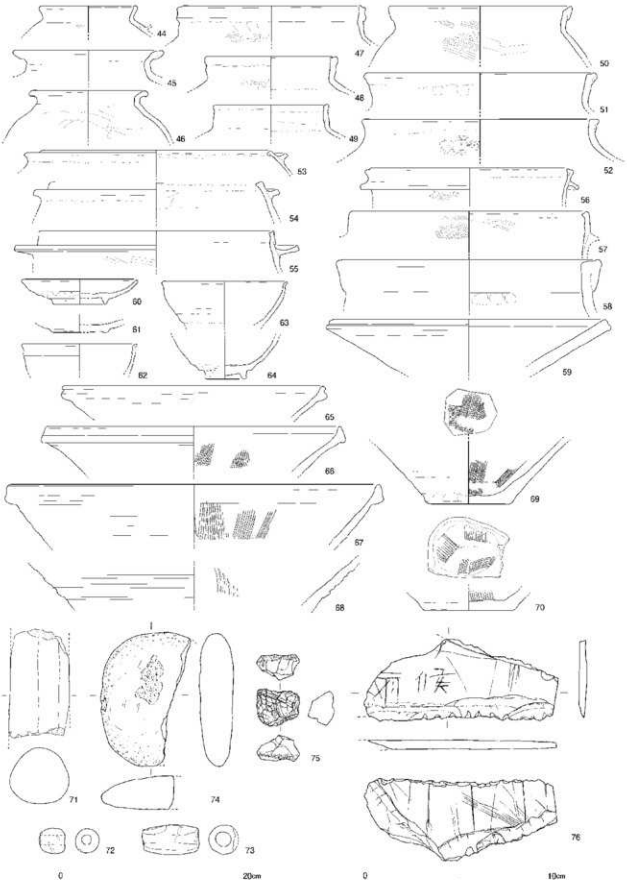
第Ⅴ－３図　世古里中遺跡調査区北壁土層(1)（１：100）



第Ⅴ-4図　世古里中遺跡調査区北壁土層(2)（1：100）



第Ⅴ－５図　世古里中遺跡出土遺物実測図(1)（１：４）



第Ⅴ－６図　世古里中遺跡出土遺物実測図(2)（76は１：２、他は１：４）

第Ⅴ－１表　世古里中遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	1-3	土師器	高杯脚	a１4	灰褐粘	(脚柱)4.8	外:ハケメ 内:シボリメメ→オサエ・ナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	脚柱12/12	金鳥時代
2	1-2	土師器	皿	a１1	黒褐粘	(口)17.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4 にぶい黄橙	□縁2/12	金鳥時代
3	1-1	土師器	甕	a１1	青灰粘～黒褐粘	(口)15.4	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/2 灰黄褐	□縁5/12	金鳥時代
4	4-4	土師器	甕	a１1	青灰粘～黒褐粘	(口)21.5	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR6/4 にぶい黄橙	□縁1/12未満	金鳥時代
5	1-4	土師器	把手付鉢	a１3	青灰粘～灰褐粘	(口)320 推定	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3 にぶい黄橙	□縁1/12	金鳥時代
6	4-6	土師器	甕	範囲確認調査坑	Ｎｏ．2	－	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヘラ状工具による流線状施文？	密	10YR7/3 にぶい黄橙	小片	金鳥時代　沈線状のものは重複痕かも
7	4-5	土師器	甕	a３9	褐灰砂	－	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヘラ状工具の流線状施文？	密	5Y7/1 灰白	体部片	金鳥時代
8	4-3	土師器	把手	a３2	黄灰砂	(残長)8.6	外:円棒状具の挿入→ナデ・オサエ	やや密	10YR7/4 にぶい黄橙	把手部分	円棒状具は剥ぎった状態で残成(脱化材が入っている)
9	10-4	土師器	椀	a５	黒褐粘土	(口)12.2	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	10YR6/2 灰黄褐	□縁1/12	平安時代後期
10	7-6	土師器	甕	a２3	灰褐粘	(口)21.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y5/3 黄褐	□縁1/12	平安時代後期
11	12-1	土師器	甕	a５	黒褐粘土	(口)22.8 (高)18.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗	2.5Y7/1 灰白	□縁9/12	平安時代後期末
12	1-5	陶器 須恵器	椀	a４4～4６	暗灰シルト	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y7/1 灰白	高台9/12	山茶椀　渥美　内外面摩滅
13	1-6	須恵器 陶器	椀	a４4～4６	暗灰シルト	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台4/12	山茶椀　渥美
14	2-2	陶器	椀	a４4	黒褐粘土	(高台)8.7	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y7/1 灰白	高台7/12	山茶椀　知多・猿投
15	13-1	陶器	椀	a３4	黒褐粘	(口)15.5 (高台)5.9	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	やや粗	N7/ 灰白	□縁6/12 高台12/12	山茶椀　知多・猿投　高台に墨書(有田)か？
16	2-3	陶器	椀	範囲確認調査坑	Ｎｏ．4	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	7.5R5/6 灰褐	高台6/12	山茶椀　渥美
17	2-1	陶器	椀	a３4	黄灰砂	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y7/1 灰白	高台6/12	山茶椀　渥美　内面研磨
18	1-7	陶器	椀	a２9	灰褐粘シルト	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台4/12	山茶椀　知多・猿投
19	2-4	青磁	椀	a４9	灰砂シルト	(高台)5.7	外:ロクロケズリ→鎬蓮弁文 内:ロクロナデ→スタンプ花文	密	10YS2オリーブ灰(亀)　灰白(地)	高台6/12	龍泉窯
20	5-1	土師器	皿	a３2	黄灰砂	(口)15.6	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	□縁1/12	中世後期～近世前期
21	11-5	土師器	皿	a２6	灰褐粘シルト	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR5/2 灰黄褐	□縁2/12	中世後期
22	8-3	土師器	小皿	a２3	灰褐粘	(口)5.8 (高)0.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	完存	中世後期～近世前期
23	5-6	土師器	小椀	a２2	灰褐粘	(口)5.8～6.8 (高)2.7	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/4 浅黄	□縁3/12	中世後期～近世前期
24	10-2	土師器	小椀	a１4	灰褐粘	(口)11.1	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	□縁2/12	中世後期～近世前期
25	9-9	土師器	小椀	a２9	灰褐粘シルト	(高台)5.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	2.5Y7/3 浅黄	高台3/12	中世後期
26	5-4	土師器	椀	a３2	黄灰砂	(高台)10	外:貼り付け高台→ナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	高台3/12	中世後期～近世前期
27	8-6	土師器	落とし蓋	a２3	灰褐粘	(口)11.0 (高)2.0	外:ナデ→ヨコナデ→摘部付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y6/3 にぶい黄	□縁3/12	中世後期　茶筅蓋
28	9-8	土師器	落とし蓋	a２2	灰粘シルト	(口)14.2	外:ナデ→ヨコナデ→摘部付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	□縁2/12	中世後期　内面に炭化物
29	10-7	土師器	落とし蓋	a２5	灰褐粘シルト	(口)14.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5YR6/3 にぶい黄	□縁2/12	中世後期
30	7-7	土師器	落とし蓋	a１6	灰褐粘	(摘幅)2.3	外:ナデ 内:ナデ	密	2.5Y5/2 暗灰黄	摘部12/12	中世後期～近世前期
31	11-6	土師器	壺	a２2	灰褐粘	(底)11.4	外:板ナデ 内:板ナデ	密	2.5Y6/1 黄灰	□縁1/12	中世後期～近世前期
32	8-4	土師器	鍋	a３1	黄灰砂	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	5Y8/2 灰白	□縁1/12	中世後期
33	5-3	土師器	鍋	a３4	黄灰砂	(口)22.4	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/3 浅黄	□縁1/12	中世後期末
34	5-5	土師器	鍋	a３4	黄灰砂	(口)22.2	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ・ケズリ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	□縁2/12	中世後期～近世前期
35	7-2	土師器	鍋	a３4	黄灰砂	(口)24.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	□縁2/12	近世初頭
36	10-1	土師器	鍋	a２9	灰褐粘シルト	(口)26.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	10YR5/1 褐灰	□縁3/12	近世初頭
37	11-1	土師器	鍋	a２9	灰褐粘シルト	(口)30.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	□縁1/12	近世初頭
38	11-3	土師器	鍋	a２5	灰褐粘シルト	(口)31.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/2 灰黄	□縁1/12	中世後期
39	6-1	土師器	鍋	a２9	灰褐粘シルト	(口)31.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	□縁1/12	中世後期
40	6-3	土師器	鍋	a２4	灰褐粘	(口)39.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	□縁1/12	中世後期～近世前期

第Ⅴ－２表　世古里中遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
41	6-2	土師器	鍋	a３２	黄灰砂	(口)32.4	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	□縁1/12	中世後期～近世前期
42	7-1	土師器	焙烙	a３２	黄灰砂	(口)32.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	□縁1/12	近世初頭
43	6-4	土師器	焙烙	a３４	黄灰砂	(口)36.6	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	□縁1/12	近世初頭
44	8-5	土師器	把手付丸鍋	a３１	黄灰砂	(口)10.4	外:ハケメ→ヨコナデ→把手付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	□縁2/12	中世後期
45	5-2	土師器	壺	a２３	灰褐粘	(口)15.8	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	□縁2/12	中世後期～近世前期
46	10-3	土師器	壺	a８	青灰～黒褐粘	(口)12.4	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y6/1 黄灰	□縁2/12	中世後期～近世前期
47	11-4	土師器	茶壺	a２９	灰褐粘シルト	(口)20.1	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	□縁1/12	中世後期～近世前期
48	7-3	土師器	壺	a３２	黄灰砂	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	□縁2/12	外側の沈線状深みは、ヘラ状工具による
49	5-8	土師器	壺(茶壺)	a３２	黄灰砂	(口)12.2	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/3 にぶい橙	□縁2/12	中世後期～近世前期
50	8-1	土師器	壺	a２４	灰褐粘	(口)19.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	5Y7/2 灰白	□縁2/12	中世後期～近世前期
51	5-7	土師器	壺	a３４	黄灰砂	(口)24.6	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/2 灰白	□縁2/12	中世後期～近世前期
52	7-4	土師器	壺	a３２	黄灰砂	(口)25.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/4 淡黄	□縁1/12	近世初頭
53	11-2	土師器	羽釜	a５	黒褐粘土	(口)24.0 (鍔)27.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y8/1 灰白	□縁1/12	中世後期
54	8-2	土師器	羽釜	a３１	黄灰砂	(口)22.2	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/2 灰白	□縁1/12	中世後期
55	10-5	土師器	羽釜	a１７	灰褐粘	(口)24.7 (鍔)30.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR6/1 褐灰	□縁1/12	中世後期～近世前期
56	10-6	土師器	羽釜	a２９	灰褐粘シルト	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	□縁1/12	中世後期～近世前期
57	7-5	土師器	羽釜	a３４	黄灰砂	(口)25.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	□縁1/12	近世初頭
58	3-3	陶器	甕	a３２	黄灰砂	(口)28.0	外:回転ナデ 内:オサエ→回転ナデ	やや密	5YR6/6 橙	□縁1/12未満	雪溜
59	2-5	陶器	練鉢	a３４	黄灰砂	(口)30	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6 橙	□縁1/12	雪溜　口縁端部摩耗
60	9-2	陶器	皿	a３２	黄灰砂	(口)12.2 (高)2.6	外:ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	5Y6/3灰オリーブ(施) 5Y7/3灰白(地)	口縁3/12 高台5/12	志野丸皿
61	9-1	陶器	皿	a３２	黄灰砂	(高台)6.0	外:ケズリ出し高台→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	2.5Y8/1 灰白(地・施)	高台3/12	志野
62	9-6	陶器	天目茶碗	a３２	黄灰砂	(口)12.2	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	5YR2/1黒褐(施) 2.5Y8/2 灰白(地)	□縁1/12	瀬戸美濃　大窯１期
63	9-7	陶器	天目茶碗	a１３	青灰～灰褐粘	(口)14.2	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	やや密	7.5YR2/1黒(施) 2.5Y8/1 灰白(地)	□縁1/12	瀬戸美濃　大窯３期か？ 外面下半は銹釉
64	9-5	陶器	天目茶碗	a３１	黄灰砂	(高台)4.3	外:ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	やや密	7.5YR2/1黒褐(施) 2.5Y7/2 灰黄(地)	□縁11/12	瀬戸美濃　天目茶碗伊賀大窯３期前半
65	3-2	陶器	擂鉢	a３２	黄灰砂	(口)28.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	10YR4/1 褐灰(地)	□縁1/12	瀬戸美濃　大窯１期
66	3-1	陶器	擂鉢	a２９	灰褐粘シルト	(口)32.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→擂り目	やや密	5YR5/2 灰褐(地)	□縁1/12	瀬戸美濃　大窯２期前半
67	3-4	陶器	擂鉢	a２０	灰褐シルト	(口)40.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→擂り目	密	7.5YR3/2 黒褐(地)	□縁1/12	瀬戸美濃　大窯２期前半
68	4-1	陶器	擂鉢	a２７	灰褐粘土～シルト		外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→擂り目	密	7.5YR5/1 褐灰(地)	体部片	瀬戸美濃　大窯期
69	4-2	陶器	擂鉢	a２５	灰褐粘シルト	(底)9.0	外:ロクロナデ→糸切り 内:ロクロナデ→擂り目(７方向)	密	2.5YR4/3赤灰(地) 10YR8/3浅黄橙(地)	底部6/12	瀬戸美濃　大窯期
70	13-2	陶器	擂鉢	a４０	現代流路	(底)9.6	外:ロクロナデ→糸切り 内:ロクロナデ→擂り目	やや密	10YR8/3 浅黄橙	底3/12	瀬戸美濃　大窯期　底部片を研磨工具に転用
71	13-2	土師質	柱状土製品	a３１	黄灰砂	(幅)6.2	外:オサエ・ナデ 断面形は不整の三角形状に成形	粗	2.5Y7/2 灰黄	－	全体に２次被熱
72	9-3	土師質	土鍋	a２２	灰褐粘	(長)27.5 (幅)27	孔径約10cm	密	10YR4/1 褐灰	完存	重量14.63ｇ
73	9-4	土師質	土鍋	a３８	黒灰粘	(長)6.0 (幅)3.1	孔径約1.6cm	やや密	5Y7/1 灰白	一部欠損	重量42.82ｇ
74	14-1	石製品	敲き石	a３２	黄灰砂	(長)14.1 (幅)9.4	上面に敲打痕・研磨痕	－		重量600ｇ	花崗閃岩製
75	14-2	石製品	火打石	a３４	黄灰砂	(長)4.5 (幅)2.95	稜部に敲打痕	－		重量56.17ｇ	チャート製
76	13-3	石製品	鄂状刃部	a３４	黄灰砂	(長)4.35 (幅)10.2	鏡を転用？離部はノコギリ状となる	－	黒灰	重量28.88ｇ	粘板岩製　「・・・鄂状」の別書

Ⅵ　玉城町世古　西垣内遺跡（第２次）

１　調査経緯と調査区の状況

西垣内遺跡は度会郡玉城町世古字西垣内に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年11月22日から同年12月20日にかけて断続的に、52㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、世古集落北西丘陵部の道路部分に埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区の標高は、西端部で約18.8m、東端部で18.1mである。調査にあたっては、西端からおよそ４m毎にグリッドを分けていった。

なお、県道田丸停車場斉明線の道路改良工事に伴い、平成４年度に調査された「世古遺跡」は、現在の認識でいう西垣内遺跡に相当する。そのため、今回の調査を「西垣内遺跡第２次」とする。

２　層位と遺構

層位　埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した。層序の最深部には、黄橙～白灰色の粘土層が見られる（第10層）。この層は、西端部では掘削深度以下に達して谷状地を形成し、ａ２グリッド付近では標高18m程度、ａ19グリッド付近では17.3m程度の高さである。つまり、調査区西端部に谷状地を形成しているものの、全体としては東側に下降する形状といえる。ａ７グリッド付近では杭列もあったため、全体として湿地状の落ち込みを呈していると見られる。

白色系粘土層の上部には、灰色～淡灰褐色系粘土が堆積する（第８・９層）。これらは、ａ15グリッド以西には薄く堆積し、それ以東では遺構埋土として見られる。ここからは、一部奈良時代のものを含むが、鎌倉時代から江戸時代初期にかけての遺物が見られる。とくに戦国末期から江戸初期にかけての遺物は、世古里中遺跡同様多く含んでいた。

灰色～淡灰褐色系粘土層の上は、ほ場整備や道路改良に伴う整地層・改良土層である。

遺構　全体として湿地状の落ち込みを呈するが、ａ15グリッド以東では白褐色系粘土層上面に不定形な土坑が見られた。土坑は直径1.5～2.0m程度の不整楕円形を呈し、白色系粘土層に達するように掘られているため、世古里中遺跡の遺構と同様な粘土採掘坑かと考えられる。粘土採掘坑からの出土遺物は少ないが、ａ18グリッド検出の土坑から12世紀後葉頃の土師器甕が出土しており、この頃を中心とした時期のものと考えられる。また、世古里中遺跡と同様に、戦国末期頃の粘土採掘坑もあると考えられる。

３　出土遺物

今回の調査で出土した遺物を第Ⅵ－２図に示した。遺物には、奈良時代（１～３）、平安時代末期から鎌倉時代（５～11）、室町時代（12）、戦国末期から江戸初期（13～23）のものがある。４は形態的には古代以前のものに類似するが、焼成が硬質で、調整手法も江戸期のものと共通するため、江戸期のものである可能性が高いと考えている。これ以外では、時期不明の石製品・土製品（24～28）や、銭貨（29）もある。図示した以外の遺物では、古墳時代の土師器高坏、12世紀代の渥美産陶器壺、16世紀代の瀬戸大窯系擂鉢などがある。

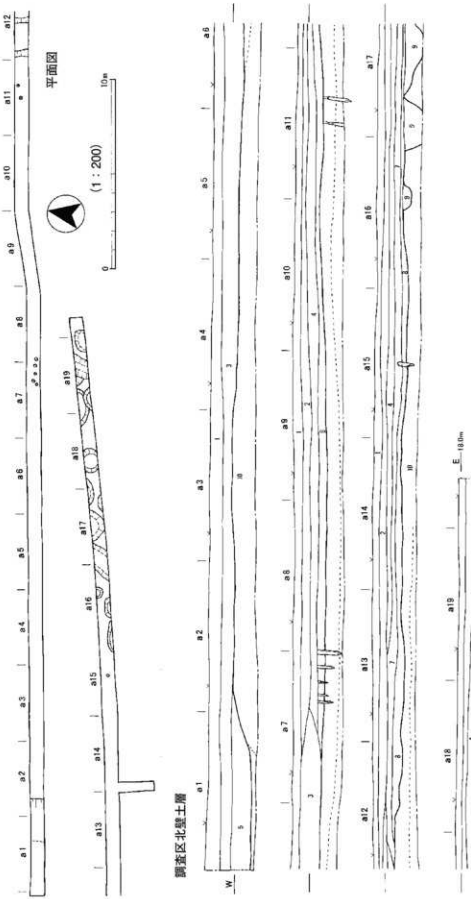
24～26は棒状土製品で、断面はやや方形気味の楕円形である。29は北宋銭「熙寧元寶」である。

４　小結

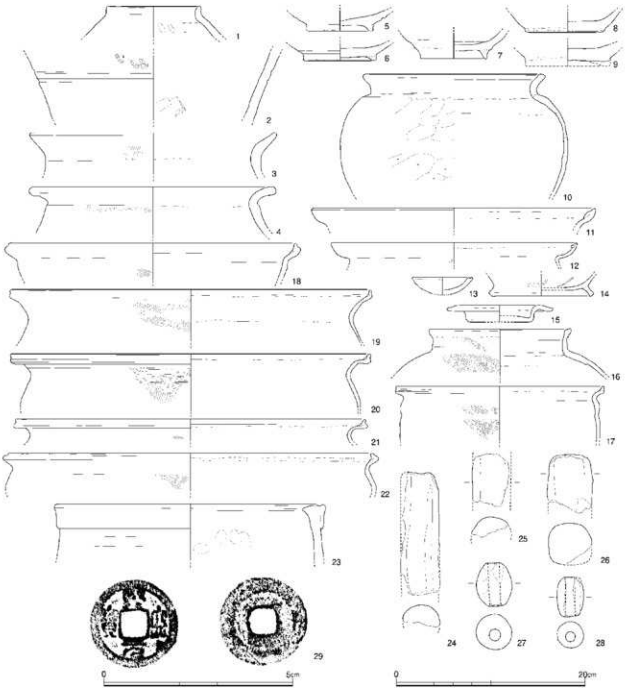
西垣内遺跡は、今回の調査地から約50m西にあたる地点で平成４年に県道改良工事に伴う発掘調査が実施されている（第Ⅴ－１図）。平成４年調査Ｂ区では、大量の土師器類とともに重複する掘立柱建物群が確認されている。西垣内遺跡の中心は、平成４年調査区を含む丘陵部にあると考えられる。

今回の調査区は、西垣内遺跡の中心部となる丘陵部の南縁辺部分にあたる。世古里中遺跡と同様、調査区の南部には湿地（流路を含む）が広がっており、調査区付近は粘土採掘坑として利用された地と考えられる。

世古里中遺跡と同様、当遺跡は土器窯とその関連集落遺跡と考えることができよう。　（伊藤）



第Ⅵ－１図　西垣内遺跡調査区平面図および土層断面図



第Ⅵ－２図　西垣内遺跡出土遺物実測図（29は１：１、他は１：４）

第Ⅵ－１表　西垣内遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	種・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	6-1	須恵器	短頸壺	a１４	灰褐土	(口)10.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	5Y5/1　灰	口縁2/12	奈良～平安時代
2	5-1	須恵器	壺	a１４	灰褐土	(頸)21.2	外:回転ナデ→カキメ→沈線・波状文 内:板ナデ→回転ナデ	やや密	10Y 8/2/4 にぶい黄橙	頸部1/12	古墳時代～奈良時代
3	4-2	土師器	甕	a１５	灰褐土	(口)26.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10Y 8/2/3 にぶい黄橙	口縁1/12未満	奈良時代
4	5-2	土師器	甕	a１２	灰褐土	(口)26.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/2　灰黄	頸部2/12	近世初頭？
5	6-3	陶器	椀	a１４	灰褐土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ　内:ロクロナデ	密	2.5Y7/1　灰白	高台4/12	山茶椀　渥美　内面破磨
6	5-5	灰釉陶器	椀	縄潰確認調査坑	No.１	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ　内:ロクロナデ	密	5Y7/1　灰白	高台12/12	猿投・知多　高台に条状の圧痕
7	6-4	陶器	椀	a１５	灰褐土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ　内:ロクロナデ	密	2.5Y8/1　灰白	高台3/12	山茶椀　渥美
8	5-3	陶器	椀	a１０	灰褐土	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ　内:ロクロナデ	やや密	5Y7/1　灰白	高台5/12	山茶椀　渥美　全体に摩滅

第Ⅵ－２表　西垣内遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	種・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
9	5-4	陶器	椀	ａ１３	灰色土	(底部)9.0	外:ロクロナデ→糸切り？→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y6/2 灰白	底部3/12	山茶椀　渥美
10	6-2	土師器	甕	ａ１８	灰褐土	(口)19.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10Y8/6.2 灰黄褐	口縁小片	平安時代後期末
11	4-4	土師器	鍋	ａ１０	灰褐土	(口)30	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	10Y8/4 にぶい黄橙	口縁1/12未満	中世前期
12	4-3	土師器	鍋	ａ１９	灰褐土	(口)26	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR5/2 灰黄褐	口縁1/12未満	中世後期
13	3-5	土師器	小鍋	範囲確認調査坑	Ｎｏ．１	(口)6.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁1/12	中世後期～近世初頭
14	3-3	土師器	台付椀？	ａ８	灰色粘土	(高台)11	外:ハケメ→貼り付け高台、ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	高台3/12	中世後期～近世初頭
15	1-1	土師器	落とし蓋	ａ１０	灰褐土	(蓋)11.2 (高)1.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁2/12	中世後期～近世初頭
16	3-2	土師器	壺	ａ９	灰色粘土	(口)15	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁3/12	中世後期～近世初頭
17	3-1	土師器	鍋	範囲確認調査坑	Ｎｏ．１	(口)22	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10Y8/2 灰白	口縁1/12	中世後期
18	2-1	土師器	鍋	範囲確認調査坑	Ｎｏ．１	(口)31.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期～近世初頭
19	2-3	土師器	鍋	ａ８	灰色粘土	(口)38.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10Y8/1 灰白	口縁1/12	中世後期
20	2-2	土師器	鍋	ａ７	灰色粘土	(口)38	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期
21	1-3	土師器	鍋	範囲確認調査坑	Ｎｏ．１	(口)37.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	口縁1/12	中世後期末
22	1-4	土師器	鍋	範囲確認調査坑	Ｎｏ．１	(口)39.5	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	口縁1/12	中世後期～近世初頭
23	4-1	陶器	甕	ａ１５	灰褐土	(口)28.5	外:回転ナデ 内:オサエ・ナデ→回転ナデ	密	5YR4/2 灰褐(亀) 2.5YR3/2(茶)(亀)	口縁1/12未満	雪舟
24	3-4	土師質	棒状土製品	ａ１０	灰褐土	(幅)4.0	外:ナデ・オサエ 断面形は円形	密	10Y8/2 灰白	－	全体に２次被熱
25	3-7	土師質	棒状土製品	ａ１５	灰褐土	(幅)3.7以上	外:ナデ・オサエ 断面形は不整円形	密	10Y8/2.3 浅黄橙	－	全体に２次被熱
26	3-6	土師質	棒状土製品	ａ１８	灰褐土	(幅)4.5	外:ナデ・オサエ 断面形は不整方形	密	2.5Y6/2 灰黄	－	全体に２次被熱
27	4-6	土師質	土錘	ａ１９	灰褐土	(長)4.6 (幅)3.8	孔径約１．２cm	やや密	2.5Y7/2 灰黄	完存	重さ50.78g
28	4-5	土師質	土錘	ａ１５	灰褐土	(長)4.2 (幅)2.8	孔径約１．１cm	やや密	10YR7/2 にぶい黄橙	一部欠損	重さ27.93g
29	3-8	銅製品	銭貨	ａ１３	灰褐土	(径)2.3	北宋銭「熙寧元寶」篆書体	－	－	完存	

Ⅶ　明和町簑村　鳥墓遺跡(第２次)

１　調査経緯と調査区の状況

鳥墓遺跡は多気郡明和町簑村字鳥墓に所在する。県営かんがい排水事業により、平成23年12月５日から同月７日にかけて断続的に、30㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、鳥墓神社(明和町指定史跡鳥墓神庠跡)の南辺道路部にあたる。埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区の標高は概ね15.5ｍ前後である。なお、平成５年度に実施した第１次調査区(工事立会)は、今回の調査区の北側約20ｍの位置にある。

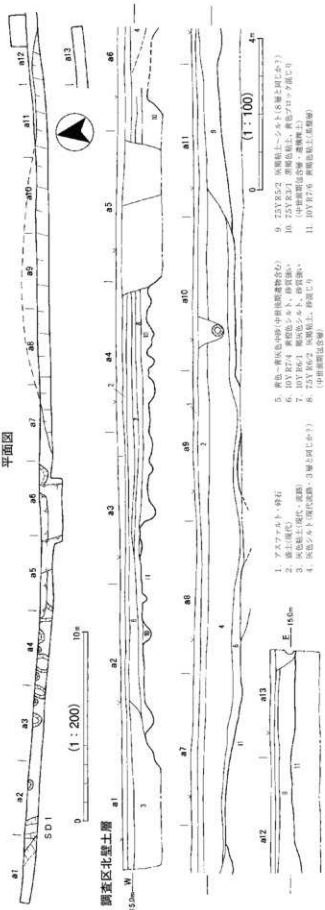
調査にあたっては、西端からおよそ４ｍ毎にグリッドを分けていった。

２　層位と遺構

層位　埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外である。鳥墓遺跡では、遺構の基盤となる層(ここでは地山)が比較的浅かったため、その面で確認を行った。

遺構の基盤となる層は橙色粘土で、ａ３グリッド付近では標高約14.8ｍ(地表下約60cm)で検出した。基盤層はａ８グリッド付近から東に向かって下降し、標高14ｍ以下となる。しかし、ａ10グリッド付近から再度高さを増し、ａ13グリッド付近では標高15ｍ付近にまで達している。

ａ２～ａ４グリッドにかけては、基盤層上面に黒褐色系粘土層(第Ⅶ－１図10層)が確認できる。これらは下部の遺構にも伴うもので、平安時代末期頃を中心とした遺物が含まれている。この層の上面には灰褐色系砂質土層(第Ⅶ－１図６～８層)が見られる。これらは、当地に形成されていた耕作地(田畠)の造成土と考えられる。室町戦国期から江戸時代にかけてのものと見られる。



第Ⅶ－１図　鳥墓遺跡調査区平面図および土層断面図

ａ１グリッド付近およびａ６～ａ10グリッドの間は流路を示す層が確認できる。出土遺物からは江戸時代以降、明治時代頃までのものと考えられる。両者は一連の流路と考えられる。

以上のことから、今回の調査地は概ね台地縁辺部にあたり、その裾部をめぐる流路を一部確認していると考えられる。

遺構　台地縁辺部にあたるａ２～ａ５グリッド付近を中心に遺構が見られた。ＳＤ１は鎌倉時代(13世紀中頃)の溝と考えられる。ａ２～５グリッドでは、不整楕円形の土坑を５基ほど確認した。いずれも不定形で、遺物はあまり含んでいないが、概ね平安時代末頃(12世紀後葉頃)のものと見て大過ない。

３　出土遺物

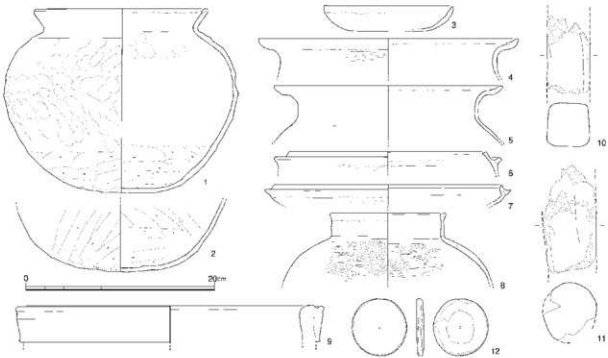
今回の調査で出土した遺物を第Ⅶ－２図に示した。遺物には、平安時代末期から江戸初期頃のものまでが見られる。１・２は平安時代末期の土師器甕。外面に煤が付き、使用の痕跡が伺われる。３～５はＳＤ１から出土した鎌倉時代前期の土器類。６は室町時代と考えられる土師器羽釜で鍔の短いもの。７は江戸時代初期かと考えられる土師器焙烙で、当地付近の遺跡での出土は珍しい。10・11は棒状土製品で、土師器竈の部材として用いられるもの。12は円盤形をした土製品で、用途は不明だが、土器生産に関係する可能性も考えられる。

４　小結

明和町蓑村地内は古代以来の土師器生産地で、鳥墓遺跡もその一部と考えられる。鳥墓神社の東隣には、現在の土師器生産工房である「神宮土器調整所」がある(第Ⅴ－１図)。今回の土坑状遺構や、出土した棒状土製品は、平安時代末期頃の土器生産に伴うものと考えられる。

なお、調査区に近接して鳥墓神序跡(明和町指定史跡)がある。神序(かんだち、神館)は神社に近接して設けられる祭祀施設であるが、これと今回の調査区との関係は明確ではない。

(伊藤)



第Ⅶ－２図　鳥墓遺跡出土遺物実測図（１：４）

第Ⅶ－１表　鳥墓遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	種・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	1-1	土師器	甕	a 4	黒褐帖	(口)18.4 (高)19.3	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗	10Y R6/3 にぶい黄橙	口縁1/12 体部6/12	平安時代後期末
2	2-1	土師器	甕	a 4	黒褐帖	(底)－	外：オサエ・ナデ→ケズリ 内：板ナデ→ケズリ	粗	10Y R4/4　褐	底部12/12	平安時代後期末
3	1-2	土師器	皿	a 2	ＳＤ１　東岸	(口)13.8 (高)2.65	外：調整 内：調整	粗	10Y R6/1　褐灰	口縁6/12	中世前期
4	3-4	土師器	鍋	a 2	ＳＤ１　東岸	(口)27.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	10Y R7/2 にぶい黄橙	口縁1/12	中世前期
5	2-4	土師器	鍋	a 2	ＳＤ１　東岸	(口)24.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗	10Y R8/2 灰白	口縁1/12	中世前期
6	3-2	土師器	羽釜	a 9	暗灰シルト	(口)20.8 (胴)24.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y 8/1　灰白	口縁1/12	中世後期
7	3-3	土師器	焙烙	a 8	灰色シルト	(口)26.0	外：ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ヨコナデ	やや密	10Y R7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期～近世初頭
8	2-3	土師器	茶釜	a 6	灰色シルト	(口)12.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y 8/2　灰白	口縁2/12	中世後期～近世初頭
9	3-1	陶器	甕	a 4	灰褐帖	(口)32.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや粗	7.5Y R5/4 にぶい褐	口縁2/12	釉薬
10	1-3	土師質	柱状土製品	a 2	灰褐帖	(幅)4.5	外：ナデ・オサエ 断面形は方形	やや粗	2.5Y 8/2　灰白	－	全体に２次被熱
11	1-4	土師質	柱状土製品	a 2	灰褐帖	(幅)5.7	外：ナデ・オサエ 断面形は方形	やや粗	10Y R8/1 灰白	－	全体に２次被熱
12	2-2	土師質	円盤状土製品	a 8	灰色シルト	(径)5.7	外：ナデ　貫通する円柱状具による孔あり	密	2.5Y R7/3 にぶい橙	完存	

Ⅷ　明和町簑村　簑村大塚遺跡（第２次）

１　調査経緯と調査区の状況

簑村大塚遺跡は多気郡明和町簑村字大塚に所在する。平成23年12月19日から12月21日にかけて調査を実施した。最終調査面積は52㎡であった。

調査地は町道で、長さ40m、幅1.2 ～ 1.7mである。東西方向に調査区を設置していることから、南北に延びる低丘陵に対して直交する関係にある。調査グリッドは、調査区幅の都合から東西方向のみを４m間隔で設定し、調査区西端をその起点とした。

なお、平成２年度に実施した第１次調査区（工事立会）は、今回の調査区の東側約120mの位置にある。第１次調査では明確な遺構・遺物は無かった。

２　層位と遺構

基本層序（第Ⅷ－１図）は、舗装に伴うアスファルト・砕石などの下に、現代と考えられる客土（第７層）がある。その下には近・現代の撹乱にあたる第８層のほか、客土及びそれに関連する第９ ～ 14層が堆積する。このうち第11・12・14層において土器の細片や炭を含んでいた。

第９ ～ 14層の下では、還元色を呈する灰色系埋土が観察された（第15層）。平面・断面の特徴から溝や野池の埋土と考えられる。第17層における遺物の特徴から、第15層は近世以降の堆積ととらえることができる。中央の丘陵鞍部付近では、現代の客土（第７層）の直下で、第19 ～ 21層が確認できた。第19・21層では、中世あるいは近世の土器片とともに炭が多く認められたことから、灰原に相当すると考えられる。

第15層の下では、第22 ～ 25層が確認できた。このうち第23 ～ 25層は中世以前の形成と推察される。

第27層は褐灰色を呈しており、炭を少量含む。土器はほとんど認められなかったが、色調・含有物から灰原の末端付近を反映している可能性もある。上層の第26層が中世に形成された可能性を持つことから、第27層の形成時期はそれ以前となり、中世または近世の灰原（第19 ～ 21層）とは別の遺構を想定する必要があろう。

これらの堆積層の下では、当地の地山に相当する第28・29層が確認できた。地山は、明黄褐色から浅黄色を呈する極細粒砂を主体とする堆積層であり、近隣の丘陵を形成する堆積層である。地山のうちのうち上層にあたる第28層のほうが風化の作用を強く受けており、赤褐色の色調が強い。

３　遺構

調査の結果、中央付近で丘陵の鞍部にあたる地点を確認した。さらにその両側が落ち込むような状況をとらえることができた。西側の落ち込みは平面的な特徴・還元色を呈する埋土からＳＤ１と名付けた。ＳＤ１は落ち込みあるいは溝だったと考えられる。中央付近の鞍部では、小規模な窯に伴う灰原ととらえうる土層が観察された。東側の落ち込みは丘陵から平野への転換を反映したものと考えられるが、ひとまずＳＤ４と名付けた。この他、調査区西端・東端では現代撹乱が認められた。

ＳＤ１　調査区の東側で確認した。丘陵鞍部から幅約12mである。第７層の下では、客土の第９ ～ 14層が確認された。これらの層には１cmにも満たない土器の小片・炭を多く含むことから、窯の灰原の土を客土に利用したことがわかる。客土の土質から近隣から持ち込まれた可能性が高く、調査地の近くに窯の存在を想定できる。

その下層では灰色粘土を主体とする第15層が観察できた。この層は、溝への堆積状況を示しており、還元色を呈している。なお、第22・23・25層の上端は長期の滞水によって還元色に変化している。第22層では中世または近世、第24層で中世の遺物を含む。さらに下層では地山に到達する。

このような堆積状況と遺物から、中世から落ち込みが存在していたこと、近世・近代に水路あるいは野池として利用されたといえる。

灰原等　第19 ～ 21層は、丘陵の鞍部において観察できた灰原層である。第21層の形成後、間層にあたる第20層、さらにその上に第19層が形成されたと考

えられる。その広がりは東西2.5m、南北1.2m以上、厚さ35cmであった。これらは北側において厚く堆積していたことから、調査区の北側に窯が位置すると想定できる。出土物から中世あるいは近世の小規模な窯に伴う灰原と考えられる。

なお、ＳＤ１の西端付近で確認した第17層では、近世の土器が密集して堆積しており、焼成失敗品の廃棄に伴うものとみなせる。

ＳＤ４　丘陵鞍部に相当する場所では、第16・18・26・27層が確認された。このうち第27層は暗灰褐色系の埋土で、炭などを含む。これらの点から第27層は灰原の末端ととらえることもできる。上層の第26層は中世に形成されたと考えられることから、第27層は、それ以前ととらえることができる。(高松)

4　出土遺物

遺物量は整理箱にして約２箱である。今回の調査で出土した遺物を第Ⅷ－２図に示した。平安時代末期～鎌倉時代(１～６)、室町時代(７・９・10)、戦国末期(８)、江戸時代中後期(11～32)、のほか、土製品類(33～40)がある。

11・12は土師器甕の形態をなす。とくに11は７世紀代頃の甕と極めて類似した形態であるが、板状工具によるナデを中心とした調整手法や、土師器にしては極めて硬質な焼き上がり、あるいは素地粘土の質などが、中世末期から近世初期に見られる土師器と共通する。甑形をなす19をはじめ、11～19の土器類は共通性を持っている。そのため、これらの土器は、一見すると古代(７世紀前後)のもののように見えるが、実は江戸時代中後期に製作されたものと考えられる。

近世に「復古調」の土器を製作する事例は、当遺跡にも近い外山遺跡(明和町簑村)でも観察されている[1]。なぜこのようなことが行われるのかの理由は今のところ明確にし得ないが、近世の土器生産地「有爾」において特徴的な現象として把握できることのみ指摘しておきたい。

33は掌握圧痕のある土製品で、用途不明。34～37は棒状土製品で、土器窯に伴う道具と考えられる。38は「三又状土製品」に類似するため、鋳造遺構との関連も考慮されるが、上記と同様、土器窯に伴う遺物の可能性もある。39・40は土錘。　(伊藤)

5　小結

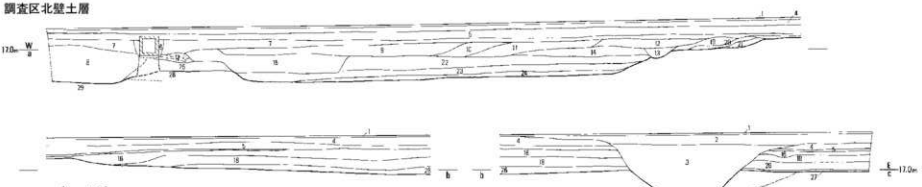
今回の調査では、丘陵鞍部で土器窯の灰原と考えられる層を確認した。その広がりから調査区北側に窯体が位置すると推察される。ただし、当地は昭和60年代に圃場整備が実施されており、調査区北側の高まりは、その際に盛り土がなされた結果だという。第19～21層の直上にも現代客土の第７層が及んでいることから、深耕や削平による影響が大きいものと予想される。したがって、窯本体については既に失われている可能性もあろう。いずれにしても、当地において、今後発掘調査を実施する場合、この点を考慮する必要があるだろう。

今回の調査で判明した灰原と、当遺跡近隣の北野遺跡や水池土器製作遺跡の存在を踏まえると、当地では古代から近世にかけて極めて継続性の高い土器生産が行われていたことが改めて判明した。当地における土器生産のあり方を反映していると評価できよう。　(高松)

[註]

(１)三重県埋蔵文化財センター「外山遺跡・本郷遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊　1990年)

調査区北壁土層



第村大塚遺跡土層

[アスファルト舗装に伴う層、現代撹乱]

1．アスファルト

2．5Y6/1N　灰(灰色砕石)

3．10YR4/4褐　粘土～シルト　しまりなし　粘質あり(現代撹乱)

4．5BG7/1明青灰　礫(青色砕石)

5．5YR5/8明赤褐　シルト(赤色砕石)

6．5YR5/4にぶい赤褐　シルト(細粒雑土)

[近～現代の客土]

7．2.5Y6/8明黄褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり(現代客土)

8．2.5Y3/2黒褐　粘土～シルト　しまりあまりない　粘質あり(近～現代撹乱)

9．7.5YR4/6褐　粘土～シルト　しまり非常にあり　粘質あり(客土)

10．10YR5/3にぶい黄褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり(客土)

11．7.5YR4/1褐灰　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
長径1cm以下の土師器ならび瓦質不良の土器片を多く含む。
炭を含む(客土)

12．10YR5/3にぶい黄褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物少量含む(客土)

13．5Y5/1N　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり

14．10YR4/2灰黄褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物を含む。炭を少量含む(客土)

[近世以降の溝あるいは野池]

15．2.5Y5/1黄灰　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり

[近世以降の層]

16．7.5YR4/6褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり

[近世の層]

17．10Y3/1黒灰　粘土～シルトに7.5YR4/3褐色　粘土～シルトを現状に10%含む。炭混じる　しまりあり　粘質あり　近世陶器を多量に密に含む

18．7.5YR6/6橙　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物わずかに含む

[中世または近世の灰層]

19．7.5YR4/1褐灰　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物を多く含む(灰原層)

20．7.5YR4/4褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物少量含む(炭層)

21．7.5YR4/2灰褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物を多く含む(灰原層)

[中世または近世の層]

22．10YR5/2灰黄褐　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物含む

[中世以前の層]

23．2.5Y6/2灰黄　粘土～シルト　しまりややあり　粘質あり
遺物含む

24．2.5Y6/1黄灰　粘土～シルト　しまりややあり　粘質あり
遺物含む

25．2.5Y6/2灰黄　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物含む

26．2.5Y6/2灰黄　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物わずかに含む

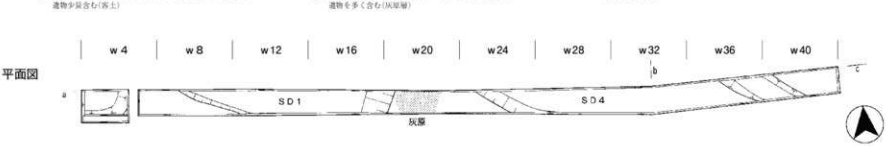
27．7.5YR5/1　褐灰　粘土～シルト　しまりあり　粘質あり
遺物なし　炭少量含む

[地山]

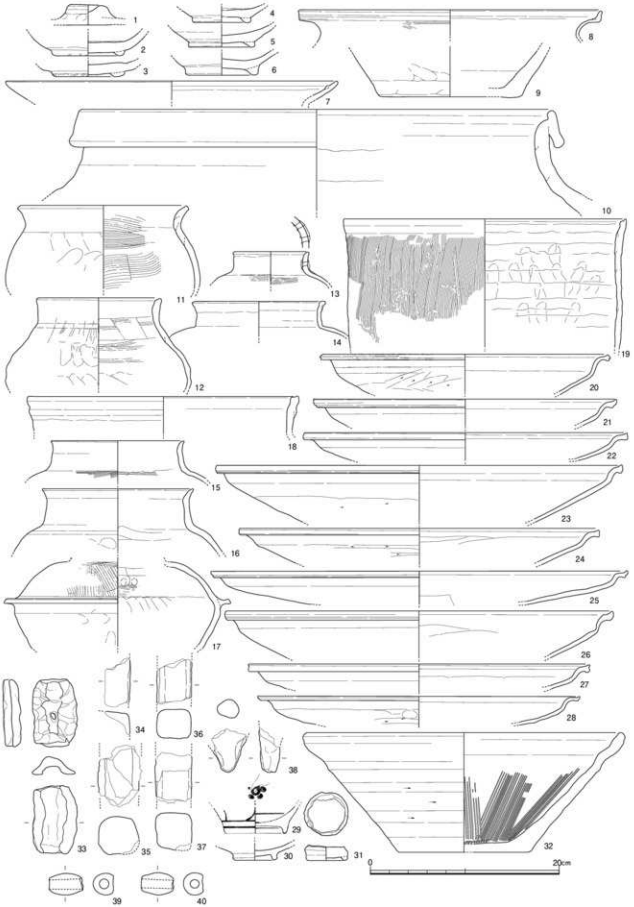
28．10YR6/8明黄褐　シルト～極細粒砂　しまりややあり　粘質ややあり

29．2.5Y7/4浅黄　極細粒砂～細粒砂　しまりあまりない
粘質あまりない

平面図



第図－1図　第村大塚遺跡調査区平面図および土層断面図



第Ⅲ－２図　篠村大塚遺跡出土遺物実測図（１：４）

第Ⅷ－１表　箕村大塚遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	4-2	土師器	落とし蓋	w 16	第12-19層	(横)4.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	2.5Y4/1　黄灰	横部12/12	
2	6-5	陶器	椀	w 4	S D 1 第15層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→赤切り→高台貼付ナデ-将懸痕 内:ロクロナデ	やや粗	5Y7/1　灰白	高台12/12	山茶椀　渥美　内面研磨
3	4-4	陶器	椀	w 16	第12-19層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→赤切り→高台貼付ナデ-将懸痕 内:ロクロナデ	密	2.5Y7/1　灰白	高台6/12	山茶椀　渥美　内面研磨
4	2-8	陶器	椀	w 28	S D 4 第26層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→赤切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y8/1　灰白	高台2/12	山茶椀　渥美
5	4-3	陶器	椀	w 16	第12-19層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→赤切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1　灰白	高台3/12	山茶椀　渥美　内面研磨
6	4-6	陶器	椀	w 4	第８層	(高台)7.7	外:ロクロナデ→赤切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y8/2　灰白	高台12/12	山茶椀　渥美　内面研磨
7	1-3	土師器	鍋	w 20	S D 4 第18層	(口)35	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/4 浅黄橙	口縁1/12未満	中世中期(鍋Ｂ、３ａ)
8	3-5	土師器	鍋	w 16	第12-19層	(口)32.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁2/12	中世後期(鍋Ｂ、４ｅ)
9	4-7	陶器	鉢体	w 24	S D 4 第26層	(底)15.2	外:オサエ・ナデ 内:研磨痕	密	2.5YR5/2　灰赤 2.5YR6/4 にぶい橙	底部2/12	常滑
11	7-2	土師器	甕	w 16	第12-19層	(口)50	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁1/12未満	常滑
11	7-2	土師器	甕	w 4	S D 1 第15層	(口)18	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6　橙	口縁3/12	幾成硬質、近畿のものか？
12	8-1	土師器	壺	w 4	S D 1 第15層	(口)13.2	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y5/2 暗灰黄	口縁3/12	幾成硬質、近畿のものか？
13	7-4	土師器	壺	w 4	S D 1 第15層	(口)8.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR4/1 褐灰	口縁1/12	口縁部に焼成前穿孔（２個残、２個一対か？）
14	5-3	土師器	壺	w 16	第19層	(口)14.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁2/12	中世後期～近世前期
15	8-3	土師器	茶釜	w 4	S D 1 第15層	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y5/1　黄灰	口縁2/12	中世後期～近世前期
16	6-4	土師器	壺	w 4	S D 1 第15層	(口)16	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y5/2　暗灰黄	口縁1/12	
17	8-4	土師器	茶釜	w 4	S D 1 第15層	(脚)23.8	外:ナデ-オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ-オサエ→ハケメ	密	10YR8/4　浅黄橙	脚3/12	中世後期～近世前期
18	5-2	土師器	壺	w 16	第19層	(口)28.6	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/12	中世後期～近世前期
19	4-1	土師器	甕	w 4	S D 1 第15層	(口)29.9	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	5YR7/8　橙	口縁3/12	幾成硬質、近畿のものか？
20	3-1	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)30.6	外:ナデ→ヨコナデ-ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR7/8　橙	口縁3/12	近世中後期
21	3-3	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第17層	(口)32.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/8　橙	口縁1/12	近世中後期
22	3-2	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第17層	(口)34.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6　橙	口縁1/12	近世中後期
23	1-2	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)4 3.0	外:ナデ→ヨコナデ-ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6　橙	口縁2/12	近世中後期
24	6-3	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)38	外:ナデ→ヨコナデ-ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁2/12	近世中後期
25	1-1	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)44.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ-ケズリ	密	5YR7/6　橙	口縁2/12	近世中後期
26	3-4	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第17層	(口)41.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/6　橙	口縁1/12	近世中後期
27	6-1	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)36	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	近世中後期
28	6-2	土師器	焙烙	w 4	S D 1 第15層	(口)34	外:ナデ→ヨコナデ-ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y6/2　灰黄	口縁1/12	近世中後期
29	8-2	陶器	椀	w 4	S D 1 第15層	(高台)6.4	外:ケズリ出し高台→施釉 内:施釉(輪化文あり)	密	釉:5Y8/2灰　白 素地:25Y7/2灰黄	高台11/12	瀬戸美濃
30	7-3	陶器	皿	w 4	S D 1 第15層	(高台)4.6	外:ケズリ出し高台→施釉 内:施釉	密	釉:10YR1.7/1黒、5YR/2灰白素地:10YR8/3浅黄橙	高台12/12	瀬戸美濃？　近世
31	2-1	陶器	天目茶碗	w 4	S D 1 第15層	(高台)4.3	外:削り出し高台 内:施釉	密	N1.5/0　黒(釉) 2.5YR3/1 鉄黒(地)	高台12/12	加工円盤　重さ33.71ｇ
32	7-1	陶器	擂鉢	w 4	S D 1 第15層	(口)34 (高)12.6	外:回転ナデ→回転ケズリ→赤切り 内:回転ナデ→擂目	密	釉：2.5Y3/3(橄) 素地：10YR8/4 浅黄橙	口縁1/12	瀬戸美濃 口縁端部は使用による摩滅
33	4-5	土師質	不明	w 4	S D 1 第15層	(長)7.1 (幅)4.6	外:オサエ(指ち痕) 内:ナデ	密	2.5Y4/1　黄灰	完存？	漁道具？
34	4-8	土師質	棒状土製品	w 28	S D 4 第18層	(残長)6.1 (幅)2.6	外:ナデ	密	2.5YR6/3　浅黄	破片	断面隅丸長方形
35	2-6	土師質	棒状土製品	w 20	S D 4 第18層	(残長)6.5 (幅)4.2	外:ナデ	密	7.5YR8/4 浅黄橙	両端欠損	断面隅丸長方形
36	2-4	土師質	棒状土製品	w 8	S D 1 第22層	(残長)4.8 (幅)3.7	外:ナデ	密	2.5YR6/2　灰白	両端欠損	断面隅丸長方形
37	2-5	土師質	棒状土製品	w 16	第14層	(残長)4.4 (幅)3.8	外:ナデ	密	2.5YR6/2　灰白	両端欠損	断面隅丸長方形
38	2-7	土師質	三叉状土製品	w 20	S D 4 第18層	(残長)4.7 (幅)2.3	外:ナデ	密	10YR8/2 灰白	脚一部	
39	2-3	土師質	土錘	w 4	S D 1 第15層	(長)3.6 (幅)2.1	外:ナデ 内:円棒状工具巻き付け痕	密	7.5YR6/4 にぶい橙	一部欠損	重さ11.57ｇ
40	2-2	土師質	土錘	w 4	S D 1 第15層	(長)3.3 (幅)2.4	外:ナデ 内:円棒状工具巻き付け痕	密	5YR7/8　橙	一部欠損	重さ11.87ｇ

Ⅸ　伊勢市柏町　西垣外（にしがいと）遺跡

1　調査の概要

総説　伊勢市柏町に所在する西垣外遺跡（第１次調査）は、平成23年度県営かんがい排水事業による農業用水管理設工事（宮川４工区その２地区）に伴い、調査を実施した。調査期間は平成23年12月５日～12月９日で、調査区は幅0.9m×87mを設定し、最終調査面積は78㎡である。

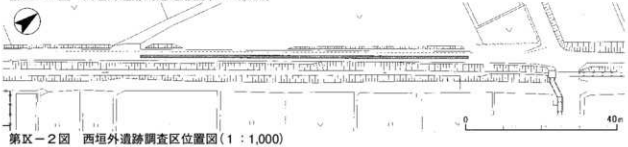
協議の経過　西垣外遺跡は、工事中の不時発見により立会を実施したものである。事業予定地は遺跡の外側で、過去に設置した宮川用水旧管部分に新管を設置するという工事であったため、当初は工事着工に問題ないものとして処理していた。しかし、同12月１日に現地を確認したところ、旧管横の未掘削部分を開削しており、弥生時代終末期の高坏片や常滑焼の口縁部を確認したため、急遽工事立会の形で調査を実施した。なお、調査終了後に伊勢市教育委員会と協議のうえ、遺跡の範囲を今回の調査地まで拡大する手続きをとった。

調査の経過　工事立会調査は伊勢農林からの労務提供を受けて実施した。道路工事事業の受注者である浜口土木株式会社が、現物供与の形で作業員を手配し、現場の安全管理等を行った。

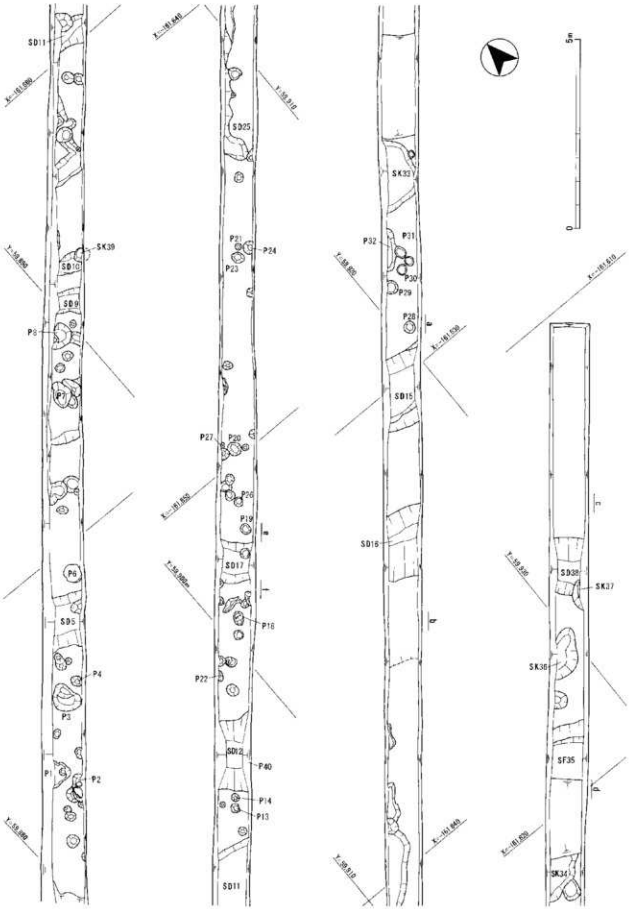
【調査日誌（抄）】

12月１日　状況確認、遺構・遺物を確認　（伊藤）
12月５日　機械掘削、遺構検出、人力掘削（相場）
12月６日　機械掘削、人力掘削。ＳＤ12・ＳＤ11・ＳＤ15から遺物多く出土　（伊藤・相場）
12月７日　人力掘削。ＳＦ35焼土検出（伊藤・相場）
12月８日　写真撮影、実測準備（萩原・高松・相場）
12月９日　図面作成。ＳＫ39人力掘削（伊藤・相場）

第Ⅸ－１図　西垣外遺跡周辺地形図（１：5,000）



第Ⅸ－２図　西垣外遺跡調査区位置図（１：1,000）



第Ⅸ－３図　西垣外遺跡遺構平面図（１：100）

2　遺跡の立地と基本層位

立地　西垣外遺跡は、伊勢市柏町西垣外・東垣外・岡山・南山に所在する。[1]

柏集落の東南に位置し、遺跡西端中央部に加須夜神社が鎮座する。[2]　遺跡の現状は畑地で、今回の調査区は遺跡の東端を走る道路下にあたる。調査区の東を流れる用水路を境として北東側の水田は一段下がっていることから、調査区は集落の東端にあたると考えられる。標高は2.8mである。

基本層位　基本層位は、舗装・砕石・造成土の下に、黒褐色土と暗灰黄色土の包含層が２層堆積する。現地表面から60cm下で遺構面となる。

地山は、調査区南側は黄褐色土～明黄褐色シルト質土で、やや砂質である。北側に進むと黒褐色土(黒ボク)層に変化し、黒褐色土の下に灰黄褐色粘土が堆積している。遺構埋土は、基本的に黒～黒褐色土の黒ボクで、北側では遺構形成面よりやや粘質であった。　（相場）

［註］

（1）伊勢市教育委員会編『伊勢市史』(2011年)。採集遺物の時期は、旧石器時代後期～縄文時代草創期、弥生時代後期～古墳時代、平安時代後期～室町時代と断続的である。遺物の種類は、ナイフ形石器・木の葉形尖頭器などの石器類、弥生土器・須恵器・土師器・山茶椀・陶器などの土器類、鉄滓など豊富である。

（2）明治年間の地籍図では、加須夜神社は現位置ではなく、神社地は柏集落のなかに認められる。

3　主な遺構

a　概要

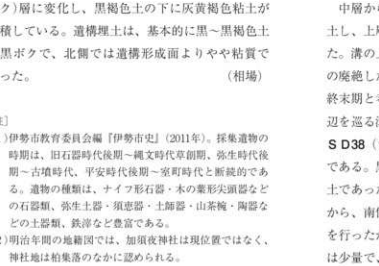
主な遺構は柱穴と溝である。中世後期が主体であるが、調査区南側では弥生時代終末期の溝を１条確認した。弥生時代終末期および中世後期の溝はいずれも調査区を横断し、南西→北東方向に流れるものと推測される。このほか、中世墓と考えられる土坑を検出した。

b　弥生時代後期の遺構

ＳＤ12（第Ⅸ－５図）　幅約1.9m、遺構検出面から底面までの深さは約１ｍである。形状は逆三角形を呈し、人がひとり立てるほどの底面をもつ。下層は黄橙色砂質土の地山ブロックを多く含んでおり、遺物はほとんど認められなかった。

中層からは、ほぼ完形の手焙形土器が逆向きに出土し、上層からは高坏片などの土器が破片で出土した。溝の上面で、鎌倉時代のピットを検出した。溝の廃絶した時期は、出土した高坏などから弥生時代終末期と考えられ、その性格は環濠のような集落縁辺を巡る溝と想定される。

ＳＤ38（第Ⅸ－４図）　幅約1.53m、深さ40cmの溝である。黒ボクの遺構形成面に対して埋土は黒色粘土であった。南側の斜面が、北に比べ急であることから、南側が墳丘となる方形周溝墓を想定して掘削を行ったが、対となる溝は認められなかった。遺物は少量で、時期は弥生時代の範疇におさまる。



1. 舗装・砕石(造成土)
2. 2.5Y5/6黄色褐色土(造成土)
3. 10YR8/8黄橙色土（造成土）
4. 2.5Y3/1黒褐色土(包含層)
5. 7.5Y4/2灰褐色土(土師器片多い)
6. 2.5Y4/3暗灰黄色土(包含層)
7. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
8. 10YR4/2灰黄褐色土(土器片多い)　（ＳＤ15）
9. 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
10. 10YR3/3暗褐色土(ＳＤ16)
11. 10YR4/3にぶい褐色土
12. 7.5YR6/6橙色粘質土(地土)(ベースｄブロック40%含む)
13. 10YR3/2黒褐色土　（ＳＦ35）
14. 7.5YR6/6橙色粘質土(地土)(ベースｄブロック40%含む)
15. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　（ＳＫ37）
17. 10YR2/2黒褐色土
18. 10YR3/3暗褐色土　（ＳＤ38）
20. 10YR2/1黒土　(ベースｄ)
21. 10YR5/6黄褐色土　(ベースａ)
22. 10YR5/2灰黄褐色粘土(ベースｅ)

第Ⅸ－４図　西垣外遺跡土層断面図（１：100）

c　中世の遺構

ＳＤ10　幅52cm、深さ65cmの溝である。両岸はほぼ垂直に落ちる幅の狭い溝で、同様の形状をもつＳＤ９と併走している。２つの溝に時期差はほとんどみられない。出土遺物は南伊勢中世Ⅳｂ期(16世紀前葉)と考えられる。中世墓と考えられるＳＫ39と重複している。

ＳＤ11　幅2.6m、深さ44cmの東西溝である。北法面は幅２m程度のテラス状平坦面があり、南法面寄りが深くなっている。南側で多量の土師器鍋片が出土し、これらは外面に煤が付着するものが多い。土師器片に混じって鉄滓が２点出土している。出土遺物は南伊勢中世Ⅳｂ期である。

ＳＤ15（第Ⅸ－５図）幅約1.9m、深さ80cmの東西溝。溝の形状は逆台形状で、南法面の方が屈曲して急角度である。埋土は黒色土(黒ボク由来)で、下層には礫を含むが規格性は無い。出土遺物は多く、南伊勢中世Ⅳａ期(15世紀後葉)が中心である。

ＳＤ16（第Ⅸ－５図）　幅約1.8m、深さ約35cmの東西溝で、形状は逆台形状を呈する。ＳＤ15と併走するが、ＳＤ16のほうがやや浅く、南側が緩やかに傾斜する。出土遺物は少ないが、南伊勢中世Ⅳａ期頃(15世紀中葉～後葉)に相当し、時期的にもＳＤ15と共通する。

ＳＤ25　落ち込み状の浅い溝で、東西方向に伸びている。南伊勢中世Ⅳａ期頃の遺物が出土しているが、それに混じって弥生時代の蛤刃石斧が出土した。

ＳＫ33　長径約２m・深さ約30cm、緩やかな傾斜の土坑で、底は平坦面となる。南伊勢中世Ⅳａ期のほぼ完形の土師器鍋が出土した。

ＳＦ35（第Ⅸ－５図）　南端が既設管で破壊されているため全体の規模は不明だが、調査区内では幅約1.5m、深さ29cmの土坑状遺構として確認した。上層部には多くの円礫を含む褐色系粘土が見られる。中層部は、黒褐色土層と黒ボクブロックを多く含む焼土層が互層に堆積する。下層部は暗オリーブ褐色土で、灰層と考えられる。南側に続く焼けた粘土が確認されたが、現代の攪乱により全体像は不明である。出土遺物は、南伊勢中世Ⅳｂ期(16世紀前葉)に相当する。

ＳＫ39　径約40cmの土坑である。完形の土師器鍋が２点上向きに出土した。意図的な埋納であり、蔵骨器の可能性が考えられる。ＳＤ10と重複しているが、調査区が狭く、遺構の前後関係は掴めなかった。また、土師器鍋が２点出土していることから２基の墓坑があったと想定されるが、これについても重複関係は不明である。土師器鍋の時期は南伊勢中世Ⅳａ期である。

柱穴群　調査区南端のピット２は根石を伴う柱穴で、周辺にある同規模のピットとともに、掘立柱建物の柱穴を構成するものと考えられる。時期は概ね中世後期の範疇におさまるものである。　　(相場)

4　出土遺物

a　概要

西垣外遺跡(第１次)で出土した遺物は、コンテナケース６箱、重さ11.7kgである。そのうち、５箱が中世後期の土器であった。調査面積77㎡に対し、出土遺物は比較的多い遺跡であるといえよう。

b　弥生時代後期の遺物

ＳＤ12出土遺物(１～11)　７を除くほぼ全ての個体が上層から出土している。７は手焙形土器で、中層から逆さ向きに出土した。調査時は底部が欠損していたが接合後ほぼ完形となる。覆部外面はナデとハケメがみられる。体部外面は２枚貝を用いて条痕文を施し、突帯を貼付けたのち指でつまみ上げている。底部外面は斜め方向のケズリがみられる。煤などの付着はなく、胎土は在地のものと考えられる。

溝の廃絶時期は甕の口縁部、高坏坏部の形態から弥生時代終末期と考えられ、概ね上村編年Ⅵ様式[1]期前半に相当し、廻間Ⅰ式０～１段階に併行する。[2]

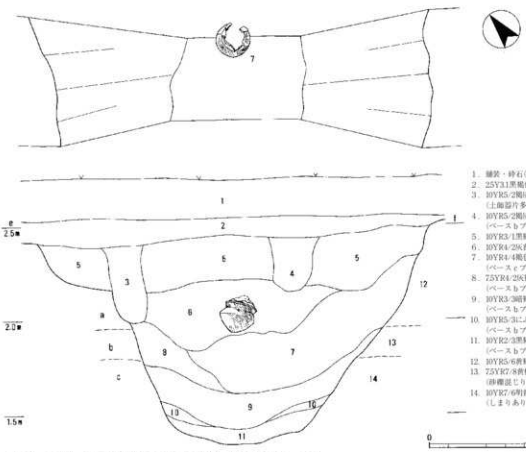
Ｐｉｔ９出土遺物(12～13)　受口甕の口縁部。外面にハケメを施しているが、施文等は認められない。

その他(14～19)　中世の遺構に混じり込んだ遺物である。19はほぼ完形の両刃石斧(太型蛤刃石斧)で、刃部を研磨しているが、風化が著しく、不明である。石材は、遺跡周辺の御荷鉾帯で採取可能である緑色岩であろう。弥生時代中期以前に属するの可能性が高いが、共伴資料がないため詳細は不明である。[3]

(相場)

c　中世の遺物

西垣外遺跡から出土した中世の遺物は、おおよそ



第Ⅸ－５図　西垣外遺跡ＳＤ12平面図・断面図(１：20)

第Ⅸ－１表　西垣外遺跡　遺構一覧表

遺構名	形態	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
Pit1	柱穴	中世後期	0.8～	0.4	0.26	青磁片	
Pit2	柱穴	中世後期	0.72	0.2	0.27	土師器片	根石あり
Pit3	柱穴	中世後期	0.72	0.72	0.3	土師器片	
Pit4	柱穴	弥生後期	0.28	0.29	0.19	弥生土器(甕)	
SD5	柱穴	中世後期	0.8～	1.32	0.32	土師器(皿・鍋・羽釜)	
Pit6	柱穴	中世後期	0.5	0.5	0.34	土師器(皿・鍋)	
Pit7	柱穴	中世後期	0.7	0.4	0.18	土師器・山茶椀	
Pit8	柱穴	中世後期	0.68～	0.5	0.35	土師器(皿)	
SD9	溝	中世後期	0.8～	0.58	0.56	土師器(皿)	
SD10	溝	中世後期	0.8～	0.52	0.65	土師器(鍋・羽釜)、陶器	
SD11	溝	中世後期	0.8～	2.6	0.44	土師器(皿・鍋)・青磁、鉄滓	南で一段下がる
SD12	溝	弥生後期	0.8～	1.9	1.01	弥生土器(壺・甕・高坏・手焙り形土器)	
Pit13	柱穴	古代	2.4	2.4	0.08	土師器片	
Pit14	柱穴	中世後期	2.2	2.2	0.23	土師器片、鉄滓２点	
SD15	溝	中世後期	0.8～	1.9	0.45	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	
SD16	溝	中世後期	0.8～	1.8	0.34	土師器(鍋・羽釜)、陶器(常滑)	
SD17	溝	中世後期	0.8～	1.2	0.19	土師器(皿・鍋)	
Pit18	柱穴	中世後期	0.4	2.3	0.3	土師器(鍋)	
Pit19	柱穴	中世後期	0.3	0.22	0.07	土師器(皿・鍋)	
Pit20	柱穴	中世か	0.35	0.36	0.43	土師器片	

遺構名	形態	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
Pit21	柱穴	中世後期	0.18	0.18	0.18	土師器片	
Pit22	柱穴	中世後期	0.28	0.11	0.14	土師器(皿)	
Pit23	柱穴	弥生後期	0.3	0.28	0.31	弥生土器	
Pit24	柱穴	古墳？	0.3	0.22～	0.34	古式土師器片(瓢壺)	
SD25	溝	中世後期	0.6～	7.3～	0.11	土師器(皿・鍋)、青磁、山茶椀、鉛刀石斧	
Pit26	柱穴	中世後期	0.25	0.25	0.22	土師器片	
Pit27	柱穴	中世後期	0.32	0.2～	0.28	土師器片	
Pit28	柱穴	中世後期	0.32	0.3	0.04	土師器片	
Pit29	柱穴	中世後期	0.35	0.3～	0.4	土師器片	
Pit30	柱穴	中世後期	2.8	2.3	0.29	土師器片	
Pit31	柱穴	中世後期	3.6	2.4	0.29	土師器(鍋)	
SK32	土坑	中世後期	1.12	2.1～	0.39	土師器(皿・鍋)	
SK33	土坑	中世後期	1.94	0.8～	0.28	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	
SK34	土坑	中世後期	1.1	0.7～	0.14	土師器(皿)	
SF35	畝土坑	中世後期	0.8～	1.5～	0.29	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	焼土あり 南側は撹乱
SK36	土坑	中世後期	1.32	5.3～	0.27	土師器	
SK37	土坑	中世後期	0.8	0.26	0.47	土師器片	SD38上面
SD38	溝	中世後期	0.8～	1.53	0.4	弥生土器片	
SK39	中世墓	中世後期	0.38	0.4	0.34～	土師器片	
Pit40	柱穴	中世後期	0.26	0.2～	2.8	土師器・山茶椀	SD12上面

※遺構番号は、ＳＤ・ＳＫ・Ｐｉｔなど、遺物の出土した遺構を全て通し番号としている。

13世紀から16世紀代のものが認められる。なかでも中世後期(15世紀後半～16世紀前半)のものが圧倒的に多い。

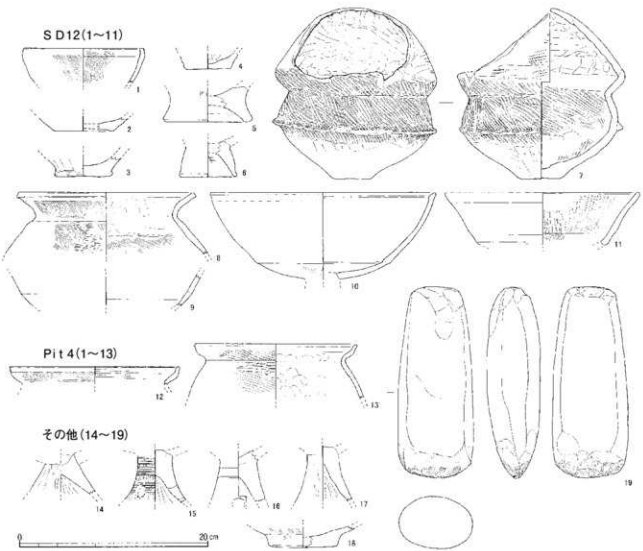
Pit出土遺物(20・21)　20は青磁碗で龍泉窯系。簡略化された鎬蓮弁文の状況から、14世紀代頃のものと考えられる。21は渥美産陶器碗(山茶椀)で12世紀後葉頃のもの。[4]

ＳＤ５出土遺物(22～27)　22は南伊勢系のＢ形態土師器皿。23は陶器平椀で、古瀬戸後Ⅲ期頃のものか。24～26は土師器鍋、27は土師器で鉈口形の羽釜である。土師器類は、南伊勢中世Ⅳａ期の状況を示している。[5]

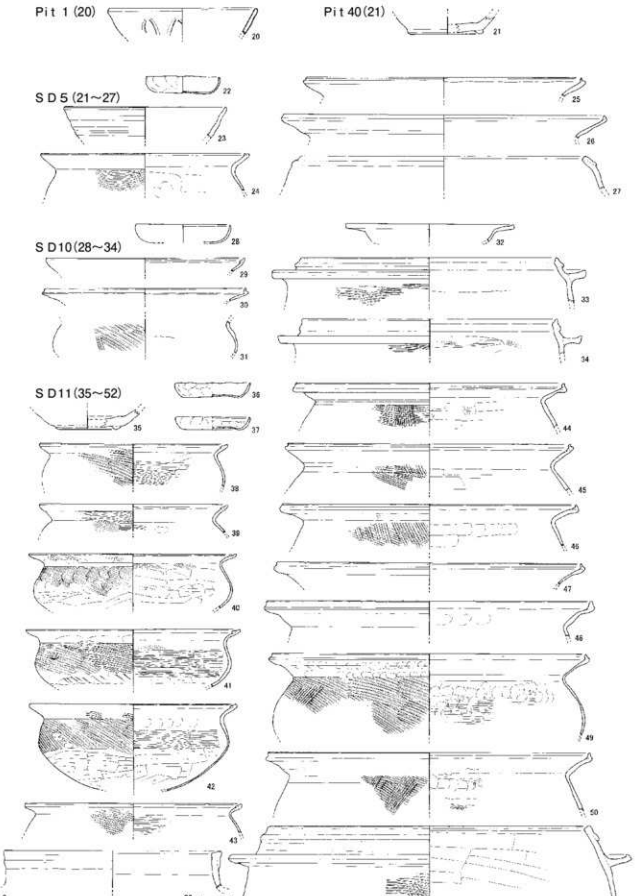
ＳＤ10出土遺物(28～34)　28は南伊勢系のＢ形態土師器皿。29～31は土師器鍋。32は土師器茶釜蓋と考えられる。33・34は土師器羽釜で、口縁部外面を外側に折り返すもの。これらの土師器類は、南伊勢中世Ⅳｂ期の状況を示している。

ＳＤ11出土遺物(35～52)　比較的まとまった資料である。35は渥美産陶器椀(山茶椀)で、混入である。36～52は土師器。36･37は南伊勢系Ｂ形態の皿で、37の口縁部はヨコナデを示す珍しいもの。38～50は鍋で、38～43は小形、44～50は中形のものである。51は羽釜、52は茶釜形をなす壺である。これらは総じて南伊勢中世Ⅳｂ期に相当する。

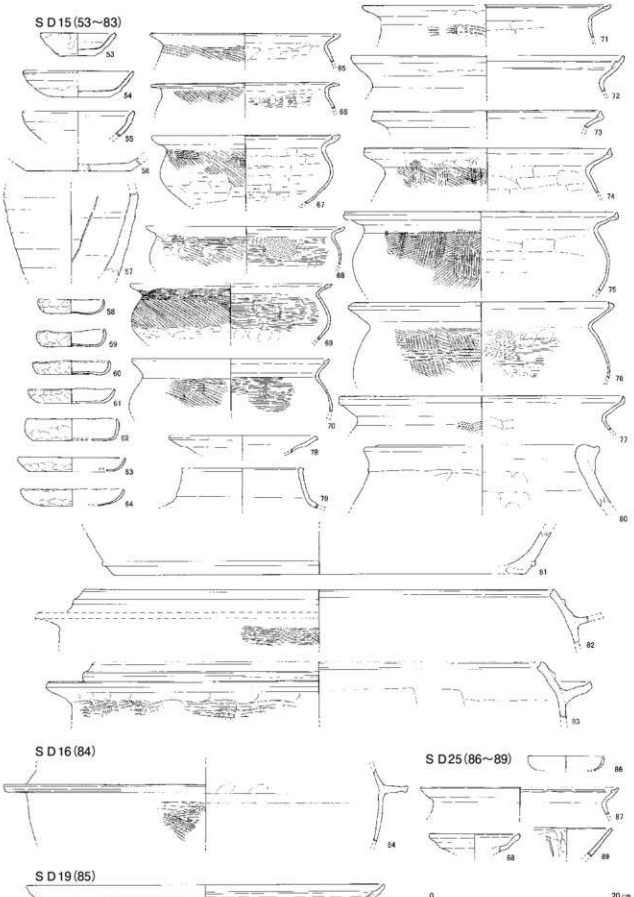
ＳＤ15出土遺物(53～83)　この遺構資料も比較的まとまっている。53～56は古瀬戸。53は縁釉小皿、54は縁釉中皿、55は平碗で、いずれも古瀬戸後Ⅳ期古に相当する。56は大皿の破片。57は12世紀末頃の渥美産壺の体部片で混入である。58～64は土師器皿。58～60・62は南伊勢Ｂ形態、61・63・64はＣ



第Ⅸ－６図　西垣外遺跡出土遺物実測図(1)（１：４）



第Ⅸ－7図　西垣外遺跡出土遺物実測図(2)（1：4）



第Ⅸ－８図　西垣外遺跡出土遺物実測図(3)（１：４）

形態である。65 ～ 77は土師器鍋。65 ～ 70は小形、71から77は中形である。78は土師器茶釜蓋、79は土師器茶釜。80は陶器壺で常滑産である。81は瓦質土器火鉢。82・83は土師器羽釜。これらは総じて南伊勢中世Ⅳａ期に相当する。

ＳＤ16出土遺物(84)　土師器羽釜片である。南伊勢中世Ⅳａ期頃のものと考えられる。

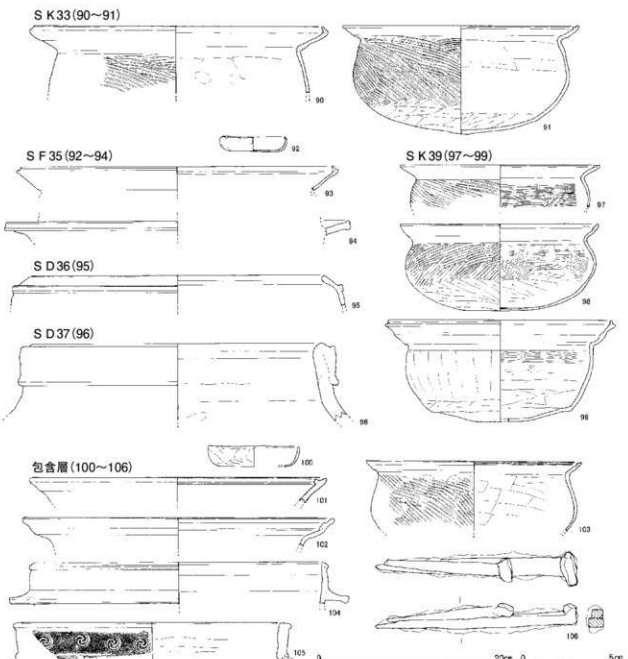
ＳＤ19出土遺物(85)　土師器鍋片である。南伊勢中世Ⅲｂ期のものである。

ＳＤ25出土遺物(86 ～ 89)　出土遺物は少ない。86は南伊勢系Ｂ形態皿、87は土師器鍋。88は山茶椀小皿である。89は青磁碗で混入と考えられる。これらは概ね南伊勢中世Ⅳａものと考えられる。

ＳＫ33出土遺物(90・91)　土師器鍋がある。南伊勢中世Ⅳａ期のものである。

ＳＦ35出土遺物(92 ～ 94)　土師器類で、南伊勢系Ｂ形態皿(92)・鍋(93)・羽釜(94)がある。南伊勢中世Ⅳｂ期のものと考えられる。

ＳＤ36・37出土遺物(95・96)　ＳＤ36からは土師器姥口羽釜(95)、ＳＤ37からは常滑産陶器甕(96)が出



第Ⅸ－９図　西垣外遺跡出土遺物実測図(4)（106は１：２、その他１：４）

第Ⅸ－２表　西垣外遺跡出土遺物観察表(1)

報告	実測番号	器種・貨等		遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴		胎土	色調	残存度	特記事項
1	02-02	弥生土器	壺	SD12上層	(口)12.8	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケメ		やや密	橙5YR6/6	口縁部1/12	
2	02-04	弥生土器	壺	SD12	(底)6.1	外:ナデ 内:ナデ		密	外:にぶい橙5YR6/4 内:褐灰10YR5/1	底部2/12	
3	02-06	弥生土器	壺	SD12	(底)6.1	外:ナデ 内:ナデ		密	外:橙2.5YR2/6(黒斑あり) 内:にぶい黄橙YR7/4	底部8/12	
4	02-07	弥生土器	壺	SD12	(底)5.0	外:ナデ→ナデ 内:ヨサエ・ナデ		密	橙5YR6/6	底部10/12	底部外面に植物繊維痕がみられる
5	02-05	弥生土器	台付甕	SD12	(脚台)9.4	外:ハケメ 内:ナデ		やや密	にぶい橙7.5YR6/4	脚台部7/12	
6	02-09	弥生土器	台付甕	SD12上層	(脚底)5.8	外:ナデ 内:ナデ→ハケメ		粗	橙7.5YR7/6	台部1/12	
7	03-01	弥生土器	手捻形土器	SD12	(底)4.1 (高)18.0	外:ナデ→条痕文・ハケメ→ケズリ→突帯貼付 内:ハケメ→板ナデ・ヨコナデ		やや粗	灰白10YR8/2	はば完形	外面調整は、腰部はハケメ、体部は２枚貝の条痕文、底部はケズリ
8	01-02	弥生土器	甕	SD12上層	(口)19.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ・ナデ		やや粗	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部6/12	
9	01-06	弥生土器	高坏	SD12上層	－	外:磨滅 内:磨滅		やや粗	橙5YR6/6	坏部2/12	
10	01-01	弥生土器	高坏	SD12	(口)23.9	外:磨滅(坏部下半一部タテハケ) 内:磨滅		やや粗	明褐7.5YR5/6	口縁部3/12	
11	01-05	弥生土器	高坏	SD12上層	(口)20.6	外:磨滅 内:ナデ→タテミガキ		粗	橙5YR6/6	口縁部1/12以下	
12	01-04	弥生土器	甕	Pit4	(口)18.0	外:ハケメ 内:ハケメ→ヨコナデ		やや粗	橙7.5YR7/6	口縁部2/12	
13	01-03	弥生土器	甕	Pit4	(口)17.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ヨサエ・ナデ		粗	明褐7.5YR5/6(外面の一部5YR3/1中ず 黒)	口縁部2/12	
14	05-04	弥生土器	高坏(脚部)	SD15	(脚柱)3.5	外:磨滅 内:シボリメ		やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	脚柱部のみ	全体的に摩耗して調整不明瞭
15	04-03	弥生土器	高坏(脚部)	SD15	(脚柱)3.7	外:ミガキ→梯孔直線文 内:シボリメ		密	橙5YR7/6	脚柱部のみ	3方向の透孔
16	02-03	弥生土器	高坏	SK33	(脚柱)4.0	外:梯孔直線文? 内:ナデ		やや密	明赤褐5YR5/6	脚柱部上半	透孔１ヵ所残存
17	05-05	弥生土器	高坏(脚部)	SD5	(脚柱)3.3	外:ハケメ? 内:シボリメ		やや密	にぶい黄橙10YR7/4	脚柱部のみ	全体的に摩耗して調整不明瞭
18	05-02	弥生土器	壺(底部片)	SD5	(底)7.2	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ		粗	外:黄灰2.5Y5/1 内:灰N5/	底部5/12	
19	23-01	石製品	両刃石斧	SD25	(長)20.2 (幅)8.0 (高)5.6	刃部に線状痕あり		－		完形	重量:1.38kg 風化著しい
20	08-02	青磁	椀	Pit1	(口)15.9	外:回転ナデ→蓮華弁文→施釉 内:回転ナデ→施釉		密	素地:灰白7.5Y7/1 釉:明緑灰10GY7/1	口縁部1/12	風化著しい。施釉化された蓮華弁の状況から14c中ゴ。
21	11-01	陶器(山茶椀)	椀	Pit40	(底)7.6	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ		やや密	灰黄2.5Y7/2	底部1/12未満	断先産 12c後葉
22	11-07	土師器	小皿	SD5	(口)7.6 (高)1.7	外:ヨサエ・ナデ 内:ヨサエ・ナデ		やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部3/12	南伊勢系B形態
23	11-06	陶器(古瀬戸)	平椀	SD5	(口)17.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉		密	浅黄5Y7/3	口縁部1/12未満	古瀬戸後期第
24	11-05	土師器	鍋	SD5	(口)22.0	外:ヨサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ヨサエ→板ナデ→口縁部ヨコナデ		密	外:にぶい橙7.5YR5/4 内:橙7.5YR6/6	口縁部1/12未満	
25	11-04	土師器	鍋	SD5	(口)29.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		やや密	外:にぶい橙7.5YR6/3 内:橙7.5YR7/6	口縁部1/12	外面全体的に煤付着
26	12-03	土師器	鍋	SD5	(口)34.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	外面全体的に煤付着
27	12-04	土師器	羽釜	SD5	(口)30.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		密	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	南伊勢中世Ⅳa期
28	07-05	土師器	皿	SK10	(口)10.0 (高)2.0	外:ヨサエ・ナデ 内:ヨサエ・ナデ		密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 南伊勢系B形態
29	06-04	土師器	鍋	SK10	(口)20.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		密	明黄橙10YR7/6	口縁部3/12	南伊勢中世Ⅳ b 期
30	06-05	土師器	鍋	SK10	(口)21.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		密	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部1/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面全体的に煤付着
31	07-03	土師器	鍋	SK10	－	外:ハケメ 内:ナデ→ヨコナデ		密	橙7.5YR7/6	体部片のみ	南伊勢中世Ⅳ b 期
32	07-02	土師器	壺	SK10	(口)17.8	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ		密	明黄橙10YR7/6	口縁部1/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 茶釜の蓋か
33	06-03	土師器	羽釜	SK10	(口)27.0	外:ハケメ→鍔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ		密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12以下	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面、鍔より下に煤付着
34	06-02	土師器	羽釜	SK10	(口)27.0	外:ハケメ→鍔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ		密	明黄橙10YR7/6	口縁部2/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面、鍔より下に煤付着
35	18-03	陶器(山茶椀)	椀	SD11	(底)7.6	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→研磨		やや密	灰白25Y7/1	底部2/12	断先産 12c末
36	18-01	土師器	皿	SD11	(口)8.0 (高)1.6	外:ヨサエ・ナデ 内:ヨサエ・ナデ		やや密	橙7.5YR7/6	口縁部10/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 南伊勢系B形態
37	18-02	土師器	皿	SD11	(口)7.8 (高)1.5	外:ヨサエ・ナデ 内:ヨサエ・ナデ		やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部3/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 南伊勢系B形態
38	16-02	土師器	鍋	SD11	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ		やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部1.5/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面の一部に煤付着
39	14-04	土師器	鍋	SD11	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→オサエ→口縁部ヨコナデ		密	橙7.5YR7/6	口縁部1/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面全体的に煤付着
40	13-02	土師器	鍋	SD11	(口)22.0	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ		やや密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部6/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面全体的に煤付着
41	18-06	土師器	鍋	SD15	(口)22.8	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ		やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	南伊勢中世Ⅳ b 期 外面全体的に煤付着

第X－３表　西垣外遺跡出土遺物観察表(2)

報告	実測番号	器種・質等	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
42	15 -01	土師器　鍋	SD11	(口)22.0	外:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ→板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4,浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 体部下半に煤付着
43	14 -03	土師器　鍋	SD11	(口)23.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12強	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
44	16 -01	土師器　鍋	SD11	(口)28.5	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
45	18 -04	土師器　鍋	SD11	(口)30.6	外:ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期
46	13 -01	土師器　鍋	SD11	(口)31.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄橙10YR5/3,にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
47	14 -02	土師器　鍋	SD11	(口)33.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
48	14 -01	土師器　鍋	SD11	(口)34.6	外:ヨコナデ 内:オサエ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
49	15 -02	土師器　鍋	SD11	(口)33.2	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期
50	15 -03	土師器　鍋	SD11	(口)34.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
51	13 -03	土師器　羽釜	SD11	(口)34.0 (鍔)42.6	外:ハケメ→鍔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/3,灰褐7.5YR5/2	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期
52	18 -05	土師器　壺	SD11	(口)22.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期
53	21 -07	緑釉陶器 (古瀬戸)	小黒	SD15	(口)8.0 (高)2.4 (底)3.8	密	外:回転ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	にぶい黄橙10YR8/2 釉色:ｵﾘｰﾌﾞ黄5Y6/4	ほぼ 完形	古瀬戸後期Ⅳ期古。灰釉は内面全面。
54	21 -07	緑釉陶器 (古瀬戸)	小黒	SD15	(口)11.8 (高)2.8 (底)6.5	密	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白25Y7/1 釉色:ｵﾘｰﾌﾞ黄5Y6/3	ほぼ 完形	古瀬戸後期Ⅳ期古。灰釉は内面全面・外面上半部(ハケ塗り)。
55	21 -09	緑釉陶器 (古瀬戸)	平梅	SD15	(口)12.0	密	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	にぶい黄橙10YR7/2 釉色:灰ｵﾘｰﾌﾞ5Y6/2	口縁部 2/12	古瀬戸後期Ⅳ期古。灰釉は内面・外面とも全面に施釉。
56	21 -05	緑釉陶器 (古瀬戸)	大黒	SD15	(底)11.0	やや密	外:回転ナデ→底部糸切り→施釉 内:回転ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	底部 2/12	古瀬戸後期Ⅳ期古。緑釉大黒。
57	21 -06	陶器　壺	SD15	－	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白25Y7/1	体部付のみ	産地産地ー13c初頭 内面下方から上方に捩い工具痕あり
58	22 -08	土師器　小黒	SD15	(口)7.0 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 7/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢赤Ｂ形態
59	22 -07	土師器　小黒	SD15	(口)7.4 (高)1.4-1.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 4/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢赤Ｂ形態
60	22 -06	土師器　小黒	SD15	(口)8.2 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢赤Ｂ形態
61	22 -03	土師器　小黒	SD15	(口)9.2 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢赤Ｃ形態
62	22 -04	土師器　小黒	SD15 下層	(口)9.5 (高)2.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢赤Ｂ形態
63	22 -09	土師器　小黒	SD15	(口)11.4 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢Ｃ形態
64	22 -05	土師器　小黒	SD15	(口)11.0 (高)1.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 南伊勢Ｃ形態
65	17 -03	土師器　鍋	SD15	(口)20.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
66	16 -03	土師器　鍋	SD15	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→オサエ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期
67	17 -01	土師器　鍋	SD15	(口)20.0	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	南伊勢中世Ⅳ b期
68	17 -02	土師器　鍋	SD15	(口)21.0	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
69	17 -04	土師器　鍋	SD15	(口)21.4	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ	やや密	明黄褐10YR7/6	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
70	20 -02	土師器　鍋	SD15	(口)20.9	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
71	19 -02	土師器　鍋	SD15	(口)26.4	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
72	16 -04	土師器　鍋	SD15	(口)29.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
73	17 -05	土師器　鍋	SD15	(口)24.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
74	01 -01	土師器　鍋	SD15	(口)26.4	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
75	19 -03	土師器　鍋	SD15	(口)29.2	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
76	20 -01	土師器　鍋	SD15	(口)28.2	外:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面一部に煤付着
77	20 -03	土師器　鍋	SD15	(口)30.4	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:黒褐10YR3/1 内:にぶい橙7.5YR6/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期
78	22 -02	土師器　釜	SD15 下層	(口)15.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面全体的に煤付着
79	21 -04	土師器　茶釜	SD15	(口)13.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	南伊勢中世Ⅳ b期 外面の一部に煤付着
80	22 -01	陶器 (常滑)	大奥	SD15	(口)25.0	やや粗	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	
81	21 -03	瓦質土器　火鉢	SD15	(底)43.6	外:ナデ→突帯貼付 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	底部 1/12以下	

第Ⅸ－４表　西垣外遺跡出土遺物観察表(3)

報告	実測番号	器種・質等	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
82	21 -02	土師器　羽釜	SD15	(口)49.6	外:ヨコナデ→鍔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	外面,鍔より下に煤付着
83	21 -01	土師器　羽釜	SD15	(口)47.4 (鍔)55.8	外:ヨコナデ→鍔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12以下	
84	09 -03	土師器　羽釜	SD16	(鍔)38.0	外:ナデ→ハケメ→鍔貼付後ナデ 内:ナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	鍔部 1/12	南伊勢中世Ⅳａ期
85	20 -04	土師器　鍋	SD19	(口)38.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳｂ期 外面全体的に煤付着
86	07 -06	土師器　皿	Pit22	(口)8.0	外:ナデ→エ.ナデ 内:ナデ→エ.ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	南伊勢中世Ⅳａ期 南伊勢系Ⅱ形態
87	07 -01	土師器　鍋	SD25	(口)21.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳａ期 外面全体的に煤付着
88	07 -07	陶器 (山茶椀)	皿	SD25	(口)9.6	密	黄灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	知多産
89	08 -01	青磁　椀	SD25	－	外:回転ナデ→施蓮弁文→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:オリーブ5Y5/3	小片	龍入
90	10 -02	土師器　鍋	SK33	(口)31.0	外:エ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR5/3	口縁部 3/12強	南伊勢中世Ⅳａ期
91	10 -01	土師器　鍋	SK33	(口)25.0 (高)11.4	外:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	ほぼ 完形	南伊勢中世Ⅳａ期。外面全体的に煤付着。 底部内面に炭化物付着。
92	11 -02	土師器　小皿	SF35	(口)6.6 (高)1.5	外:オサエ.ナデ 内:オサエ.ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 3/12	南伊勢中世Ⅳｂ期
93	12 -01	土師器　鍋	SF35	(口)33.0	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	南伊勢中世Ⅳｂ期
94	12 -02	土師器　羽釜	SF35	(口)36.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	鍔部 1/12強	南伊勢中世Ⅳｂ期 外面全体的に煤付着
95	07 -04	土師器　羽釜	SK36	(口)31.2	外:ヨコナデ 内:板ナデ	密	外:淡黄2.5Y8/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12以下	南伊勢中世Ⅲｂ期
96	06 -01	陶器 (常滑)	甕	SK37	(口)32.4	密	外:にぶい橙7.5YR5/4 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	
97	05 -01	土師器　鍋	SD39	(口)21.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4/12	南伊勢中世Ⅳａ期
98	04 -01	土師器　鍋	SK39	(口)21.0 (高)8.1	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ 完形	南伊勢中世Ⅳａ期
99	04 -02	土師器　鍋	SK39	(口)24.4 (高)10.7	外:タテ方向板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ 完形	南伊勢中世Ⅳａ期。外面全体的に煤付着。 底部内面に炭化物付着。
100	08 -04	土師器　皿	包含層	(口)9.6 (高)2.1	外:オサエ.ナデ 内:オサエ.ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12	
101	08 -07	陶器 (古瀬戸)	深皿	包含層	(口)31.4	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄2.5Y6/2 釉:灰黄2.5Y7/2	折縁深皿	口縁部 1/12
102	09 -01	土師器　鍋	包含層	(口)33.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	外面全体的に煤付着
103	08 -06	土師器　鍋	包含層	(口)22.7	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:浅黄橙10YR8/4 内:黄橙10YR8/6	口縁部 2/12	
104	09 -02	土師器　羽釜	包含層	(口)31.6	外:ヨコナデ→鍔貼付後ナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	外面全体的に煤付着
105	08 -08	瓦質土器　風炉	包含層	(口)29.4	外:ヨコナデ→ミガキ→スタンプ文 内:板ナデ?	密	黒N2/1	口縁部 2/12	口縁部外面に巴文スタンプ
106	04 -04	金属製品　釘	包含層	(全長)10.7 (全長)7.2	2個体接着	－	－	完形	1本目:全長10.7,厚み0.6,幅0.7 2本目:全長7.2,厚み.幅0.5

土した。南伊勢中世Ⅲｂ期頃のものだが、出土量が少ないため、遺構の時期としては示しがたい。

ＳＫ39出土遺物(97 ～ 99)　土師器鍋が３個体ある。97・98は小形、99は直線的な体部を呈するものである。南伊勢中世Ⅳａ期頃のものである。

包含層出土遺物(100 ～ 106)　遺構に伴わないものや、遺構検出中出土で遺構の特定ができない遺物を便宜的に包含層出土遺物として扱う。土師器皿(100)・鍋(102・103)・羽釜(104)のほか、古瀬戸折縁深皿(101)、瓦質土器風炉(105)、鉄釘(106)がある。105の口縁部外面には巴文がスタンプされている。106の鉄釘は、２本が重なっている。　(伊藤)

[註]

(1)上村安生「伊勢・伊賀地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年)

(2)赤塚次郎Ⅴ　考察」(『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990年)

(3)櫻井拓馬氏のご教示による。

(4)伊藤裕偉「南伊勢・志摩の中世土器」(『三重県史』資料編考古２、2008年)

(5)藤澤良祐ほか(『愛知県史』別編窯業２　中世・近世瀬戸系、2007年)

5　小結

a　西垣外遺跡の変遷

旧石器時代から縄文時代草創期　調査区内に遺構はないが、採集資料としてナイフ形石器２点、木の葉形尖頭器１点、掻器１点、有調整剥片３点、剥片・砕片・焼石などがみつかっている。[1]

弥生時代　弥生時代終末期に廃絶したと考えられるＳＤ12が認められ、これは集落縁辺を巡る環濠のような役割を有していたと想定される。条痕文の施された完形の手焙形土器が逆さ向きに出土した。

古墳時代　調査区内に遺構は認められないが、ピットから甕壺が出土した。また、採集資料では古墳時代の台付甕がみられ、弥生時代後期から古墳時代前期まで継続して生活を営んでいたようである。

古代　調査区内では遺構・遺物ともに確認されなかった。採集資料として須恵器の甕、灰釉陶器片がみつかっている。[2]

中世　中世後期の遺構・遺物はともに濃密で、調査区の南側で根石を伴う柱穴や中世墓２基を検出した。カマドあるいは鍛造・鋳造に関係する施設と考えられる焼土坑は調査区北側で検出した。遺物が多量に見つかった溝は、屋敷を区画するものとみられる。採集資料には陶器類も多くみられる。[3]

b　弥生時代後期の西垣外遺跡

遺構と遺物　ＳＤ12は逆台形状に深く掘られた人工的な溝である。中層から最下層にかけて遺物はほとんど出土せず、上層からのみ出土しているため、掘削時期は不明である。埋没時期は、指標となるＳ字甕の出土が認められないものの、弥生時代終末期、概ね上村編年Ⅵ様式期前半(廻間Ⅰ式0 ～ 1段階)に併行すると考えられる。

逆さ向きに出土した完形の手焙形土器は意図的に投棄された可能性が高く、溝埋没時の祭祀行為が想定される。手焙形土器の形態は、開口部の幅が比較的狭く立ち上がりは斜め方向に延び、中島氏の分類による鉢部形態Ｂ類、接合方法の３類にあたる。[4]体部外面に二枚貝による調整がみられる。胎土は在地のものであるが、三重県内の手焙形土器出土例[5]をみると条痕文をもつ個体は類例がなく、施文具のみに着目すると伊勢湾を介した三河以東との関わりが想定される。[6] また、近江を原産とする手焙形土器は荒いハケメを特徴としていることから、それを模倣する形で条痕を用いた可能性も考えられよう。

当該期における宮川西岸の集落　ここでは、宮川西岸域における弥生時代後期から古墳時代初頭の集落を概観し、西垣外遺跡の位置付けを行う。[7]

弥生時代後期前半(上村編年Ⅴ－１様式期：八王子古宮式併行期)、伊勢市磯町の大藪遺跡から方形周溝墓が３基確認される。[8] 隣接する明和町域においては、金剛坂遺跡でこの時期の方形周溝墓群が確認されている。[9]

弥生時代後期後半(上村編年Ⅴ－２～５様式期、山中式併行期)の明確な遺構は認められない。ただし、上地町中楽山遺跡からは竪穴住居に伴っていたであろう高坏が出土しており、これは坏部外面に波状文をもつものである。[10] 一方、宮川東岸の伊勢市市街地に位置する倭町隠岡遺跡からは、上村編年Ⅴ－３～５様式期の竪穴住居が検出されている。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて集落が

増加する。伊勢市上地町野垣内遺跡では、上村編年Ⅵ－２～３様式期、廻間Ⅰ式３～４段階に併行する方形竪穴住居21棟、方形周溝墓４基が確認される。隣接する中楽山遺跡でも同時期の竪穴住居や方形周溝墓が確認され、マコモ遺跡・小社遺跡とともに沖積低地をのぞむ左岸段丘上の中核的な集落を形成している。[11]

また、沿岸部では東大淀町東山遺跡でＳ字甕Ｂ類のほか高坏・壺などが出土している。[12] 同じく沿岸部に位置する有滝町高ノ御前遺跡では包含層からＳ字甕Ｂ～Ｃ類、柳ヶ坪型壺や器台など古墳時代前期の遺物が出土している。[13]

このように、弥生時代後期前半から弥生時代終末期にかけては宮川西岸段丘上に、古墳時代初頭には沿岸部にまとまりをみることができる。西垣外遺跡は沿岸部に位置するが、時期は上村編年の第Ⅵ様式前半にあたることから、東山遺跡・高ノ御前遺跡よりやや古く位置付けられる。

以上のことから宮川西岸域における集落の動向を概観すると、八王子古宮式併行期に大籔遺跡、山中式併行期に野垣外遺跡で点的にみられる出土例が、廻間式併行期になると遺跡数・出土量ともに増加し、これは古墳時代初頭に集落数が増加する全国的な傾向とも合致する。弥生時代終末期の短い期間のみに機能する環濠は小規模な集落に多いとされ[14]、西垣外遺跡ＳＤ12が埋没した時期はちょうどその過渡期にあたる。今回の調査成果は、宮川流域からやや離れた位置にある当該地に、この時期小さなまとまりがあったことがうかがえる資料となろう。（相場）

c　中世後期の西垣外遺跡

中世では、15世紀後半から16世紀前半にかけての遺構・遺物が良好に認められた。調査区が狭隘なため、集落の全体像は示し得ないが、区画溝に囲まれた複数の屋敷地と考えられる。

遺構のなかで興味深いのは、焼土坑ＳＦ35の存在である。粘土と円礫で固めたと考えられるこの遺構は、ここでの燃焼を目的とした構造物と考えられる。性格としては、カマドか、あるいは鉄滓の存在から鍛造・鋳造に関係する可能性が考えられるが、明確にはできない。

遺物としては、ＳＤ11・15でまとまった出土が見られた。特徴としては、土師器鍋や羽釜といった煮沸具が多く、土師器・陶器を含めた供膳形態は少ない。これらは、当地の土器組成を見る上で良好な資料である。（伊藤）

d　調査のまとめと課題

今回の調査区は遺跡の東端と考えられ、集落の中心からはやや外れた位置にあたる。弥生時代後期のＳＤ１や中世後期の溝群は集落や屋敷を区画する性格を有していると推測されることから、調査区西側には、断続的ではあるが長期間営まれた集落が展開していることが想定されよう。（相場）

[註]

（1）伊勢市教育委員会編『伊勢市史』（2011年）
（2）註（1）と同じ
（3）註（1）と同じ
（4）小竹森尚子「手焙形土器雑想」（『紀要』３滋賀県文化財保護協会、1985）／中島脊夫「手焙形土器について」（『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会、1992年）／高橋一夫『手焙形土器の研究』（六一書房、1998年）
（5）岸田早苗「特殊土器」（『三重県史』考古１、2005年）
（6）愛知県朝日遺跡からは貝殻腹縁文をもつ手焙形土器が出土しており、伊勢湾沿岸においては施文具として用いられた事例が認められる。
（7）土器の様式、時期区分は以下の文献による。なお本稿では、弥生時代後期を山中式併行期とした。弥生時代終末期とは、上村氏の第Ⅵ様式とそれをややくだる範囲、赤塚氏の廻間Ⅱ式段階までを含む。
・赤塚次郎「Ⅴ考察」（『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990年）
・上村安生「伊勢・伊賀地域」（『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年）
（8）三重県教育委員会『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』（1973年）
（9）三重県教育委員会『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（1985年）
（10）三重県教育委員会「昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」（1973年）
（11）三重県教育委員会「昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」（1979年）
（12）註（1）と同じ
（13）三重県埋蔵文化財センター『高ノ御前遺跡（第２次）発掘調査報告』（2004年）
（14）石井智大「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」（『伊勢湾岸域の弥生後期社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト、2011年）

X　伊勢市有滝町　茶臼塚遺跡

1　調査経緯と調査区の状況

茶臼塚遺跡は伊勢市有滝町字茶臼塚に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年12月23日から翌24年１月18日にかけて断続的に、28㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、有滝町集落の中央にある「有滝農村公園」の北側にあたる。道路部分に埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区は東西方向のトレンチ状で延長約37ｍ、標高は、東端部で約1.2ｍ、西端部で約1.6ｍである。

工事立会で調査したため、４ｍの配管長単位をグリッドとして扱ったが、配管の長さが異なる箇所についてもそのまま１グリッドとして扱った。

第Ｘ-１図　茶臼塚遺跡周辺地形図

2　層位と遺構

層位　埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した。地表のベースとなるの黄褐色中砂および褐灰色細砂（第９・10層）で、第９層は標高の低い東側にしか見られない。これらの層のさらに下部には混礫灰色系粗砂が見られる。これらはいずれも海成土砂と考えられ、砂堆（浜堤帯）で構成されている当地の基盤をなしていると見られる。

その上に堆積する第６～８層は、橙～褐色系細砂である。この層からは、全体で約2.2kgの鉄滓が出土した。遺構埋土ないしは包含層と考えられる。上部に堆積する第４層には、炭化物とともに破砕された貝殻が比較的多く含まれていた。これらのことから、第４層付近が生活面となっていたものと考えられる。

遺構　調査区を縦断するかたちで旧「宮川用水」配管時の攪乱が及んでいるため、確認できた遺構は極めて乏しい。しかし、ａ３・４グリッド第６・８層中からは2.2kgにも及ぶ鉄滓が出土した。調査区が狭いために明確にはできないが、６・８層は全体として何らかの遺構と考えるのが適切であろう。

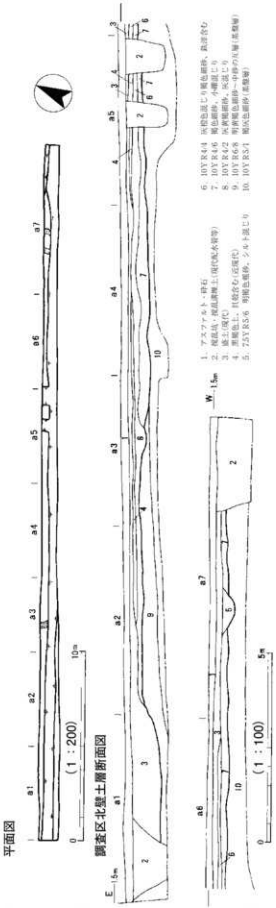
また、調査区西部では土坑状の遺構があった。埋土に特別な状況は見られない。

これらは、出土遺物の状況から見て、12世紀代から16世紀頃に及んでいると考えられよう。

3　出土遺物

調査区が狭隘であったことと、中央を縦断する「旧宮川用水」のため、出土遺物は極めて少ないが、鉄滓を大量に出土したことは特筆される。また、土器類は少量ながら、12世紀から16世紀にかけてのものが見られる。

１は土師器小皿で、12世紀代のもの。２は陶器壺で、肩部にヘラ描沈線がめぐる。13世紀代の常滑（知多半島）産のものである。３は土師器鍋で、13世紀中頃のものであろう。４は陶器擂鉢で、瀬戸産のもの。外面には錆釉が見られ、大窯期、16世紀後葉ころの



第Ｘ－２図　茶臼塚遺跡調査区平面図および断面図

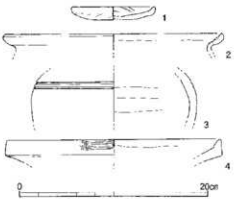
ものである。

4　小結

今回の調査では、中世を中心とした鉄滓の大量出土が最も特筆される。近隣に鍛造生産を中心とした金属製品生産遺構が広がっていると推察できる。

また、今回の調査区内は旧宮川用水配管に伴う攪乱により大きく破損していたが、調査区の壁寄りでは比較的良好な土層断面を見ることができた。つまり、今回の調査地に隣接したところに、比較的残りがよい状態で遺跡が広がっていると考えられる。

中世の有滝地区は、海を利用した水運が盛んであったと考えられ、15世紀後葉には海上関も設置されている(「氏経卿引付」「三重県史」資料編中世２)。今回の調査で確認できた金属器生産についても、海上交通、具体的には船舶に用いる釘などの製造に関する可能性も考えてよいであろう。　　(伊藤)



第Ｘ－３図　茶臼塚遺跡出土遺物実測図(１：４)

工事立会調査区全景（東から）

工事立会調査区ＳＤ６（北東から）

第１次調査区全景（南東から）

第１次調査区東半（東から）

第２次調査区(幹線)全景（東から）

第２次（幹線）調査区全景（西から）

第２次（幹線）調査区ＳＤ58 および柱穴検出状況（北西から）

第２次(支線)調査区全景（北から）

第２次(支線)調査区全景（南から）

第２次(支線)調査区柱穴群（北西から）

第２次(支線)調査区柱穴群（南西から）

5

15

16

17

18

26

34

53

55

57

84

118

125

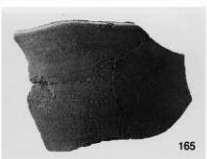
127

149

159

160

162


165

170

171

189

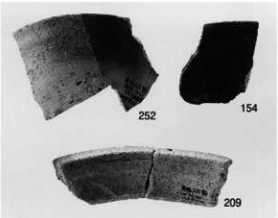
212

222

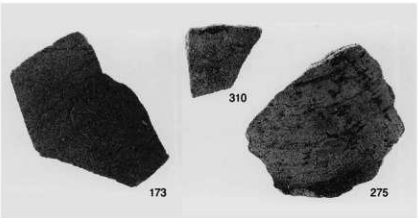
238

262

265


252
154
209

270


310
173
275

291

303

293

307

295

308

299

311

調査区南部全景・塚田１号墳（北から）

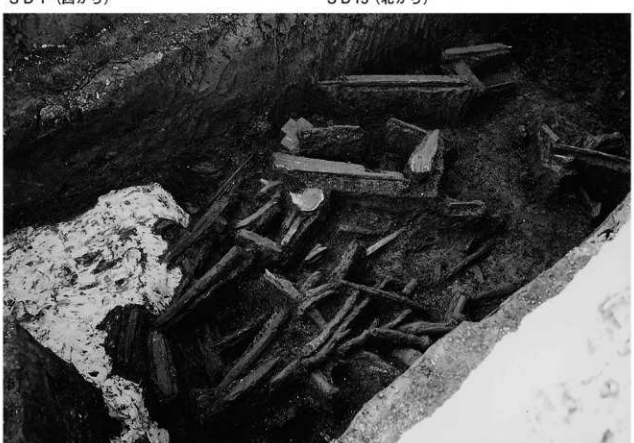
塚田２号墳（北から）

２号墳周溝（ＳＤ３）（東から）

２号墳周溝（ＳＤ５）（東から）

ＳＤ１（西から）

ＳＤ15（北から）



堰１上部（南東から）

堰１　筵出土状況（南から）

堰１上部（南から）

堰１と南岸テラス（北西から）

木製品出土状況

木製品出土状況

堰１最下部（南から）

板状杭検出状況（西から）

堰１最下部（北西から）

木製品出土状況（北から）

堰１・堰２・南岸テラス（北から）

堰2（北から）

堰2 蜜柑割杭出土状況（南から）

堰2 杭出土状況（南から）

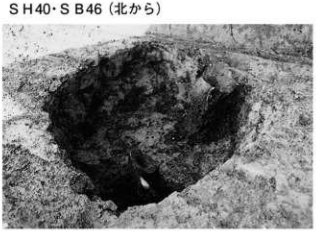
堰2 蜜柑割杭杭出土状況（北から）

堰3（北から）

調査区北部全景（北から）

ＳＨ40・ＳＢ46（北から）

N152 Pit 1（南から）



N156 ＳＫ34（南から）

N156 Pit 1（北から）

N176 Pit 8（西から）

15

28

34

53

57

60

61

58

67

68

82

83

66

85

90

91

94

98

95

100

108

107

115

118

131

140

146

109

113

116

123

133

141

154

110

114

117

128

135

138

142

158

159

156

161

177

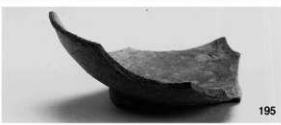
184

178

193

211

199


195

202

220

227

149

12

183
11
182

229

231

230

232

236

237

233

234

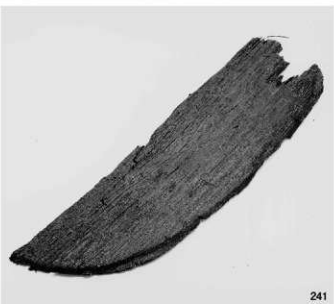
235

261

238

239

240


241

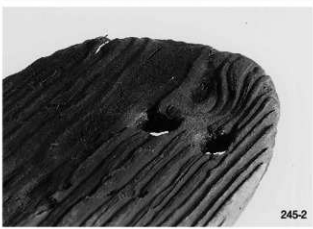
242

243

244

245-1

246


245-2

247

248

249

250-1

250-2

251-1

251-2

252

253

254

257

259

267-1

写真図版Ⅳ－14

267-2

267-3

268

262

264

265

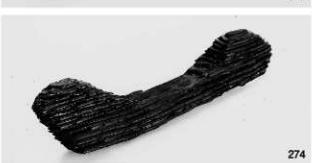
266

269

270

272

273


274

277

275

276

280

281

282

284

283

285

292

293

295

294

297

303

304

307

308

314

316

317

318

322

323

324

325

331

335

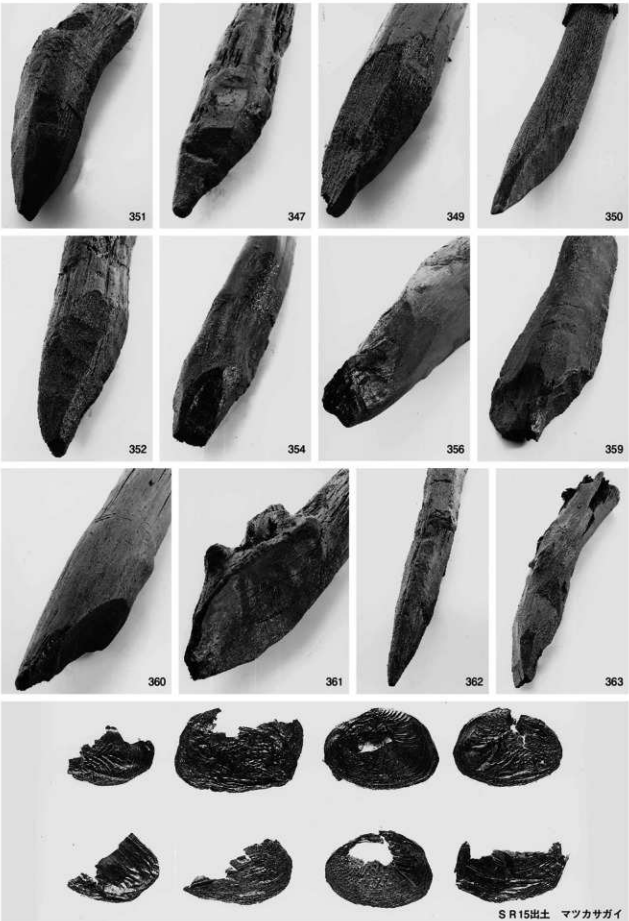
337

338

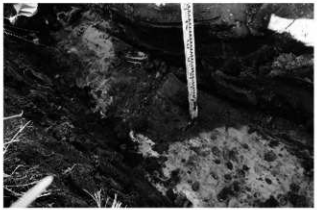
340

341

342


351
347
349
350
352
354
356
359
360
361
362
363
ＳＲ15出土　マツカサガイ

調査風景

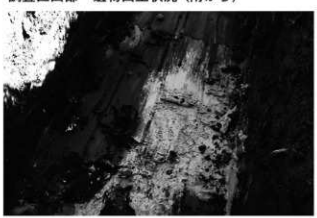


調査区西部　土坑（南から）

調査区西部　遺物出土状況（南西から）

調査区西部　遺物出土状況（南から）

土壌サンプル採取地点



調査区中央部　土坑（西から）

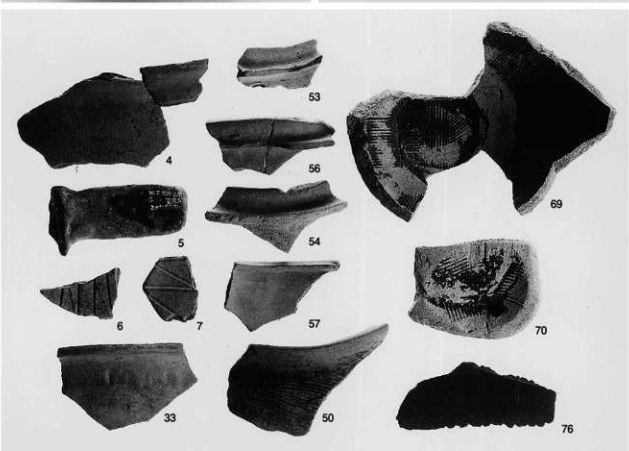
調査区東部　土坑（南西から）

3

15

11

71


53
4
56
69
5
54
6
7
57
70
33
50
76

調査区近景（西から）

調査区中央部　土坑（西から）

調査区中央部　土層（南から）

調査区東部　土坑（南西から）

調査区近景（西から）

調査区全景（南東から）

調査区中央部　土坑（南東から）

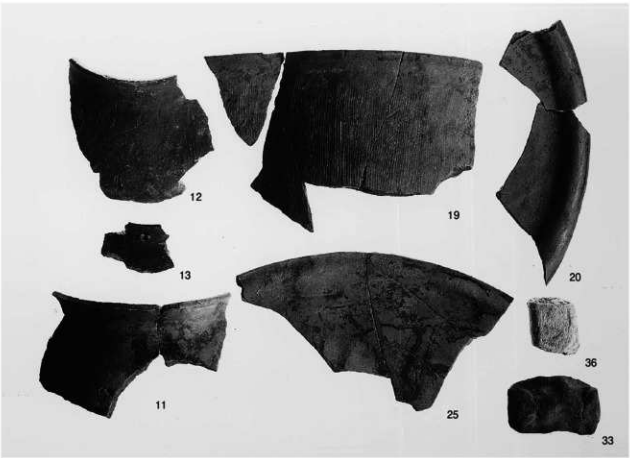
調査区中央部　土層（南から）

調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

灰原層（第19～21層、南から）

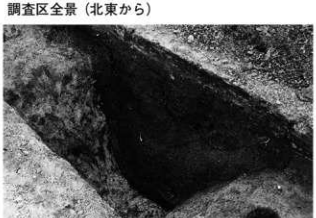
密集して出土した遺物（第17層）



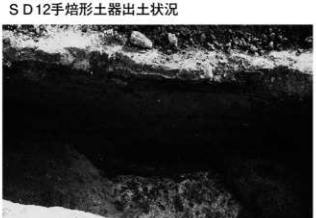
調査区全景（南西から）

調査区全景（北東から）

ＳＤ12手焙形土器出土状況



ＳＤ12（南から）



ＳＤ38（南から）

6

8

7

10

13

15

19

20

36

40

49

42

51

53

54

69

105

91

98

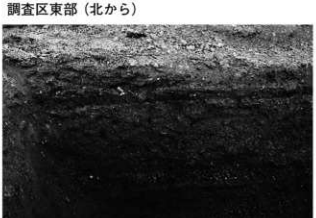
99

工事立会状況（西から）

調査区の状況（東から）

調査区東部（北から）

調査区中央部（北から）



調査区西部（北から）

報告書抄録

ふりがな	へいせい21～23ねんどけんえいのうぎょうきばんせいびじぎょうちいき(いせかんない) まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書名	平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)埋蔵文化財発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	336
編著者名	伊藤裕偉・相場さやか・髙松雅文・星野浩行
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596 (52) 1732
発行年月日	2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
寺田遺跡 (てらだいせき)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 佐田 (さた)	24461	425	34° 29′ 40～ 45″	136° 37′ 55～ 59″	20091124～ 1127 20100106～ 0115 20101004～ 1217	250 130 675	平成21・22年度 経営体育成基盤 整備事業 (有田地区)
塚田1号墳 (つかだ1ごうふん)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 妙法寺 (みょうほうじ)	24461	7	34° 29′ 44″	136° 38′ 25″	20101129～ 20110210	661	平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
塚田2号墳 (つかだ2ごうふん)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 妙法寺 (みょうほうじ)	24461	467	34° 29′ 42″	136° 38′ 25″	20101129～ 20110210		平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
田丸道遺跡 (たまるみちいせき)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 妙法寺 (みょうほうじ)	24461	466	34° 29′ 41～ 48″	136° 38′ 24～ 25″	20101129～ 20110210		平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
世古里中遺跡 (せこさとなかいせき)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 世古 (せこ)	24461	389	34° 30′ 50″	136° 37′ 25～ 34″	20111122～ 1220	146	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
西垣内遺跡 (にしがいとういせき)	度会郡玉城町 (わたらいぐんたまきちょう) 世古 (せこ)	24461	408	34° 30′ 55″	136° 37′ 21″	20101108～ 1109	53	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
鳥墓遺跡 (とうかいせき)	多気郡明和町 (たきぐんめいわちょう) 蓑村 (みのむら)	24442	639	34° 31′ 6″	136° 37′ 51″	20111205～ 1207	30	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)

蓑村大塚遺跡	多気郡明和町 蓑村	24442	231	34° 31′ 13″	136° 37′ 51″	20111219～ 1221	52	平成23年度経営体育成基盤整備事業(有田地区)
西垣外遺跡	伊勢市柏町	24203	a 156	34° 32′ 28″	136° 39′ 9″	20111205～ 12099	78	平成23年度県営かんがい排水事業(宮川４工区)
茶臼塚遺跡	伊勢市有滝町	24203	a 79	34° 32′ 28″	136° 41′ 50″	20111209～ 20120118	28	平成23年度県営かんがい排水事業(宮川４工区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺田遺跡	散布地	古墳後期 平安・鎌倉	溝・柱穴	土師器(古墳時代) 土師器・陶器(平安～中世)	
塚田1・2号墳	古墳	古墳後期	周溝	石製紡錘車(近隣から)	
田丸道遺跡	散布地	弥生 古墳後期 平安	流路(堰)、竪穴住居、掘立柱建物	木製品(多数)、土師器・須恵器・刀子・緑釉陶器	古墳後期の堰遺構 平安時代の掘立柱建物
世古里中遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
西垣内遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
鳥墓遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
蓑村大塚遺跡	散布地	近世	落ち込み	土師器	
西垣外遺跡	散布地	弥生後期 中世	溝(弥生)、溝、柱穴	手焙形土器(完形)	環濠集落か？
茶臼塚遺跡	散布地	中世	土坑	土師器・陶器	鉄製品鍛造遺構か？

要約

寺田遺跡では、古墳時代から中世後期にかけての遺構・遺物を確認し、なかでも平安時代後期の土器資料が良好である。塚田１・２号墳では、周溝の一部を確認し、近隣から古墳に関係すると考えられる石製紡錘車が出土した。田丸道遺跡では、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に確認された。なかでも、古墳時代後期の堰遺構と集落跡および流路出土の良質な木製品、平安時代後期の大形柱穴を伴う集落跡の確認は特筆できる。世古里中遺跡・西垣内遺跡・鳥墓遺跡では、中世前期・後期頃の粘土採掘坑と考えられる遺構を確認した。付近には土器生産遺構が存在すると考えられる。蓑村大塚遺跡では、近世中期頃の良好な土器群が出土し、近隣に当時の土器生産遺構があると考えられる。西垣外遺跡では、弥生時代後期の環濠と考えられる大溝と、中世後期の集落跡を確認した。大溝出土の手焙形土器は完形品で、注目できる。茶臼塚遺跡では、中世後期頃と考えられる鉄滓が多量に出土し、当時の鉄器生産がされていた場と考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告３３６

平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域（伊勢管内）
埋蔵文化財発掘調査報告

２０１３（平成25）年３月
印　　刷　　文　　化　　印　　刷
編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター